



労働政策研究報告書 No. 125

2010

JILPT : The Japan Institute for Labour Policy and Training

学校時代のキャリア教育と若者の職業生活

労働政策研究・研修機構

学校時代のキャリア教育と若者の職業生活

独立行政法人 労働政策研究・研修機構

The Japan Institute for Labour Policy and Training

まえがき

次代を担う人材である若者のキャリア形成については、社会に出る前の学校段階から、自らのキャリアを考え、キャリア形成に向けた職業能力開発を促進するとともに、学校から職業生活への円滑な移行を図るための支援を推進することが強く求められている。

このため近年、関係行政において、キャリア教育に関連する様々な事業が展開されてきた。労働行政においても、従来から学校と連携した職業指導等をはじめとして、職業やキャリアに関する理解を深めるための諸施策が推進されているところである。将来の労働市場における失業等の長期化を未然に防止するため、労働行政がその得意とする分野からキャリア教育に貢献することは非常に重要であり、必然のことであると言える。

このように、生涯にわたるキャリア形成の基礎となる力を育み、培う学校段階のキャリア教育の重要性が広く認識され、キャリア教育が各学校段階で本格的に推進される時代が到来しつつあるが、キャリア教育の効果や評価について体系的に分析・検討した研究は、多いとは言えない。キャリア教育は将来のキャリア形成に向けたものであることから、とりわけ、学校段階でのキャリア教育がその後のキャリア形成や職業生活にどのような影響を与えるかという中・長期的な視点からの検討が望まれていた。本研究はそれに応えるために、職業生活とキャリア教育の関係についてアプローチしたものである。

本研究では、キャリア教育の萌芽期から全国的実施へと発展する時期において中学・高校生であった現在の20代中盤の者を対象として全国規模の調査を行い、学校時代のキャリア教育の記憶、評価と、職業及び学校生活関連事項や属性、当時の居住地域等様々な条件との関連をみることにより、中・長期的な視点からみたキャリア教育の有効性を検討した。その上で、労働行政の特徴を活かしたキャリア教育推進に関する示唆も行っている。

キャリア教育は、学校生活や教科への好循環と職業生活への好影響の可能性を内在している。本報告書は、これを現実のものとするために、労働行政をはじめキャリア教育関係行政共通の検討材料として提供するものである。

本報告書が、今後のキャリア教育本格実施時代において、関係行政が緊密に連携した効果的なキャリア教育の推進に資するものとなることができれば、幸いである。

2010年11月

独立行政法人 労働政策研究・研修機構
理事長 稲 上 毅

執筆担当者（執筆順）

| 氏名 | 所属 | 執筆担当章 |
|-------|---------------------|--|
| 西村 公子 | 労働政策研究・研修機構 統括研究員 | 第1章1(1)(2)、 第1章2、第8章 |
| 下村 英雄 | 労働政策研究・研修機構 副主任研究員 | 第1章1(3)、 第1章3～4、 第2章～第6章、 補章1 |
| 高久 聡司 | 労働政策研究・研修機構 臨時研究協力員 | 第7章 |
| 川崎 友嗣 | 労働政策研究・研修機構 特別研究員 | 補章2 |

生涯キャリア発達研究会

| | | |
|-------|-------------|-------------------|
| 西村 公子 | 労働政策研究・研修機構 | キャリアガイダンス部門統括研究員 |
| 松本 純平 | 労働政策研究・研修機構 | 特任研究員 |
| 長縄 久生 | 労働政策研究・研修機構 | キャリアガイダンス部門主任研究員 |
| 室山 晴美 | 労働政策研究・研修機構 | キャリアガイダンス部門主任研究員 |
| 深町 珠由 | 労働政策研究・研修機構 | キャリアガイダンス部門副主任研究員 |
| 下村 英雄 | 労働政策研究・研修機構 | キャリアガイダンス部門副主任研究員 |
| 川崎 友嗣 | 労働政策研究・研修機構 | 特別研究員（関西大学教授） |

目 次

第1章 若者の職業生活の視点からみたキャリア教育へのアプローチ

| | |
|-----------------------|----|
| 1. 本研究の背景と問題意識 | 1 |
| 2. 調査研究の対象者 | 9 |
| 3. 調査研究の目的と方法、収集データ概要 | 10 |
| 4. 各章の主な内容 | 13 |

第2章 学校時代のキャリア教育に対する評価

| | |
|---|----|
| 1. 学校時代のキャリア教育に対する評価 | 25 |
| 2. 学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの | 28 |
| 3. 学校時代のキャリア教育と学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものとの関連 | 33 |
| 4. 学校時代に行った授業や行事の記憶が学校時代のキャリア教育の評価に与える影響（まとめ） | 35 |

第3章 学校時代のキャリア教育と学校卒業後のキャリアとの関連

| | |
|--|----|
| 1. 最終学歴別にみた学校時代のキャリア教育の評価 | 38 |
| 2. 学校卒業直後の就労形態別にみた学校時代のキャリア教育の評価 | 39 |
| 3. 正社員・非正社員就労期間別にみた学校時代のキャリア教育の評価 | 41 |
| 4. 転職経験別にみた学校時代のキャリア教育の評価 | 44 |
| 5. 学校卒業後のキャリア別にみた学校時代のキャリア教育の評価 | 46 |
| 6. 学校時代のキャリア教育と学校卒業後のキャリアとの関連について（まとめ） | 51 |

第4章 学校時代のキャリア教育と現在の就労状況との関連

| | |
|----------------------------------|----|
| 1. 現在の仕事上の立場別の学校時代のキャリア教育の評価 | 53 |
| 2. 平均労働時間・平均収入別の学校時代のキャリア教育の評価 | 55 |
| 3. 現在の勤務先の業種別・職業別の学校時代のキャリア教育の評価 | 58 |
| 4. 現在の就労状況による学校時代のキャリア教育の評価の違い | 63 |
| 5. 本章の結果のまとめと示唆 | 65 |

第5章 学校時代のキャリア教育と現在の就労意識との関連

| | |
|-----------------------------------|----|
| 1. 職業生活に対する満足感と学校時代のキャリア教育の評価との関連 | 69 |
| 2. 自尊心と学校時代のキャリア教育の評価との関連 | 71 |
| 3. 人生に対する考え方と学校時代のキャリア教育の評価との関連 | 73 |

| | |
|---|-----|
| 4. 学校時代のキャリア教育と就労意識との関連（まとめ） | 77 |
| 第6章 学校時代のキャリア教育と学校生活・家庭生活との関連 | |
| 1. 学校時代のキャリア教育の評価と学校生活との関連 | 80 |
| 2. 中学時代の学業成績と学校時代のキャリア教育の評価との関連 | 81 |
| 3. 学校卒業時の就職活動と学校時代のキャリア教育の評価との関連 | 83 |
| 4. 中退の有無と学校時代のキャリア教育の評価との関連 | 85 |
| 5. 学校時代に学んだ知識が役立っている程度と学校時代のキャリア教育の評価 との関連 | 86 |
| 6. 家庭生活と学校時代のキャリア教育との関連 | 88 |
| 7. 本章のまとめと示唆 | 92 |
| 第7章 学校時代のキャリア教育の自由記述データによる分析 | |
| 1. 本章の目的 | 94 |
| 2. 対象と課題の設定 | 95 |
| 3. 各時代の自由記述において頻出する語句 | 95 |
| 4. 頻出する語句の内容の時代的変容 | 98 |
| 5. 【アルバイト】【活動】が意味する《キャリア教育》 | 102 |
| 6. 転機としての最終学歴 | 105 |
| 7. 現在の状況による過去の意味づけの異同 | 106 |
| 8. まとめ | 110 |
| 第8章 労働行政におけるキャリア教育の推進に向けて | |
| 1. キャリア教育の推進に向けて注目される事項 | 113 |
| 2. 労働行政の担うキャリア教育推進施策への示唆 | 119 |
| 補章1 学校時代のキャリア教育と地方の教育・労働指標との関連 | |
| 1. 本章の問題意識 | 125 |
| 2. 学校時代のキャリア教育の評価の都道府県別の集計結果と社会生活統計指標 | 126 |
| 3. 学校時代のキャリア教育の評価と都道府県別の社会生活統計指標との関連 | 127 |
| 4. 学校時代のキャリア教育の評価と都道府県別の社会生活統計指標の変化との関連 | 134 |
| 5. 学校時代のキャリア教育の評価に影響を与える要因および示唆（まとめ） | 137 |

補章2 これからのキャリア教育と労働行政

| | |
|------------------------------------|-----|
| 1. 本研究の意義 —キャリア教育の中長期的な効果測定— | 139 |
| 2. これからのキャリア教育 —勤労観・職業観と基礎的・汎用的能力— | 139 |
| 3. 効果をもたらす取り組みとは | 141 |
| 4. 労働行政が担うキャリア教育 | 143 |
| | |
| 資 料 | 145 |
| 調査票 | 147 |
| 単純集計結果 | 157 |

第1章 若者の職業生活の視点からみたキャリア教育へのアプローチ

1. 本研究の背景と問題意識

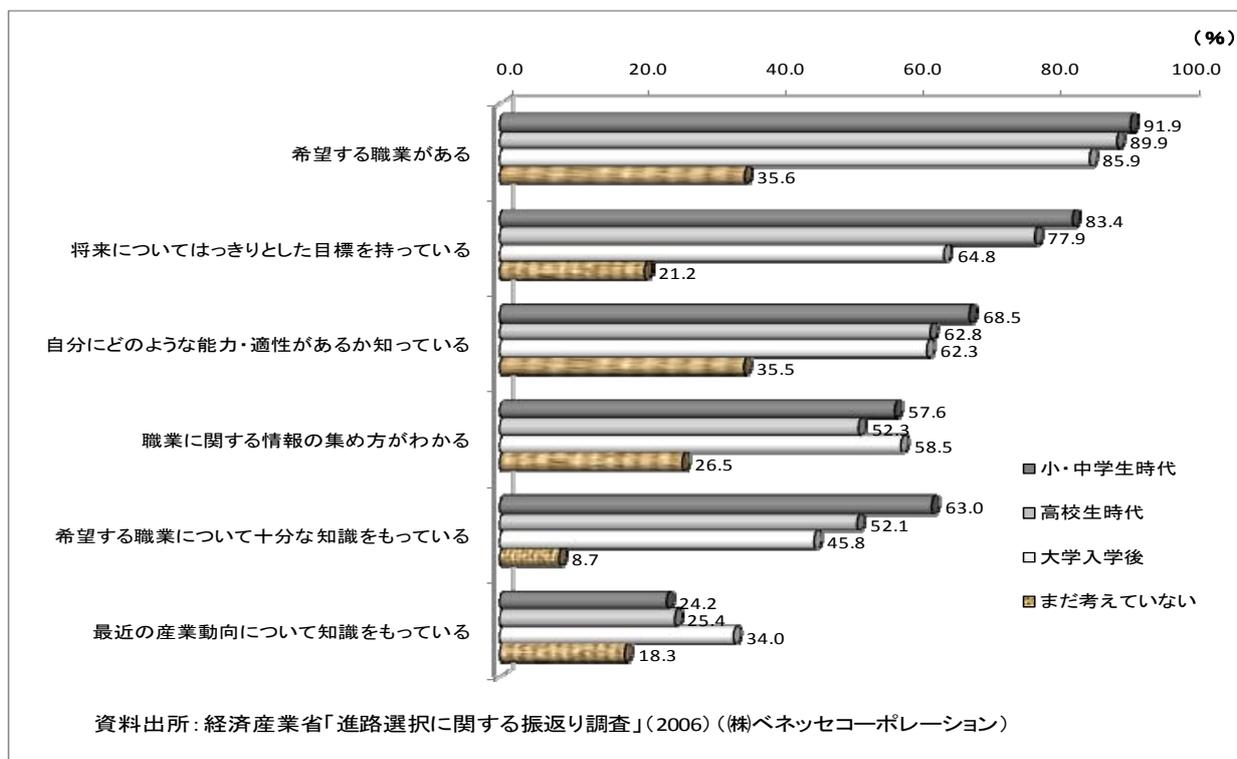
(1) 学校段階におけるキャリア教育の重要性

少子高齢化が進み本格的な人口減少社会を迎えるに当たり、我が国経済社会の活力の維持・発展のためには、経済社会活動の担い手一人一人が能力を発揮し、生涯にわたるキャリア形成を行うことが期待されている。

とりわけ、次代を担う人材である若者のキャリア形成については、社会に出る前の学校段階から、自らのキャリアを考え、キャリア形成に向けた職業能力開発を促進するとともに長期にわたるキャリアの基礎を築き、学校から職業生活への円滑な移行を図るための支援を推進することが強く求められる。

しかしながら、学校段階のキャリア教育と学生の職業意識については、「在学中のキャリア教育が十分でないことに加え、学生側も働くことのリアリティに欠け、様々な情報に流されている。このため、職業意識が十分に醸成されていない者が増大するとともに、自らの資質と進路のミスマッチも深刻化している」（生涯キャリア支援と企業のあり方に関する研究会（2007））との厳しい指摘がある。

経済産業省「進路選択に関する振返り調査」（2006）によれば、大学生の約4割の者は高等学校卒業までにどのような職業に就くか意識しておらず、大学生となった現在においても



図表1-1 どのような職業に就くかを意識した時期別にみた職業に関する意識

「まだ考えていない」者が19.1%を占めた。同調査により、どのような職業に就くか意識した時期別に職業に関する意識をみると、総じてどのような職業に就くかを意識した時期が早い者で職業に関する意識が高い傾向が伺え、大学生（現在）でも「まだ考えていない」者はいずれの項目においても最低の割合を示した（図表1-1）。大学生になっても将来のキャリアを意識していない者が一定割合存在し、それらの者ではキャリア形成の準備が進んでいない状況が明らかになったと言える。これらは、キャリアを意識し、学校段階から具体的な準備を進めることができるように教育・支援すること—キャリア教育—の重要性を改めて認識させる結果であり、キャリア形成についての意識化が遅れ、キャリア形成準備が不十分なまま学校段階を終了した場合、就職した職業とのミスマッチ、職業生活上の不適応、早期離職等の惹起が危惧される。

(2)近年におけるキャリア教育をめぐる動きと労働施策

近年におけるキャリア教育に関する施策等の動きを概観すると、学校教育における「キャリア教育」の文言が初めて公式に明示されたのは、中央教育審議会答申（1999）「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」であった。同答申では、「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育（望ましい職業観・態度を育てる教育）を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。」とされた。

同答申以前においても学校と職業の円滑な接続に関する施策として、大学生等を対象としたインターンシップの推進が関係各省で取り組まれていたが、同答申以降、職場体験の対象者が、高校生を対象としたインターンシップ、中学生を対象とした5日以上職場体験学習（キャリア・スタート・ウィーク）と、中学、高校生へ広がっている。

さらに若者自立・挑戦プランにみられるように、学校段階におけるキャリア教育については政府全体の問題と位置付けられ、厚生労働省、経済産業省等の関係省庁においても様々な課題の指摘と施策の展開（例えば、公共職業安定所と産業界が連携した職業意識形成支援（厚生労働省）や、地域の民間機関のコーディネートによるキャリア教育（経済産業省））が実施されてきた。

このようにキャリア教育をめぐる各種施策が展開される中で、キャリア教育推進の意は、法律にも明記されるに至った。59年ぶりに改正された教育基本法（2006年改正）において、教育の目標（第2条第2項）に「職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んじる態度を養うこと」と「職業」が追加され、学校教育法（2007年改正）では、義務教育の目標（第21条第10項）として「職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと」が謳われた。これらを受けた教育振興基本計画（2008）では、基本的方向2の具体的施策として「地域の人材や民間の力も活用したキャリア教育・職業教育、ものづくりなど実践的教育の推進」、基本的方向3の具体的施策として「勤労観・職業観や技能をはぐくむ教育（キャリア教育・職業教育）の推進」が提示され、キャ

リア教育の推進を含んだ小学校、中学校、高等学校の学習指導要領が順次告示（小・中学校学習指導要領 2008 年、高等学校学習指導要領 2009 年）されている。

また昨年 10 月に策定された「緊急雇用対策」では、大学等の就職支援の充実として、キャリアカウンセラーの配置、大学における職業指導（キャリアガイダンス）の制度化が盛り込まれた。2010 年に公布（施行は 2011 年 4 月）された大学設置基準、短大設置基準においては「学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて養うことができるよう、大学（短期大学）内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする」とされ、大学（短期大学）におけるキャリア教育の推進と実施体制の整備が具体的に進められることとなった（参考図表）。

これらにみられるように、学校段階のキャリア教育の推進については、近年、積極的な方向と具体的な施策等が次々と打ち出されている。

一方、労働行政においては、職業安定法第 26 条の規定に基づき、従来から日常的に学校と連携して、職業指導（職業適性検査や職業興味検査の開発・提供等による職業指導）が行われてきた。加えて、現在では、公共職業安定所による中学生・高校生等を対象としたキャリア探索プログラム、主として高校生を対象としたジュニア・インターンシップ、就職希望の新規高卒予定者等を対象とした就職ガイダンスが実施されている。併せて、教育現場に求められるキャリア・コンサルタントの能力・専門性の整理やキャリア・コンサルタントの役割について検討が重ねられ、本年度からキャリア教育をサポート・推進する者の専門的な能力を養成するキャリア教育専門人材養成事業が開始された（図表 1－2）。

図表 1－2 キャリア教育に関する労働施策

| 事項 | 内容 |
|----------------|--|
| 職業安定法第 26 条 | <ul style="list-style-type: none"> ○学校と協力して、学生生徒に対し、雇用情報、職業に関する調査研究の成果等を提供し、職業指導を行う。 ○学生生徒等に対して紹介することが適当と認められる限り多くの求人を開拓し、能力に適合した職業にあっせんするように努めなければならない。 ○学校の行う職業指導に協力しなければならない。 ○学生生徒等に対する職業指導を効果的かつ効率的に行うことができるよう、学校その他の関係者と協力して、職業を体験する機会の付与その他の職業の選択についての学生又は生徒の関心と理解を深めるために必要な措置を講ずる。 |
| キャリア探索プログラム | <ul style="list-style-type: none"> ○公共職業安定所において、企業で働く者などを講師として中学校や高等学校等に派遣することにより、職業や産業の実態、働くことの意義、職業生活等に関して、生徒の理解と自ら考えることを促進する。 |
| ジュニア・インターンシップ | <ul style="list-style-type: none"> ○主として高校生を対象とした在学中に就業体験を行う。自らの適性と職業の関わりを深く考える契機を提供する。 |
| 高校生に対する就職ガイダンス | <ul style="list-style-type: none"> ○就職希望の新規高校卒業予定者等を対象に、地域の労働市場の状況や就職活動の進め方の説明、労働関係法令の基礎知識、正社員とフリーターの働き方・賃金の違い等の情報の提供を行う。 |
| キャリア教育専門人材養成事業 | <ul style="list-style-type: none"> ○キャリア教育をサポート・推進する人材を養成するためのプログラム及びテキストを開発するとともに、講習を実施（講習対象者）キャリア・コンサルタント、公共職業安定所相談員、中学・高校教員等 |

教育振興基本計画（2008）においても、キャリア教育については、学校自らが行うものに加えて、関係府省の連携と地域の様々な資源の活用による実施が求められているのは先にみたとおりである。このためキャリア教育に関する労働施策は、キャリア教育推進のための有力な資源を提供し、学校と連携してキャリア教育を推進するという位置づけにあるものである。

(3)中・長期的な視点から見たキャリア教育の効果と評価の必要性

これまでキャリア教育の重要性が広く認識され、様々な施策を通じて積極的に推進されるようになったことをみてきたが、今後、キャリア教育が本格的に実施される時代を迎えるにあたり、その効果と評価の測定が非常に重要な問題となる。

そのため本節では、欧米で先行しているキャリア教育の効果測定研究の動向を概観した上で、日本におけるキャリア教育効果研究としての本調査研究の位置づけを明確にする。

(アメリカにおけるキャリア教育の効果測定研究)

キャリア教育に関する研究では、キャリアの効果が、どのような側面にどの程度みられるのかを測定する、いわゆる「効果測定」の問題が理論面・実践面で常に議論となってきた。

海外においてもアメリカを中心に、キャリア教育の効果は以前から検討されてきた。キャリア教育の効果測定に関するまとまった実証研究の端緒である Fretz(1981)は、キャリア教育に関する先行研究の効果を検証し、キャリア教育を行うことは総じて言えば（その内容にかかわらず）効果的であると結論づけた。Fretz に続く研究では、個々の効果測定研究の結果をメタ分析と呼ばれる統計手法を用いて統合し、結論を導く研究もなされてきた。代表的な研究として Oliver & Spokane(1988)、Whiston, Sexton & Lasoff(1998)、Whiston, Brecheisen & Stephens(2003)などがある。

また、最近の効果測定に関する外国文献で引用されることが多い著名な研究としては、Brown & Ryan-Krane(2000)および Brown, Ryan-Krane, Brecheisen, Castelino, Budisin, Miller, & Edens (2003) がある。これら一連の研究では最近の効果測定研究 62 研究を統合するメタ分析を行っている。その結果、様々なキャリアガイダンス技法のうち、特に効果的な5つの技法は、(1)目標を紙に書かせることによって具体化させる手法、(2)自己理解テストを個々の学生・生徒に即して個別に解釈すること、(3)職業情報を提供するにあたって良い面と悪い面の両面を提示して現実的な見通しを持たせること、(4)本人にとってモデルとなるような人物を探させること、(5)現実の移行に有益なネットワーキングを行うことであり、これらのうち3つ以上含んだ場合に効果が極めて高いことを統計的に明らかにしている。

その他に有名な研究として、Evans & Bruck (1992) の研究がある。これは、キャリア教育が学業成績に与える影響を 67 の研究のメタ分析を行って明らかにしたものであり、キャリア教育は生徒の学業成績を改善すると結論づけている。特に「(キャリア教育を行う)各グルー

プに（生徒を選抜したりせずに）ランダムに割り当てられている場合」「キャリア教育が算数や国語の科目と組み合わせられている場合」「9ヶ月の学期中に151～200時間をかけられる場合」「プログラムを同じ生徒に次の年も行える場合」などの条件がそろった場合に効果的であるとされている。

このようにアメリカにおいて、キャリア教育の効果測定に関する研究が複数の研究を統合するメタ分析の手法によって検証されている背景として、キャリア教育の取り組みの前後で何らかの指標の変化を比較したり、キャリア教育を行う群と行わない統制群を設けて両群の差を比較したりするといった、個々のキャリア教育の効果測定研究が既に多くなされているということがある。効果測定研究に蓄積があるため、複数の研究を統合するメタ分析によって一定の結論を導くことが可能となっている。

（ヨーロッパにおけるキャリア教育のアウトカム論）

ヨーロッパにおいては、上述のキャリア教育の効果測定研究の議論をより発展させた議論を行っている。

まず、アメリカを中心になされてきたキャリア教育の効果測定研究が、基本的に、どのような取り組みが最も効果的なのかという技法論に止まっていたとすれば、ヨーロッパで議論されているキャリア教育のアウトカム論では、より裾野の広い議論が行われるのが特徴である。例えば、ヨーロッパには、キャリア教育の対費用効果などにも関心が向けられている。現状では、先進国の多くはキャリア教育にかかるコストを公的な支出によって賄っている（OECD,2004）。そのため、キャリア教育にコストをかけることで、いかなるベネフィットが得られるのかを正確に説明するキャリア教育のアカウンタビリティに関心が向けられている。

キャリア教育およびキャリア教育を含むキャリアガイダンス全体をコストとベネフィットの観点から見直そうとする研究としては、Killeen, White, & Watts (1992) の “The Economic Value of Careers Guidance”、Hughes, Bosley, Bowes, & Bysse (2002) の “The Economic Benefits of Guidance” などがある。これらの研究は、どのような技法が最も効果的なのかを明らかにするだけでなく、キャリア教育が社会全体にどのような影響を与えうるのか、また、それを具体的に測定するにはどうすれば良いといった幅広い議論を行う。

こうした問題意識から、キャリア教育のアウトカムとして何を期待できるのか、また、それはどのような指標によって測定することができるのかという議論も派生している。例えば、OECD (2004)、World Bank (2004)、ILO (2006) とともに、キャリアガイダンスの目標として、本人の「教育 (learning goal)」面だけではなく、「労働市場 (labour market goal)」におけるマッチングの改善や、「社会的公平・社会的包摂 (social equity and social inclusion)」などを重視している。本人のキャリアに対する意識やスキルに働きかけるだけでなく、その先の労働市場の改善、さらにはその延長線上に、社会全体の格差や不平等、貧困などの問題解決の可

能性までを見ようとするのが、ヨーロッパにおけるキャリア教育論（それを含むキャリアガイダンス論）の特徴である。

（日本におけるキャリア教育の効果測定研究）

上記の欧米の研究動向と比較した場合、日本では、キャリア教育の効果測定に関する研究は立ち後れている。小学校から中学校・高校、大学に至るまでキャリア教育・キャリアガイダンスの取り組みはなされているものの、その効果を実証的に測定しようとする例は多くない。常に何らかの形でキャリア教育の効果測定を試みは行われているが、それは直後に簡単なアンケートを行ったり、感想文を書かせて、内容を整理・集計することに止まっている場合が多い。そこからさらにより良いキャリア教育の取り組みに結びつけるべく一段掘り下げた有益な情報を得ようとする問題意識は十分でない。また、OECD（2004）は、「ほとんどの各国政府は、キャリアガイダンスの提供や、公共政策目標の達成におけるその有効性の全体像を示すのに必要なデータを手元に持っていない。」と指摘する。

労働政策研究・研修機構（2008）では、キャリア形成の6つのステップのうち、「職業情報」（仕事理解）、「テスト：職業レディネス・テスト」（自己理解）、「職場体験」（啓発的経験）を取り上げ、自己効力観（進路課題自信尺度）の観点からその効果を分析した。これは、キャリア教育を体験した直後の短期的な有効性等に関して客観的な分析を行ったものである。

文部科学省（2006）においては、キャリア教育の実践は、計画（Plan）、実行（Do）、評価（Check）、改善（Action）のPDCAサイクルで行うことが重要であると指摘し、キャリア教育全体の評価の前提と教員が行う評価の観点の例を示している（図表1-3）。これは主として、キャリア教育中または直後の有効性やキャリア教育実施自体に係る、教員自身の評価である。

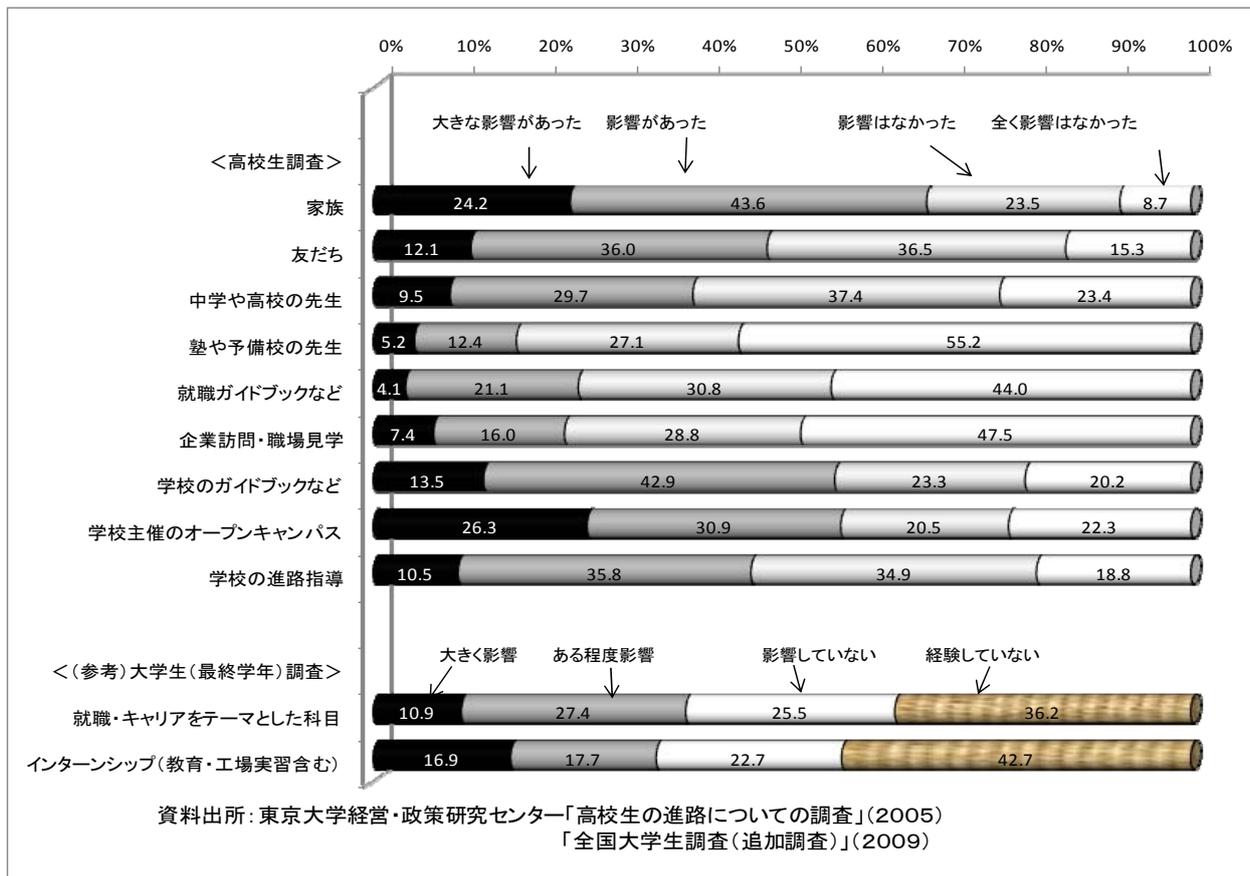
図表1-3 キャリア教育全体の評価の前提

- キャリア教育の目指す目標が、具体的で明確であること
- 目標が各学校や児童・生徒の実態に応じて、実行可能な内容であること
- 教員がキャリア教育の意義と実践への計画、方法等を十分理解できていること
- 教育活動の実行に際し、児童生徒にどのような変化や効果が期待されるか等が、具体的に示されていること
- 評価方法等が適切に示されていること
- 教員が、評価の目的、方法等について理解し、適切に評価できる能力を有すること
- キャリア教育の推進体制が確立されていること など

資料出所：文部科学省(2006)「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引ー児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるためにー」

(注) この評価の前提の下に、教員が行うキャリア教育の基本的な評価の観点例が①目標の設定、②実践中の評価、③評価の方法、④「児童生徒の変化」の評価、⑤評価を受けての改善の項目ごとに示されている。

キャリア教育体験後からの評価の期間をやや長くとり、学生・生徒からキャリア教育に対する評価を求めたものとしては、東京大学経営・政策研究センター「高校生の進路についての調査」(2005)、「全国大学生調査」(2009)がある。これによれば、高校生では「学校の進路指導」が自身の進路に「影響があった」とする者は46.3%（「大きな影響があった」10.5%、「ある程度影響があった」34.9%）と5割に達せず、「影響がなかった」とする者(53.7%)の方が高かった。また大学生では「就職・キャリアをテーマとした科目」が、進路を考える上で影響しているとする者の割合は38.1%（「大きく影響」10.9%、「ある程度影響」27.4%）と、「影響していない」(25.5%)より高いが、当該科目を経験していない者も36.2%を占めた。両調査により、学生・生徒からは、学校の進路指導やキャリア形成に関する科目の影響は、進路を考える上でそれほど大きいとは意識されていない状況であることが伺える(図表1-4)。



図表1-4 進路を考える上で影響があったもの

このようにキャリア教育の有効性や効果に関する視点は様々あるが、キャリア教育が将来のキャリア形成に向けた準備段階で実施されるものである以上、学校段階でのキャリア教育がその後のキャリア形成や職業生活にどのような影響を与えるかという中・長期的な視点からの検討が必要である。しかしながら、日本においてはそのような視点からの研究はほとん

どみられない。欧米の先行研究をみても、学校時代のキャリア教育の効果測定研究は、どのような技法が最も効果的なのかという論点から、いかにキャリア教育はその後の経済社会状況に影響を与え得るのかを含めて論じられるように発展している。日本においても学校時代のキャリア教育とその後の職業生活を具体的に検討することは、キャリア教育研究発展の流れに沿ったものである。また、労働行政においては、キャリア教育がその後の労働市場や労働力需給に影響を与えることの可能性に関心を有し、かつそれを重要視していることから、キャリア教育の短期的な効果ではなく、労働市場参入後における職業生活からみた中・長期的な効果に関心があるのは当然のことである。

しかしながら、キャリア教育とその後の職業生活との関連を分析・検討するに当たっては、

- ・学校卒業後の追跡調査による方法を採用し大規模なデータを収集することは、費用、期間の面から困難であること
- ・職業生活については、キャリア教育に加えて、その他の経験の影響が様々あり、キャリア教育の効果を抽出することは困難を伴うこと

等の問題点がある。これらの調査・分析上の問題点を克服し、中・長期的な視点で職業生活面の有効性を分析・検討することにより、今後のキャリア教育の効果的推進に資することが求められている。

そこで本研究では、現在職業に就いている者等が、キャリア教育の各事項を「覚えているか、覚えていないか」という事実を確認し、現在の職業生活にその内容が「役立ったか、役立っていないか」という評価を求め、これらと様々な条件との関連をみることにより、中・長期的なキャリア教育の有効性を検討することとした。中・長期的なキャリア教育の有効性を検討することが困難な調査・分析上の問題点のうち、データ収集に関しては、特定の学校の卒業生を追跡するという調査方法は採らず、各都道府県一定数が得られるようにサンプリングしてデータを収集した。この方法は、ある特定の学校で行われたキャリア教育の有効性を分析することはできないものの、大規模データの収集により、キャリア教育のどのような内容が記憶され、役立つと評価されるのかという全体的な傾向をつかむことができると考えられた（図表1-5）。

図表1-5 キャリア教育の有効性等の分析・検討

| | 短期的 (キャリア教育実施直後) | 中・長期的 (職業生活) |
|-------------|-----------------------------|--------------------------------|
| 学生・生徒の観点 | ○ 〔(独)労働政策研究・研修機構等の先行研究〕 | ◎本研究 ※キャリア教育の記憶と評価等を全国規模で調査 |
| 教員等実施者からの観点 | ○ 〔文部科学省による評価の観点の提示等〕 | |

また、キャリア教育を体験してからの期間が長くなれば、キャリア教育の直接的な効果を厳密に分析することが困難となる点については、キャリア教育の記憶とその内容の評価を尋ねるとともに、これらを職業及び学校生活関連事項や属性、当時の居住地等、様々な条件との関連で分析するという手法を採ることとした。

本調査研究は、このような手法を用いることにより、学校時代のキャリア教育と若者の職業生活が具体的にどのような側面でどのように関連がみられるのかを様々な角度から提示し、中・長期的なキャリア教育の有効性等を検討するものである。

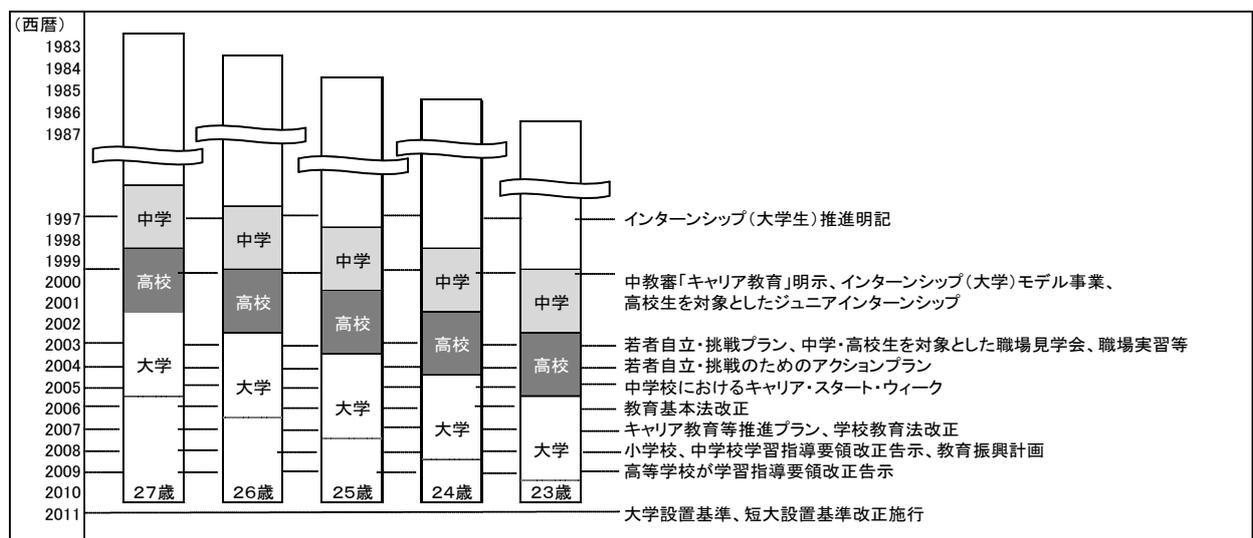
2. 調査研究の対象者

職業生活の視点からキャリア教育にアプローチをするに当たり、調査対象者については、職業に従事している者を中心とすることが求められる。

キャリア教育との関連で考えると、キャリア教育が全国で本格的に展開されるようになったのは2000年代に入ってからであり、その対象となった者は現在まだ労働市場に参入していない者も多い¹が、1990年代からキャリア教育に先進的に取り組んでいた地域もあるところである²。

これらのことを考慮して、調査の対象は、そのほとんどが労働市場に参入している20代中盤の者（25歳を中心として前後2歳までの範囲の者）とすることとした。これらの者は、大卒者の場合は就職後3年目に相当し、いわゆる7・5・3問題の時期に相当する者でもある。

調査対象者と近年のキャリア教育施策等の展開の関係をみたものが、図表1-6である。



図表1-6 キャリア教育推進施策と調査対象者の学校段階

¹ 例えば、中学生に5日以上職場体験を行うキャリア・スタート・ウィーク（文部科学省）は、2005年度から開始されており、最初の体験者（当時中学2年生）は2009年度現在、高校3年生である。

² 富山県における「社会に学ぶ『14歳の挑戦』事業」（1995年度から）、神戸市の「トライやる・ウィーク」（1998年度から）、広島県における「フロンティア21事業」の中での特色ある学校教育活動（1999年度から）などがあげられる。

調査対象者は、中央教育審議会答申でキャリア教育が明示された時期（1999年）には中学～高校生であり、若者自立・挑戦プランが策定された時期（2003年）には高校～大学生、キャリア教育等推進プランが策定され学校教育法が改正された時期（2007年）には大学生以上となっていた。

このように、本研究の調査対象者は、キャリア教育との関係から言えば萌芽期から全国レベルでの実施へと発展する時期において中学・高校生であった者であり、キャリア教育に関連する諸施策の影響は、地域や出身校により程度の差はあるものの一定程度受けている層とみることができる。また、職業生活との関係から言えば、職業生活の節目付近（大卒者の場合の就職後3年目）に当たる者が多く含まれると考えられる。

3. 調査研究の目的と方法、収集データ概要

(1)調査の目的

学校段階のキャリア教育と学校卒業後の職業行動等との関係について分析し、学校卒業後のキャリア形成に効果的なキャリア教育推進の検討を行うためのデータを収集する。

(2)調査対象者

25歳前後（23～27歳）の若年者。最終的に調査会社モニター利用により5,000票程度を目標に回収するために、回収率約80%を想定して6,330名に調査票を配布した。調査対象者を25歳前後とした理由は、①1990年代後半にキャリア教育に取り組んだ地域で中学校生活を送った年代が現在20代中盤になっていること、②大卒後3年であり学校から社会への移行・定着の評価を行うにあたっての一定の区切りと考えられることの2点であった。

当初、キャリア教育の先進県と後進県の比較を行うなど、国内における地域差を検討する目的もあったことから、各都道府県から最低30名以上の回答者数を確保することとした。その他、性別・学歴・職業等に極端な偏りが出ないように配慮することとした。

(3)調査項目

- ・回答者の基本属性（性別、居住地（現在・過去）、年齢）
- ・学校卒業後のキャリアについて（就職活動の成否、卒業後の進路、離転職状況）
- ・現在の職業について（労働時間、賃金、勤務先の業種・職種）
- ・学校時代のキャリア教育・キャリアガイダンス（学校時代のキャリア教育の印象・記憶）
- ・現在の職業生活に役立ったと思う学校時代の経験（自由記述）
- ・職場体験学習、高校進路指導、進路相談・キャリアカウンセリングについて
- ・現在の生活意識・職業意識（満足感、自尊感情、悩み）他

(4)調査手法

調査は2010年2～3月に実施した。調査会社を通じて、調査会社のモニターに郵送にて調査票を配布し、返送するように依頼した。最終的に23～27歳5,576名（男性1,932名、女性3,643名、不明1名）を回収した。

ただし、上述の手続きで各都道府県から最低30名以上の回答者を確保することを優先したために、最終的に回収された調査回答者の性別構成比は約35%と65%と女性割合がかなり高くなった。そこで、女性の回答者からさらにランダムに再サンプリングを行って2,000票を抽出し、最終的に男性・女性の比率をおおむね1：1にあわせ、計3,932名のデータでその後の分析を行った。回収データと再サンプリング後のデータの関係は、図表1－7に示したとおりである。

図表1－7 調査回収状況と再サンプリング後の性別の内訳

| 回収ベース | | | ➔ | 再サンプリング後 | | |
|-------|-------|--------|---|----------|-------|--------|
| | 度数 | % | | | 度数 | % |
| 男性 | 1,932 | 34.6% | | 男性 | 1,932 | 49.1% |
| 女性 | 3,643 | 65.4% | | 女性 | 2,000 | 50.9% |
| 無効回答 | 1 | 0.0% | | | | |
| 合計 | 5,576 | 100.0% | | 合計 | 3,932 | 100.0% |

なお、この再サンプリングは3回行い、再サンプリングしたデータセットを3つ作成し、主だった質問項目で回答傾向を比較した。その結果、全ての項目で統計的に有意な差はみられなかった。また、データセットによって若干回答傾向に差が視認できる場合も最大で数%以内の範囲に収まっていた。以上のことから、本研究では最初に再サンプリングしたデータを本報告書で分析するデータセットとして用いることとした。

その他、年齢や学歴などでも若干の偏りがみられたが、後の分析では、年齢別・学歴別の分析などもあわせて行うことにより、サンプリングの偏りの問題を解消することとした。

(5)収集データ概要

再サンプリングを行った結果、本研究に調査対象者の内訳は以下のとおりとなった。

まず、図表1－8に示したとおり、年齢と性別の内訳は若干のばらつきはあるものの、各年齢ともにおおむね男女50%ずつの割合となった。

図表1－8 本研究で分析するデータの年齢・性別の内訳

| | 23歳 | 24歳 | 25歳 | 26歳 | 27歳 | 合計 |
|----|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 男性 | 179 | 241 | 393 | 506 | 608 | 1927 |
| | 52.2% | 45.2% | 52.8% | 48.9% | 48.1% | 49.2% |
| 女性 | 164 | 292 | 351 | 528 | 656 | 1991 |
| | 47.8% | 54.8% | 47.2% | 51.1% | 51.9% | 50.8% |
| 合計 | 343 | 533 | 744 | 1034 | 1264 | 3918 |
| | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 100.0% |

※表に記載した以外に年齢不詳の14名あり。

次に、図表1-9に年齢・学歴の内訳を示した。学歴は全体的に平成19年就業構造基本調査の25～29歳の学歴構成比と比べて「大学・大学院」卒業者が多く「高校」卒業者が少ない。本報告の調査結果はこの点に留意して解釈する必要がある。なお、年齢による学歴の歪みはなかった。

図表1-9 本研究で分析するデータの年齢・学歴の内訳

| | 23歳 | 24歳 | 25歳 | 26歳 | 27歳 | 合計 |
|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 大学・大学院 | 188 | 323 | 497 | 649 | 800 | 2457 |
| | 54.8% | 60.6% | 66.8% | 62.8% | 63.3% | 62.7% |
| 短大・高専 | 33 | 36 | 43 | 90 | 118 | 320 |
| | 9.6% | 6.8% | 5.8% | 8.7% | 9.3% | 8.2% |
| 専門・各種学校 | 58 | 76 | 111 | 162 | 180 | 587 |
| | 16.9% | 14.3% | 14.9% | 15.7% | 14.2% | 15.0% |
| 高校 | 64 | 93 | 89 | 128 | 162 | 536 |
| | 18.7% | 17.4% | 12.0% | 12.4% | 12.8% | 13.7% |
| 中学 | 0 | 1 | 1 | 1 | 0 | 3 |
| | 0.0% | 0.2% | 0.1% | 0.1% | 0.0% | 0.1% |
| その他 | 0 | 4 | 3 | 3 | 4 | 14 |
| | 0.0% | 0.8% | 0.4% | 0.3% | 0.3% | 0.4% |
| 合計 | 343 | 533 | 744 | 1033 | 1264 | 3917 |
| | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 100.0% |

※表に記載した以外に年齢不詳の14名および学歴不明の1名あり。

図表1-10には年齢別にみた現在の仕事上の立場の内訳を示した。平成20年労働力調査の同年代の結果と照らして極端な歪みはみられなかった。

図表1-10 本研究で分析するデータの年齢別にみた現在の仕事上の立場の内訳

| | 23歳 | 24歳 | 25歳 | 26歳 | 27歳 | 合計 |
|---------------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 正社員・正職員 | 195 | 322 | 444 | 594 | 733 | 2288 |
| | 57.2% | 60.4% | 60.1% | 57.7% | 58.3% | 58.7% |
| 自営業・自由業 | 3 | 6 | 14 | 31 | 38 | 92 |
| | 0.9% | 1.1% | 1.9% | 3.0% | 3.0% | 2.4% |
| 契約社員・嘱託 | 14 | 36 | 51 | 60 | 61 | 222 |
| | 4.1% | 6.8% | 6.9% | 5.8% | 4.9% | 5.7% |
| 派遣社員 | 7 | 18 | 15 | 46 | 49 | 135 |
| | 2.1% | 3.4% | 2.0% | 4.5% | 3.9% | 3.5% |
| パート・アルバイト | 61 | 71 | 85 | 124 | 127 | 468 |
| | 17.9% | 13.3% | 11.5% | 12.1% | 10.1% | 12.0% |
| 家族従業員 | 4 | 5 | 5 | 5 | 6 | 25 |
| | 1.2% | 0.9% | 0.7% | 0.5% | 0.5% | 0.6% |
| 専業主婦他 | 19 | 35 | 73 | 119 | 180 | 426 |
| | 5.6% | 6.6% | 9.9% | 11.6% | 14.3% | 10.9% |
| 大学院や専門学校などの教育機関に在学中 | 3 | 2 | 1 | 1 | 0 | 7 |
| | 0.9% | 0.4% | 0.1% | 0.1% | 0.0% | 0.2% |
| 無職で進学や留学などの準備 | 4 | 4 | 4 | 1 | 2 | 15 |
| | 1.2% | 0.8% | 0.5% | 0.1% | 0.2% | 0.4% |
| 無職で仕事を探している | 19 | 26 | 29 | 29 | 31 | 134 |
| | 5.6% | 4.9% | 3.9% | 2.8% | 2.5% | 3.4% |
| 無職で何もしていない | 5 | 5 | 10 | 7 | 11 | 38 |
| | 1.5% | 0.9% | 1.4% | 0.7% | 0.9% | 1.0% |
| その他 | 7 | 3 | 8 | 12 | 19 | 49 |
| | 2.1% | 0.6% | 1.1% | 1.2% | 1.5% | 1.3% |
| 合計 | 341 | 533 | 739 | 1029 | 1257 | 3899 |
| | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 100.0% |

※表に記載した以外に年齢不詳の14名および現在の立場・身分不明の学歴不明の19名あり。

4. 各章の主な内容

以下に、第2章以降の各章の内容について概要を述べる。

(1)「第2章 学校時代のキャリア教育に対する評価」の主な内容

第2章では、中学時代・高校時代のキャリア教育に対する全般的な印象・評価を検討した。学校時代のキャリア教育を「覚えている」割合は、中学校では「かなり覚えている」「やや覚えている」を合計して約30%程度であった。高校では同じく約40%程度であった。一方、「役立っている」割合は、中学では約20%、高校では約25%であった。性別・年齢・地方による違いを検討した結果、年齢で違いがみられ、年齢が若いほどキャリア教育をよく覚えていた。

また、学校時代に行ったキャリア教育関連の授業や行事で記憶にあるものとしては、中学・高校では二者面談・三者面談が記憶に残っているという共通性がある。ただし、中学ではボランティアなどの体験活動や職業人に話を聞く授業などが多く記憶されている一方、高校では個別相談・カウンセリングや興味検査・適性検査などが記憶されている割合が高かった。大学では興味検査・適性検査が記憶に残っている者が多かった点で高校と共通しているが、より具体的な就職活動の進め方や履歴書の書き方、面接試験・試験対策に関する授業が記憶に残っている割合が高いという結果となった。

中学校時代のキャリア教育を覚えているか否かについては、職業人や地域の人に話を聞いた記憶が影響を与えていたが、高校時代のキャリア教育を覚えているか否か、および中学・高校時代のキャリア教育が役立っているか否かにはコミュニケーションやマナーを学ぶ授業の記憶が大きな影響を与えていることが示された。

なお、基本的に、回答者は最終学歴に最も近い学校種に通っている時に、将来の進路や職業について最も学習したと思う傾向が強かった。そのため、例えば、高校卒業で就職した回答者は、高校時代に行った授業や行事を役立ったと考える傾向がみられた。

(2)「第3章 学校時代のキャリア教育と学校卒業後のキャリアとの関連」の主な内容

第3章では、学校時代のキャリア教育と学校卒業後のキャリアとの関連を検討した。本章の結果は、以下の2点に集約される。①「大卒」「卒業直後に正規就労」「非正規就労経験なし」「転職経験なし」といった、いわば「直線的」なキャリアを歩んだ回答者で、中学・高校時代のキャリア教育は評価が高い。一方で、「直線的」なキャリアを歩んだ回答者は高等教育機関まで進む者が多いので、実際には自分が最後に通った大学、短大・高専、専門・各種学校時代に進路や職業について最も学習したと考えている。②何らかの形で「直線的」なキャリアを歩んでこなかった回答者は、総じて学校のキャリア教育を高く評価しないので中学・高校のキャリア教育の評価も低い。一方で「直線的」なキャリアを歩まなかった回答者は高等教育機関まで進む者が多くないので、実際には自分が最後に通った高校（または中学）時代に進路や職業について最も学習したと考えている。

「直線的」なキャリアを歩む可能性がある者にとっては大学等が、また「直線的」ではないキャリアを歩む可能性のある者にとっては、中学および高校が、将来の進路や職業について最も学習する場であるため、それぞれの対象層に応じた適切なキャリア教育を側面的にサポートする必要があることを示唆した。

(3)「第4章 学校時代のキャリア教育と現在の就労状況との関連」の主な内容

第4章では、学校時代のキャリア教育と現在の就労状況および就労意識との関連を検討した。その結果、概して言えば、比較的高い収入があり、運輸業、郵便業、教育・学習支援業、医療、福祉などの業種に勤務し、専門的・技術的・管理的職業に就いている者、非正社員経験のない者で、学校時代のキャリア教育に対する評価が高かった。逆に、現在、無業または求職中であるか、パート・アルバイトとして働いている場合、学校卒業直後の就労形態が無業で非正社員経験しかない場合、現在の職業が生産工程・建設である場合に、概して言えば学校時代のキャリア教育の評価が低かった。

学校時代のキャリア教育をよく覚えており、よく学んだ者は、現在、「直線的」で「恵まれた」キャリアを歩んでいると解釈すれば、学校のキャリア教育は将来の若者の職業生活に大きな影響を与える重要な要因であり、それゆえ、学校のキャリア教育の環境をよりいっそう整備し、キャリア教育から多くを学べる若者を増やすべきであるとする示唆が引き出せる。

ただし、一方で、本章の結果は、むしろ、無業者、求職者、非正規就労者に対して、より有益に感じられるようなキャリア形成支援を何らかの形で提供する必要性を示唆するものであるとも考えられた。望ましくは、いわゆる「直線的」ではなく「恵まれた」とは言えない期間があつたとしても、長期的には主体的にキャリアを形成し充足した職業生活を送るための基礎となるようなキャリア教育が学校段階で施されるべきであることを示唆した。

(4)「第5章 学校時代のキャリア教育と現在の就労意識との関連」の主な内容

第5章では、現在の就労意識と学校時代のキャリア教育の評価との関連を検討した。その結果、キャリア教育は、現在の生活全般に対する満足感、これまでの職業生活に対する満足感、将来の目標の明確さ、自尊心などと、総じて密接な関連があることが示された。

現在の就労意識と学校時代のキャリア教育に対する評価の関連モデルを検討した結果、①職業生活に対する満足感、将来の目標等の明確さ、生活全般に対する満足感には、高校時代のキャリア教育が「役立っている」という評価が全般的に影響を与えていた。②本人の自尊心も、職業生活に対する満足感、将来の目標等の明確さ、生活全般に対する満足感に全般的な影響を与えていた。③これまでの人生は自分の努力で決まってきたという感覚は、将来の目標の明確さや自尊心に影響を与えていた。④中学時代のキャリア教育を「覚えている」か否かも将来の目標等の明確さに影響を与えていた。

以上の結果から、学校時代のキャリア教育は、基本的に現在の満足感や将来の目標の明確

さなどと広く関係していること、自尊心は、現在の満足感や将来の目標の明確さを下支えする重要な要因であることなどが示された。

従来、キャリア教育では、キャリアや就職に関わる事からのみを指導目標とすることが多かったが、本人の根本的な自尊心は若者の就労意識に全般的な影響を与えていることを重視すれば、こうした自尊心をいかなる形でキャリア教育に組み込んでいくのか（組み込まないのか）、また、労働行政の側からはどのような側面的なサポートが可能なのか等について、ある種の萌芽的な議論がなされて良いということを示唆した。

(5)「第6章 学校時代のキャリア教育と学校生活・家庭生活との関連」の主な内容

第6章では、学校生活・家庭生活と学校時代のキャリア教育との関連を検討した。本章の結果、以下の諸点が示された。第一に、総じて、学校に適応的であったほど、学校時代のキャリア教育に対する評価が高かった。特に、中学・高校時代においては「相談に乗ってくれる先生がいた」ということがキャリア教育の評価と強く関連していた。第二に、一方で、学業成績とはそれほど強い関連はみられなかった。強いて言えば、中学時代の学業成績は下の方だったと回答した若者で、極端に学校時代のキャリア教育の評価が低いという結果が目立った。第三に、就職活動がうまくいった若者、学校を中退しなかった若者、学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っていると感じる若者ほど、学校時代のキャリア教育の評価が高かった。特に、学校時代に学んだ知識とキャリア教育の評価の関連は比較的顕著であり、ここでも、学校時代の知識はほとんど仕事に役だっていないと回答した者で、極端に学校時代のキャリア教育の評価が低いという結果が目立った。第四に、家庭生活が良好であった者ほど、学校時代のキャリア教育の評価が高かった。特に、「学校での出来事などを家族で話し合った」「将来について話し合った」など、家族で将来について話し合ったという若者で、特に学校時代のキャリア教育の評価が高かった。

これらの結果に基づいて、労働行政のキャリア教育との関わりの1つの形として、学校時代におけるキャリア教育への一層緊密な連携の他、学校のキャリア教育から十分学べなかった者に対して、その分を補填するようなキャリア形成支援を常に用意しておくことの必要性等を示唆した。

(6)「第7章 学校時代のキャリア教育の自由記述データによる分析」の主な内容

第7章では、小学校や中学校、高校、大学等の学校時代において、現在の職業生活に関係があったと思うことの自由記述データを用いて分析を行った。

その結果、第一に、自由記述の内容の時代的変遷の分析を通して、職業生活に関係する各時代における基本的な事柄を見出した。具体的には、①関与する他者（【友達】【先輩】など）や活動（【クラブ】【部活】【アルバイト】【サークル】など）の幅の広がり、②同一の語句の意味内容の変遷などが示された。第二に、職業生活を営む現在から学校時代の経験を想起し

た際に、授業としての「キャリア教育」も一定の記述があるものの、人間生活を営む上での基礎的なルールの学習である【活動】と職業生活に結びつく社会的なルールの教育的効果を有している【アルバイト】といった《キャリア教育》がより「現在の職業生活に関係した出来事」として結びつく傾向にあることを明示した。第三に、「現在の職業にもっとも関係した時代」について、①学歴を問わずに約70%の人が「最終学歴」を選択する一方で、②「現在の身分」によっては、「最終学歴」を選択する割合が低下するという事実から、「就職」という経験は、その結果によっては過去の意味づけを変容させる人生の転機となっているという記憶の現在性・社会性との関連を明らかにした。

以上の知見から「キャリア教育」の課題として、第一に「キャリア教育」が「社会」の変化に対応していかなければならないという点を示唆した。今日流通している「就職」や「職業」という文脈における説得的な語りの形式および内容の歴史的特殊性の把握が重要となることを述べた。第二に学校時代のキャリア教育は授業としての「キャリア教育」のみで成り立つわけではなく、学生の自主的な行動による《キャリア教育》からも成り立っていた。「キャリア教育」には、学生が、①《キャリア教育》を経験する基盤としての役割、②《キャリア教育》の経験の解釈に対する支援を果たしていくことが重要となることを示唆した。第三に学校教育における「キャリア教育」の効果を測定することの困難という問題を示唆した。回答者の現在の状況は、社会の経済状態とそれに伴う雇用の問題と大きく関連する以上、「個人」的な問題ではなく、「社会」的な問題と通底している。したがって、「個人」の問題としてだけではなく、「社会」の問題とも関連させて「キャリア教育」の在り方を模索していくこと、ならびに「キャリア教育」の困難を学校教育の問題だけではなく「社会」の問題として捉え、その困難と向き合っていくことが肝要となることを示唆した。

(7)「第8章 労働行政におけるキャリア教育の推進に向けて」の主な内容

第8章では、各章の分析結果から、今後のキャリア教育推進に向けて注目される事項を要約し、労働行政におけるキャリア教育推進施策等について若干の示唆を行った。

キャリア教育の有効性を検討する指標の1つとして、職業生活を送っている現在におけるキャリア教育の記憶に注目し、キャリア教育を記憶していることに影響を与える「職業興味や職業適性などの検査」、「職業や仕事を調べる授業」、「職業人や地域の人に話を聞く授業」、「進路の目標や計画を考える授業」、「ボランティアなどの体験活動」、「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」等の自己理解、仕事理解、啓発的経験、意思決定に係る各学習の重要性を確認した上で、これらを後に役立ったと評価されるように実施することが課題であるとの指摘を行った。また、最終学歴に近い学校種に通っているときに将来の進路や職業について最も学習したとする傾向も強かったことから、最終学歴直近の学校段階におけるキャリア教育について、総仕上げとしての意義を指摘した。

さらに、学校卒業時の就職活動に成功し直線的なキャリアを歩んだ者ほどキャリア教育の

記憶があり役立っているとの評価が高かった一方で、転職、非正規就労経験者等直線的なキャリアを歩まなかった者においても、キャリア教育を高く評価する者では一定の収入を得られていたことから、労働市場で困難局面に遭遇してもキャリアを形成する基礎力を育み培うキャリア教育に対する期待を記述した。

加えて、職業生活や生活全般、将来の目標設定に対するキャリア教育の正の影響と、自尊心が職業生活や生活全般、将来の目標設定に与える正の影響及び自尊心に正の影響を及ぼす「(これまでの人生は) 努力で決まってきた」という考え方に着目し、キャリア教育による新たな体験や刺激が、学校生活を積極的に送る方向や努力が人生に影響を与えると考えられる方向へと機能する可能性を示唆した。これは、中学・高校時代のキャリア教育を記憶していること及び高校のキャリア教育が役立っているとの評価が、「(これまでの人生は) 努力で決まってきた」という考え方と統計的に有意な水準で関係があること等が見出されたことによる。キャリア教育が学校生活を積極的に送り、努力することを促すような内容となるように留意することにより、キャリア教育と学校生活の教科等との好循環が形成できると考えられた。

キャリア教育は、このように学校生活への好循環と職業生活への好影響の可能性を内在している。これを現実のものとするためには、教育行政と関係行政が緊密に連携し、学校外の資源を有効に活用して、多角的な教育支援を行うことが必要である。

労働行政においては、職業適性検査等の効果的な提供（自己理解支援）を行うほか、学生・生徒が職業を身近なものとして興味を持つことができるよう、地域の実情に即した職業情報の収集と提供や職業人の講話（仕事理解支援）、職場体験（啓発的体験支援）等の実施を工夫すること、教育機関領域におけるキャリア・コンサルティングの充実（意思決定支援）とそのためのキャリア・コンサルティング能力の向上支援を行うこと、就職活動を効果的に推進するため大学等に対する就職活動の進め方や履歴書作成等に関するノウハウを提供すること等、職業や労働に最も近いという特徴を活かして、キャリア教育へ一層貢献することが重要であるとの指摘を行った。

(8)「補章1 学校時代のキャリア教育と地方の教育・労働指標との関連」の主な内容

補章1として、学校時代のキャリア教育と各都道府県の社会生活統計指標との関連を分析した。おもな知見として、中学のキャリア教育が記憶にあるか否かが各都道府県の社会生活統計指標と密接に関連していた。「有効求人倍率」「労働力人口比率」「完全失業率」「第3次産業就業者比率」などの労働関係の指標の他、「15歳未満人口割合」「合計特殊出生率」などの人口に関わる指標、「専門学校生徒数」「大学数」などの教育関連の指標と関連がみられた。

様々な要因が関連しているため、単純な解釈は許されないが、何らかの形で地域の労働市場を安定させることによって、キャリア教育の推進を側面から支援することが可能となる場合があることを暫定的な知見の1つとして述べた。

また、労働関連の指標とキャリア教育の関連性はある程度明確であり、キャリア教育が生

徒にとって印象に残るようなものになるにあたって、各都道府県の労働関係の指標が良好であることが下地になっていると解釈できる可能性のあることを示唆した。

(9)「補章2 これからのキャリア教育と労働行政」の主な内容

本研究の内容を受けて、これからのキャリア教育と労働行政の関わりについて示唆を行った。若年者の就業問題として指摘されるフリーターや無業者、早期離職は、いずれも初期キャリアの問題であり、ここにキャリア教育がどのような影響を及ぼしているのかを検討する必要があると指摘し、本研究で行ったキャリア教育の中長期的な効果測定の意義について述べた。また、これからのキャリア教育は、キャリアを「能力」ととらえ、スキルを身につけ、知識・技能に働きかけて基礎的・汎用的能力を育成し、社会的・職業的自立を支援する働きかけである点を指摘し、そうした「能力」としてのキャリアへの働きかけを、中学・高校・大学の各学校段階で行っていく必要があることを述べた。その上で、労働行政が果たすべき役割として、キャリア教育を通して高められる「意識」と「能力」を社会的・職業的自立にうまくつなげていくところにあると述べ、キャリア教育が生き方教育のみを強調し、キャリア教育が職業離れを起こすことがないように、社会的・職業的自立へ向けての支援を充実させていくことが労働行政に求められていると示唆した。

【引用文献】

- Brown, S. D., & Ryan Krane, N. E. 2000 Four(or five) sessions and a cloud of dust: Old assumptions and new observations about career counseling. In S. D. Brown, & R. W. Lent (Eds.), *Handbook of counseling psychology* (3rd ed., pp.740-766). New York: Wiley.
- Brown, S. D., Ryan Krane, N. E., Brecheisen, J., Castelino, P., Budisin, I., Miller, M., & Edens, L. 2003 Critical ingredients of career choice interventions: More analyses and new hypotheses. *Journal of Vocational Behavior*, 62, 411-428
- Evans, J. H. Jr., & Burck, H. D. 1992 The effects of career education interventions on academic achievement: A meta-analysis. *Journal of Counseling & Development*, 71, 63-68.
- Fretz, B. R. 1981 Evaluating the effectiveness of career interventions. *Journal of Counseling Psychology*, 28, 77-90.
- Hughes, D., Bosley, S., Bowes, L., & Bysshe, S. 2002 The economic benefits of guidance. CeGS Research Report Series No 3. Derby: Centre for Guidance Studies, University of Derby.
- International Labour Office.(ILO) 2006 Career guidance: A resource handbook for low-and middle- income countries. Geneva, ILO.
- Killeen, J., White, M., Watts, G. 1992 Economic Value of Careers Guidance. Policy Studies Institute.
- 文部科学省 2006 小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引—児童生徒一人一

人の勤労観、職業観を育てるためにー

OECD 2004 *Career guidance and public policy: Bridging the gap*. Paris, France: OECD

Oliver, L. W., & Spokane, A. R. 1988 Career-intervention outcome: What contributes to gain?
Journal of Counseling Psychology, 35, 447-464.

労働政策研究・研修機構 2008 学校段階のキャリア形成支援とキャリア発達 労働政策研究報告書 No.104

生涯キャリア支援と企業のあり方に関する研究会 2007 生涯キャリア支援と企業のあり方に関する研究会報告書

Whiston, S. C., Brecheisen, B. K., & Stephens, J. 2003 Does treatment modality affect career counseling effectiveness? *Journal of Vocational Behavior*, 62, 390-410.

Whiston, S. C., Sexton, T. L., & Lasoff, D. T. 1988 Career intervention outcome: A replication and extension. *Journal of Counseling Psychology*, 45, 150-165.

World bank 2004 Public policies for career development: Case study and emerging issues for designing career information and guidance systems in development and transition economics. Washington, DC: Worldbank.

(参考図表) キャリア教育等に関する近年の施策等の動き

| 年月 | 発表主体 | 題名 | 特記事項 |
|---------|---------------------|---|---|
| | 〇 指摘事項等 内要 | | |
| 1997.1 | 文部科学省 | 「教育改革プログラム」 〇「インターンシップ」の推進明記-将来の科学技術の発展を託す人材の養成の中で、大学におけるインターンシップを位置づけ 「インターンシップ(学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと)を支援する取組を総合的に推進します。」 | |
| 1997.5 | 政府 | 「経済構造の変革と創造のための行動計画」 〇「インターンシップ」の推進明記-創造的研究開発基盤の整備/国際競争力のある人材養成における大学の国際競争力強化の中での位置づけ 「インターンシップ(学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと)については、学生や企業側における意義を踏まえ、関係省庁が連携を図りつつ、総合的な施策を推進し、中小企業への支援を含め、一層の普及に努める。」 | |
| 1997.9 | 厚生労働省、文部科学省、経済産業省 | 「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」 〇大学等における「インターンシップ」の望ましい在り方、推進方策の在り方を指摘 「インターンシップの円滑な推進のため、文部省、通商産業省、労働省が連携し、大学等、企業等の協力を得ながら、以下の施策を積極的に展開することが必要であると考えられる。」 1)インターンシップに関する調査研究及び情報提供 2)インターンシップ推進のための仕組みの整備 3)大学等及び受け入れ企業等に対する支援 | |
| 1998.3 | 厚生労働省 | 「インターンシップ等学生の就業体験のあり方に関する研究会」報告書 〇大学院・大学・短大・高専・専修学校における「インターンシップ」の効果的実施と発展・普及策の指摘 「インターンシップの普及に資する行政の対応として、例えば次のような方策について、今後具体的な検討を行い、実現を図る必要がある。」 ①企業の理解を深めるため、企業の取り組みを積極的に支援、②インターンシップの類型別にみた効果的な条件等について整理して情報提供、③企業等に対する相談等の支援、④公共職業安定機関等における職業情報等の整備、⑤関係行政における支援策の連携 | 《平成11年3月》 ・インターンシップモデル事業実施(経済産業省) |
| 1999.12 | 中央教育審議会 | 「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」(答申) 〇「キャリア教育」の明示 「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育(望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育)を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。」 | 《平成11年度～》 ・高校生を対象とした「ジュニア・インターンシップ事業」実施(厚生労働省) |
| 2001.5 | 厚生労働省 | 「第7次職業能力開発基本計画」(平成13年度～17年度) 〇若年者の職業能力として「職業意識の啓発」施策を記述 「事業主との協力の下行うインターンシップや職業ガイダンス等を活用して、在学中の早い時期から職業意識の啓発を積極的に行っていく。」 | ・インターンシップ導入促進等支援事業実施(厚生労働省) |
| 2002.7 | 厚生労働省 | 「キャリア形成を支援する労働市場政策研究会」報告書 〇「長いキャリアの準備期としての学校教育」に関する指摘 「早期から職業に関心を向け、職業意識を涵養することが益々重要になっている。」 | |
| 2002.11 | 国立教育政策研究所生徒指導研究センター | 「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」 〇「『職業観・勤労観』の育成』の必要性を指摘 職業観・勤労観の育成は、社会や企業が求める人材を養成するといった役割を超えて、全ての子どもたちが自立し、他者と協働して生きるために身につけなければならない最低限の力を育むという重要な意味を持っている。 〇「産業・経済社会の現実についての適格な情報提供」の必要性を指摘 「職場見学・体験やインターンシップ、先輩や企業人の経験の活用、産業・経済の動きや雇用の変化等についての十分な情報提供により、子どもたちに職業の世界が現実感をもって見えるようにする必要がある。」 〇「職業的(進路)発達にかかわる諸能力」を提示 「人間関係形成能力」、「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」の4領域を縦軸に、小・中・高の学校段階を横軸にしたマトリックスで、各発達段階で育成することが期待される具体的な能力・態度を提示 | |
| 2003.6 | 若者自立・挑戦戦略会議 | 「若者自立・挑戦プラン」 〇「キャリア教育、職業体験等の推進」政策を列挙 a.勤労観・職業観の醸成を図るため、学校の教育活動全体を通じ、子どもの発達段階を踏まえた組織的・系統的なキャリア教育を推進する。 b.小学校段階からの各種仕事との触れ合いの機会を充実する。 c.インターンシップについて、単に認定の促進、期間の多様化などにより内容を充実し、実施の拡大を図る。 d.社会や企業の最新情報を活かした進路相談などを効果的に実施するため、地域の態様な人材を様々な教育の場で積極的に活用する。 | 《平成15年度～》 ・中学生・高校生を対象とした「職場見学会、職場実習等」実施(厚生労働省) |

| | | | |
|---------|--|---|---|
| 2003.9 | 若年者キャリア支援研究会 | 「若者の未来のキャリアを育むために～若年者キャリア支援政策の展開」 | |
| | <p>○「学校は実践力、人間力を育てる主体」との指摘</p> <p>「若者が、各個人の能力、適性を踏まえた上でキャリア設計、職業選択を行い、自立した職業生活を営むことを可能とするキャリア教育、進路指導の実施が求められる。その一環として、…（中略）…職業体験学習をカリキュラムに的確に位置づけることや、卒業するための必修単位に認定することにより、これまで以上に職業体験学習機会を拡大すべきである。…（中略）…なお、地域の企業やその団体が、学校の行うキャリア教育、職業体験等に対する積極的な協力を行うことが重要である。このため、地域の企業と学校をむすびつけ、学生・生徒に効果的な職業体験プログラムを提供する仕組みの整備が不可欠である。」</p> | | |
| 2004.1 | キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議 | 「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために」 | |
| | <p>○「キャリア教育」を定義</p> <p>「キャリア教育とは、児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度を育てる教育」。端的には「児童生徒の勤労観、職業観を育てる教育」</p> <p>○「キャリア教育推進のための方策」を提示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各発達段階に応じた「能力・態度」の育成を軸とした学習カリキュラムの開発 ・各学校における教育課程への適切な位置付けと指導の工夫・改善 ・体験活動等の活用（職場体験、インターンシップ等） ・社会や経済の仕組みについての現実的理解、労働者としての権利・義務等の知識の習得 ・多様で幅広い他者との人間関係の構築 | | |
| 2004.2 | 専門学校等における「日本版デュアルシステム」に関する調査研究協力者会議 | 「専門学校等における『日本版デュアルシステム』の推進に向けて」－実務と教育とが連結した新しい人材育成システム推進のための政策提言－ | <p>《平成16年度～》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「日本版デュアルシステム」実施（厚生労働省・文部科学省） ・「YESプログラム」実施（21年度まで）（厚生労働省） ・「新キャリア教育プラン、キャリア教育推進地域指定事業」実施（文部科学省） |
| | <p>○「専門学校等における日本版デュアルシステムのあるべき姿とねらい」を提言</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産業界と専門学校等とが連携をとりながら双方にとってメリットがあるように協同で人材を育成する教育システムを構築することがあるべき姿 ・実践的な職業知識・技能を教育を導入して生徒の資質・能力を伸長するとともに、勤労観、職業観を育むことを第一義的なねらいとする。 ・日本版デュアルシステムの導入によって、高等学校を活性化するとともに、専門学校等と地域の産業・企業とのパートナーシップを確立して地域の産業・企業が求める人材など、社会に有為な人材を育成することをねらいとする。 | | |
| 2004.12 | 若者自立・挑戦戦略会議 | 「若者自立・挑戦のためのアクションプラン」 | |
| | <p>○「学校段階からのキャリア教育の強化（ものづくり体験等）」に関する施策を提起</p> <p>「小中高校において、勤労観、職業意識の形成や職業教育等を行うため、関係府省が密接に連携し、産業界の最大限の協力を得つつ、以下のような事業を通じて、学校段階からのキャリア教育を強力に推進する。</p> <p>その際、キャリア教育に係る事業の一体的かつ効果的な実施を図るため、学校、PTA、各教育委員会、各労働局・ハローワーク、各経済産業局、地方公共団体、地域の経営者協会や商工会議所等による地域レベルでの協議の場を設けるなど、関係機関等の連携・協力による支援システムづくりに取り組むこととし、本アクションプラン策定後速やかに、各章から関係機関等に対し、具体的な指示・協力依頼を行う。」</p> <p>①中学校中心とした5日以上の職場体験やインターンシップの実施等</p> <p>②ハローワークと産業界が連携して行う職業意識形成支援事業の対象校拡大と若年者ジョブサポーターの拡充</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企業人等を講師として学校に派遣し、職業や産業の実態、働くことの意義、職業生活等に関して生徒に理解させ、自ら考えられるキャリア検索プログラム ・ジュニア・インターンシップ <p>③NPO、企業等の民間の経験やアイデアを活用し、モノづくり等の働くことの面白さを伝える教育のモデル地域（10地域）での実施</p> | | |
| 2005.3 | 厚生労働省 | 「インターンシップ推進のための調査研究会報告書」 | |
| | <p>○「キャリア教育全体の中でのインターンシップの位置づけ」に関する認識</p> <p>「インターンシップは、中学、高校中等教育段階でのキャリア教育を通じた、働くことの意義についての基本認識、自己と社会、職業を関係付けて考えることの習慣付けといった成果を踏まえ、また大学におけるキャリア教育の一環として、低学年次からの適切な指導やインターンシップに先立つての事前指導の積み重ねの上に実施されることで、初めて多様な成果が生まれるものと認識すべきである。」</p> | | |
| 2005.6 | 内閣府 | 「若者の未来のキャリアを育むために～若年者キャリア支援政策の展開」包括的な自立支援方策に関する検討会報告書 | <p>《平成17年度～》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学校における「キャリア・スタート・ウィーク」実施（文部科学省） |
| | <p>○若者の自立に向け、「キャリア教育の充実の重要性」を指摘</p> <p>学校教育においても、社会的自立に向けた基礎的な能力や意識の向上を図るため、小学校から発達段階に対応した組織的・系統的な指導を行うとともに、職場体験等を通じた職業意識の形成を図るなど、キャリア教育の充実が重要である。</p> | | |

| | | | |
|---------|--|--|--|
| 2005.9 | 若者の人間力を高めるための国民会議 「若者の人間力を高めるための国民宣言」 「国民運動推進の基本方針」 | 「若者の人間力を高めるための国民宣言」 「国民運動推進の基本方針」 | ・「キャリア教育実施プロジェクト」実施（文部科学省） ・「地域自律・民間活用型キャリア教育プロジェクト」（平成19年度まで）（経済産業省） |
| | ○ 運動推進を宣言（「若者の人間力を高めるための国民宣言」） 「1. 子供の頃から人生を考える力やコミュニケーション能力を身につけさせ、働くことの理解を深めさせるなど、社会に出る前の若者が生きる自信と力をつけることができますようにします。」 ○ 各段階の若者に対する支援等を表明（「国民運動推進の基本方針」） 「小中学校では、学習意欲を高めるとともに自らの人生を考えることを学ばせ、また、職場を訪れたり、仕事を体験したり、仕事をしている人の話を聞く機会を増やします。」 「大学では、質の高い教育を行うとともに社会人としての生きる力を身につけさせ、また、インターンシップなどを通じ、仕事に対する理解を深めるとともに、幅広く仕事に関する情報を手に入れられるようにします。」 | | |
| 2005.11 | 文部科学省 「中学校 職場体験ガイド」 | 「中学校 職場体験ガイド」 | |
| | ○ 学校、受入企業等、家庭・保護者を対象としたキャリア・スタート・ワーク理解と実施のためのガイド | | |
| 2006.1 | 若者自立・挑戦戦略会議 「若者自立・挑戦のためのアクションプラン」 | 「若者自立・挑戦のためのアクションプラン」 | |
| | ○ 学校段階からのキャリア教育の強化 ①中学校を中心に、5日以上の職場体験やインターンシップの実施など、地域の教育力を最大限活用し、キャリア教育の更なる強化を図る。 ②キャリア探索プログラム、ジュニア・インターンシップ等、ハローワークと産業界が連携して行う職業意識形成支援事業対象校を拡大する。若年者ジョブサポーター数を拡充する。 ③NPO、企業等の民間の経験やアイデアを活用し、ものづくり等の働くことの面白さを伝える教育を、モデル地域（10か所程度）において実施する。 | | |
| 2006.2 | 社会人基礎力に関する研究会 「中間とりまとめ」 | 「中間とりまとめ」 | |
| | ○ 3分野12要素の社会人基礎力を提案 ・社会人基礎力＝組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力 ・前に踏み出す力（アクション）：主体性、働きかけ力、実行力 ・考え抜く力（シンキング）：課題発見力、計画力、創造力 ・チームで働く力（チームワーク）：発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力 | | |
| 2006.7 | 厚生労働省 「第8次職業能力開発基本計画」（平成18年度～22年度） | 「第8次職業能力開発基本計画」（平成18年度～22年度） | |
| | ○ 職業キャリアの準備期における支援として「インターンシップや職業ガイダンス」を記述 「小中学校、大学のそれぞれの段階において、職業との触れ合いや職業意識の啓発を通じ、働くことの理解を深めさせ、生きる自信と力をつけさせる。具体的には、児童・生徒について、学校等との連携の下、初等・中等教育段階からの職業キャリア教育の充実や職業と触れ合う機会づくりを進めるとともに、生徒・学生について、事業主等との連携の下、インターンシップや職業ガイダンスを実施する。」 | | |
| 2006.11 | 文部科学省 「キャリア教育推進の手引ー児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるためにー」 | 「キャリア教育推進の手引ー児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるためにー」 | |
| | ○ キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために」を手引として発行。具体例やキャリア教育評価のPDCAも提示。 「現在、マネジメント・サイクルとして、計画（Plan）を実行（Do）し、評価（Check）して改善（Action）に結びつけるPDCAサイクルが提案されている。学校運営・教育活動において有効と考えられることから、キャリア教育の全体計画等においても、適切に評価するとともに、その評価が改善に結びつき、次期目標へ反映されることが重要である。」 | | |
| 2006.11 | 高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議報告書 「普通科におけるキャリア教育の推進」 | 「普通科におけるキャリア教育の推進」 | |
| | ○ 普通科の高等学校におけるキャリア教育の問題点を指摘 「普通科の進路指導は、当面する進路の指導に偏る傾向があり、その指導において十分な成果を上げているとは言い難い。」 ○ キャリア教育推進に望まれる15の方策を提言 学校に対する提言が含まれる項目は、「学校教育目標にキャリア教育の推進を位置付けること」、「組織的、体系的なキャリア教育の指導計画の作成」、「キャリア教育の適切な評価及び制度の評価方法の検討」、「キャリア教育を推進するための校内体制作りと外部との連携組織」、「すべての教職員を対象としたキャリア教育研修の充実」、「小・中・高・大の学校間、校種間の連携・協力」、「教育委員会、産業界、関係機関等に連携窓口の設置を図る」、「社会人講師等、外部人材の積極的活用」、「インターンシップ等の推進のための協議会等の設置」、「インターンシップ等多様な体験の機会の充実」、「キャリア教育を推進するための資料作成等」、「高等学校卒業後の支援」の12項目 | | |
| 2006.12 | 教育基本法改正 ○ 教育の目標（第2条第2項）に追加 「職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと」 ○ 義務教育の目的（第5条第2項）に追加 「国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。」 | | |

| | | | |
|--------|-------------------|--|--|
| 2007.5 | キャリア教育等推進会議 | 「キャリア教育等推進プランー自分でつかもう自分の人生ー」 ○ 小学校から大学院までの体系的なキャリア教育等の推進と関係機関の連携等の対応方針と施策を列挙 「各学校段階等における組織的で系統的なキャリア教育等の推進」に関する課題認識は次のとおり。 キャリア教育等については、学校現場において、キャリア教育等の必要性は理解されながらも現場での対応が区々である、特定の教員等の熱意によるところが大きく組織的な対応となっていない、高等学校普通科における取組の遅れ等学校段階等において取組具合に差異があり、各学校間の接続が不十分。 | |
| 2007.6 | 学校教育法改正 | ○ 新設された「第2章 義務教育」において職業との関連を明記(第21条第10項) 「職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと」 | |
| 2007.7 | 厚生労働省 | 「生涯キャリア支援と企業のあり方に関する研究会報告書」 ○ 「キャリア教育の不十分さ」に対する指摘 「企業に入社するまでの教育のあり方は、その後のキャリア形成に大きな影響を与える。在学中のキャリア教育が十分でないことに加え、学生側も働くことのリアリティに欠け、様々な情報に流されている。このため、職業意識が十分に醸成されていない者が増大するとともに、自らの資質と進路のミスマッチも深刻化しているという指摘もなされている。」 | |
| 2008.1 | 中央教育審議会 | 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申) ○ 「教育内容の主な改善事項」の1つとして「キャリア教育」を指摘 「近年の産業・経済の構造的な変化や雇用の多様化・流動化等を背景として、就職・進学を問わず子どもたちの進路をめぐる環境は大きく変化している。このような変化の中で、将来子どもたちが直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくためには、子どもたち一人一人の勤労観・職業感を育てるキャリア教育を充実させる必要がある。・・・(略)・・・具体的には例えば、 ・特別活動における望ましい勤労観・職業観の育成の重視 ・総合的な学習の時間、社会科、特別活動における、小学校での職場見学、中学校での職場体験活動、高等学校での就業体験活動等を通じた体系的な指導の推進、などを図る必要がある。」 | |
| 2008.2 | 若者の人間力を高めるための国民会議 | 「若者の職業意識形成支援に係るアピール文」 ○ 家庭、地域社会・学校、職場における若者支援の呼びかけ 「学校においては、各学校段階に応じ、職場体験活動などに積極的に取り組むとともに、それが一過性のものとならないよう、生徒たちが仕事について考える機会を増やし、また教員自身も様々な働く人の姿を生徒等に伝えよう。」 | |
| 2008.3 | 文部科学省 | 「小学校学習指導要領」告示 ○ 「総合的な学習の時間」の内容の取り扱い配慮事項として「ものづくり等の体験活動」を提示 「自然体験やボランティア活動などの社会体験、ものづくり、生産活動などの体験活動、観察・実験、見学や調査、発表や討論などの学習活動を積極的に取り入れること。」 | |
| 2008.3 | 文部科学省 | 「中学校学習指導要領」告示 ○ 「総合的な学習の時間」の内容として「職業や自己の将来に関する学習活」、取り扱い配慮事項として「職場体験活動」を提示 「学習活動については、・・・(略)・・・職業や自己の将来に関する学習活動などを行うこと。」 「自然体験や職場体験活動、ボランティア活動などの社会体験、ものづくり、生産活動などの体験活動、観察・実験、見学や調査、発表や討論などの学習活動を積極的に取り入れること。」 | |
| 2008.4 | 厚生労働省(中央職業能力開発協会) | 「キャリア・コンサルティング研究会」報告書 ○ 「教育現場において特に求められる」キャリア・コンサルタントの能力・専門性を整理 ・グループを通じた支援の実施能力 ・キャリア形成支援に係るプログラム等の企画・提案・コーディネート能力 ・学生のメンタル面・発達課題等に関する理解 ・企業での就労経験等 ・キャリア・コンサルタントとしての姿勢や態度(学生目線) | 《平成20年度～》 ・「ジョブカード」制度実施(厚生労働省) ・キャリア・コンサルタント技能検定試験実施(厚生労働省) ・「キャリア教育民間コーディネーター育成・評価システム開発事業」(経済産業省) |
| 2008.7 | 教育振興基本計画 | ○ 「基本的方向1 社会全体で教育の向上に取り組む ③人材育成に関する社会の要請に応える」施策としてキャリア教育の推進を提示 ◇地域の人材や民間の力も活用したキャリア教育・職業教育、ものづくりなど実践教育の推進 「子供達の勤労観や社会性を養い、将来の職業や生き方についての自覚に資するよう、経済団体、PTA、NPOなどの協力を得た、関係府省の連携により、キャリア教育を推進する。特に、中学校を中心とした職場体験活動や、普通科高等学校におけるキャリア教育を推進する。また、高校生等に専修学校の機能を活用した多様な職業体験の機会を提供するための取組を促す。さらに、ものづくりに関する児童生徒の興味・関心を高めるとともに知識・技術を習得させるため、例えば小・中学校段階のものづくり体験や、専門高校等における地域産業や経済界と連携したものづくり教育をはじめ、産業、職業への理解を図る。」 ○ 「基本的方向2 個性を尊重しつつ能力を伸ばし、個人として、社会の一員として生きる基盤を育てる ②規範意識を養い、豊かな心と健やかな体をつくる」施策としてキャリア教育の推進を提示 ◇勤労観・職業観や知識・技能をはぐくむ教育(キャリア教育・職業教育)の推進 「子供達の勤労観や社会性を養い、将来の職業や生き方についての自覚に資するよう、経済団体、PTA、NPOなどの協力を得た、関係府省の連携により、キャリア教育を推進する。特に、中学校を中心とした職場体験活動や、普通科高等学校におけるキャリア教育を推進する。また、専門高校等が地域社会等と連携して行う特色ある職業教育の取組を促すとともに、高校生等に専修学校の機能を活用した多様な職業体験の機会を提供するための取組を促す。さらに、ものづくりに関する児童生徒の興味・関心を高めるとともに知識・技術を習得させるため、例えば小・中学校段階のものづくり体験や、専門高校等における地域産業や経済界と連携したものづくり教育をはじめ、産業、職業への理解を図る。」 | |

| | | |
|----------|--|----------------------------|
| 2009. 3 | 文部科学省 | 「高等学校学習指導要領」告示 |
| | <p>○「教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項」として「職業教育に関して配慮すべき事項」を提示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・普通科においては、…（略）…必要に応じて、適切な職業に関する各教科・科目の履修の機会について配慮するものとする。 ・学校においては、キャリア教育を推進するために、地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、地域や産業界等との連携を図り、産業界等における長期間の実習を取り入れるなどの就業体験の機会を積極的に設けるとともに、地域や産業界等の人々の協力を積極的に得よう配慮するものとする。 <p>○「教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項」の「教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項」に「キャリア教育」を提示</p> <p>「生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進すること。」</p> | |
| 2009. 3 | 厚生労働省（中央職業能力開発協会） | 「若年者向けキャリア・コンサルティング研究会」報告書 |
| | <p>○「教育機関領域においてキャリア・コンサルタントが果たすべき役割」を指摘</p> <p>「特に中学校においては近年キャリア・スタート・ウィークによる職場体験が広く普及しており、こうした機会を活用した効果的なキャリア意識形成のためには、職場体験前後の職業意識啓発のためのキャリア・コンサルティングの実施等、キャリア・コンサルタント等の支援が効果的と考えられる。」</p> <p>「キャリア教育の支援を行うキャリア・コンサルタントには、school-to-workの接点の存在として、児童・生徒・学生（そして教員）に企業・社会事情を伝える役割、また企業に若年者事情を伝える役割が期待される。」</p> | |
| 2009. 10 | 緊急雇用対策本部 | 「緊急雇用対策」 |
| | <p>○「新卒者の就職支援態勢の強化」を決定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハローワークに「高卒・大卒就職ジョブサポーター」を緊急配備 ・大学等の就職支援の充実 <p>就職相談窓口の充実（キャリアカウンセラーの配置など）、女子学生等を対象にした「ライフプランニング支援」の推進、大学における職業指導（キャリアガイダンス）の制度化</p> | |
| 2010. 1 | 文部科学省 | 「小学校キャリア教育の手引き」 |
| | <p>○ 小学校を対象に、学年段階ごとにキャリア教育を教育課程とのかかわりで実施する内容・方法や校内推進体制等を具体的に提示</p> | |
| 2010. 3 | 厚生労働省（中央職業能力開発協会） | 「キャリア・コンサルティング研究会」報告書 |
| | <p>○ キャリア教育推進に関わる人材像の提起</p> <ol style="list-style-type: none"> ①生徒のキャリア形成を意識したキャリア教育場面における実践的な指導 ②キャリア教育の推進力・突破力を備えたリーダーシップの発揮 ③キャリア教育推進に係るコーディネート ④学校教育場で個々の生徒を支援するキャリア・コンサルティング ⑤キャリア教育推進に係る専門的助言・指導 | |
| 2011. 4 | 文部科学省 | 「大学設置基準」、「短期大学設置基準」改正施行 |
| | <p>○ 規定の新設</p> <p>「学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学（短期大学）内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。」</p> | |

(注) 1 は、厚生労働省施策等又は厚生労働省施策等が含まれるもの。

2 省庁名は、現在の名称に統一している。

第2章 学校時代のキャリア教育に対する評価

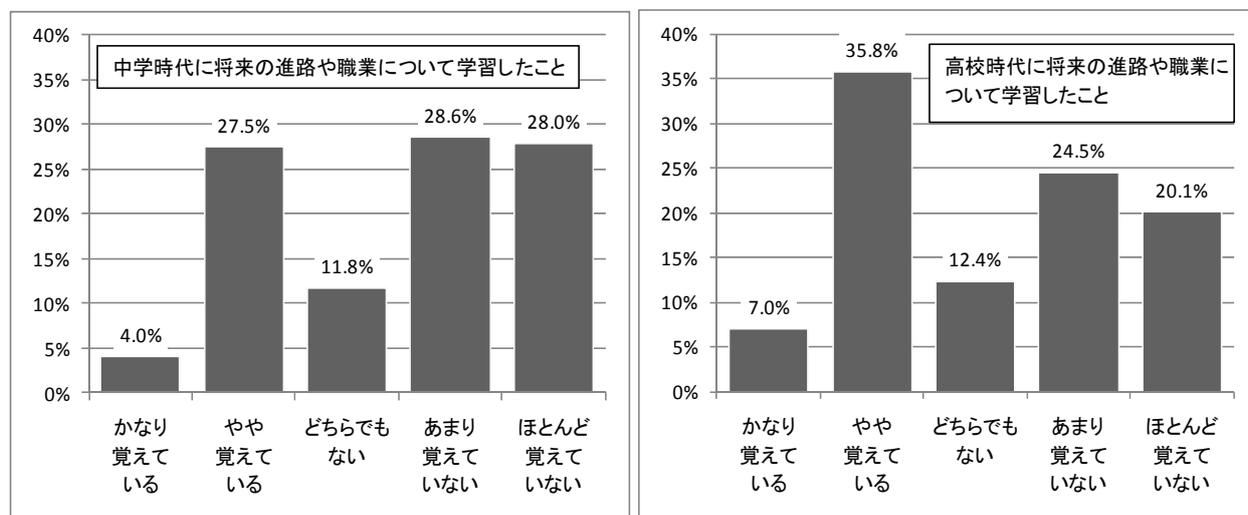
1. 学校時代のキャリア教育に対する評価

(1) 全般的傾向

本章では、中学時代・高校時代のキャリア教育に対する全般的な印象・評価をたずねた設問を中心に、その全般的な傾向、性別・年齢・地方による違いを以下に見ていくこととする。

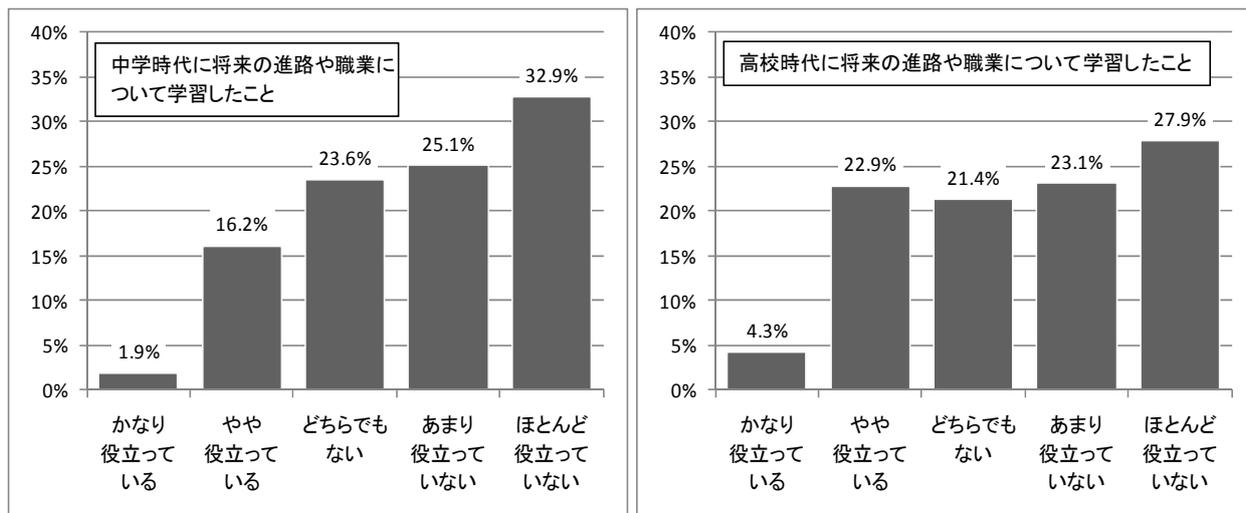
まず初めに、中学時代・高校時代のキャリア教育に対する全般的な印象・評価を「中学時代（高校時代）に将来の進路や職業について学習したことを覚えていますか」「中学時代（高校時代）に将来の進路や職業について学習したことは役立っていますか」という設問でたずねた。本調査の回答者が中学・高校時代には、いまだ学校現場において「キャリア教育」という用語が一般的でなかった可能性を考慮して、この設問では「キャリア教育」という用語を使用せず、「将来の進路や職業について学習したこと」といった言い回しでたずねた。

その結果、図表2-1および図2-2のような結果となった。まず、「覚えている」割合については、中学では「やや覚えている」「あまり覚えていない」「ほとんど覚えていない」という回答が30%弱とほぼ同じ割合であった。また、高校では「やや覚えている」が最も多く35.8%であった。



図表2-1 「中学時代・高校時代に進路や職業について学習したことを覚えている割合

一方、「役立っている」割合については、中学・高校ともに「ほとんど役立っていない」という回答が最も多く、それぞれ30%前後に達していた。以下、中学時代では「あまり役立っていない」「どちらでもない」「やや役立っている」と続いており、高校時代でもほぼ同様の傾向がみられていた。



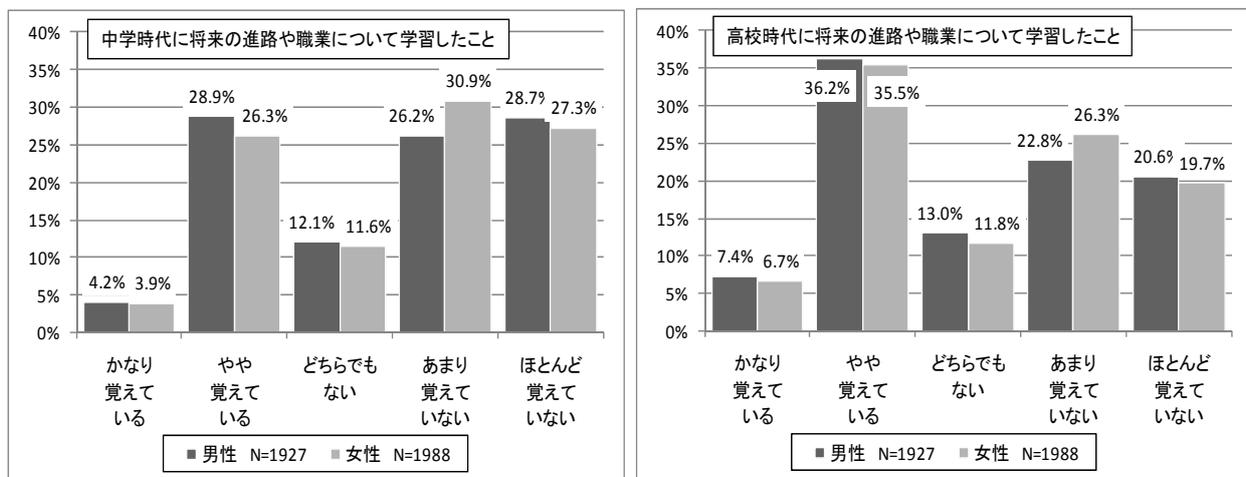
図表2-2 「中学時代・高校時代に進路や職業について学習したこと」が役立った割合

このように、総じて言えば、中学時代・高校時代に進路や職業について学習したことは、やや覚えているかまたはあまり覚えていないかに二極化している面があり、その学習の結果は総じて言えばあまり役立っていないという印象の回答が多い結果となった。

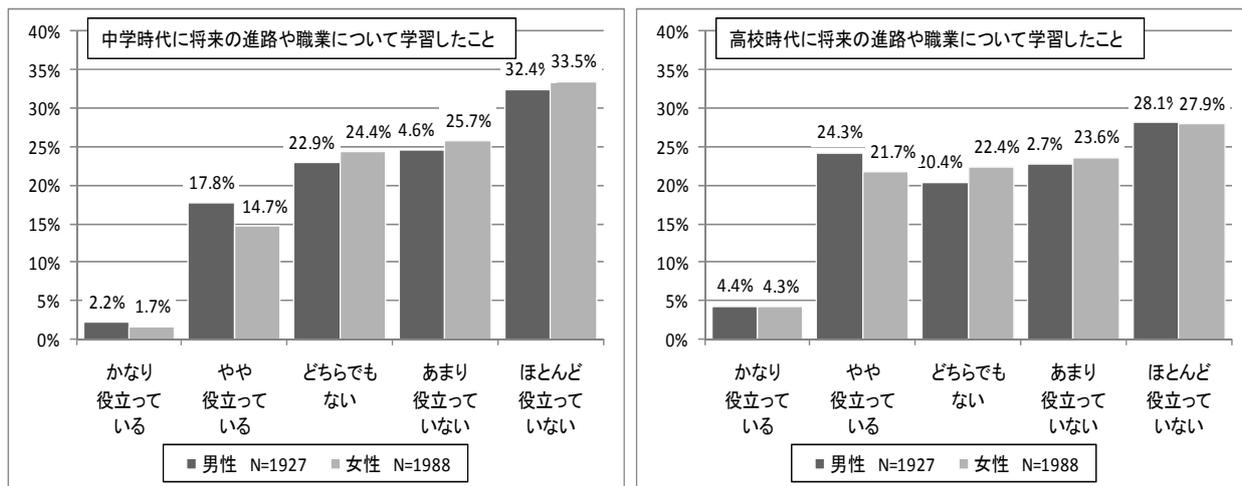
(2)性別・年齢・地方による違い

様々な要因によって、学校時代のキャリア教育に対する評価は違いがみられると考えられたので、以下に、学校時代のキャリア教育に対する評価の性別・年齢・地方による違いを検討した。

その結果、まず、図表2-3、図表2-4に示したとおり、性別による違いはほとんどみられなかった。

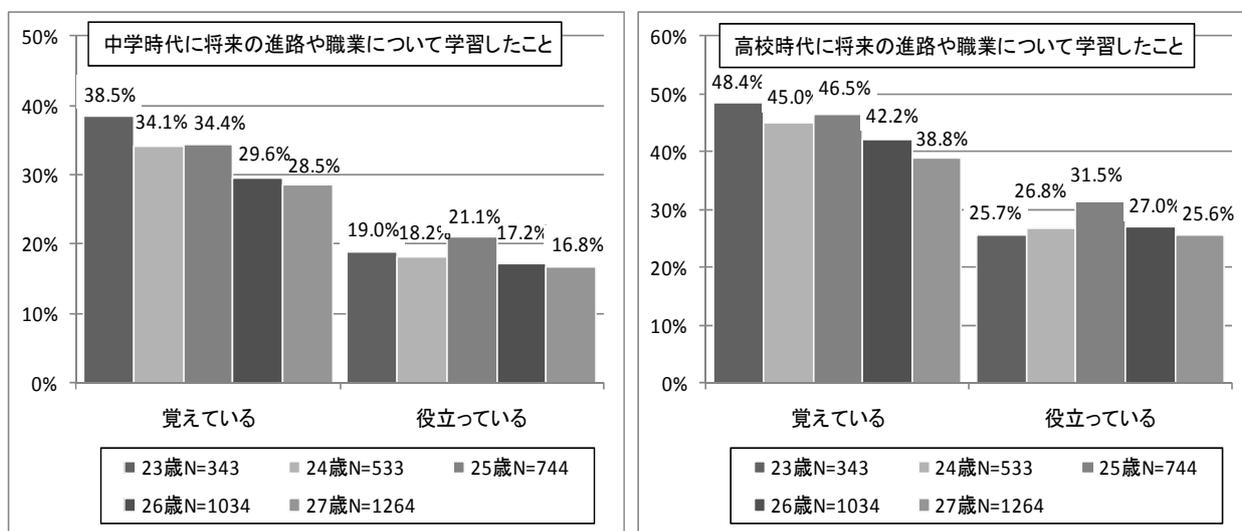


図表2-3 男女別の「中学時代・高校時代に進路や職業について学習したこと」を覚えている割合



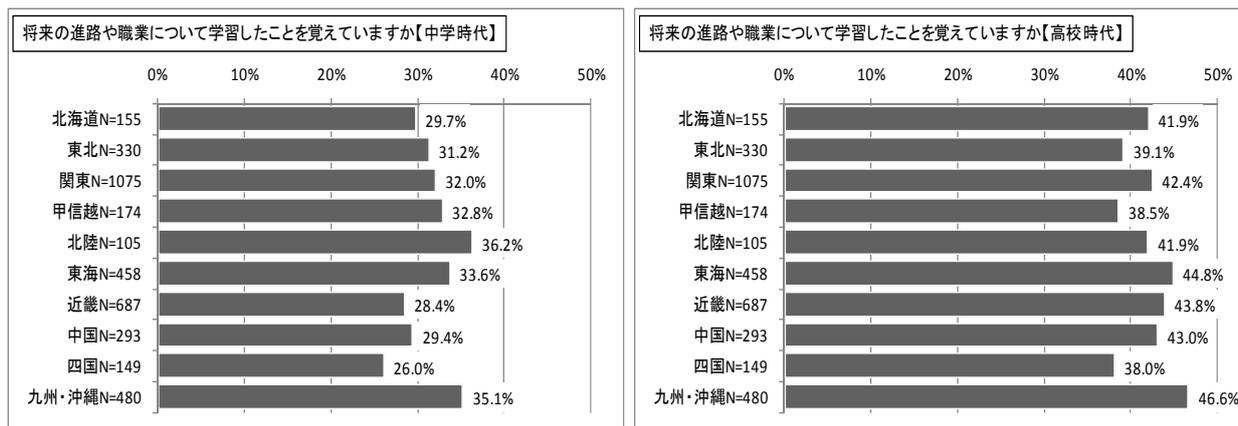
図表2-4 男女別の「中学時代・高校時代に進路や職業について学習したこと」が役立った割合

図表2-5に示したとおり、年齢による違いはみられた。「かなり覚えている」と「やや覚えている」を合計して「覚えている」割合、「かなり役立っている」と「やや役立っている」を合計して「役立っている」割合として、年齢による違いを検討した。その結果、「将来の進路や職業に就いて学習したことを覚えているか」で「中学時代」および「高校時代」ともに、年齢が若いほど「覚えている」とする回答が統計的に有意に多かった。

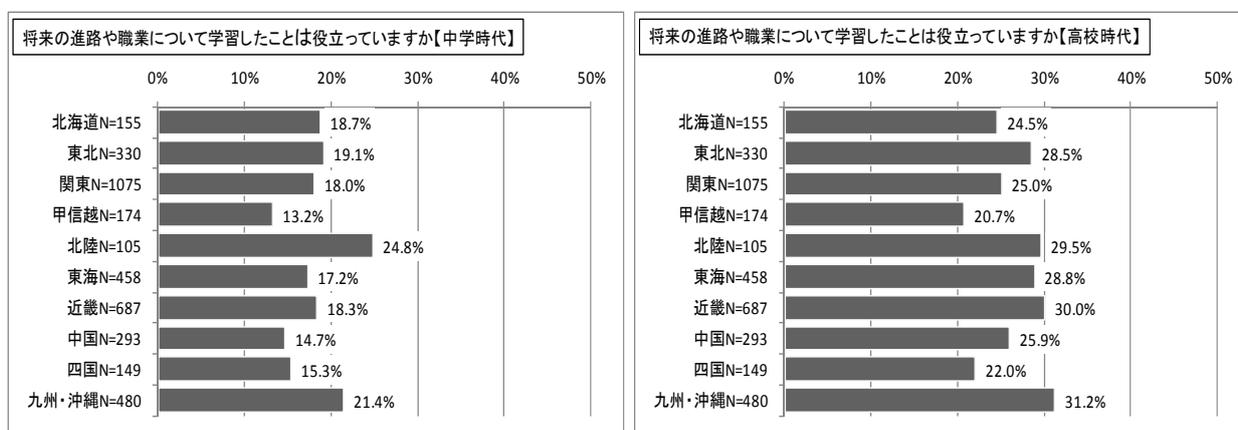


図表2-5 年齢別の「中学時代・高校時代に進路や職業について学習したこと」を覚えている割合(左)および役立った割合(右)

ただし、図表2-6および図表2-7に示したとおり、地方による違いは明確ではなかった。個別には「北陸」「東海」「九州・沖縄」などの地方で覚えている割合も役立った割合も比較的高いなどの結果がみられているが、いずれも統計的に有意な結果ではなかった。



図表2-6 中学・高校時代に住んでいた地方別の
「中学時代・高校時代に進路や職業について学習したこと」を覚えている割合



図表2-7 中学・高校時代に住んでいた地方別の
「中学時代・高校時代に進路や職業について学習したこと」が役立った割合

2. 学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

(1) 全般的傾向

今回の調査では、図表2-8に示したようなキャリア教育関連の授業や行事について、中学・高校・大学・短大・高専・専門学校等別に記憶があるか否かについても回答を求めた。その結果、図表2-8に示したとおり、記憶にある授業や行事は中学・高校・大学等でそれぞれ分かれていた。

図表2-8から、中学では「進路に関する二者面談や三者面談」「職業人や地域の人に仕事の話聞く授業」「ボランティアなどの体験活動」、高校では「進路に関する二者面談や三者面談」「進路に関する個別相談やカウンセリング」「職業興味や職業適性などの検査」、大学等では「就職活動の進め方や試験対策の授業」「履歴書の書き方や面接試験の練習」「職業興味や職業適性などの検査」が上位3位となった。中学・高校では二者面談・三者面談が記憶に残っているという共通性があるが、中学ではボランティアなどの体験活動や職業人に話を聞

く授業などが多く記憶されている一方、高校では個別相談・カウンセリングや興味検査・適性検査などが記憶されている割合が高い。大学では興味検査・適性検査が記憶にある点で高校と共通しているが、より具体的な就職活動の進め方や履歴書の書き方、面接試験・試験対策に関する授業が記憶に残っている割合が高いという結果となった。

図表2-8 中学・高校・大学等に行った授業や行事で記憶にあるものの割合

| | 中学 | 高校 | 大学等 | 中学で重視 | 高校で重視 | 大学で重視 | その他 |
|-----------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|
| 職業興味や職業適性などの検査 | 19.3% | 33.5% | 44.0% | | | ○ | |
| 自分の性格を理解するための検査 | 21.7% | 32.7% | 42.4% | | | ○ | |
| 職業や仕事を調べる授業 | 31.1% | 21.8% | 21.5% | ○ | | | |
| 職業人や地域の人に仕事の話を書く授業 | 31.5% | 15.1% | 18.4% | | | | ○ |
| 職場体験学習やインターンシップ | 26.3% | 11.7% | 30.6% | | | | ○ |
| ボランティアなどの体験活動 | 31.9% | 20.2% | 15.5% | ○ | | | |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 68.1% | 80.2% | 17.7% | | ○ | | |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 22.3% | 41.6% | 29.1% | | ○ | | |
| 進路の目標や計画を考える授業 | 18.9% | 31.9% | 18.6% | | ○ | | |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 11.3% | 25.5% | 47.9% | | | ○ | |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 4.5% | 16.5% | 48.5% | | | ○ | |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 5.8% | 14.8% | 32.5% | | | ○ | |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 3.5% | 7.7% | 21.4% | | | ○ | |

※数値は記憶にあると答えた回答者の割合。各学校段階で上位3位のものに網かけを付した。また「中学・高校・大学で重視」の欄は%の値から判断して傾向を示した。

(2)性別による違い

中学・高校・大学等で行った授業や行事で記憶にあるものについても、性別・年齢・地域に検討を行った。その結果、図表2-9～図表2-11に示したとおり、性別による統計的に有意な違いがみられた。

図表2-9 中学で行った授業や行事で記憶にあるものの性別の割合

| 中学 | 男性 N=1927 | 女性 N=1991 | (差) | 有意水準 |
|-----------------------|--------------|--------------|-------|------|
| 職業興味や職業適性などの検査 | 18.5% | 20.1% | 1.6% | |
| 自分の性格を理解するための検査 | 20.0% | 23.4% | 3.3% | |
| 職業や仕事を調べる授業 | 29.9% | 32.2% | 2.3% | |
| 職業人や地域の人に仕事の話を書く授業 | 29.7% | 33.2% | 3.5% | |
| 職場体験学習やインターンシップ | 23.0% | 29.5% | 6.5% | ** |
| ボランティアなどの体験活動 | 30.2% | 33.6% | 3.5% | |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 64.5% | 71.5% | 7.0% | ** |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 20.8% | 23.7% | 2.9% | |
| 進路の目標や計画を考える授業 | 18.1% | 19.7% | 1.7% | |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 11.3% | 11.3% | 0.0% | |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 4.0% | 5.0% | 1.0% | |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 6.2% | 5.5% | -0.7% | |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 3.5% | 3.6% | 0.1% | |

** p<.01 なお統計的に有意な結果が示された箇所については、高い値に網かけ、低い値に下線を付した。また、差の大きな箇所を太字にした。

図表2-10 高校で行った授業や行事で記憶にあるものの性別の割合

| 高校 | 男性 N=1927 | 女性 N=1991 | (差) | 有意 水準 |
|-----------------------|--------------|--------------|-------|----------|
| 職業興味や職業適性などの検査 | 31.4% | 35.5% | 4.1% | ** |
| 自分の性格を理解するための検査 | 31.4% | 33.9% | 2.5% | |
| 職業や仕事を調べる授業 | 20.7% | 22.9% | 2.2% | |
| 職業人や地域の人に仕事の話聞く授業 | 15.2% | 15.0% | -0.2% | |
| 職場体験学習やインターンシップ | 10.2% | 13.2% | 3.0% | ** |
| ボランティアなどの体験活動 | 17.2% | 23.1% | 5.9% | ** |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 77.7% | 82.7% | 5.0% | ** |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 38.3% | 44.7% | 6.4% | ** |
| 進路の目標や計画を考える授業 | 31.3% | 32.4% | 1.1% | |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 23.6% | 27.4% | 3.8% | ** |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 15.8% | 17.2% | 1.4% | |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 13.4% | 16.2% | 2.7% | |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 7.2% | 8.2% | 1.1% | |

** p<.01 なお統計的に有意な結果が示された箇所については、高い値に網かけ、低い値に下線を付した。また、差の大きな箇所を太字にした。

図表2-11 大学等で行った授業や行事で記憶にあるものの性別の割合

| 大学等 | 男性 N=1927 | 女性 N=1991 | (差) | 有意 水準 |
|-----------------------|--------------|--------------|-------|----------|
| 職業興味や職業適性などの検査 | 47.6% | 40.5% | -7.2% | ** |
| 自分の性格を理解するための検査 | 45.0% | 39.8% | -5.3% | ** |
| 職業や仕事を調べる授業 | 25.0% | 18.1% | -6.9% | ** |
| 職業人や地域の人に仕事の話聞く授業 | 20.0% | 16.8% | -3.2% | |
| 職場体験学習やインターンシップ | 32.5% | 28.7% | -3.9% | ** |
| ボランティアなどの体験活動 | 13.3% | 17.6% | 4.3% | ** |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 20.1% | 15.4% | -4.7% | ** |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 29.2% | 29.1% | 0.0% | |
| 進路の目標や計画を考える授業 | 20.6% | 16.6% | -4.0% | ** |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 48.1% | 47.6% | -0.5% | |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 49.1% | 47.9% | -1.2% | |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 30.8% | 34.3% | 3.5% | |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 23.1% | 19.7% | -3.4% | |

** p<.01 なお統計的に有意な結果が示された箇所については、高い値に網かけ、低い値に下線を付した。また、差の大きな箇所を太字にした。

おおむね中学・高校では女性の方が記憶に残ったという回答が多く、中学では「進路に関する二者面談や三者面談」「職場体験学習やインターンシップ」(図表2-9)、高校では「進路に関する二者面談や三者面談」「進路に関する個別相談やカウンセリング」「ボランティアなどの体験活動」(図表2-10)が記憶に残ったという回答が女性で多かった。ただし、大学等では男性の方が記憶に残ったという回答が多く、「職業興味や職業適性などの検査」「自分の性格を理解するための検査」「職業や仕事を調べる授業」が記憶に残ったという回答が男性で多かった(図表2-11)。

(3)年齢による違い

図表2-12～図表2-14には年齢別に検討した結果を示した。中学、高校、大学等に

共通して、おおむね年齢が若い方が記憶に残っていると回答する割合が多かった。特に、中学では「職場体験学習やインターンシップ」「職業人や地域の人に仕事の話聞く授業」「職業や仕事を調べる授業」で年齢が若いほど記憶に残っていると回答する割合が高かった（図表2-12）。また、高校では「進路の目標や計画を考える授業」「職業や仕事を調べる授業」「ボランティアなどの体験活動」で年齢が若いほど記憶に残っていると回答する割合が高かった（図表2-13）。大学等では「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」「履歴書の書き方や面接試験の練習」「就職活動の進め方や試験対策の授業」で年齢が若いほど記憶に残っていると回答する割合が高かった（図表2-14）

図表2-12 中学で行った授業や行事で記憶にあるものの年齢別の割合

| 中学 | 23歳 N=343 | 24歳 N=533 | 25歳 N=744 | 26歳 N=1034 | 27歳 N=1264 | (差) 23歳－ 27歳 | 有意 水準 |
|-----------------------|--------------|--------------|--------------|---------------|---------------|--------------------|----------|
| 職業興味や職業適性などの検査 | 23.9% | 22.3% | 20.2% | 18.8% | <u>16.8%</u> | 7.1% | ** |
| 自分の性格を理解するための検査 | 23.6% | 22.5% | 23.5% | 21.3% | 20.2% | 3.4% | |
| 職業や仕事を調べる授業 | 40.8% | 37.9% | 30.9% | 31.2% | <u>25.6%</u> | 15.2% | ** |
| 職業人や地域の人に仕事の話聞く授業 | 41.1% | 37.9% | 34.5% | 31.0% | <u>24.8%</u> | 16.3% | ** |
| 職場体験学習やインターンシップ | 48.7% | 35.8% | 29.2% | 23.6% | <u>16.9%</u> | 31.8% | ** |
| ボランティアなどの体験活動 | 38.8% | 37.9% | 30.9% | 32.0% | <u>28.0%</u> | 10.8% | ** |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 67.9% | 67.4% | 70.3% | 69.0% | 66.4% | 1.6% | |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 25.4% | 23.5% | 23.7% | 21.7% | 20.6% | 4.8% | |
| 進路の目標や計画を考える授業 | 23.9% | 20.8% | 21.6% | 19.1% | <u>15.0%</u> | 9.0% | ** |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 16.9% | 11.6% | 10.5% | 11.0% | 10.2% | 6.7% | |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 5.8% | 4.7% | 4.2% | 4.1% | 4.7% | 1.2% | |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 5.2% | 7.3% | 5.8% | 5.9% | 5.4% | -0.1% | |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 3.2% | 3.6% | 4.4% | 3.8% | 2.8% | 0.4% | |

** p<.01 なお統計的に有意な結果が示されたものについては、最も高い値に網かけ、最も低い値に下線を付した。また、差の大きな箇所を太字にした。

図表2-13 高校で行った授業や行事で記憶にあるものの年齢別の割合

| 高校 | 23歳 N=343 | 24歳 N=533 | 25歳 N=744 | 26歳 N=1034 | 27歳 N=1264 | (差) 23歳－ 27歳 | 有意 水準 |
|-----------------------|--------------|--------------|--------------|---------------|---------------|--------------------|----------|
| 職業興味や職業適性などの検査 | 39.4% | 36.6% | 35.1% | 32.9% | <u>30.1%</u> | 9.2% | ** |
| 自分の性格を理解するための検査 | 36.7% | <u>37.5%</u> | 34.3% | 33.0% | <u>28.4%</u> | 8.3% | ** |
| 職業や仕事を調べる授業 | 30.3% | 24.6% | 23.9% | 20.4% | <u>18.1%</u> | 12.2% | ** |
| 職業人や地域の人に仕事の話聞く授業 | 19.5% | 17.4% | 15.6% | 15.0% | <u>12.7%</u> | 6.9% | ** |
| 職場体験学習やインターンシップ | 16.3% | 14.6% | 12.4% | 11.0% | <u>9.4%</u> | 6.9% | ** |
| ボランティアなどの体験活動 | 28.0% | 18.6% | 20.8% | 20.0% | <u>18.5%</u> | 9.5% | ** |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 79.9% | 81.4% | 80.1% | 80.7% | 79.6% | 0.3% | |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 48.1% | 46.3% | <u>38.6%</u> | 42.1% | 39.1% | 9.0% | ** |
| 進路の目標や計画を考える授業 | 39.9% | 36.6% | 34.7% | 31.6% | <u>26.2%</u> | 13.8% | ** |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 31.2% | 26.8% | 25.4% | 25.0% | 24.0% | 7.2% | |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 21.6% | 18.0% | 15.2% | 16.2% | 15.5% | 6.1% | |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 18.1% | <u>18.8%</u> | 13.2% | 15.5% | <u>12.7%</u> | 5.3% | ** |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 11.1% | 7.9% | 7.3% | 8.3% | 6.5% | 4.6% | |

** p<.01 なお統計的に有意な結果が示されたものについては、最も高い値に網かけ、最も低い値に下線を付した。また、差の大きな箇所を太字にした。

図表2-14 大学等で行った授業や行事で記憶にあるものの年齢別の割合

| 大学等 | 23歳 N=343 | 24歳 N=533 | 25歳 N=744 | 26歳 N=1034 | 27歳 N=1264 | (差) 23歳－ 27歳 | 有意 水準 |
|-----------------------|--------------|--------------|--------------|---------------|---------------|--------------------|----------|
| 職業興味や職業適性などの検査 | 47.2% | 44.8% | 47.2% | 43.5% | 41.3% | 5.9% | |
| 自分の性格を理解するための検査 | 47.8% | 43.2% | 47.4% | 40.5% | <u>39.1%</u> | 8.7% | ** |
| 職業や仕事を調べる授業 | 27.7% | 22.7% | 23.0% | 21.1% | <u>18.8%</u> | 8.9% | ** |
| 職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業 | 21.6% | 18.4% | 19.9% | 18.7% | 16.5% | 5.1% | |
| 職場体験学習やインターンシップ | 33.5% | 29.6% | 32.7% | 32.3% | 27.5% | 6.0% | |
| ボランティアなどの体験活動 | 20.1% | 14.1% | 18.1% | 15.2% | <u>13.6%</u> | 6.5% | ** |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 20.1% | 16.3% | 19.6% | 17.5% | 16.7% | 3.4% | |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 33.2% | 31.7% | 27.8% | 29.7% | <u>27.3%</u> | 5.9% | ** |
| 進路の目標や計画を考える授業 | 23.6% | 22.1% | 19.0% | 17.4% | <u>16.4%</u> | 7.2% | ** |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 55.4% | 53.3% | 51.3% | 45.8% | <u>43.1%</u> | 12.3% | ** |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 55.4% | 52.7% | 51.3% | 47.6% | <u>44.0%</u> | 11.4% | ** |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 44.0% | 36.8% | 33.3% | 31.9% | <u>27.7%</u> | 16.3% | ** |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 23.0% | 22.3% | 22.6% | 22.0% | 19.4% | 3.6% | |

** p<.01 なお統計的に有意な結果が示されたものについては、最も高い値に網かけ、最も低い値に下線を付した。また、差の大きな箇所を太字にした。

(4) 地方による違い

図表2-15～図表2-17には地方別に検討した結果を示した。概して言えば、中学で行った授業や行事は、東北、甲信越、東海など東日本で中学・高校時代を過ごした者で記憶に残っているという回答が多く、高校では逆に中国や九州沖縄など西日本で中学・高校時代を過ごした者で記憶に残っているという回答が多かった。大学等については関東で中学・高校時代を過ごした者で記憶に残っているという回答が多かった。

図表2-15 中学で行った授業や行事で記憶にあるものの地方別の割合

| 中学 | 北海道 N=155 | 東北 N=330 | 関東 N=1076 | 甲信越 N=174 | 北陸 N=105 | 東海 N=458 | 近畿 N=687 | 中国 N=293 | 四国 n=150 | 九州 沖縄 N=481 | 有意 水準 |
|-----------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|-------------|--------------|--------------|--------------|--------------|-------------------|----------|
| 職業興味や職業適性などの検査 | 17.4% | 22.7% | 18.4% | 25.9% | 29.5% | 29.5% | 11.9% | 20.8% | 16.0% | <u>16.0%</u> | ** |
| 自分の性格を理解するための検査 | 29.0% | 27.6% | <u>19.1%</u> | 27.6% | 30.5% | 34.5% | <u>12.5%</u> | 18.8% | 22.0% | 19.8% | ** |
| 職業や仕事を調べる授業 | <u>20.0%</u> | 39.1% | 35.9% | 37.4% | 33.3% | 38.6% | <u>21.1%</u> | 28.0% | 24.0% | <u>27.2%</u> | ** |
| 職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業 | <u>16.8%</u> | 38.2% | 34.9% | 33.9% | 30.5% | 40.0% | <u>24.2%</u> | 29.0% | 32.7% | <u>27.2%</u> | ** |
| 職場体験学習やインターンシップ | <u>7.7%</u> | 27.6% | <u>23.8%</u> | 44.8% | 48.6% | 41.7% | <u>19.9%</u> | <u>20.5%</u> | <u>19.3%</u> | 25.6% | ** |
| ボランティアなどの体験活動 | <u>20.6%</u> | 34.8% | <u>29.0%</u> | 43.1% | 33.3% | 44.8% | <u>23.4%</u> | 31.7% | 34.7% | 34.9% | ** |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 72.9% | <u>76.7%</u> | 66.7% | 74.7% | 70.5% | <u>74.5%</u> | <u>62.3%</u> | 65.9% | 66.7% | 64.9% | ** |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 20.6% | 24.5% | 20.4% | <u>32.8%</u> | 27.6% | 25.5% | <u>18.8%</u> | 23.5% | 20.7% | 22.2% | ** |
| 進路の目標や計画を考える授業 | 16.8% | 23.0% | 17.7% | 17.8% | 21.9% | 22.9% | 16.6% | 18.8% | 18.0% | 19.5% | |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 13.5% | <u>17.3%</u> | 10.9% | <u>5.7%</u> | 5.7% | <u>19.9%</u> | <u>6.0%</u> | 11.9% | <u>18.0%</u> | <u>7.5%</u> | ** |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 4.5% | 5.5% | <u>2.9%</u> | 4.0% | 3.8% | <u>7.2%</u> | 3.3% | 6.1% | 7.3% | 5.2% | ** |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 3.2% | 4.2% | 6.2% | 2.9% | 7.6% | 8.7% | 4.5% | 5.8% | 7.3% | 6.0% | |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 4.5% | 4.8% | 4.2% | 2.9% | 1.0% | 2.6% | 2.9% | 3.1% | 4.0% | 3.5% | |

** p<.01 なお統計的に有意な結果が示されたものについては、最も高い値に網かけ、最も低い値に下線を付した。

図表2-16 高校で行った授業や行事で記憶にあるものの地方別の割合

| 高校 | 北海道 N=155 | 東北 N=330 | 関東 N=1076 | 甲信越 N=174 | 北陸 N=105 | 東海 N=458 | 近畿 N=687 | 中国 N=293 | 四国 n=150 | 九州 沖縄 N=481 | 有意 水準 |
|-----------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|-------------|-------------|--------------|--------------|-------------|-------------------|----------|
| 職業興味や職業適性などの検査 | 34.2% | 35.8% | 31.6% | 33.3% | 39.0% | 36.9% | 31.3% | 33.8% | 28.7% | 36.2% | |
| 自分の性格を理解するための検査 | 28.4% | 33.0% | 30.9% | 29.3% | 35.2% | 39.3% | 29.0% | 34.1% | 32.0% | 36.4% | |
| 職業や仕事を調べる授業 | 22.6% | 17.9% | <u>19.1%</u> | 16.7% | 25.7% | 22.3% | 22.3% | 26.3% | 22.0% | 26.8% | ** |
| 職業人や地域の人に仕事の話聞く授業 | 14.8% | 17.0% | <u>11.8%</u> | 14.9% | 20.0% | 13.3% | 14.7% | 19.1% | 14.0% | 20.4% | ** |
| 職場体験学習やインターンシップ | 14.2% | 13.9% | <u>7.9%</u> | <u>16.7%</u> | 13.3% | 10.5% | <u>8.6%</u> | 16.4% | 12.0% | 18.3% | ** |
| ボランティアなどの体験活動 | 20.0% | 23.3% | <u>15.6%</u> | 16.1% | 22.9% | 21.8% | <u>17.3%</u> | 23.9% | 24.0% | 27.9% | ** |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 73.5% | 83.0% | 77.9% | 83.9% | 82.9% | 81.7% | 79.9% | 83.3% | 78.0% | 82.1% | |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 39.4% | 39.7% | 40.6% | 50.6% | 45.7% | 39.3% | 40.0% | 46.8% | 44.0% | 41.8% | |
| 進路の目標や計画を考える授業 | 25.8% | 32.1% | 28.7% | 31.0% | 35.2% | 33.8% | 31.6% | 35.2% | 34.0% | 36.0% | |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | <u>34.2%</u> | <u>35.5%</u> | <u>19.7%</u> | <u>19.0%</u> | 21.9% | 25.8% | <u>21.0%</u> | 32.4% | 35.3% | 31.0% | ** |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 18.7% | <u>21.8%</u> | <u>10.6%</u> | 12.1% | 17.1% | 15.7% | 15.1% | <u>21.2%</u> | 23.3% | 24.3% | ** |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 11.6% | 11.8% | <u>12.4%</u> | 11.5% | 16.2% | 15.1% | 15.9% | 17.7% | 17.3% | 19.5% | ** |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 11.6% | 7.9% | 7.1% | 8.0% | 7.6% | 6.6% | 8.9% | 5.1% | 8.7% | 8.3% | |

** p<.01 なお統計的に有意な結果が示されたものについては、最も高い値に網かけ、最も低い値に下線を付した。

図表2-17 大学等で行った授業や行事で記憶にあるものの地方別の割合

| 大学等 | 北海道 N=155 | 東北 N=330 | 関東 N=1076 | 甲信越 N=174 | 北陸 N=105 | 東海 N=458 | 近畿 N=687 | 中国 N=293 | 四国 n=150 | 九州 沖縄 N=481 | 有意 水準 |
|-----------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|-------------|--------------|-------------|--------------|-------------|-------------------|----------|
| 職業興味や職業適性などの検査 | 35.6% | 38.2% | 47.8% | 46.8% | 39.4% | 41.8% | 46.7% | 41.5% | 42.6% | 37.5% | ** |
| 自分の性格を理解するための検査 | 34.1% | <u>30.9%</u> | 48.0% | 44.4% | 37.4% | <u>37.3%</u> | 46.0% | 36.8% | 35.7% | 38.5% | |
| 職業や仕事を調べる授業 | 22.7% | 17.1% | 24.0% | 22.6% | 23.2% | <u>16.5%</u> | 23.3% | <u>15.1%</u> | 25.6% | 20.3% | |
| 職業人や地域の人に仕事の話聞く授業 | 22.0% | 12.2% | 19.6% | 18.5% | 20.2% | 14.1% | 18.2% | 21.0% | 21.7% | 19.0% | |
| 職場体験学習やインターンシップ | 31.8% | 29.3% | 30.9% | 29.8% | 28.3% | 29.8% | 28.9% | 36.4% | 35.7% | 28.8% | |
| ボランティアなどの体験活動 | 19.7% | 15.0% | 14.5% | 16.1% | 11.1% | 15.2% | 15.7% | 16.5% | 19.4% | 17.2% | |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 17.4% | 16.3% | 18.2% | 15.3% | 15.2% | 18.6% | 16.8% | 19.5% | 22.5% | 16.1% | |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 31.8% | 22.0% | 32.4% | 28.2% | 23.2% | 28.9% | 28.3% | 23.9% | 30.2% | 27.7% | |
| 進路の目標や計画を考える授業 | 15.9% | 14.6% | 20.4% | <u>25.8%</u> | <u>9.1%</u> | 15.6% | 16.6% | 20.2% | 23.3% | 19.3% | ** |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 49.2% | 44.7% | 48.5% | 62.1% | 44.4% | 46.3% | 48.1% | 45.2% | 51.2% | 45.9% | |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 45.5% | 46.3% | 49.6% | 60.5% | 54.5% | 46.7% | 47.6% | 44.5% | 51.9% | 47.2% | |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 37.1% | 28.9% | 32.6% | 41.1% | 35.4% | 32.3% | 29.5% | 34.2% | 38.8% | 31.7% | |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 19.7% | <u>15.9%</u> | <u>23.8%</u> | <u>32.3%</u> | 20.2% | 19.1% | 19.9% | 16.9% | 26.4% | 20.1% | ** |

** p<.01 なお統計的に有意な結果が示されたものについては、最も高い値に網かけ、最も低い値に下線を付した。

3. 学校時代のキャリア教育と学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものとの関連

学校時代のキャリア教育に対する評価と学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものとの関連を検討した。

まず、図表2-18には、学校時代のキャリア教育を「覚えている」か否か別に学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを検討した。中学時代に将来の進路や職業について学習したことを「かなり覚えている」または「覚えている」と回答した者とそれ以外の者とを比較した。

その結果、中学校時代のキャリア教育を「覚えている」と回答した者とそれ以外の者で最も大きな開きがみられたのは「職業人や地域の人に仕事の話聞く授業」に関する記憶であり、「職業や仕事を調べる授業」がそれに続いていた。また、「職業興味や職業適性などの検査」「進路の目標や計画を考える授業」の記憶についても比較的大きな開きがみられた。高校時代のキャリア教育でも似たような傾向がみられており、最も大きな開きがみられたのは、

「進路の目標や計画を考える授業」に関する記憶であり、以下、「職業や仕事を調べる授業」「職業興味や職業適性などの検査」などが続いていた。基本的に、中学校・高校時代のキャリア教育を覚えているかいないかと関わりが深いのは、職業について調べたり話を聞いたりする授業、職業興味検査や職業適性検査、進路の目標や計画を考える授業などに関する記憶であると考えておくことができる。

図表2-18 学校時代のキャリア教育を「覚えている」か否か別にみた

学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

| | 【中学時代】 | 【中学時代】 | (差) | 【高校時代】 | 【高校時代】 | (差) |
|-----------------------|-----------------|------------------|-------|-----------------|------------------|-------|
| | 覚えている N=1236 | 覚えていない N=2682 | | 覚えている N=1679 | 覚えていない N=2239 | |
| 職業興味や職業適性などの検査 | 26.9% | 15.8% | 11.1% | 42.5% | 26.7% | 15.8% |
| 自分の性格を理解するための検査 | 26.2% | 19.6% | 6.6% | 39.0% | 28.0% | 11.0% |
| 職業や仕事を調べる授業 | 41.9% | 26.1% | 15.8% | 29.8% | 15.7% | 14.1% |
| 職業人や地域の人に仕事の話聞く授業 | 42.4% | 26.5% | 15.9% | 21.1% | 10.6% | 10.5% |
| 職場体験学習やインターンシップ | 31.9% | 23.8% | 8.1% | 15.7% | 8.8% | 6.9% |
| ボランティアなどの体験活動 | 36.7% | 29.7% | 7.0% | 25.7% | 16.1% | 9.6% |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 71.8% | 66.3% | 5.5% | 83.6% | 77.7% | 5.9% |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 27.3% | 19.9% | 7.4% | 48.6% | 36.3% | 12.3% |
| 進路の目標や計画を考える授業 | 26.6% | 15.4% | 11.2% | 41.2% | 24.9% | 16.3% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 13.1% | 10.4% | 2.7% | 31.0% | 21.4% | 9.6% |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 6.3% | 3.7% | 2.6% | 21.0% | 13.1% | 7.9% |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 8.2% | 4.8% | 3.4% | 20.8% | 10.4% | 10.4% |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 4.2% | 3.2% | 1.0% | 9.6% | 6.3% | 3.3% |

※1%水準で統計的に有意な(差)に網かけを付した。

次に、図表2-19では、学校時代のキャリア教育が「役立っている」か否か別に学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを検討した。中学時代に将来の進路や職業について学習したことを「かなり役立っている」または「役立っている」と回答した者とそれ以外の者とを比較した。

図表2-19 学校時代のキャリア教育が「役立っている」否か別にみた

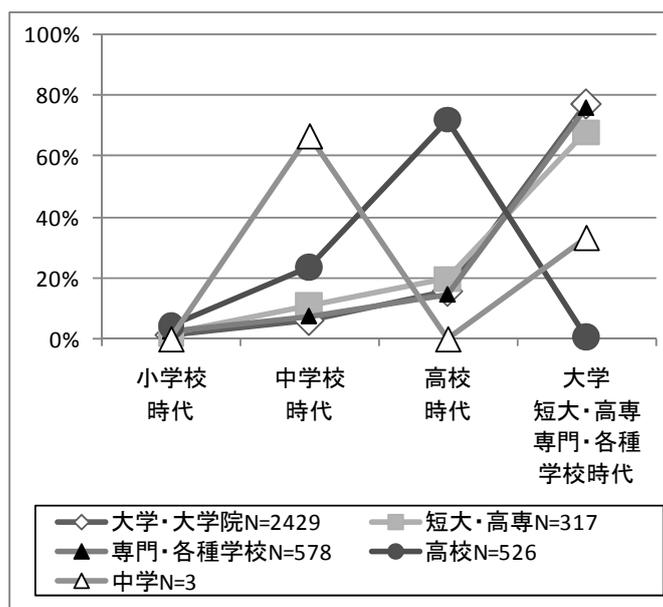
学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

| | 【中学時代】 | 【中学時代】 | (差) | 【高校時代】 | 【高校時代】 | (差) |
|-----------------------|-----------------|-------------------|------|------------------|-------------------|-------|
| | 役立っている N=709 | 役立っていない N=3209 | | 役立っている N=1067 | 役立っていない N=2851 | |
| 職業興味や職業適性などの検査 | 24.3% | 18.2% | 6.1% | 43.9% | 29.6% | 14.3% |
| 自分の性格を理解するための検査 | 26.2% | 20.7% | 5.5% | 40.8% | 29.7% | 11.1% |
| 職業や仕事を調べる授業 | 37.2% | 29.8% | 7.4% | 31.4% | 18.2% | 13.2% |
| 職業人や地域の人に仕事の話聞く授業 | 39.2% | 29.8% | 9.4% | 23.2% | 12.0% | 11.2% |
| 職場体験学習やインターンシップ | 28.8% | 25.8% | 3.0% | 18.4% | 9.2% | 9.2% |
| ボランティアなどの体験活動 | 36.0% | 31.0% | 5.0% | 26.6% | 17.8% | 8.8% |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 70.1% | 67.6% | 2.5% | 82.4% | 79.4% | 3.0% |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 29.8% | 20.6% | 9.2% | 50.0% | 38.4% | 11.6% |
| 進路の目標や計画を考える授業 | 25.4% | 17.5% | 7.9% | 44.0% | 27.3% | 16.7% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 12.8% | 10.9% | 1.9% | 35.4% | 21.8% | 13.6% |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 7.2% | 3.9% | 3.3% | 24.6% | 13.4% | 11.2% |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 9.7% | 5.0% | 4.7% | 26.1% | 10.6% | 15.5% |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 4.9% | 3.2% | 1.7% | 11.0% | 6.5% | 4.5% |

※1%水準で統計的に有意な(差)に網かけを付した。

その結果、中学校のキャリア教育が役立っていると回答した者とそうでない者では、学校時代に行った授業や行事に関する記憶に、統計的に有意な違いはみられなかった。一方、高校のキャリア教育に関しては統計的な違いがみられており、値の開きが大きい者から順に、「進路の目標や計画を考える授業」「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」「職業興味や職業適性などの検査」に関する記憶に違いがみられていた。

この点について、図表2-20に示されるように、基本的に、回答者は最終学歴に最も近い学校種に通っている時に、将来の進路や職業について最も学習したと思う傾向が強いということが関連していると推察される。概して言えば、高校卒業で就職した回答者は、高校時代に行った授業や行事を役立ったと考える傾向がある。しかし、中学卒業で社会に出た回答者は割合が少ない。そのため、中学時代に行った進路や職業関連の授業や行事を特に役立ったと回答する者は少なく、ほぼ全回答者で役立ったか役立たなかったかの認識にあまり大きな差がなかったと推測される。結果的に、中学校で行った授業や行事の記憶についても大きな差がつかなかったと考察できる（なお、最終学歴別にみた学校時代のキャリア教育の評価については次章第3章を参照のこと）。



図表2-20 最終学歴別にみた将来の進路や職業について最も学習したと思う時期

4. 学校時代に行った授業や行事の記憶が学校時代のキャリア教育の評価に与える影響(まとめ)

最後にまとめとして、学校時代に行った授業や行事の記憶が、学校時代のキャリア教育の評価に与える影響を検討するために、ロジスティック回帰分析を行った結果を示した。中学校・高校それぞれについて、①「かなり覚えている」または「覚えている」と回答した者とそれ以外の者、②「かなり役立っている」または「役立っている」と回答した者とそれ以外の者を被説明変数とし、学校時代に行った授業や行事の記憶をそれぞれ説明変数とした。ま

た、ここまでの分析結果から、性別・年齢・地方も関連が深い面があったので、回帰分析に含めた。

図表2-21にロジスティック回帰分析の結果を示した。表から以下の点が示される。

- ①中学時代のキャリア教育を「覚えている」か否かに最も大きな影響を与えたのは「職業人や知識の人に仕事の話聞く授業 ($\beta=.43$)」の記憶であった。以下、「進路の目標や計画を考える授業 ($\beta=.39$)」「職業興味や職業適性などの検査 ($\beta=.37$)」が続いていた。
- ②高校時代のキャリア教育を「覚えている」か否かに最も大きな影響を与えたのは「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 ($\beta=.43$)」の記憶であった。以下、「進路の目標や計画を考える授業 ($\beta=.40$)」であった。以下、「職業興味や職業適性などの検査 ($\beta=.39$)」が続いていた。
- ③キャリア教育が「役立っている」か否かについては、中学・高校時代に共通して「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 ($\beta=.52$ および $\beta=.57$)」の記憶であった。中学校時代のキャリア教育が役立っているか否かについては「進路に関する個別相談やカウンセリング ($\beta=.39$)」、同じく高校時代について「就職活動の進め方や試験対策の授業 ($\beta=.48$)」が続いていた。

以上の結果から、中学校時代のキャリア教育を覚えているか否かについては、職業人や地域の人に話を聞いた記憶が影響を与えているが、高校時代のキャリア教育を覚えているか否か、および中学・高校時代のキャリア教育が役立っているか否かにはコミュニケーションやマナーを学ぶ授業の記憶が大きな影響を与えていることが示された。

図表2-21 学校時代に行った授業や行事の記憶が
キャリア教育の評価に与える影響(ロジスティック回帰分析)

| | 中学時代 | | | | 高校時代 | | | |
|-----------------------|---------|--------|---------|--------|---------|--------|---------|--------|
| | 覚えている | | 役立っている | | 覚えている | | 役立っている | |
| | β | Exp(B) | β | Exp(B) | β | Exp(B) | β | Exp(B) |
| 職業興味や職業適性などの検査 | .37 | 1.45 | | | .39 | 1.48 | | |
| 自分の性格を理解するための検査 | | | | | | | | |
| 職業や仕事を調べる授業 | .36 | 1.43 | | | .35 | 1.42 | | |
| 職業人や地域の人に仕事の話聞く授業 | .43 | 1.54 | .32 | 1.38 | .33 | 1.39 | | |
| 職場体験学習やインターンシップ | | | | | | | | |
| ボランティアなどの体験活動 | | | | | .29 | 1.34 | | |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | | | | | | | | |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | | | .39 | 1.48 | | | .28 | 1.33 |
| 進路の目標や計画を考える授業 | .39 | 1.47 | | | .40 | 1.49 | | |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | | | | | | | | |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | | | | | | | .48 | 1.61 |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | | | .52 | 1.69 | .43 | 1.54 | .57 | 1.76 |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | | | | | | | | |
| 性別(女性) | | | .27 | 1.31 | | | | |
| 年齢 | | | | | | | | |
| 地方 | | | | | | | | |

$R^2=.06$ $p<.01$ $R^2=.03$ $p<.01$ $R^2=.09$ $p<.01$ $R^2=.02$ $p<.01$

※ステップワイズ式のロジスティック回帰分析。1%水準で有意なもののみ表中に掲載。また、列ごとに最も大きな β の値に網かけを付した。

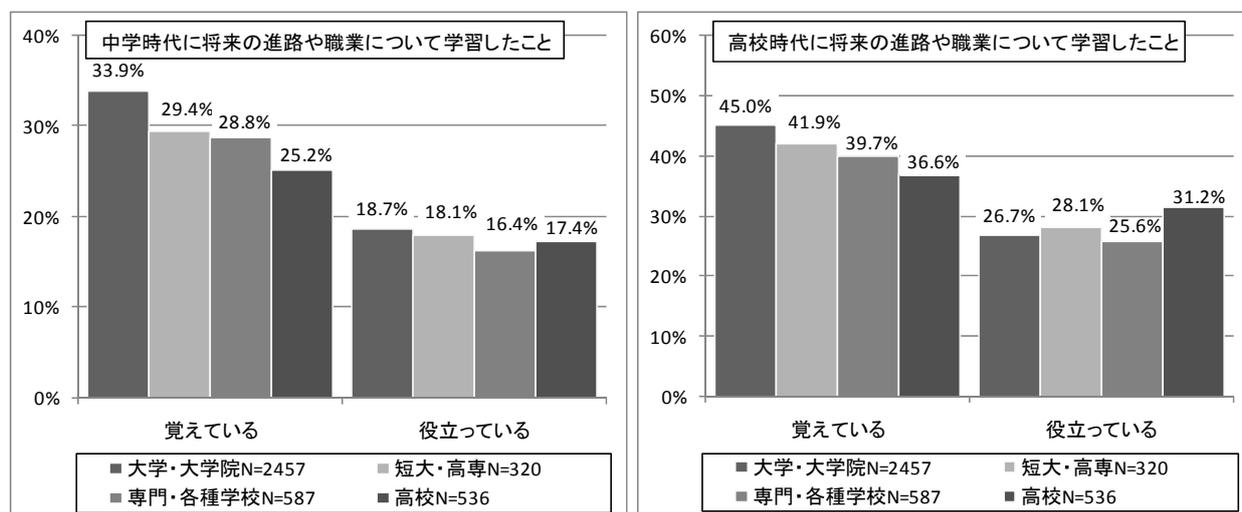
本章におけるその他の主要な結果として、職業興味検査・職業適性検査のような自己理解系の授業、職業や仕事を調べたり職業人に話を聞く職業理解系の授業、さらに進路目標や進路計画を考えさせるキャリア計画に関わる授業などは、中学・高校に共通してキャリア教育を覚えているという印象につながっている面があることが示された。また、実際に役立っているものとして進路に関する個別相談やカウンセリングも中学・高校に共通して挙がっており、中学高校時代に個別相談に乗ってもらったという記憶は、学校時代のキャリア教育が役立っているという印象に結びついている可能性がうかがえる。

第3章 学校時代のキャリア教育と学校卒業後のキャリアとの関連

1. 最終学歴別にみた学校時代のキャリア教育の評価

本章では、学校時代のキャリア教育と学校卒業後のキャリアとの関連を検討する。

図表3-1に、最終学歴別の学校時代のキャリア教育の評価を示した。「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」のどちらの設問でも、「覚えている」割合は、最終学歴が「大学・大学院」の者で最も高く、最終学歴が「高校」の者で最も低かった。一方、「役立っている」割合については、統計的に有意な違いはみられなかった。以上の結果から、最終学歴とキャリア教育の関連については、学歴が高いほど中学・高校時代のキャリア教育を覚えているが、役立っているか否かの評価については学歴による違いがないと言える。



図表3-1 最終学歴別の学校時代のキャリア教育の評価

図表3-2には、最終学歴別に、学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。最終学歴ごとに中学・高校・大学のそれぞれで行った授業や行事には違いがみられた。まず、最終学歴が、①「大学・大学院」の回答者は他の学歴の回答者に比べて、高校時代の「進路に関する二者面談や三者面談」、大学時代の「職業興味や職業適性などの検査」「自分の性格を理解するための検査」を覚えているとする割合が高かった。②「短大・高専」では、中学時代・高校時代の「履歴書の書き方や面接試験の練習」、短大・高専時代の「進路に関する二者面談や三者面談」、大学時代の「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」を覚えているとする割合が高かった。③「専門・各種学校」では、総じて学校時代の授業や行事を広範に覚えていると回答する割合が高かったが、共通して「履歴書の書き方や面接試験の練習」を覚えているとする割合が高かった他、「就職活動の進め方や試験対策の授業」「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」など、具体的な就職活動の進め方やマナーなどの授業を覚えてい

るとする割合が高かったのが目をひく。④「高校」では、中学時代・高校時代に行った授業や行事が記憶にあるとする割合が高かったが、特に最終学歴となる高校の授業や行事は広く覚えているとする割合が高かった。

以上の結果をまとめると、大卒者は、高校時代の（おそらくは進学に向けた）二者面談・三者面談のみを覚えており、大学時代の自己理解テストをよく覚えていると回答したが、総じて言えば、あまり記憶にあると回答した割合は少なかったと言える。短大・高専、専門・各種学校を卒業した者は、具体的な就職活動の進め方やコミュニケーション・マナーに関する授業を覚えていると回答する傾向が強かった。また、高卒者にとっては、総じて、高校のキャリア教育の重要性が改めて示された結果となった。

図表3-2 最終学歴別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

| | 大学・ 大学院 N=2457 | 短大・ 高専 N=320 | 専門・ 各種学校 N=587 | 高校 N=536 |
|-----------------------|----------------------|--------------------|----------------------|-------------|
| 中学 | | | | |
| 職業興味や職業適性などの検査 | 17.6% | 21.6% | 21.1% | 23.7% |
| 職場体験学習やインターンシップ | 24.5% | 29.1% | 26.6% | 33.2% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 8.9% | 15.3% | 15.2% | 14.9% |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 3.0% | 6.3% | 7.3% | 7.5% |
| 高校 | | | | |
| 職業興味や職業適性などの検査 | 30.9% | 31.6% | 35.3% | 45.0% |
| 職業や仕事を調べる授業 | 18.8% | 21.3% | 24.0% | 32.8% |
| 職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業 | 13.9% | 15.0% | 14.7% | 21.3% |
| 職場体験学習やインターンシップ | 7.4% | 12.5% | 17.5% | 23.7% |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 82.7% | 75.6% | 79.4% | 73.5% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 15.1% | 30.6% | 36.3% | 58.4% |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 10.1% | 17.5% | 20.6% | 40.7% |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 10.1% | 18.4% | 17.9% | 30.8% |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 6.0% | 7.2% | 8.3% | 14.7% |
| 大学 | | | | |
| 職業興味や職業適性などの検査 | 54.9% | 40.3% | 41.2% | |
| 自分の性格を理解するための検査 | 53.3% | 38.1% | 38.3% | |
| 職業や仕事を調べる授業 | 22.8% | 26.3% | 33.4% | |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 17.4% | 26.3% | 30.5% | |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 32.3% | 33.1% | 40.0% | |
| 進路の目標や計画を考える授業 | 19.8% | 20.9% | 28.8% | |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 53.6% | 59.4% | 61.8% | |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 32.9% | 45.6% | 54.0% | |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 26.5% | 18.4% | 21.0% | |

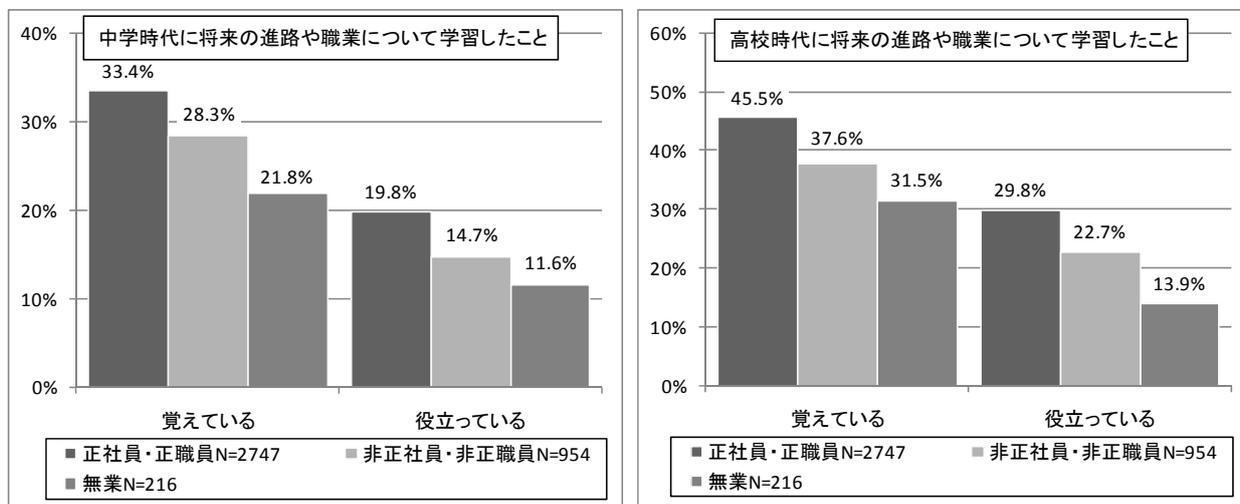
※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

2. 学校卒業直後の就労形態別にみた学校時代のキャリア教育の評価

図表3-3には、学校卒業直後の就労形態別にみた学校時代のキャリア教育の評価を示した。図中の数値は「かなり覚えている+やや覚えている」または「かなり役立っている+やや役立っている」の割合である。

図から、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」のどちらについても「覚えている」「役立っている」と回答した割合は、学校卒業直後の就労形態が「正社員・正職員」>「非正社員・非正職員」>「無業」の順に統計的に有意に高かった。学校卒業直後に正社員として就職した者が最も学校時代の

キャリア教育に対する評価が高く、学校卒業直後に非正社員、無業だった者ほど学校時代のキャリア教育に対する評価が低かった。



図表3-3 学校卒業直後の就労形態別にみた学校時代のキャリア教育の評価

図表3-4は、具体的に、学校時代に行ったどのような授業や行事が記憶にあるのかを検討した結果である。表から、「非正社員・非正職員」が記憶に残っていると回答した割合が高いのは、中学時代の「自分の性格を理解するための検査」のみであり、その他は、概して「正社員・正職員」が記憶に残っていると回答した割合が高かった。特に、「正社員・正職員」は大学等の時代の授業や行事を記憶に残っていると回答する割合が高く、ほぼ全項目にわたって「非正社員・非正職員」「無業」よりも値が大きかった。

図表3-4 学校卒業直後の就労形態別にみた
学校時代に行った授業や行事で記憶に残っているもの

| | | 正社員・ 正職員 N=2747 | 非正社員・ 非正職員 N=954 | 無業 N=216 |
|----|-----------------------|-----------------------|------------------------|-------------|
| 中学 | 自分の性格を理解するための検査 | 19.8% | 27.1% | 20.4% |
| 高校 | 進路に関する二者面談や三者面談 | 81.6% | 78.1% | 73.6% |
| 大学 | 職業興味や職業適性などの検査 | 49.1% | 31.7% | 32.4% |
| | 自分の性格を理解するための検査 | 47.5% | 29.8% | 31.5% |
| | 職業や仕事を調べる授業 | 24.0% | 16.6% | 11.6% |
| | 職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業 | 20.4% | 13.0% | 15.3% |
| | 職場体験学習やインターンシップ | 34.3% | 22.4% | 19.0% |
| | 進路に関する二者面談や三者面談 | 19.1% | 14.2% | 16.7% |
| | 進路に関する個別相談やカウンセリング | 32.3% | 21.5% | 24.1% |
| | 進路の目標や計画を考える授業 | 20.1% | 15.3% | 12.5% |
| | 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 53.7% | 35.0% | 30.6% |
| | 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 54.4% | 35.2% | 32.9% |
| | 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 35.4% | 26.8% | 22.2% |

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

これは、図表3-5に示したとおり、学校卒業直後の就労形態と最終学歴に強い関連性があるからであると解釈される。今回の調査で全般的に観察されるとおり、回答者は自分がいちばん最後に通った就職する直前の学校のキャリア教育を高く評価する傾向が強い。図表3-5から明らかなように、「正社員・正職員」は最終学歴が「大学・大学院」であるものが多く、そのため「正社員・正職員」は図表3-4にみられるように、大学時代に行った進路・キャリア関連の授業や行事を記憶にあると回答する割合が高かったと推測される。

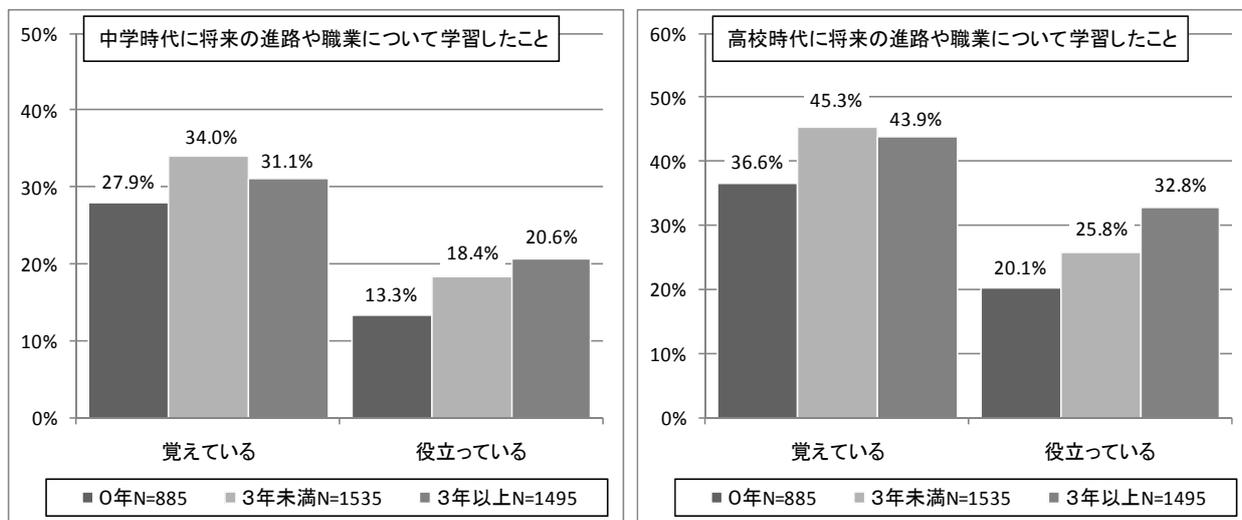
図表3-5 学校卒業直後の就労形態と最終学歴の関連

| 卒業直後 最終学歴 | 正社員・ 正職員 N=2747 | 非正社員・ 非正職員 N=954 | 無業 N=216 |
|--------------|-----------------------|------------------------|-------------|
| 大学・大学院 | 68.5% | 47.6% | 55.6% |
| 短大・高専 | 8.3% | 8.4% | 6.5% |
| 専門・各種学校 | 12.1% | 23.7% | 13.4% |
| 高校 | 10.9% | 19.5% | 24.1% |
| 中学 | 0.0% | 0.1% | 0.5% |
| その他 | 0.3% | 0.7% | 0.0% |

3. 正社員・非正社員就労期間別にみた学校時代のキャリア教育の評価

図表3-6に、正社員就労期間別の学校時代のキャリア教育の評価を示した。図中の数値は「かなり覚えている+やや覚えている」または「かなり役立っている+やや役立っている」の割合である。また、「0年」「3年未満」「3年以上」は、正社員としての就労期間を示すものであり、それぞれ正社員経験のない者、正社員経験が3年未満の者、正社員経験が3年以上の者を示す。

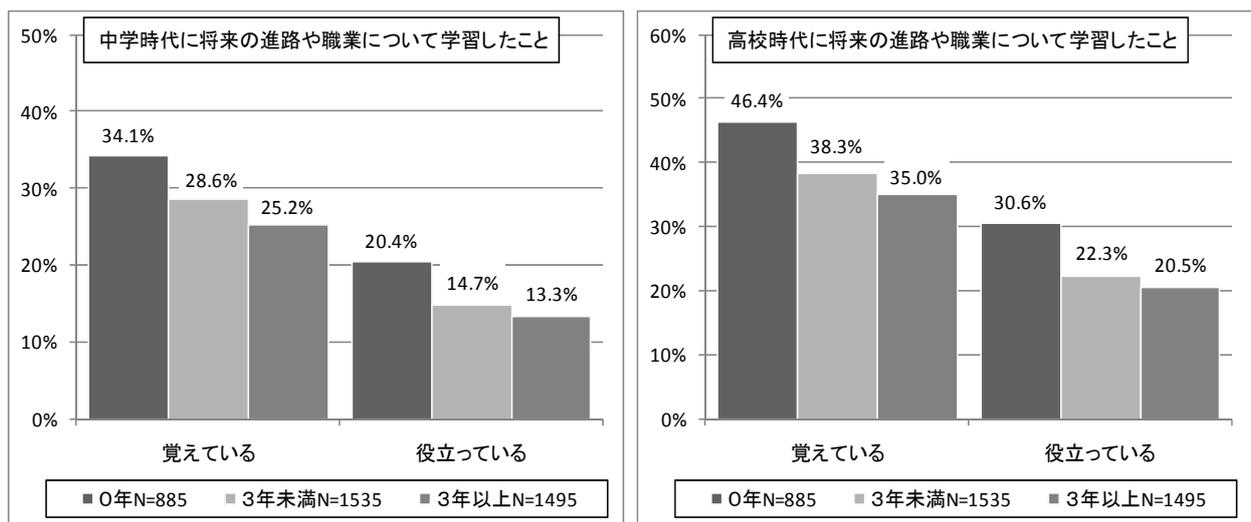
図から、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」とともに、「覚えている」割合は正社員経験が「3年未満」の者が



図表3-6 正社員就労期間別の学校時代のキャリア教育の評価

最も多いが、「役立っている」割合は正社員経験が「3年以上」の者が最も多いことが示される。本調査の回答者には年齢が23歳および24歳の者も含まれているため、大学卒業後、継続して正社員として勤め続けた場合でも正社員経験が3年未満になる者が多かったことによると思われる。ただし、25歳以上の回答者を抜き出して検討した場合にも、やはり正社員経験が「3年未満」の回答者が「覚えている」「役立っている」と回答する割合が高かったことから、いくつかの要因が複合的に影響を与えていると解釈するのが妥当であろう。

なお、非正社員就労期間別に学校時代のキャリア教育の評価を検討した結果を、図表3-7に示した。その結果、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」のいずれの設問においても、「覚えている」割合、「役立っている」割合は、非正社員経験が「0年」>「3年未満」>「3年以上」の順に大きく、非正社員経験は短い者の方が、総じて学校時代のキャリア教育を覚えており、役立っていると回答していたことが示される。



図表3-7 非正社員就労期間別の学校時代のキャリア教育の評価

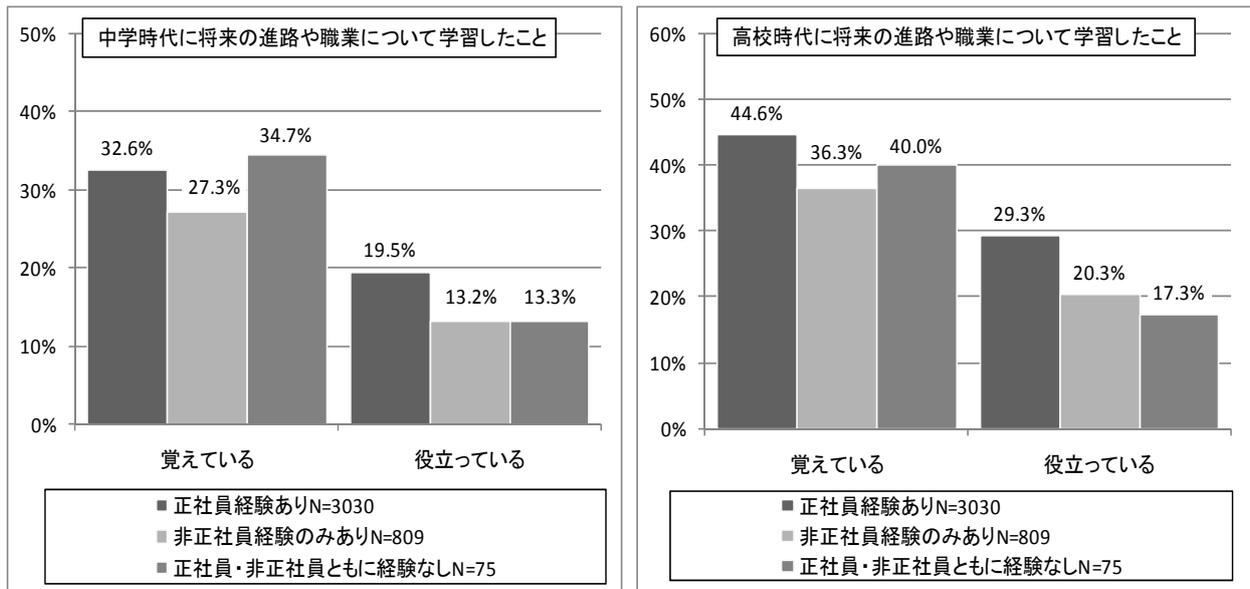
非正社員としての就労期間で学校時代のキャリア教育の評価に明確な違いがみられたので、図表3-8では、非正社員就労期間別に学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。その結果、非正社員就労期間が「0年」の者はおもに大学時代に行った授業や行事が記憶にあると回答していた。一方、非正社員としての就労期間がある者は中学時代、高校時代の授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。特に、「履歴書の書き方や面接試験の練習」「就職活動の進め方や試験対策の授業」の割合が高かった。

図表3-8 非正社員就労期間別の学校時代に行った授業や行事で記憶に残っているもの

| 非正規社員・非正規職員経験 | | 0年 N=2452 | 3年未満 N=892 | 3年以上 N=571 |
|---------------|-----------------------|--------------|---------------|---------------|
| 中学 | 自分の性格を理解するための検査 | 19.7% | 23.8% | 27.0% |
| | 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 10.1% | 13.3% | 13.1% |
| | 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 3.8% | 4.8% | 7.0% |
| 高校 | 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 24.3% | 23.4% | 33.8% |
| | 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 15.8% | 15.6% | 20.8% |
| 大学 | 職業興味や職業適性などの検査 | 49.2% | 41.5% | 25.7% |
| | 自分の性格を理解するための検査 | 48.0% | 38.8% | 24.0% |
| | 職業や仕事を調べる授業 | 23.7% | 19.4% | 15.4% |
| | 職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業 | 21.0% | 16.5% | 10.5% |
| | 職場体験学習やインターンシップ | 35.0% | 26.8% | 17.7% |
| | ボランティアなどの体験活動 | 15.6% | 17.9% | 11.6% |
| | 進路に関する二者面談や三者面談 | 19.3% | 17.7% | 10.9% |
| | 進路に関する個別相談やカウンセリング | 31.7% | 28.0% | 20.0% |
| | 進路の目標や計画を考える授業 | 20.1% | 18.3% | 12.1% |
| | 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 52.4% | 45.7% | 31.3% |
| | 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 54.1% | 45.0% | 29.9% |
| | コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 35.0% | 32.4% | 22.1% |
| | 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 24.2% | 18.7% | 13.3% |

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所を下線を付した。

ここまで非正社員経験の長さでキャリア教育の評価が異なることが繰り返し示されたので、さらに追加分析として、今回の調査回答者を、①正社員経験が少しでもある「正社員経験あり」群、②非正社員経験のみの「非正社員経験のみあり」群、③正社員経験・非正社員経験のいずれもない「正社員・非正社員ともに経験なし」群の3つに回答者を分類して、学校時代のキャリア教育の評価を比較した。図表3-9にその結果を示した。



図表3-9 学校卒業後の正社員・非正社員経験別の学校時代のキャリア教育の評価

図のうち、統計的に有意な結果は「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」が「役立っている」割合、「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」を「覚えている」割合、「役立っている」割合であった。いずれも「正社員経験あり」の者が「覚えている」または「役立っている」と回答する割合が高かった。図表3-9のうち、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」を「覚えている」割合では「正社員・非正社員ともに経験なし」の値が大きくなっているが、統計的に有意ではなかった。

図表3-10に、正社員経験・非正社員経験の有無別に学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。統計的に有意な差がみられた項目はあまり多くなく、高校時代の「進路に関する二者面談や三者面談」の他は、大学時代における「職業興味や職業適性などの検査」「自分の性格を理解するための検査」「職場体験学習やインターンシップ」「履歴書の書き方や面接試験の練習」などであった。

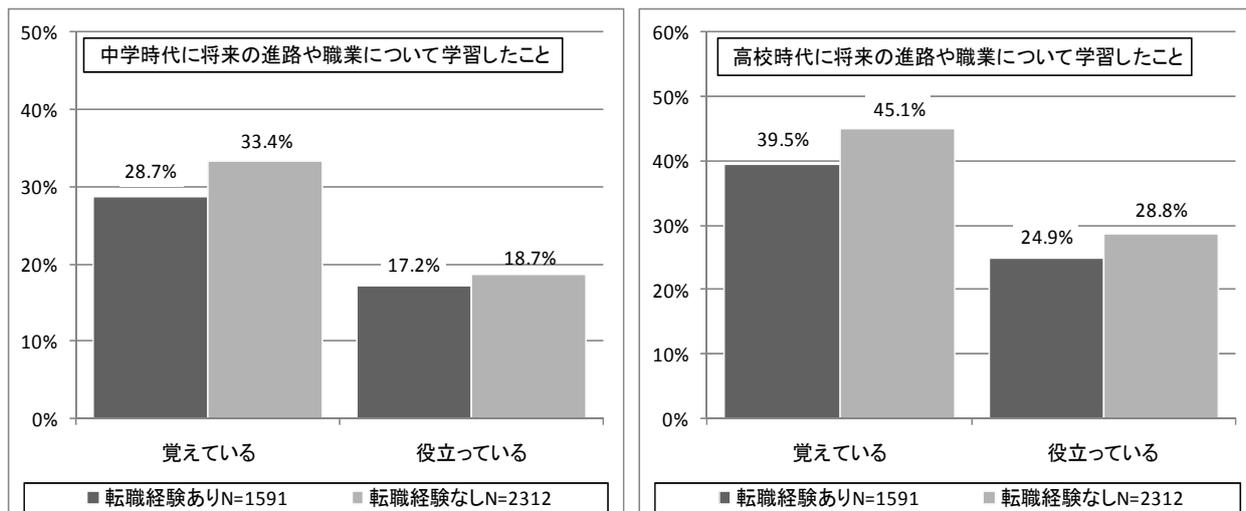
図表3-10 学校卒業後の正社員・非正社員経験別の
学校時代に行った授業や行事で記憶に残っているもの

| | 正社員経験あり N=3030 | 非正社員経験のみ あり N=809 | 正社員 非正社員 ともに経験なし N=75 |
|-----------------------|-------------------|-------------------------|--------------------------------|
| 高校 進路に関する二者面談や三者面談 | 81.4% | 76.9% | 68.0% |
| 大学 職業興味や職業適性などの検査 | 47.1% | 33.5% | 30.7% |
| 自分の性格を理解するための検査 | 45.7% | 31.0% | 28.0% |
| 職業や仕事を調べる授業 | 23.2% | 15.7% | 17.3% |
| 職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業 | 19.8% | 13.3% | 18.7% |
| 職場体験学習やインターンシップ | 32.9% | 22.2% | 25.3% |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 31.0% | 22.1% | 29.3% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 51.7% | 35.6% | 26.7% |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 52.1% | 36.5% | 32.0% |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 34.1% | 27.3% | 25.3% |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 22.6% | 16.9% | 18.7% |

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

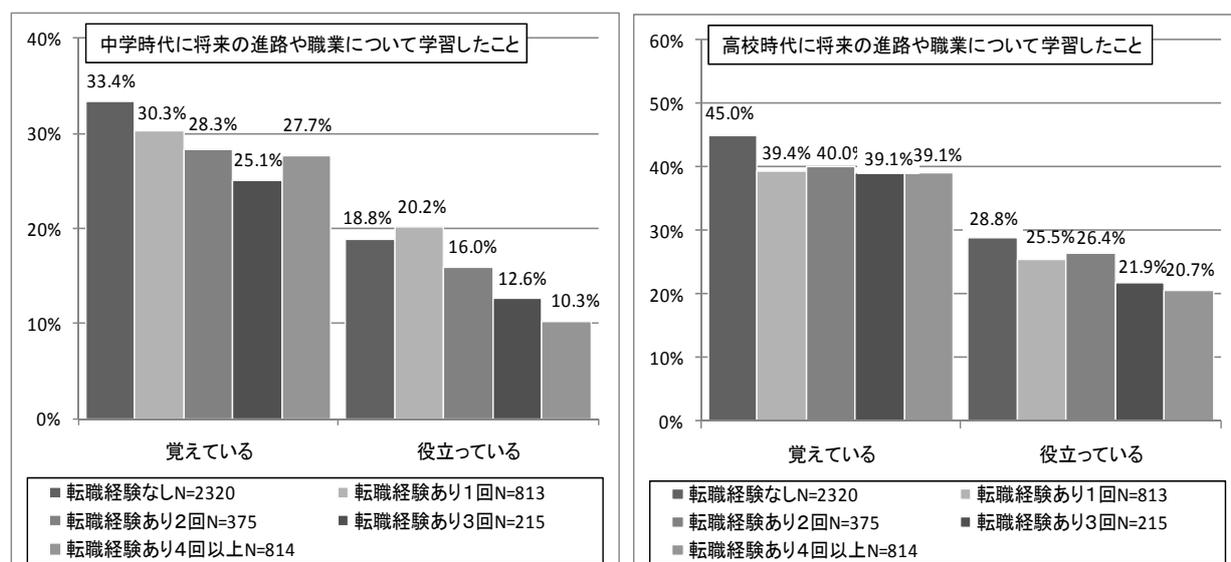
4. 転職経験別にみた学校時代のキャリア教育の評価

図表3-11に、転職経験の有無別の学校時代のキャリア教育の評価を示した。図中の数値は「かなり覚えている+やや覚えている」または「かなり役立っている+やや役立っている」の割合である。図から、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」とともに、「転職経験なし」の回答の方が「覚えている」「役立っている」のいずれの場合も値が高いことが示される。転職経験はないの方が、総じて、学校時代のキャリア教育に対する評価は良いことが分かる。



図表3-11 転職経験の有無別にみた学校時代のキャリア教育の評価

図表3-12には、さらに詳しく検討するために、転職回数別の学校時代のキャリア教育の評価を示した。図表3-12うち、1%水準で統計的に有意なのは「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」が「役立っている」とする割合であり、「転職経験あり3回」「転職経験あり4回以上」の2つの群で他よりも有意に役立っているとする割合が低かった。他の箇所も有意水準を切り上げて5%水準とした場合には、統計的に有意な差がみられており、図からうかがえるように、いずれも転職回数が多くなるほど、学校時代のキャリア教育は役立っていないと解釈できる結果であった。



図表3-12 転職回数別にみた学校時代のキャリア教育の評価

5. 学校卒業後のキャリア別にみた学校時代のキャリア教育の評価

(1) キャリアパターン別の検討

図表3-13には、学校卒業後のキャリア別にみた中学時代のキャリア教育の評価を示した。ここまで見てきた回答のうち、「学歴」「学校卒業直後の働き方」「非正規就労経験」「転職経験」をとりあげて組み合わせ、2（大卒・大卒以外）×3（正規・非正規・無業）×3（なし・3年以内・3年以上）×2（あり・なし）の36パターンを作り、どのパターンが中学時代のキャリア教育を「覚えている」または「役立っている」と回答する割合が高いのか・低いのかを示したものである。なお、上記36パターンの中には、回答者がいない組み合わせもあったことから、30名以上の回答者がみられた17パターンを検討対象とした。

表から、まず中学時代のキャリア教育を「覚えている」割合が最も高いのは、最終学歴が「大卒」で学校卒業後「正規」社員として就職し、非正規就労経験は「なし」で転職経験は「あり」の者であることが示される。また、次に中学時代のキャリア教育を覚えている割合が高いのは「大卒」で「正規」社員として就職し、非正規就労経験が「なし」、転職経験も「なし」の者であった。概して言えば、中学時代のキャリア教育を覚えている割合が高いのは大卒で正社員として就職したか、または正社員として就職しなかった場合でも非正規就労期間が3年以内と比較的短い回答者であったことが示される。

中学時代のキャリア教育が「役立っている」割合についても同様の傾向がみられたが、最終学歴が「大卒」の者がよりいっそう多くなっているのが目立つ。

さらに、「覚えている」「役立っている」の割合が低い方では、学校卒業後「無業」または「非正規」として社会に出た者、非正規就労期間が「3年以上」と比較的長い者が多い。

図表3-13 学校卒業後のキャリア別にみた中学時代のキャリア教育の評価

| 覚えている | | | | | 役立っている | | | | |
|-------|------------|---------|------|---------|--------|------------|---------|------|----------|
| 学歴 | 学校卒業直後の働き方 | 非正規就労経験 | 転職経験 | 覚えている割合 | 学歴 | 学校卒業直後の働き方 | 非正規就労経験 | 転職経験 | 役立っている割合 |
| 大卒 | 正規 | なし | あり | 36.2% | 大卒 | 非正規 | 3年以内 | あり | 22.9% |
| 大卒 | 正規 | なし | なし | 35.5% | 大卒 | 正規 | 3年以内 | なし | 21.6% |
| 大卒 | 非正規 | 3年以内 | あり | 33.9% | 大卒以外 | 正規 | なし | あり | 21.6% |
| 大卒 | 正規 | 3年以内 | なし | 32.4% | 大卒 | 正規 | なし | あり | 21.6% |
| 大卒 | 非正規 | 3年以内 | なし | 31.8% | 大卒 | 正規 | なし | なし | 20.2% |
| 合計 | | | | 31.6% | 大卒 | 非正規 | 3年以上 | なし | 20.0% |
| 大卒 | 非正規 | 3年以上 | なし | 30.8% | 大卒 | 無業 | なし | なし | 18.4% |
| 大卒 | 正規 | 3年以内 | あり | 30.7% | 合計 | | | | 18.2% |
| 大卒以外 | 非正規 | 3年以内 | なし | 30.6% | 大卒以外 | 正規 | 3年以上 | あり | 16.9% |
| 大卒以外 | 非正規 | 3年以内 | あり | 29.5% | 大卒以外 | 非正規 | 3年以内 | あり | 16.5% |
| 大卒以外 | 正規 | なし | あり | 27.4% | 大卒以外 | 無業 | 3年以内 | なし | 12.9% |
| 大卒以外 | 非正規 | 3年以上 | なし | 26.7% | 大卒以外 | 非正規 | 3年以上 | なし | 12.8% |
| 大卒 | 無業 | なし | なし | 26.3% | 大卒 | 非正規 | 3年以内 | なし | 12.5% |
| 大卒 | 非正規 | 3年以上 | あり | 23.2% | 大卒 | 非正規 | 3年以上 | あり | 12.2% |
| 大卒以外 | 正規 | 3年以上 | あり | 22.5% | 大卒以外 | 非正規 | 3年以上 | あり | 11.8% |
| 大卒以外 | 非正規 | 3年以上 | あり | 22.1% | 大卒以外 | 非正規 | 3年以内 | なし | 11.3% |
| 大卒 | 無業 | 3年以内 | なし | 18.5% | 大卒 | 正規 | 3年以内 | あり | 10.7% |
| 大卒以外 | 無業 | 3年以内 | なし | 12.9% | 大卒 | 無業 | 3年以内 | なし | 9.3% |

図表3-14には、学校卒業後のキャリア別にみた高校時代のキャリア教育の評価を示した。上記図表3-13の中学時代のキャリア教育の評価と同様、「学歴」「学校卒業直後の働き方」「非正規就労経験」「転職経験」を組み合わせた17パターンを検討対象とした。

表から、高校時代のキャリア教育を「覚えている」割合が最も高いのは、最終学歴が「大卒」で学校卒業後「正規」社員として就職し、非正規就労経験「なし」、転職経験「なし」の者であることが示される。概して言えば、大卒で正規社員として就職、非正規就労経験は短い者が高校時代のキャリア教育を覚えていると回答した割合が高い。一方、「覚えている」割合が低い方では、「大卒以外」「無業」、非正規就労経験「3年以上」が比較的多くみられる。

高校時代のキャリア教育が「役立っている」割合については解釈が難しく、学歴、学校卒業直後の働き方、非正規就労経験、転職経験のいずれかの要因が大きく影響しているという傾向が読み取りにくい。「役立っている」割合が低い方についても、学校卒業後の働き方が「無業」である者が目立つが、それ以外の傾向はみられなかった。

図表3-14 学校卒業後のキャリア別にみた高校時代のキャリア教育の評価

| 覚えている | | | | | 役立っている | | | | |
|-------|------------|---------|------|---------|--------|------------|---------|------|----------|
| 学歴 | 学校卒業直後の働き方 | 非正規就労経験 | 転職経験 | 覚えている割合 | 学歴 | 学校卒業直後の働き方 | 非正規就労経験 | 転職経験 | 役立っている割合 |
| 大卒 | 正規 | なし | なし | 48.3% | 大卒以外 | 正規 | なし | あり | 33.5% |
| 大卒 | 非正規 | 3年以内 | あり | 47.5% | 大卒以外 | 正規 | 3年以上 | あり | 32.4% |
| 大卒以外 | 正規 | なし | あり | 46.1% | 大卒 | 非正規 | 3年以内 | あり | 30.5% |
| 大卒 | 正規 | 3年以内 | なし | 43.2% | 大卒 | 正規 | なし | なし | 30.3% |
| 合計 | | | | 43.0% | 合計 | | | | 26.6% |
| 大卒 | 正規 | なし | あり | 42.8% | 大卒 | 正規 | なし | あり | 26.1% |
| 大卒 | 非正規 | 3年以内 | なし | 42.0% | 大卒以外 | 非正規 | 3年以内 | あり | 25.2% |
| 大卒 | 非正規 | 3年以上 | なし | 41.5% | 大卒 | 非正規 | 3年以上 | なし | 24.6% |
| 大卒以外 | 正規 | 3年以上 | あり | 40.8% | 大卒 | 非正規 | 3年以内 | なし | 24.4% |
| 大卒以外 | 非正規 | 3年以内 | あり | 40.3% | 大卒 | 正規 | 3年以内 | なし | 24.3% |
| 大卒以外 | 非正規 | 3年以上 | なし | 38.4% | 大卒以外 | 非正規 | 3年以上 | なし | 22.1% |
| 大卒 | 無業 | なし | なし | 36.8% | 大卒 | 非正規 | 3年以上 | あり | 19.5% |
| 大卒 | 正規 | 3年以内 | あり | 36.0% | 大卒以外 | 非正規 | 3年以内 | なし | 17.7% |
| 大卒 | 非正規 | 3年以上 | あり | 34.1% | 大卒以外 | 非正規 | 3年以上 | あり | 17.6% |
| 大卒以外 | 非正規 | 3年以内 | なし | 32.3% | 大卒以外 | 無業 | 3年以内 | なし | 16.1% |
| 大卒 | 無業 | 3年以内 | なし | 31.5% | 大卒 | 無業 | なし | なし | 15.8% |
| 大卒以外 | 非正規 | 3年以上 | あり | 27.9% | 大卒 | 正規 | 3年以内 | あり | 12.7% |
| 大卒以外 | 無業 | 3年以内 | なし | 19.4% | 大卒 | 無業 | 3年以内 | なし | 11.1% |

(2)分散分析による検討

上述のとおり、学校卒業後のキャリアと高校時代のキャリア教育の評価との関連については、おおむね、最終学歴が「大卒」、学校卒業後の働き方が「正規」、非正規就労経験「なし」、転職経験「なし」で学校時代のキャリア教育を「覚えている」「役立っている」と評価する傾向が強かった。一方、最終学歴が「大卒以外」、学校卒業後の働き方が「無業」で学校時代のキャリア教育を「覚えている」「役立っている」と評価する傾向が低かった。

ただし、上記の傾向は明確ではなく、特に高校時代のキャリア教育が「役立っている」か

否かについてはキャリアパターンによる一定の傾向が読み取りにくい結果となっていた。

そこで、以下に、「学歴」「学校卒業直後の働き方」「非正規就労経験」「転職経験」を独立変数、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」を「覚えているか」「役立っているか」を従属変数とした4要因分散分析を行い、主効果・交互作用を含めて各要因が与える影響を検討した。

図表3-15は、学校卒業後のキャリアの各要因が中学時代のキャリア教育の評価に与える影響に関する分散分析の結果を示したものである。表から、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」を「覚えているか」では「学校卒業後の働き方」の要因が1%水準で統計的に有意であった。また「役立っているか」では「学校卒業後の働き方」の要因が10%水準の有意傾向にとどまった。

図表3-15 学校卒業後のキャリアの各要因が中学時代のキャリア教育の評価に与える影響
(4要因分散分析結果)

| 中学時代に将来の進路や職業について学習したこと【覚えていますか】 | | F 値 | sig. |
|----------------------------------|------------------------------------|------|------|
| 主効果 | 最終学歴 | 0.50 | |
| | 学校卒業直後の働き方 | 4.30 | ** |
| | 非正規就労経験 | 0.51 | |
| | 転職経験 | 0.84 | |
| 2次交互作用 | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 | 0.51 | |
| | 最終学歴 * 非正規就労経験 | 0.30 | |
| | 最終学歴 * 転職経験 | 0.33 | |
| | 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 | 1.46 | |
| | 学校卒業直後の働き方 * 転職経験 | 1.22 | |
| | 非正規就労経験 * 転職経験 | 1.29 | |
| 3次交互作用 | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 | 0.79 | |
| | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 * 転職経験 | 0.21 | |
| | 最終学歴 * 非正規就労経験 * 転職経験 | 0.03 | |
| | 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 * 転職経験 | 0.74 | |
| 4次交互作用 | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 * 転職経験 | 0.77 | |

| 中学時代に将来の進路や職業について学習したこと【役立っていますか】 | | F 値 | sig. |
|-----------------------------------|------------------------------------|------|------|
| 主効果 | 最終学歴 | 0.43 | |
| | 学校卒業直後の働き方 | 2.67 | + |
| | 非正規就労経験 | 0.94 | |
| | 転職経験 | 0.90 | |
| 2次交互作用 | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 | 0.31 | |
| | 最終学歴 * 非正規就労経験 | 0.11 | |
| | 最終学歴 * 転職経験 | 0.13 | |
| | 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 | 0.65 | |
| | 学校卒業直後の働き方 * 転職経験 | 0.19 | |
| | 非正規就労経験 * 転職経験 | 0.71 | |
| 3次交互作用 | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 | 1.34 | |
| | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 * 転職経験 | 1.93 | |
| | 最終学歴 * 非正規就労経験 * 転職経験 | 1.48 | |
| | 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 * 転職経験 | 1.21 | |
| 4次交互作用 | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 * 転職経験 | 1.71 | |

※表は分散分析表。sig.は有意水準、** p<.01 * p<.05 + p<.10。

図表3-16は、学校卒業後のキャリアの各要因が高校時代のキャリア教育の評価に与える影響に関する分散分析の結果を示したものである。表から、「高校時代に将来の進路や職業

について学習したこと」を「覚えている」では「学校卒業後の働き方」の要因が 1%水準で統計的に有意であった。一方、「役立っている」ではかなり複雑な結果がみられており、4次の交互作用が 1%水準で統計的に有意であった。これは4つの要因全てが相互に関わりあいながら高校時代のキャリア教育が「役立っている」という評価に影響を与えていることを示す結果であり、高校時代のキャリア教育の評価が学校卒業後のキャリアと複雑に関連する様を改めて確認できる結果となった。

これらの結果を整理すると、学校卒業後のキャリアと学校時代のキャリア教育の評価は、端的には学校卒業後どのような形で社会に出たかに集約される面があり、基本的には、学校卒業後、正社員・正職員の形で出た回答者の方が学校時代のキャリア教育に対する評価は総じて良い。ただし、全般的にみれば、高校時代のキャリア教育が「役立っているか」の結果に象徴されるように、学校時代のキャリア教育の評価と学校卒業後のキャリアには複雑な関連がみられると言える。

図表3-16 学校卒業後のキャリアの各要因が高校時代のキャリア教育の評価に与える影響
(4要因分散分析結果)

| 高校時代に将来の進路や職業について学習したこと【覚えていますか】 | | F 値 | sig. |
|----------------------------------|------------------------------------|------|------|
| 主効果 | 最終学歴 | 0.63 | |
| | 学校卒業直後の働き方 | 3.55 | * |
| | 非正規就労経験 | 0.13 | |
| | 転職経験 | 0.06 | |
| 2次交互作用 | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 | 0.14 | |
| | 最終学歴 * 非正規就労経験 | 0.53 | |
| | 最終学歴 * 転職経験 | 0.01 | |
| | 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 | 1.54 | |
| | 学校卒業直後の働き方 * 転職経験 | 1.16 | |
| | 非正規就労経験 * 転職経験 | 1.22 | |
| 3次交互作用 | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 | 1.04 | |
| | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 * 転職経験 | 0.46 | |
| | 最終学歴 * 非正規就労経験 * 転職経験 | 0.27 | |
| | 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 * 転職経験 | 0.95 | |
| 4次交互作用 | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 * 転職経験 | 0.61 | |

| 高校時代に将来の進路や職業について学習したこと【役立っていますか】 | | F 値 | sig. |
|-----------------------------------|------------------------------------|------|------|
| 主効果 | 最終学歴 | 0.15 | |
| | 学校卒業直後の働き方 | 4.26 | ** |
| | 非正規就労経験 | 1.06 | |
| | 転職経験 | 0.13 | |
| 2次交互作用 | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 | 0.37 | |
| | 最終学歴 * 非正規就労経験 | 0.06 | |
| | 最終学歴 * 転職経験 | 0.00 | |
| | 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 | 0.95 | |
| | 学校卒業直後の働き方 * 転職経験 | 0.26 | |
| | 非正規就労経験 * 転職経験 | 1.06 | |
| 3次交互作用 | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 | 2.46 | * |
| | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 * 転職経験 | 2.90 | * |
| | 最終学歴 * 非正規就労経験 * 転職経験 | 2.65 | + |
| | 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 * 転職経験 | 1.14 | |
| 4次交互作用 | 最終学歴 * 学校卒業直後の働き方 * 非正規就労経験 * 転職経験 | 2.94 | * |

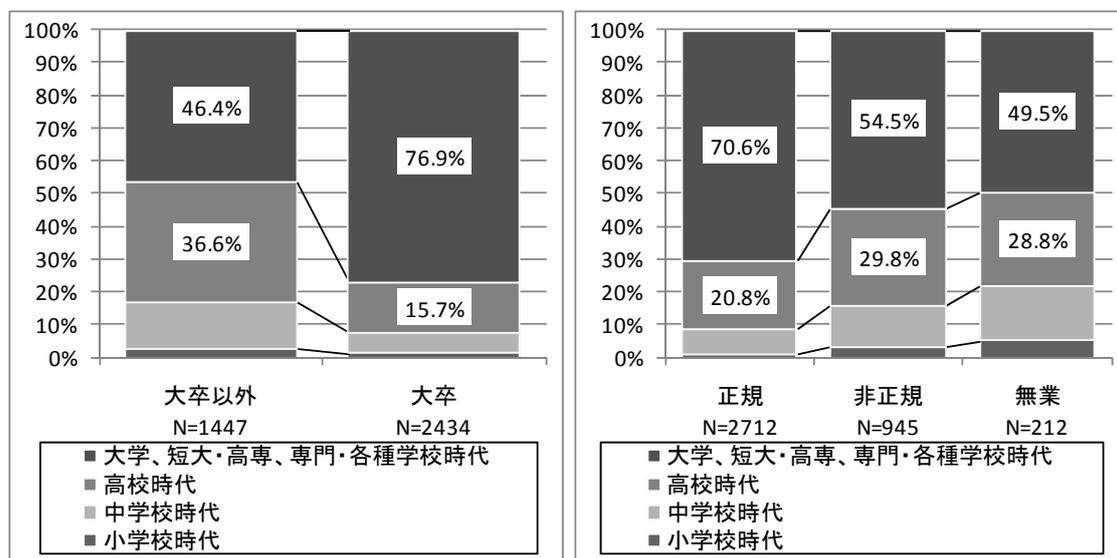
※表は分散分析表。sig.は有意水準、** p<.01 * p<.05 + p<.10。

(3)各要因別にみた小学校～大学までのキャリア教育に対する評価

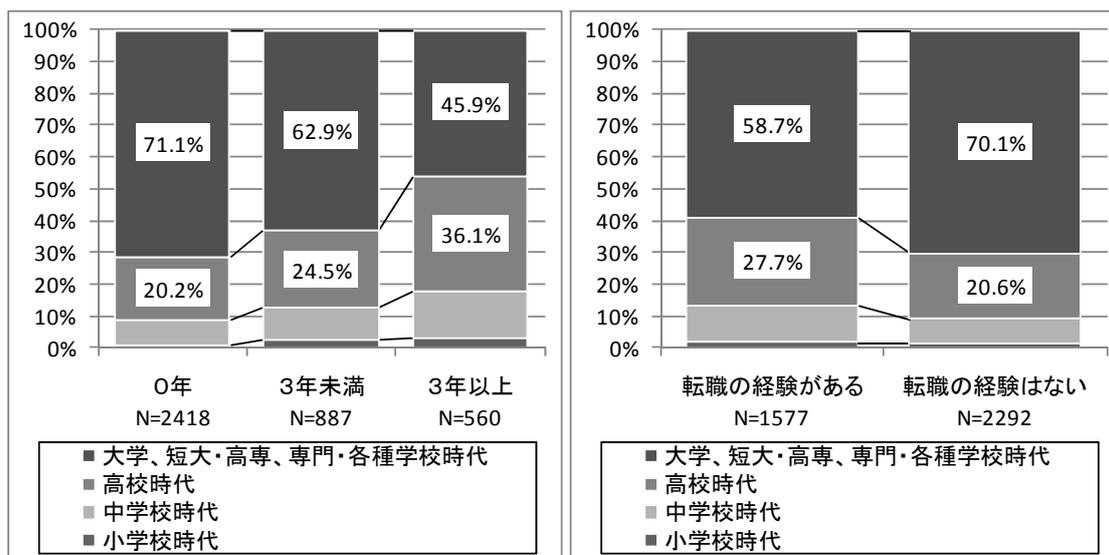
学校時代のキャリア教育の評価が学校卒業後のキャリアと複雑に関連する理由の1つとして、もともと中学時代のキャリア教育および高校時代のキャリア教育が多義的であり、現在、学校を卒業して社会人となっている若者に様々な形で影響を及ぼしているからであると考えられる。

例えば、ここまで示した結果のとおり、総じて言えば、学校時代のキャリア教育は「大卒」「卒業直後に正規就労」「非正規就労経験なし」「転職経験なし」といった、いわば「直線的」なキャリアを歩んだ回答者で評価が高い。これは、自分なりに順風満帆であると感じているキャリアを歩んだ者が、その理由の1つを学校時代にキャリアについて学んだことに帰するために、結果的に両者に関連性がみられると解釈される。また、さらに言えば、学校時代にキャリアについて学んだことが役立ったという認識があるからこそ、「直線的」なキャリアを歩むことができたという解釈も、あるいは成り立つと思われる。

しかし、本調査で繰り返し示されるとおり、回答者は最後に通った学校のキャリア教育を最も高く評価する傾向が強い。そのため、図表3-17および図表3-18に示したとおり、「大卒」「卒業直後に正規就労」「非正規就労経験なし」「転職経験なし」の回答者は、自分が将来の進路や職業について最も学習したのは「大学、短大・高専、専門・各種学校」であると回答する傾向が強い。



図表3-17 最終学歴別(左)、学校卒業直後の働き方別(右)の
将来の進路や職業について最も学習したと思う時期



図表3-18 非正規就労期間別(左)、転職経験の有無別(右)の
将来の進路や職業について最も学習したと思う時期

6. 学校時代のキャリア教育と学校卒業後のキャリアとの関連について(まとめ)

ここまでの議論を整理すると、学校卒業後から現在までのキャリアと学校時代のキャリア教育に対する評価の関連は、以下の2点に集約される。

①「直線的」なキャリアを歩んだ回答者は、総じて学校のキャリア教育を高く評価するので中学・高校のキャリア教育の評価も高い。一方で、「直線的」なキャリアを歩んだ回答者は高等教育機関まで進む者が多いので、実際には自分が最後に通った大学、短大・高専、専門・各種学校時代に進路や職業について最も学習したと考えている。

②「直線的」なキャリアを歩んでこなかった回答者は、総じて学校のキャリア教育を高く評価しないので中学・高校のキャリア教育の評価も低い。一方で「直線的」なキャリアを歩まなかった回答者は高等教育機関まで進む者が多くないので、実際には自分が最後に通った高校(または中学)時代に進路や職業について最も学習したと考えている。

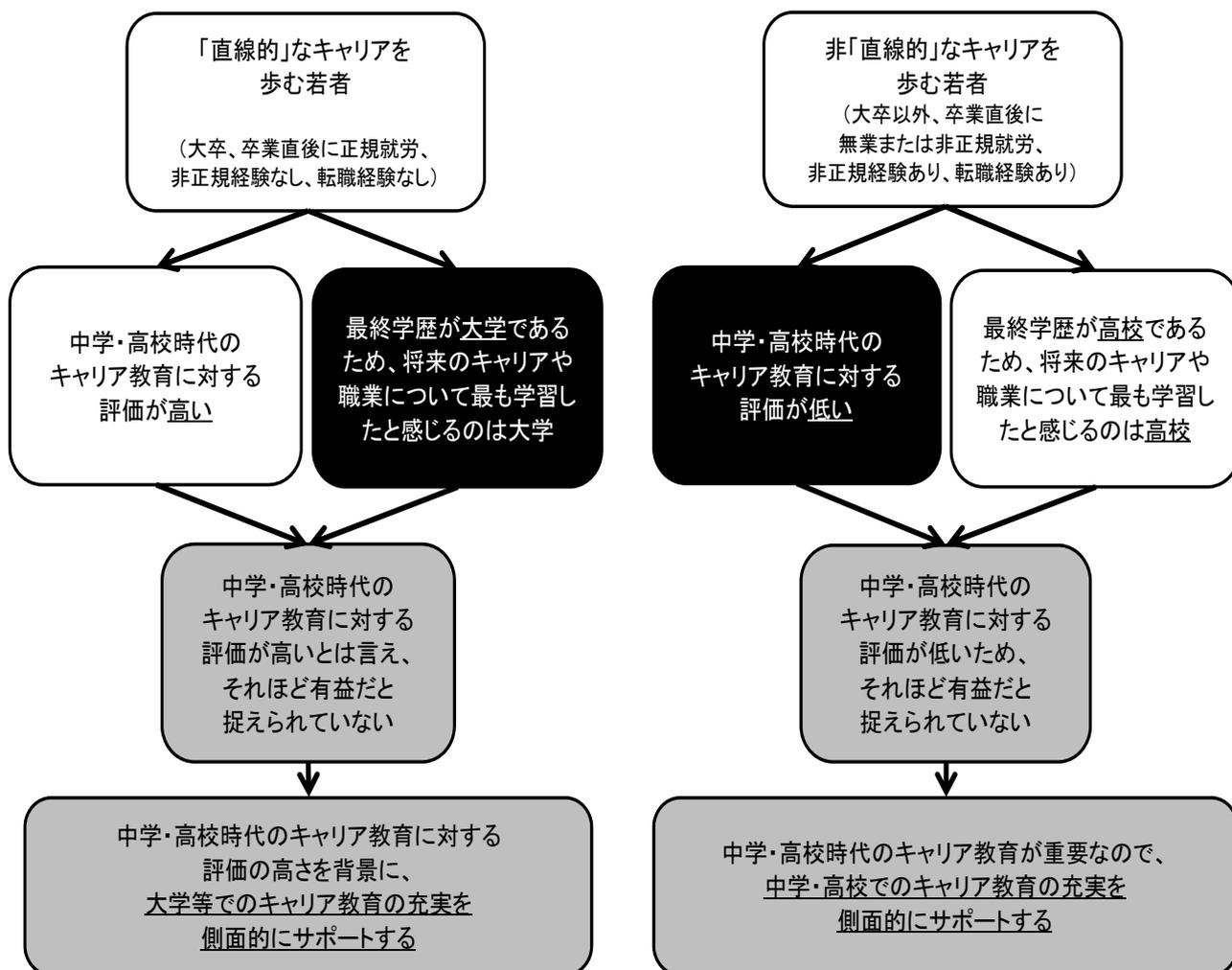
上述の点を、図表3-19に模式図として整理した。「直線的」なキャリアを歩んだ者、そうでない者のどちらの場合でも中高時代のキャリア教育の評価が十分に高くない理由をプロセス図としてとりまとめた。

これらの結果から引き出せるインプリケーションは、「直線的」なキャリアを歩む者にとっては大学等が、また「直線的」ではないキャリアを歩む者にとっては、中学および高校が、将来の進路や職業について最も学習する場であるということである。

したがって、第一には、「直線的」なキャリアを歩む若者を対象に、従来、労働行政の立場からはあまり積極的な支援を提供してこなかった大学等の高等教育機関に向けた職業相談・職業指導の充実、もしくはキャリア・コンサルティングのよりいっそうの普及といったことが考えられる。しかしながら、第二には、大学等に進学しない「直線的」でないキャリアを

歩む若者は、将来の進路や職業について学ぶ機会が中学や高校に限定されるということにより重視し、中学・高校のキャリア教育に労働行政の側から積極的に参画していく必要がある。キャリア教育の対象となる若者にはおおむね2つの層があり、そのそれぞれに対して適切なキャリア教育を側面的に支援していくという視点が重要となると思われる。

従来、キャリア教育においては、学校時代の若者をいくつかの層に分けて、その対象層ごとに特化したキャリア教育を提供するといった議論はあまり十分ではなかった。学校教育現場において若者を層化して捉えるということがあまり馴染まないことも、その理由の1つにある。しかし、労働行政の側からは、学校卒業後のキャリアという面で明らかに異なる2つの対象層を意識して、学校では行うことのできないキャリア教育の側面的なサポートを提供することができる。学校を出て新たに職業生活に入ってくる若者達のキャリアにあった形での支援を、よりきめ細かく議論することの重要性があると考えられる。



図表3-19 学校卒業後のキャリアによる学校時代のキャリア教育に対する評価の違い

および今後のキャリア教育において求められるサポート

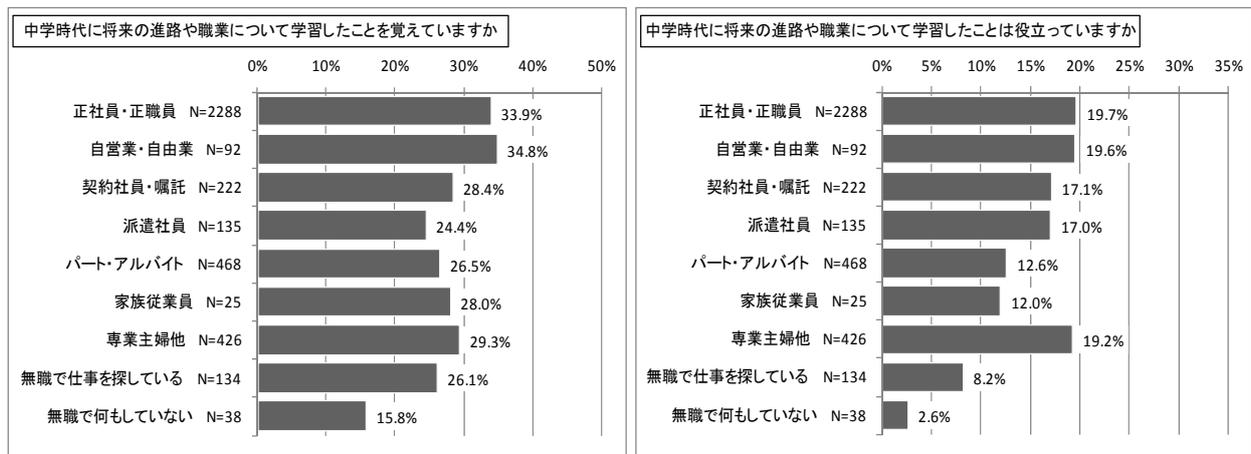
(模式図)

第4章 学校時代のキャリア教育と現在の就労状況との関連

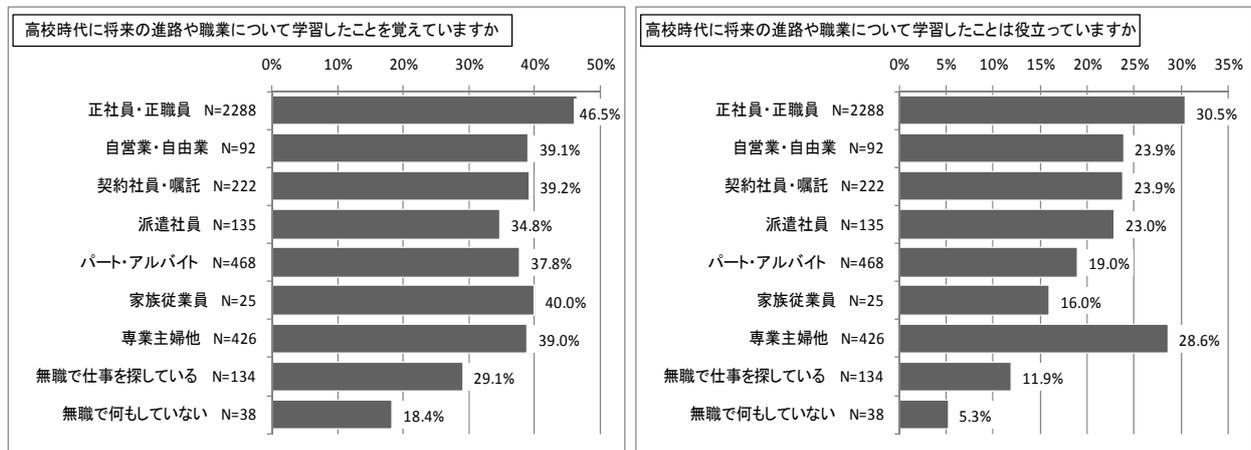
1. 現在の仕事上の立場別の学校時代のキャリア教育の評価

本章では、学校時代のキャリア教育と現在の就労状況および就労意識との関連を検討する。

図表4-1および図表4-2に、現在の仕事上の立場別の学校時代のキャリア教育の評価を示した。図中の数値は「かなり覚えている+やや覚えている」または「かなり役立っている+やや役立っている」の割合である。



図表4-1 現在の仕事上の立場別にみた学校時代のキャリア教育の評価「覚えている」



図表4-2 現在の仕事上の立場別にみた学校時代のキャリア教育の評価「役立っている」

図表4-1および図表4-2ともに、統計的な検定結果は類似しており、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」のいずれの場合でも、「正社員・正職員」が「覚えている」または「役立っている」と回答する割合が統計的に有意に高く、「パート・アルバイト」「無職で仕事を探している」「無職で何もしていない」の3つの群で「覚えている」または「役立っている」と回答する割合が統計

的に有意に低い。他はグラフの見かけ上、高低はあるが、各群の人数の関係などから統計的に有意な結果とならなかった。

以上の結果から、総じて言えば、学校時代のキャリア教育の評価は正社員で高く、パート・アルバイトを中心とする非正規就労層、失業者、無業者では低かったと言える。

図表4-3には、現在の仕事上の立場別に、学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。図表4-3では、より集約して結果を示すために、図表4-1および図表4-2の「正社員・正職員」「自営業・自由業」をまとめて「正規就労・自営」、「契約社員・嘱託」「派遣社員」「パート・アルバイト」をまとめて「非正規就労」、「専業主婦（主夫）、または結婚の準備」を「主婦」、「家族従業員」「無職で仕事を探している」「無職で何もしていない」その他をまとめて「無業その他」として集計を行った。

その結果、「正規就労・自営」はおもに大学時代に行った授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。それに対して、「非正規就労」「主婦」は高校時代に行った授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。どちらの場合も、「職場体験学習やインターンシップ」「履歴書の書き方や面接試験の練習」「就職活動の進め方や試験対策の授業」「労働法（働くことに関する法律）に関する授業」が記憶にあるとして挙げられる割合が他に比べて高かった。その他、「正規就労・自営」は中学時代のボランティアなどの体験活動や高校時代の二者面談・三者面談、「無業その他」は中学時代の履歴書の書き方などの授業が記憶にある割合が他と比較して高かった。

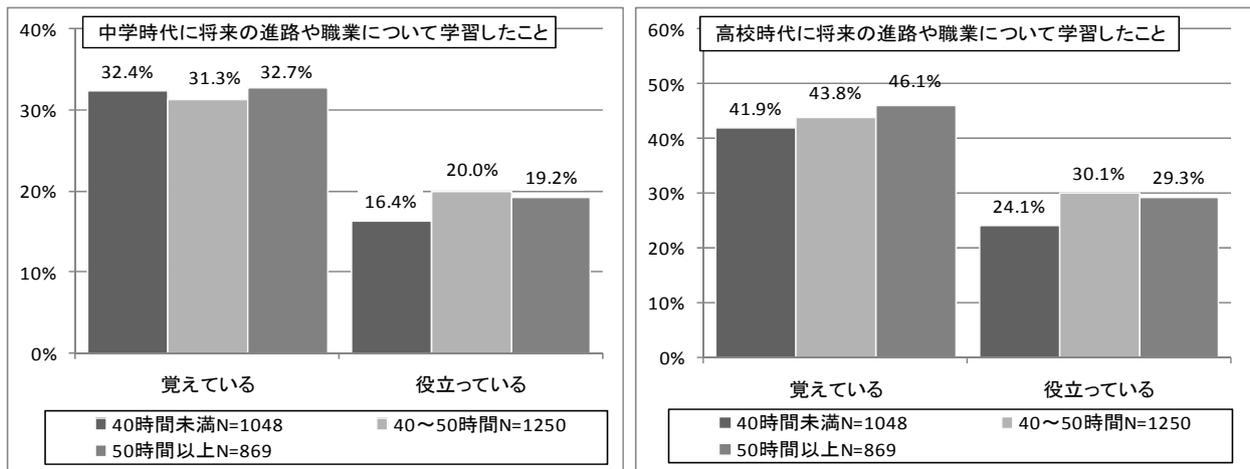
図表4-3 現在の仕事上の立場別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

| | | 正規 就労 自営 N=238 | 非正規 就労 N=827 | 主婦 N=430 | 無業 その他 N=268 |
|-----------------------|-----------------------|-------------------------|--------------------|-------------|--------------------|
| 中学 | ボランティアなどの体験活動 | 33.8% | 30.1% | 30.7% | 22.0% |
| | 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 9.7% | 12.7% | 13.7% | 16.0% |
| 高校 | 職場体験学習やインターンシップ | 10.4% | 13.7% | 16.0% | 10.4% |
| | 進路に関する二者面談や三者面談 | 81.4% | 79.8% | 80.2% | 71.6% |
| | 進路に関する個別相談やカウンセリング | 41.3% | 43.7% | 44.0% | 32.1% |
| | 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 22.7% | 28.3% | 36.5% | 24.3% |
| | 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 15.2% | 17.9% | 22.6% | 13.8% |
| | コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 13.8% | 16.3% | 19.5% | 11.6% |
| | 労働法（働くことに関する法律）に関する授業 | 6.7% | 8.6% | 11.2% | 8.6% |
| | 大学 | 職業興味や職業適性などの検査 | 48.2% | 39.4% | 35.3% |
| 自分の性格を理解するための検査 | 47.4% | 35.9% | 31.4% | 32.8% | |
| 職業や仕事を調べる授業 | 23.6% | 19.3% | 18.4% | 14.6% | |
| 職場体験学習やインターンシップ | 34.1% | 25.0% | 26.3% | 21.3% | |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 51.6% | 45.2% | 37.9% | 37.7% | |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 53.0% | 44.5% | 38.1% | 37.3% | |
| 労働法（働くことに関する法律）に関する授業 | 23.7% | 19.0% | 14.9% | 19.4% | |

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

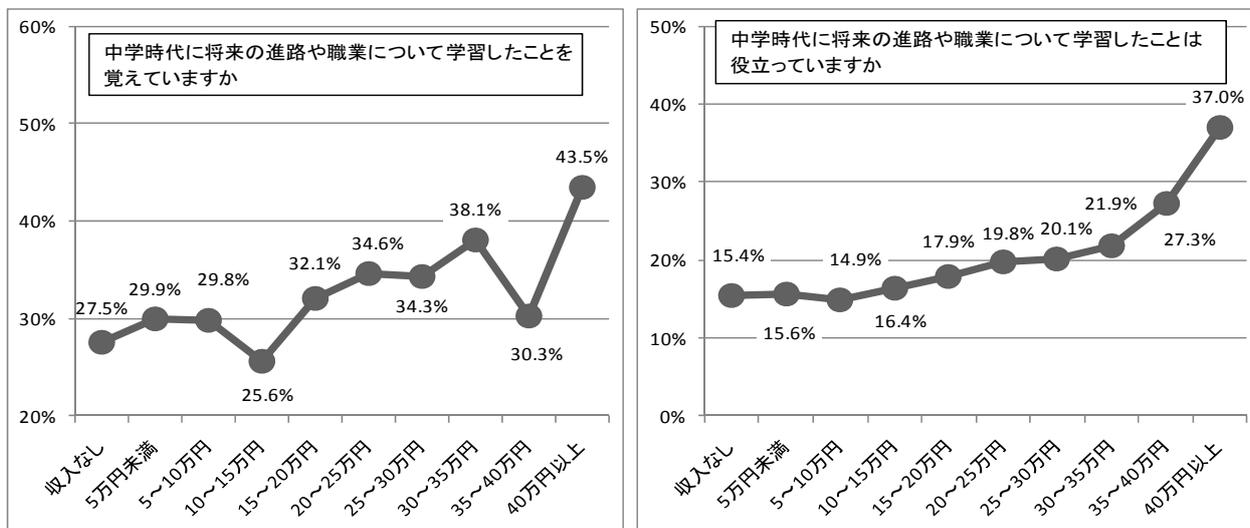
2. 平均労働時間・平均収入別の学校時代のキャリア教育の評価

図表4-4には、1週間あたりの平均労働時間別にみた学校時代のキャリア教育の評価を示した。「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」については特に目立った差はみられなかったが、「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」では労働時間が長いほど「覚えている」「役立っている」割合が高いようであった。ただし、統計的に有意なのは「役立っている」割合のみであり、労働時間が「40時間未満」と短い者で特に「役立っている」と回答する割合が低かった。

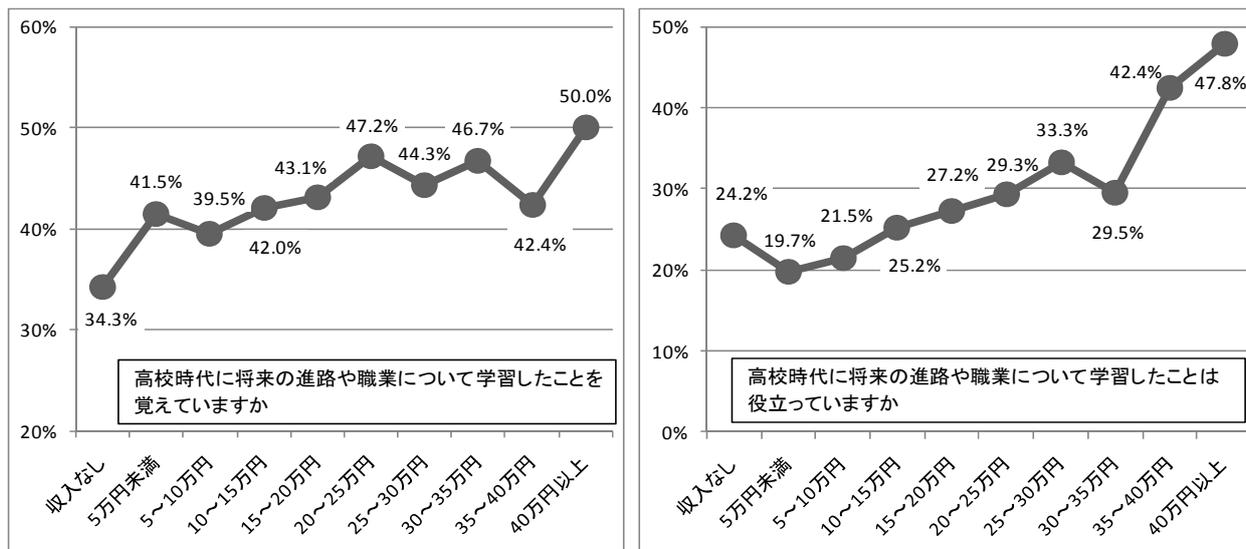


図表4-4 1週間あたりの平均労働時間別にみた学校時代のキャリア教育の評価

図表4-5および図表4-6には、1ヶ月の平均収入別にみた学校時代のキャリア教育の評価を示した。「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」ともに、概して言えば、収入が高いほど「覚えている」「役立っている」と回答する割合が高かった。



図表4-5 1ヶ月の平均収入別にみた中学時代のキャリア教育の評価



図表4-6 1ヶ月の平均収入別に見た高校時代のキャリア教育の評価

1ヶ月の平均収入で学校時代のキャリア教育の評価に違いがみられたので、図表4-7では、1ヶ月の平均収入別に学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。1ヶ月の平均収入が相対的に少ない「15万円未満」、平均的な「15~25万円」、相対的に多い「25万円以上」に群分けをして比較した。

図表4-7 1ヶ月の平均収入別に見た学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

| | 15万円未満 N=1355 | 15~25万円 N=1982 | 25万円以上 N=547 |
|-----------------------|------------------|-------------------|-----------------|
| 中学 | | | |
| 職場体験学習やインターンシップ | 29.6% | 25.3% | 21.8% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 13.9% | 9.4% | 11.3% |
| 高校 | | | |
| 職業興味や職業適性などの検査 | 35.6% | 33.5% | 27.6% |
| 職場体験学習やインターンシップ | 14.1% | 10.5% | 10.1% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 32.5% | 22.6% | 18.8% |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 20.1% | 14.8% | 13.5% |
| 大学 | | | |
| 職業興味や職業適性などの検査 | 37.2% | 48.4% | 44.8% |
| 自分の性格を理解するための検査 | 34.2% | 48.4% | 41.3% |
| 職業や仕事を調べる授業 | 18.2% | 23.3% | 23.6% |
| 職業人や地域の人に仕事の話聞く授業 | 16.2% | 18.8% | 22.5% |
| 職場体験学習やインターンシップ | 24.9% | 32.0% | 39.5% |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 26.7% | 32.1% | 24.5% |
| 進路の目標や計画を考える授業 | 16.3% | 20.6% | 16.8% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 42.4% | 53.8% | 39.9% |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 41.6% | 54.6% | 43.3% |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 31.4% | 34.8% | 27.2% |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 17.8% | 23.4% | 23.9% |

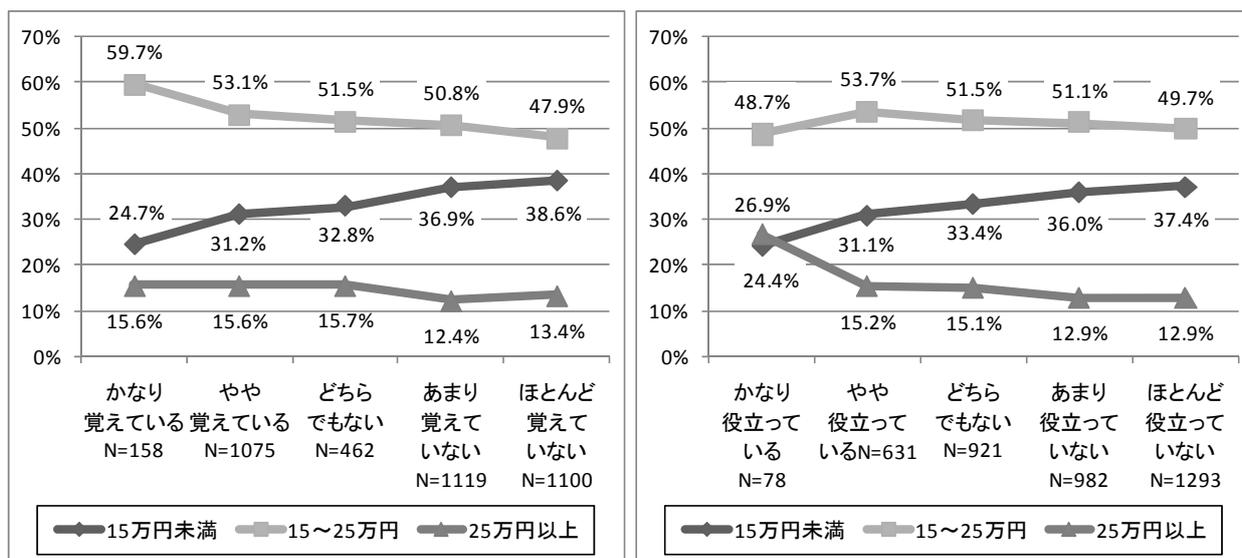
※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

その結果、収入が少ない「15万円未満」では、おもに中学・高校時代に行った授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。特に「職場体験学習やインターンシップ」「履歴書

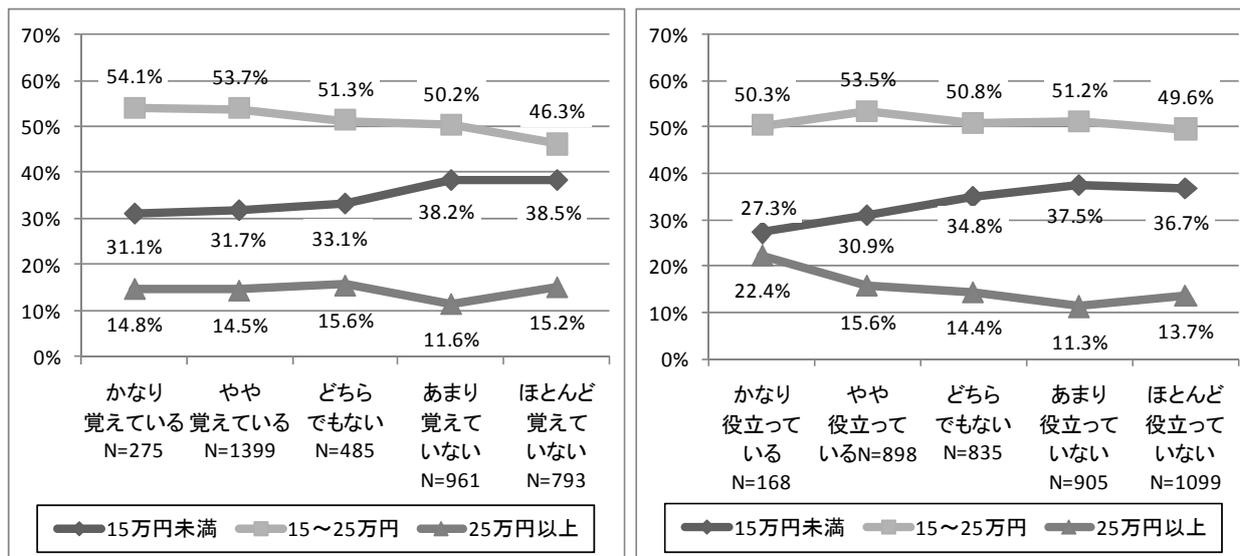
の書き方や面接試験の練習」は、中学・高校ともに記憶にあるという回答が多かった。一方、収入が平均的な「15～25万円」では、おもに大学時代に行った授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。なお、収入が高い「25万円以上」の者は大学時代の、特に「職業人や地域の人に仕事の話聞く授業」「職場体験学習やインターンシップ」を記憶があるとする割合が高かった。

図表4-8および図表4-9には、先に図表4-5および図表4-6で示した結果を、縦軸と横軸を逆にしてグラフに示した。すなわち、先には調査で行った実際の聞き方をふまえて収入別に学校時代のキャリア教育に対する評価をみた。ここでは、その順序を逆にして、仮に中学時代・高校時代のキャリア教育を「覚えている」「役立っている」ということが、いかにその後の収入に影響を与えるのかという観点から解釈することができるとすれば、どのような結果がみられるのかを示した。図表4-8および図表4-9に共通して、中学時代・高校時代のキャリア教育を「覚えている」ほど「15～25万円」の者が増え、「15万円未満」の者が減ることが示された。また、中学時代・高校時代のキャリア教育が「役立っている」ほど「15万円未満」の者が減り、「15～25万円」および「25万円以上」の者が増えることが示された。

これらの結果から、学校時代のキャリア教育をよく覚えている者ほど、また役立っている者ほど収入が高いと単純には結論づけられないものの、ここまでの一連の結果を重ね合わせて解釈すると、学校時代のキャリア教育と現在の収入の間には一定の関連性があることは言えるものと思われる。キャリア教育に積極的に取り組み、後にキャリア教育の記憶が残るほど、または後にキャリア教育は現在の職業生活に有益であると思えるほどにキャリア教育に影響を受けることが、何らかの形で現在の収入と結びついているという点は1つの知見として考えておいて良いと思われる。



図表4-8 中学時代のキャリア教育の評価別にみた1ヶ月の平均収入



図表4-9 高校時代のキャリア教育の評価別にみた1ヶ月の平均収入

3. 現在の勤務先の業種別・職業別の学校時代のキャリア教育の評価

(1)現在の勤務先の業種別にみた学校時代のキャリア教育の評価

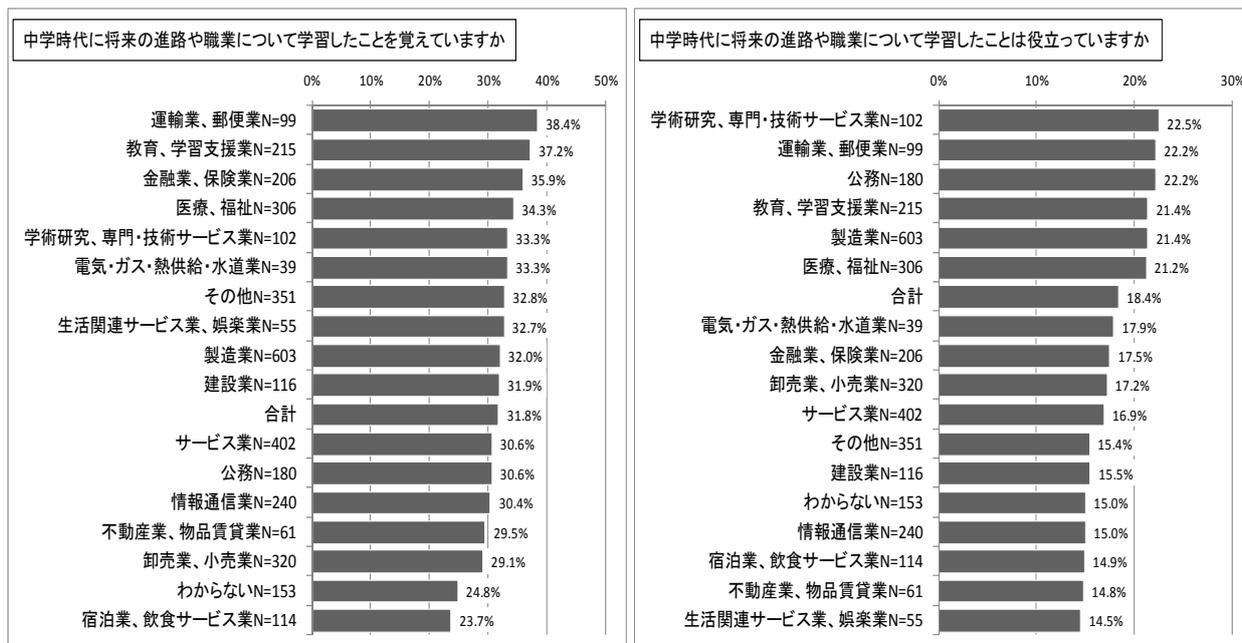
図表4-10および図表4-11には、現在の勤務先の業種別に学校時代のキャリア教育の評価を集計した結果を示した。図中の数値は「かなり覚えている+やや覚えている」または「かなり役立っている+やや役立っている」の割合である。

図のうち、全体の合計よりも上回っている業種に注目すると、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」の「覚えている」「役立っている」のいずれの設問にもみられるのは「運輸業、郵便業」「教育、学習支援業」「医療、福祉」「製造業」であった。その他、「役立っている」という評価に関しては、「学術研究、専門・技術サービス業」「公務」も中学時代・高校時代のキャリア教育に共通して高い値を示していた。

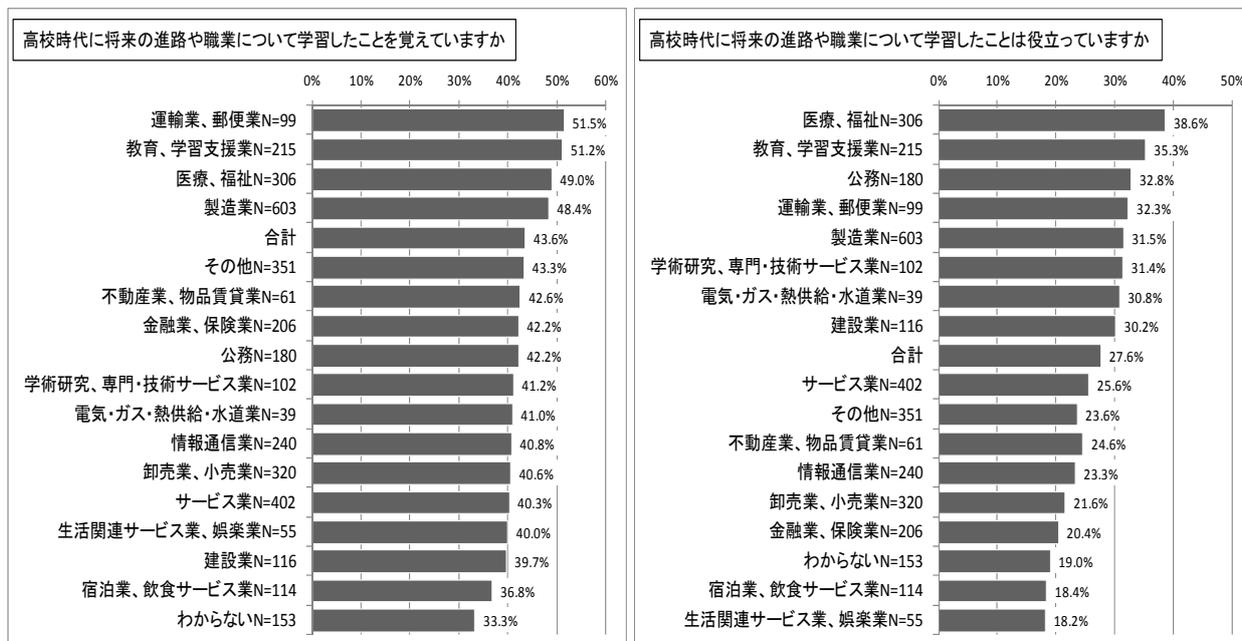
ただし、図表4-10および図表4-11のうち、全体として統計的に有意な表は高校時代に将来の進路や職業について学習したことが「役立っている」割合についてのみであり、概して言えば、現在の勤務先の業種で学校時代のキャリア教育の評価が異なるとは言え、それほど明確な違いではないことも付記しておきたい。

なお、図表4-12には、現在の勤務先の業種別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。業種と特に関連がみられたもののみ表に示した。その結果、大まかに、①「医療、福祉」では、中学・高校・大学の全般で職業調べや職場体験・インターンシップ・ボランティア、履歴書の書き方や就職活動の進め方などの授業が記憶にあるという割合が高かった。②「教育、学習支援業」では、中学の職業調べ、大学の職場体験・インターンシップ・ボランティア、就職活動の進め方や試験対策などの授業が記憶にあるという割合が高かった。③「宿泊業飲食サービス業」「生活関連サービス業、娯楽業」「その他」では、

特に高校時代の職場体験・インターンシップ・ボランティア、就職活動の進め方などの授業が記憶にあるという割合が高かった。④「製造業」「情報通信業」「運輸業・郵便業」「金融業・保険業」では、大学時代の職業興味検査・職業適性検査・性格検査のような自己理解を促す授業が記憶にあるという割合が高かった。



図表4-10 現在の勤務先の業種別にみた中学時代のキャリア教育の評価



図表4-11 現在の勤務先の業種別にみた高校時代のキャリア教育の評価

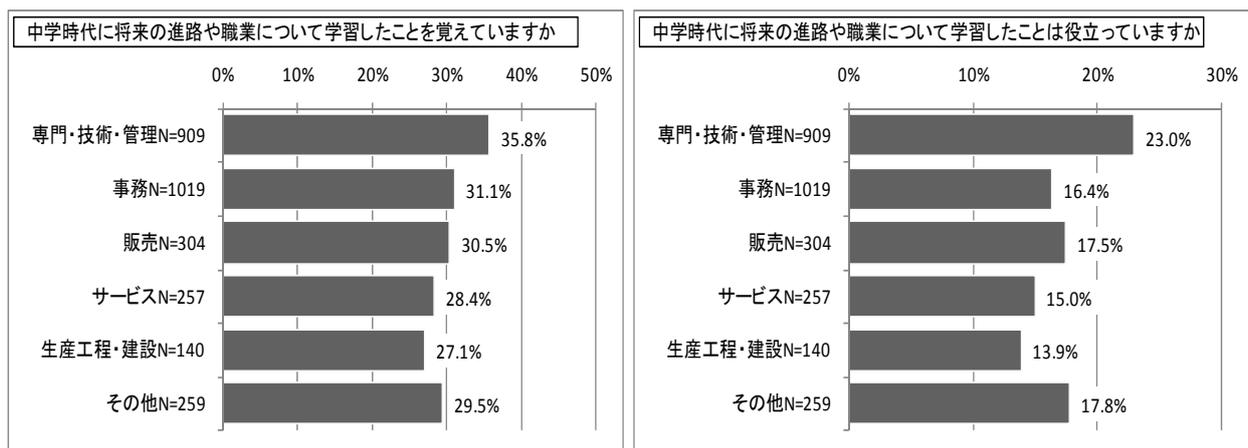
図表4-12 現在の勤務先の業種別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

| | 建設業 N=116 | 製造業 N=603 | 情報 通信業 N=240 | 運輸業 郵便業 N=99 | 金融業 保険業 N=206 | 宿泊業 飲食 サービス業 N=114 | 生活 関連 サービス業、 娯楽業 N=55 | 教育、 学習 支援業 N=215 | 医療、 福祉 N=306 | サービ ス業 N=402 | その他 N=351 | わから ない N=153 | 合計 |
|--------------------|--------------|--------------|--------------------|--------------------|---------------------|-----------------------------|-----------------------------------|---------------------------|--------------------|--------------------|--------------|--------------------|-------|
| 中学 職業や仕事を調べる授業 | | | | | | | 42.3% | 37.6% | | | | | 31.3% |
| 高校 職場体験学習やインターンシップ | | | | | | | | 16.7% | | | 15.7% | | 11.5% |
| ポランティアなどの体験活動 | | 16.1% | | | | | 36.4% | 29.4% | | | 24.5% | | 20.4% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | | | | | 9.7% | 33.3% | | 15.8% | 31.0% | | 32.8% | | 24.9% |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | | | 11.3% | | 6.3% | 22.8% | | 10.4% | 23.5% | | | | 16.1% |
| 大学 職業興味や職業適性などの検査 | | 49.1% | 52.1% | 58.6% | 60.2% | 29.8% | | 38.6% | | | 37.9% | 33.3% | 44.7% |
| 自分の性格を理解するための検査 | | 48.4% | 50.0% | | 59.2% | 26.3% | | | | | 34.2% | 29.4% | 43.3% |
| 職場体験学習やインターンシップ | | 35.5% | | | | | | 38.1% | 37.9% | | 25.9% | 20.9% | 31.2% |
| ポランティアなどの体験活動 | 6.9% | 11.1% | | | | | | 32.1% | 27.1% | | | | |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | | | | | 62.6% | | | | | | | | 32.0% |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | | | | | 64.1% | 33.3% | | 57.7% | 60.8% | 45.0% | 43.0% | 38.6% | 49.7% |

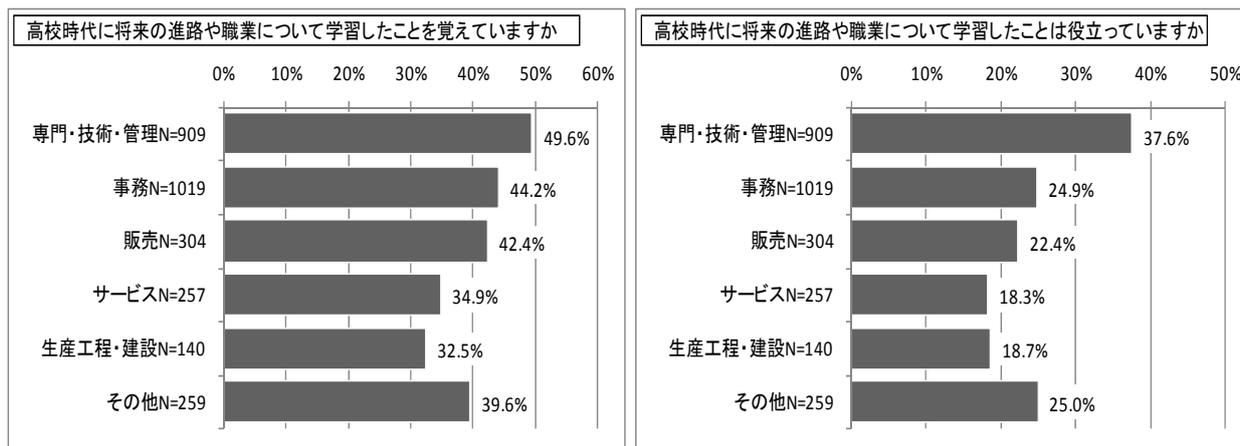
※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

(2)現在の勤務先の職種別にいた学校時代のキャリア教育の評価

図表4-13および図表4-14に、現在の職種別にみた学校時代のキャリア教育の評価を示した。図中の数値は「かなり覚えている+やや覚えている」または「かなり役立っている+やや役立っている」の割合である。中学時代に将来の進路や職業について学習したこと「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」の「覚えている」「役立っている」のいずれの設問についても結果は同じであり、現在の職業が「専門・技術・管理」の者が学校時代のキャリア教育を「覚えている」「役立っている」と回答する割合が高い。一方で、「サービス」「生産工程・建設」では学校時代のキャリア教育に対する評価が低かった。



図表4-13 現在の勤務先の職種別にみた中学時代のキャリア教育の評価



図表4-14 現在の勤務先の職種別にみた高校時代のキャリア教育の評価

図表4-15に、現在の勤務先の職種別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。表から、①「生産工程・建設」「その他」では、高校時代の履歴書の書き方や就職活動の進め方の授業が記憶にあるという割合が高かった、②「専門・技術・管理」「事務」「販売」では、大学時代の職業興味検査・職業適性検査・性格検査が記憶にあるという割合が高かった。その他、「専門・技術・管理」「事務」では履歴書の書き方や就職活動の進め方なども記憶にあるとする割合が高かった。

図表4-15 現在の勤務先の職種別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

| | 専門・ 技術・ 管理 N=909 | 事務 N=1019 | 販売 N=304 | サービ ス N=257 | 生産 工程・ 建設 N=140 | その他 N=259 |
|-----------------------|---------------------------|--------------|-------------|-------------------|--------------------------|--------------|
| 高校 | | | | | | |
| 職場体験学習やインターンシップ | 11.6% | 9.8% | 8.3% | 13.8% | 18.7% | 13.5% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 23.9% | 21.0% | 23.0% | 26.9% | 37.3% | 30.8% |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 15.2% | 13.1% | 16.9% | 17.1% | 27.1% | 19.7% |
| 大学 | | | | | | |
| 職業興味や職業適性などの検査 | 46.7% | 47.9% | 50.1% | 36.4% | 33.1% | 39.2% |
| 自分の性格を理解するための検査 | 46.8% | 47.6% | 49.3% | 33.6% | 27.7% | 34.0% |
| 職場体験学習やインターンシップ | 38.8% | 28.7% | 34.1% | 26.6% | 15.7% | 27.2% |
| ボランティアなどの体験活動 | 17.3% | 16.0% | 14.7% | 15.9% | 4.8% | 16.5% |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 22.7% | 15.5% | 16.6% | 15.9% | 19.9% | 17.3% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 51.4% | 53.3% | 51.8% | 45.3% | 31.9% | 38.6% |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 52.5% | 53.9% | 53.2% | 43.4% | 34.9% | 41.3% |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 32.9% | 34.6% | 35.5% | 34.9% | 19.9% | 29.3% |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 20.1% | 26.7% | 23.0% | 21.1% | 10.8% | 21.0% |

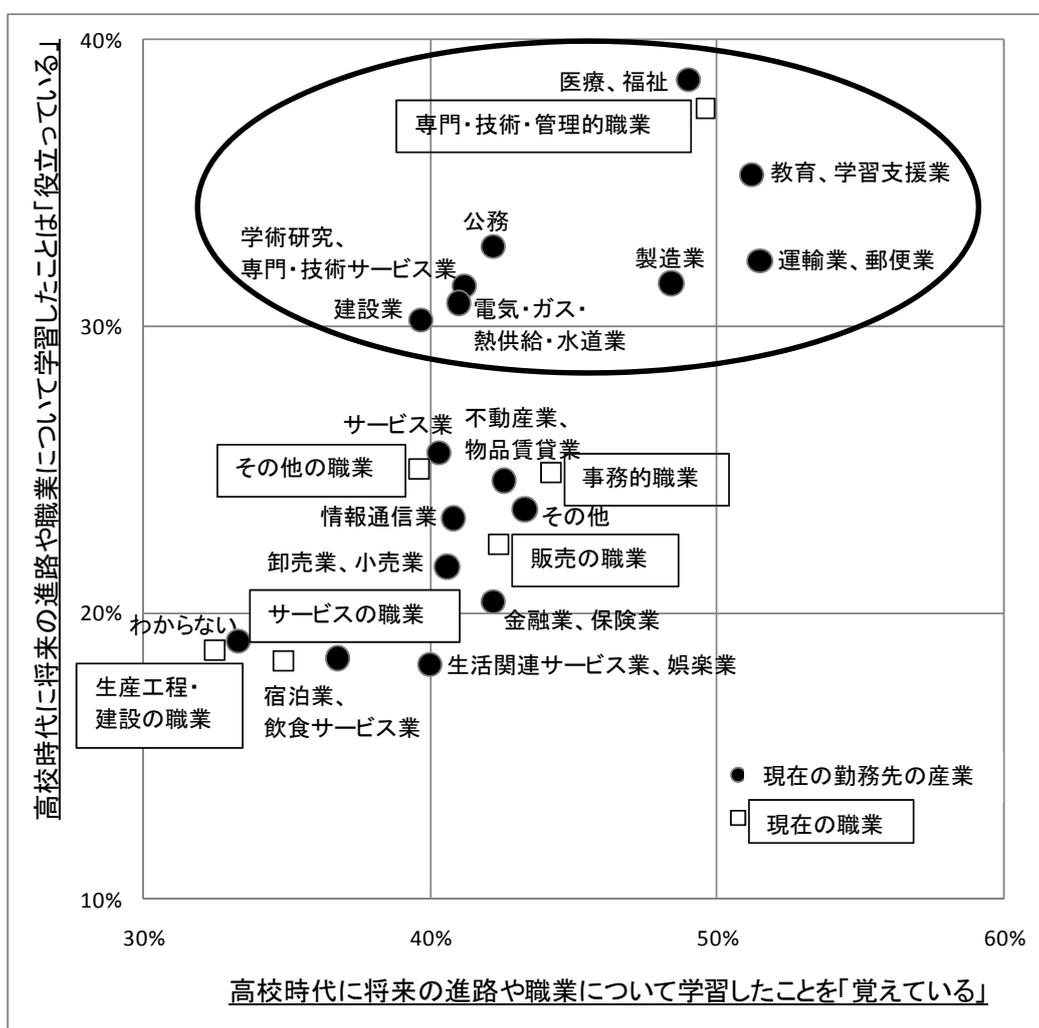
※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

(3)現在の勤務先の業種別・職業別の学校時代のキャリア教育の評価

図表4-16に、業種別・職業別の傾向が特に顕著であった高校時代のキャリア教育の評価についてまとめた。図表4-16は横軸が「高校時代に進路や職業について学習したこと」を「覚えている」割合、縦軸が同じく「役立っている」割合とし、各業種・職業の割合をプロットしたものである。図から、高校時代のキャリア教育を「覚えている」「役立っている」

の双方が高い割合を示すのは「教育、学習支援業」「運輸業、郵便業」であることが分かる。それ以外に「役立っている」と回答した割合が高かった業種として「医療、福祉」「製造業」「公務」「学術研究、専門・技術サービス」「電気・ガス・熱供給・水道業」「建設業」、職業としては「専門・技術・管理的職業」があった（図中、丸で囲んだ部分を参照のこと）。一方、「役立っている」「覚えている」の双方が低い割合を示した業種は「宿泊業、飲食サービス業」「(業種は)分からない」、職業は「サービスの職業」「生産工程・建設の職業」があった。

以上の結果から、①概して言えば、専門的・技術的な知識やスキルを要する業種・職業で高校時代のキャリア教育に対する評価が高い、②サービスの職業、生産工程・建設などの職業ではキャリア教育に対する評価が低いということが言える。



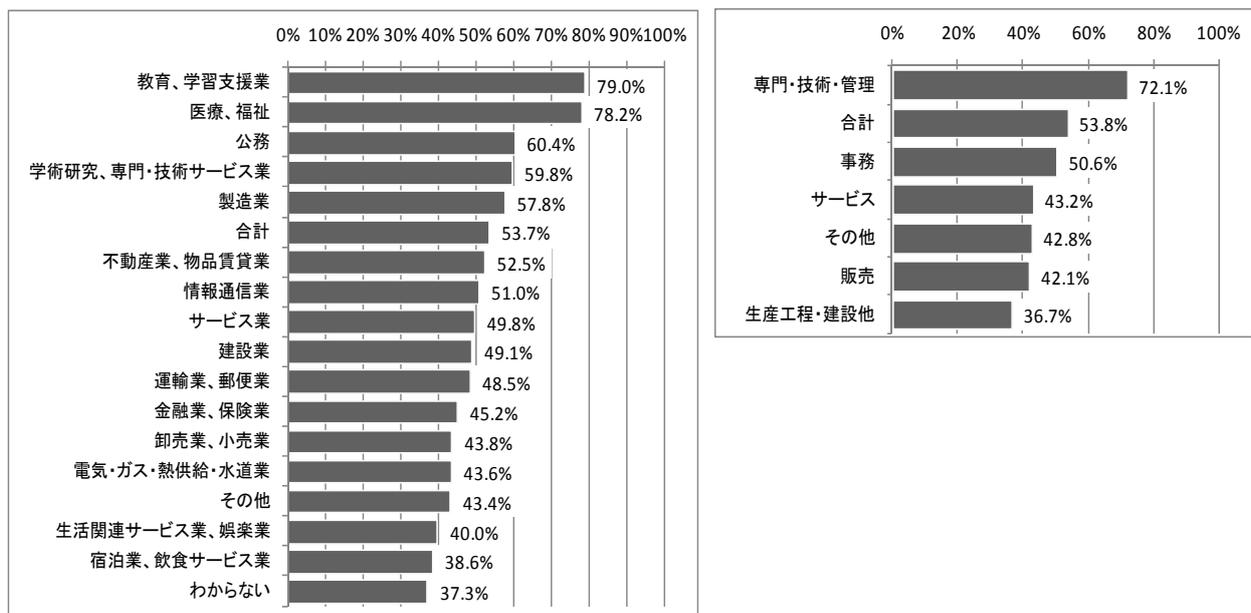
図表4-16 業種別・職種別の高校時代のキャリア教育の評価(まとめ)

図表4-17には業種別・職業別に学校時代に学んだ知識がどの程度、今の仕事に役立っているかを示したが、もともとここで挙げた業種・職種は、キャリア教育のみならず、学校時代の知識全般が職業と結びついている業種・職業であるとも言える。学校時代に学んだ

知識と現在の職業との関連性が高いということがキャリア教育の評価の高さにも派生して広がっていると解釈することができるであろう。

ただし、高校時代のキャリア教育が「役立っている」という評価が高かった業種として「製造業」「建設業」などがみられ、総じてサービス業では「役立っている」という評価がなされなかったことから、キャリア教育の評価のまた違った側面が垣間見られる。これについては、キャリア教育の評価が、現在、対人的な職業についている者よりは対物的な職業についている者で高いという解釈もできよう。

また、他章（補章「学校時代のキャリア教育と地方の教育・労働指標との関連」）では、高校のキャリア教育が「役立っている」という印象は、第2次産業就業者比率が高い土地柄とも関連している可能性が示されている。この点からは、第2次産業の盛んな地域では、実際の職場に結びつきやすい形でキャリア教育に取り組みやすく、結果的に、大人になってからそうした産業に関わる仕事に就いた際に「役立った」という印象をもたれやすいという可能性もある。ただし、この点については様々な解釈が考えられるので、今後の課題としておきたい。



図表4-17 業種別・職種別にみた学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っている程度

4. 現在の就労状況による学校時代のキャリア教育の評価の違い

本章のまとめとして、ここまで分析を行ってきた回答者の現在の職業生活に関連する各属性別の学校時代のキャリア教育の評価を1つの表に集約して示す。図表4-18には、学校時代のキャリア教育の評価が高い属性から順に表に並べた。なお、前章で分析した学校卒業後からこれまでのキャリアについても、あわせて表にして解釈することとした。

図表4-18には、中学時代・高校時代のキャリア教育を「覚えている」または「役立っ

ている」と回答した割合の高かった上位 15 属性を示した。この表のうち、どの設問についても上位 15 位までに含まれる属性に網かけを付して解釈を行った。その結果、どの設問でも概して上位に含まれる属性として、①現在の収入「40 万円以上」、②現在の収入「30～35 万円」、③勤務先の業種「運輸業、郵便業」、④勤務先の業種「教育、学習支援業」、⑤勤務先の業種「医療、福祉」、⑥現在の職業「専門・技術・管理」、⑦非正社員経験 0 年の 7 つの属性が挙がった。これらをまとめると、概して言えば、35 万円以上の比較的高い収入があり、運輸業、郵便業、教育・学習支援業、医療、福祉などの業種に勤務し、専門的・技術的・管理的職業に就いている者、非正社員経験のない者で、学校時代のキャリア教育に対する評価が高かった。

図表 4-18 学校時代のキャリア教育の評価が高い属性(上位 15 属性)

| 中学時代のキャリア教育を「覚えている」上位15属性 | | 中学時代のキャリア教育が「役立っている」上位15属性 | |
|---------------------------|-------|----------------------------|-------|
| 現在の収入「40万円以上」 | 43.5% | 現在の収入「40万円以上」 | 37.0% |
| 勤務先の業種「運輸業、郵便業」 | 38.4% | 現在の収入「35～40万円」 | 27.3% |
| 現在の収入「30～35万円」 | 38.1% | 現在の職業「専門・技術・管理」 | 23.0% |
| 勤務先の業種「教育、学習支援業」 | 37.2% | 勤務先の業種「学術研究、専門・技術サービス業」 | 22.5% |
| 勤務先の業種「金融業、保険業」 | 35.9% | 勤務先の業種「運輸業、郵便業」 | 22.2% |
| 現在の職業「専門・技術・管理」 | 35.8% | 勤務先の業種「公務」 | 22.2% |
| 現在の仕事上の立場「自営業・自由業」 | 34.8% | 現在の収入「30～35万円」 | 21.9% |
| 正社員・非正社員ともに経験なし | 34.7% | 勤務先の業種「教育、学習支援業」 | 21.4% |
| 現在の収入「20～25万円」 | 34.6% | 勤務先の業種「製造業」 | 21.4% |
| 現在の収入「25～30万円」 | 34.3% | 勤務先の業種「医療、福祉」 | 21.2% |
| 勤務先の業種「医療、福祉」 | 34.3% | 正社員経験3年以上 | 20.6% |
| 非正社員経験0年 | 34.1% | 非正社員経験0年 | 20.4% |
| 正社員経験3年未満 | 34.0% | 転職経験あり1回 | 20.2% |
| 最終学歴「大学・大学院」 | 33.9% | 現在の収入「25～30万円」 | 20.1% |
| 現在の仕事上の立場「正社員・正職員」 | 33.9% | 週平均労働時間「40～50時間」 | 20.0% |
| 高校時代のキャリア教育を「覚えている」上位15属性 | | 高校時代のキャリア教育が「役立っている」上位15属性 | |
| 勤務先の業種「運輸業、郵便業」 | 51.5% | 現在の収入「40万円以上」 | 47.8% |
| 勤務先の業種「教育、学習支援業」 | 51.2% | 現在の収入「35～40万円」 | 42.4% |
| 現在の収入「40万円以上」 | 50.0% | 勤務先の業種「医療、福祉」 | 38.6% |
| 現在の職業「専門・技術・管理」 | 49.6% | 現在の職業「専門・技術・管理」 | 37.6% |
| 勤務先の業種「医療、福祉」 | 49.0% | 勤務先の業種「教育、学習支援業」 | 35.3% |
| 勤務先の業種「製造業」 | 48.4% | 現在の収入「25～30万円」 | 33.3% |
| 現在の収入「20～25万円」 | 47.2% | 正社員経験3年以上 | 32.8% |
| 現在の収入「30～35万円」 | 46.7% | 勤務先の業種「公務」 | 32.8% |
| 現在の仕事上の立場「正社員・正職員」 | 46.5% | 勤務先の業種「運輸業、郵便業」 | 32.3% |
| 非正社員経験0年 | 46.4% | 勤務先の業種「製造業」 | 31.5% |
| 週平均労働時間「50時間以上」 | 46.1% | 勤務先の業種「学術研究、専門・技術サービス業」 | 31.4% |
| 卒業直後の就労形態「正社員・正職員」 | 45.5% | 最終学歴「高校」 | 31.2% |
| 正社員経験3年未満 | 45.3% | 勤務先の業種「電気・ガス・熱供給・水道業」 | 30.8% |
| 転職経験なし | 45.1% | 非正社員経験0年 | 30.6% |
| 最終学歴「大学・大学院」 | 45.0% | 現在の仕事上の立場「正社員・正職員」 | 30.5% |

※どの設問についても上位15位までに入る属性に網かけを付した。

図表 4-19 では、逆に、中学時代・高校時代のキャリア教育を「覚えている」または「役立っている」と回答した割合の低かった下位 15 属性を示した。この表のうち、どの設問についても下位 15 位までに含まれる属性に網かけを付して解釈を行った。その結果、どの設問でも概して下位に含まれる属性として、①現在の仕事上の立場「無職で何もしていない」、②現

在の仕事上の立場「無職で仕事を探している」、③現在の仕事上の立場「パート・アルバイト」、④卒業直後の就労形態「無業」、⑤非正社員経験のみあり、⑥現在の職業「生産工程・建設」の6つの属性が挙げられた。これらをまとめると、現在、無業または求職中であるか、パート・アルバイトとして働いている場合、学校卒業直後の就労形態が無業で非正社員経験しかない場合、現在の職業が生産工程・建設である場合に、概して言えば学校時代のキャリア教育の評価が低かった。

図表4-19 学校時代のキャリア教育の評価が低い属性

| 中学時代のキャリア教育を「覚えている」下位15属性 | | 中学時代のキャリア教育が「役立っている」下位15属性 | |
|---------------------------|-------|----------------------------|-------|
| 現在の仕事上の立場「無職で何もしていない」 | 15.5% | 現在の仕事上の立場「無職で何もしていない」 | 2.6% |
| 卒業直後の就労形態「無業」 | 21.8% | 現在の仕事上の立場「無職で仕事を探している」 | 8.2% |
| 勤務先の業種「宿泊業、飲食サービス業」 | 23.7% | 転職経験あり4回 | 10.3% |
| 現在の仕事上の立場「派遣社員」 | 24.4% | 卒業直後の就労形態「無業」 | 11.6% |
| 勤務先の業種「わからない」 | 24.8% | 現在の仕事上の立場「家族従業員」 | 12.0% |
| 転職経験あり3回 | 25.1% | 転職経験あり3回 | 12.6% |
| 最終学歴「高校」 | 25.2% | 現在の仕事上の立場「パート・アルバイト」 | 12.6% |
| 非正社員3年以上 | 25.2% | 非正社員経験のみあり | 13.2% |
| 現在の収入「10～15万円」 | 25.6% | 正社員経験0年 | 13.3% |
| 現在の仕事上の立場「無職で仕事を探している」 | 26.1% | 非正社員3年以上 | 13.3% |
| 現在の仕事上の立場「パート・アルバイト」 | 26.5% | 正社員・非正社員ともに経験なし | 13.3% |
| 現在の職業「生産工程・建設」 | 27.1% | 現在の職業「生産工程・建設」 | 13.9% |
| 非正社員経験のみあり | 27.3% | 勤務先の業種「生活関連サービス業、娯楽業」 | 14.5% |
| 現在の収入「なし」 | 27.5% | 卒業直後の就労形態「非正社員・非正職員」 | 14.7% |
| 転職経験あり4回 | 27.7% | 非正社員経験3年未満 | 14.7% |
| 高校時代のキャリア教育を「覚えている」下位15属性 | | 高校時代のキャリア教育が「役立っている」下位15属性 | |
| 現在の仕事上の立場「無職で何もしていない」 | 18.4% | 現在の仕事上の立場「無職で何もしていない」 | 5.3% |
| 現在の仕事上の立場「無職で仕事を探している」 | 29.1% | 現在の仕事上の立場「無職で仕事を探している」 | 11.9% |
| 卒業直後の就労形態「無業」 | 31.5% | 卒業直後の就労形態「無業」 | 13.9% |
| 現在の職業「生産工程・建設」 | 32.5% | 現在の仕事上の立場「家族従業員」 | 16.0% |
| 勤務先の業種「わからない」 | 33.3% | 正社員・非正社員ともに経験なし | 17.3% |
| 現在の収入「なし」 | 34.3% | 勤務先の業種「生活関連サービス業、娯楽業」 | 18.2% |
| 現在の仕事上の立場「派遣社員」 | 34.8% | 現在の職業「サービス」 | 18.3% |
| 現在の職業「サービス」 | 34.9% | 勤務先の業種「宿泊業、飲食サービス業」 | 18.4% |
| 非正社員3年以上 | 35.0% | 現在の職業「生産工程・建設」 | 18.7% |
| 非正社員経験のみあり | 36.3% | 勤務先の業種「わからない」 | 19.0% |
| 最終学歴「高校」 | 36.6% | 現在の仕事上の立場「パート・アルバイト」 | 19.0% |
| 正社員経験0年 | 36.6% | 現在の収入「5万円未満」 | 19.7% |
| 勤務先の業種「宿泊業、飲食サービス業」 | 36.8% | 正社員経験0年 | 20.1% |
| 卒業直後の就労形態「非正社員・非正職員」 | 37.6% | 非正社員経験のみあり | 20.3% |
| 現在の仕事上の立場「パート・アルバイト」 | 37.8% | 勤務先の業種「金融業、保険業」 | 20.4% |

※どの設問についても下位15位までに入る属性に網かけを付した。

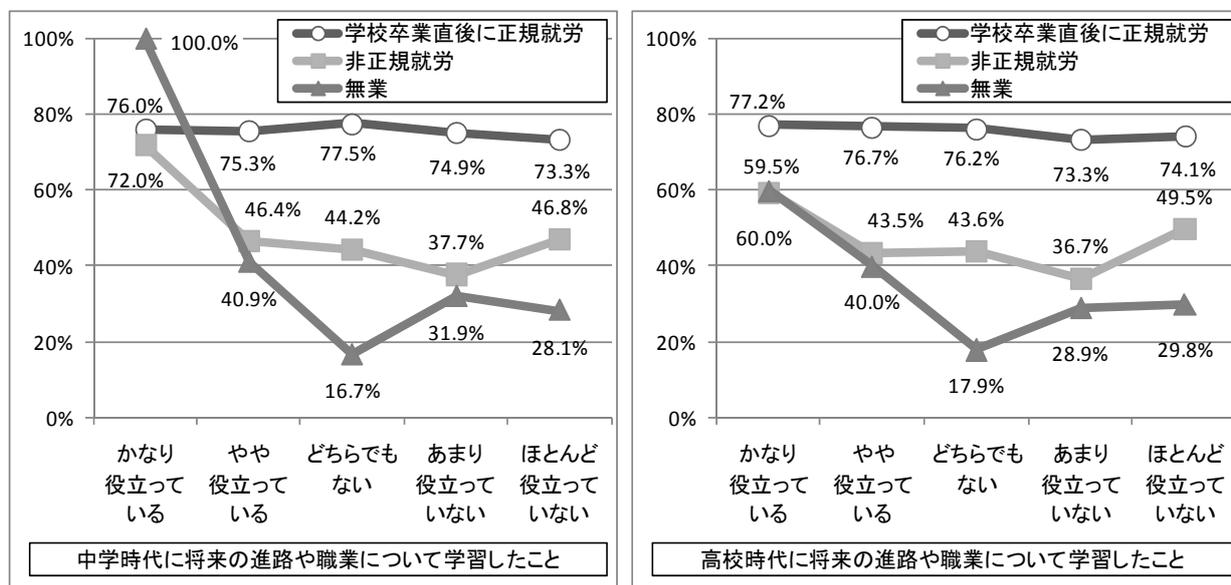
5. 本章の結果のまとめと示唆

ここまでの結果をもとに、以下の3点が示唆される。

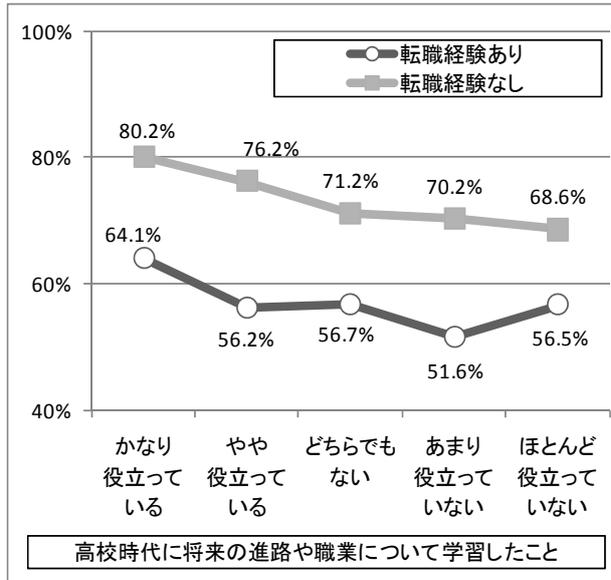
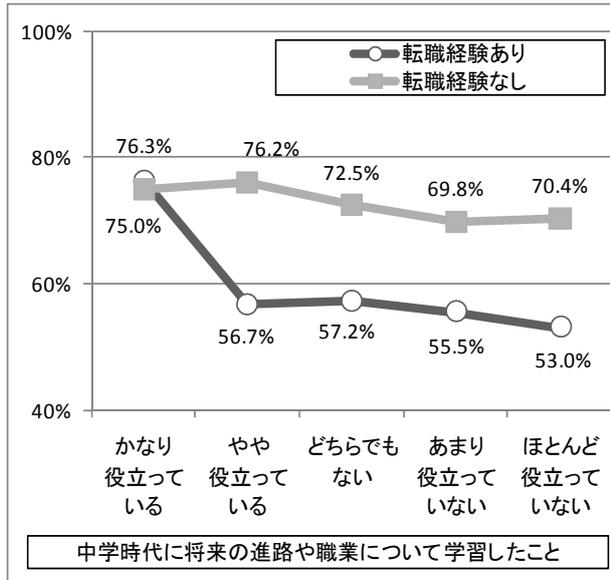
第一に、この調査の結果に限って言えば、学校時代のキャリア教育は、教育や医療、運輸や郵便などの業種で、専門的・技術的・管理的な職業に従事する非正規就労経験がない高収入の者にとって記憶に残り、かつ有益であったと捉えられやすい。それに対して、無業、求職者、非正規就労の状態にある者、非正規就労の経験が少なく、生産工程や建設の業界で働く者にとっては、学校時代のキャリア教育は記憶に残らず、役立っているとは思われていな

い。すなわち、「直線的」で「恵まれた」キャリアを歩んできた者にとってキャリア教育は効果的であり、「直線的」ではなく十分に「恵まれた」とは言えないキャリアを歩んできた者にとってキャリア教育は効果的であるとは解釈しにくい結果となった。こうした結果を、逆の観点からみれば、学校時代のキャリア教育をよく覚えていて、よく学んだ者は、現在、「直線的」で「恵まれた」キャリアを歩んでいるとする解釈ができる。その場合、学校のキャリア教育は将来の若者の職業生活に大きな影響を与える重要な要因であり、それゆえ、学校のキャリア教育の環境をよりいっそう整備し、キャリア教育から多くを学べる若者を増やすべきであるとする示唆が引き出せることとなろう。

第二に、しかしながら、本章までの結果は、むしろ、無業者、求職者、非正規就労者に対して、より有益に感じられるようなキャリア形成支援を何らかの形で提供する必要性を示唆するものであると考えられる。望ましくは、いわゆる「直線的」ではなく「恵まれた」とは言えない期間があったとしても、長期的には、主体的にキャリアを形成し、充実した職業生活を送るための基礎となるようなキャリア教育が学校段階で施されるべきである。労働行政としては、そのために、学校教育段階のキャリア教育に対する手厚い側面的なサポートを提供することが重要となろう。事実、図表4-20～図表4-22に示したとおり、「直線的」でないキャリアを歩んだ若者でも、学校時代のキャリア教育に対する評価が良い場合には一定以上の収入を得ることができると解釈できる結果もみられた。

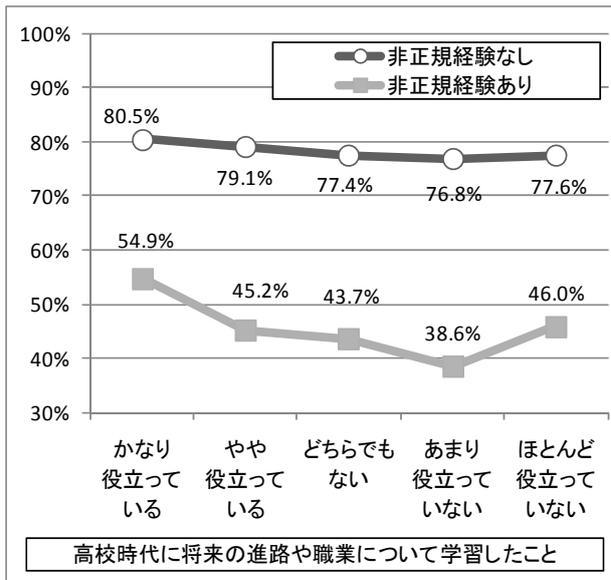
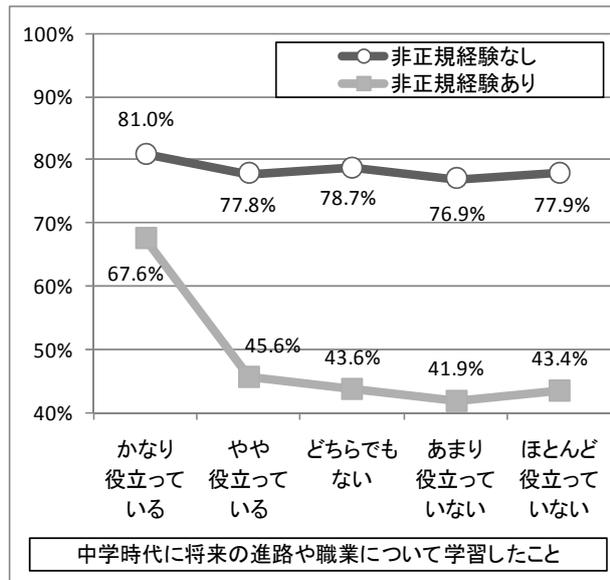


図表4-20 学校卒業直後の働き方および学校時代のキャリア教育の評価別に見た
1ヶ月の平均収入が15万円以上の者の割合



図表4-21 転職の有無および学校時代のキャリア教育の評価別にみた

1ヶ月の平均収入が15万円以上の者の割合



図表4-22 非正規就労経験および学校時代のキャリア教育の評価別にみた

1ヶ月の平均収入が15万円以上の者の割合

第三に、ただし、本調査の結果で示されるとおり、概して言えば、「直線的」ではなく「恵まれた」とは言えないキャリアを歩む者は、学校におけるキャリア教育の取り組みから多くを学ぶことができていない場合が多い。ここから得られる示唆とは、こうした層の若者が学校から離れた場合には、学校で本来受けるべきであったキャリア教育的な支援介入を、学校外の労働行政関連機関において何らかの形で行うことであろうと思われる。そうした言わば「リメディアル (remedial: 補習的・治療的) なキャリア教育的な支援 (Brown Lent, 1996 ;

Lent,2005)」を学校外の機関で行える体制・仕組みの整備の検討が必要となろう。具体的には、これまで学校教育現場では軽視されがちであった履歴書の書き方、面接の受け方、就職活動の進め方といった求職活動に必須な「手続き的な知識」を、学校外で学習できるような側面的な支援などが考えられる。その場合、現在あるジョブカードの支援体制の枠組みやその具体的な担い手としてのキャリア・コンサルタントは、こうした学校外のキャリア教育・キャリアガイダンスの提供の枠組みを模索するにあたっての重要なリソースとなる。また、キャリア・コンサルタントの介入方策として個別支援のみならず、セミナーやガイダンスといったグループ支援などの可能性も模索できるものと思われる。

【引用文献】

- Brown, S. D. 1996 A social cognitive framework for career choice counseling. Career Development Quarterly, 44,354-366.
- Lent,R. W. 2005 A social cognitive view of career development and counseling. In D.Brown & R.W.Lent(Eds.), Career Development and Counseling: Putting theory and research to work.(pp.101-127).Hoboken, NJ: Wiley.

第5章 学校時代のキャリア教育と現在の就労意識との関連

1. 職業生活に対する満足感と学校時代のキャリア教育の評価との関連

図表5-1に、現在の就労意識と学校時代のキャリア教育の評価との関連を示した。表から、「現在の生活全般に、どの程度、満足していますか」「これまでの職業生活に、どの程度、満足していますか」「将来の目標や自分のやりたいことが、どの程度、明確ですか」「自尊心(自己評価)」などとは、総じて、統計的に有意な相関係数が示された。特に、高校時代のキャリア教育が「役立っている」とする評価と現在の生活全般の満足感および職業生活に対する満足感とは最も高い相関係数がみられた。現状に対する満足感と学校時代のキャリア教育の評価は密接に関連していることが示される。

図表5-1 現在の就労意識と学校時代のキャリア教育の評価の関連

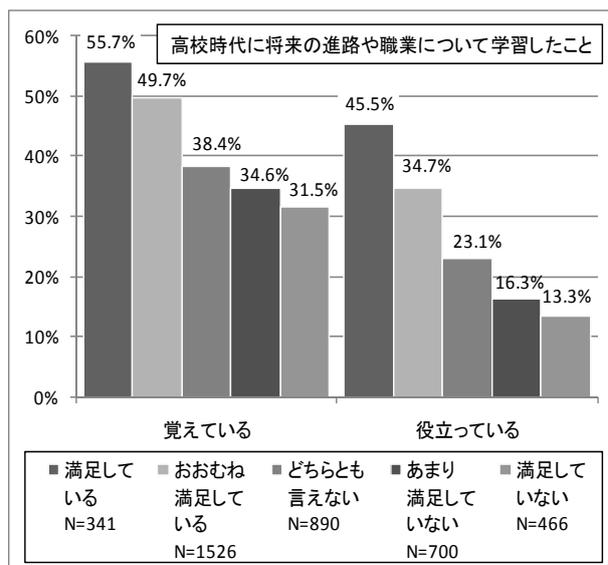
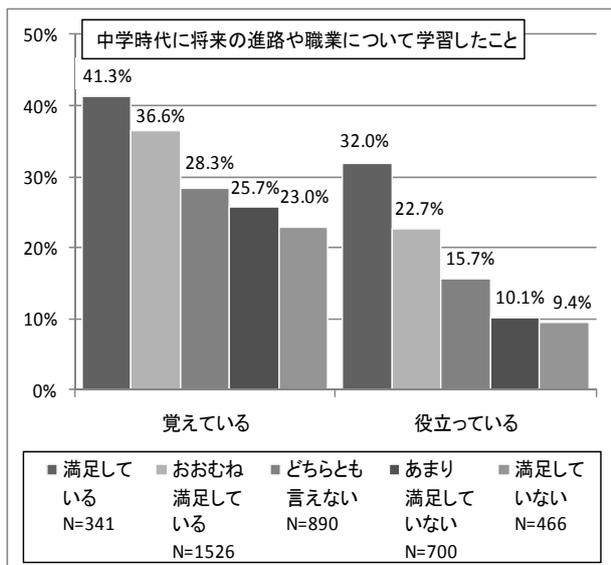
| | 中学時代 | | 高校時代 | |
|-----------------------------|-----------|------------|-----------|------------|
| | 覚えて いる | 役立っ ている | 覚えて いる | 役立っ ている |
| 現在の生活全般に、どの程度、満足していますか | .120 | .172 | .147 | .200 |
| これまでの職業生活に、どの程度、満足していますか | .157 | .215 | .187 | .251 |
| 将来の目標や自分のやりたいことが、どの程度、明確ですか | .175 | .157 | .192 | .193 |
| 自尊心(自己評価)得点 | .111 | .109 | .124 | .138 |
| (これまでの人生は)本人の能力によって決まってきた | .003 | -.036 | .014 | -.026 |
| (これまでの人生は)本人の努力によって決まってきた | .046 | .022 | .066 | .048 |
| (これまでの人生は)周囲の環境によって決まってきた | -.002 | -.060 | .007 | -.023 |
| (これまでの人生は)運によって決まってきた | -.025 | -.068 | -.029 | -.053 |

※数値は順位相関係数。1%水準で有意な相関係数を網かけにした。

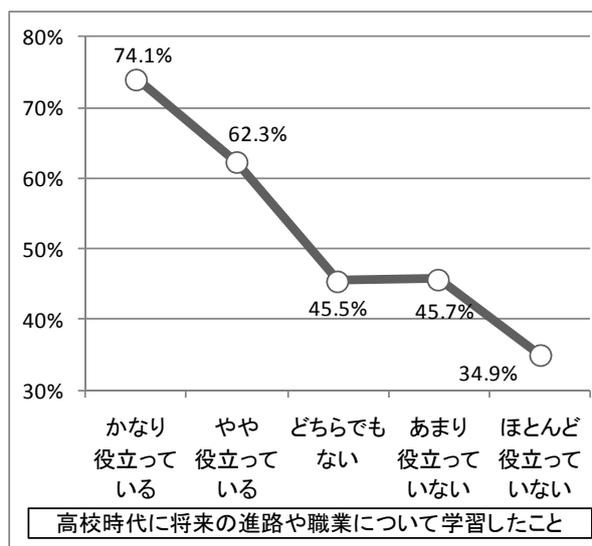
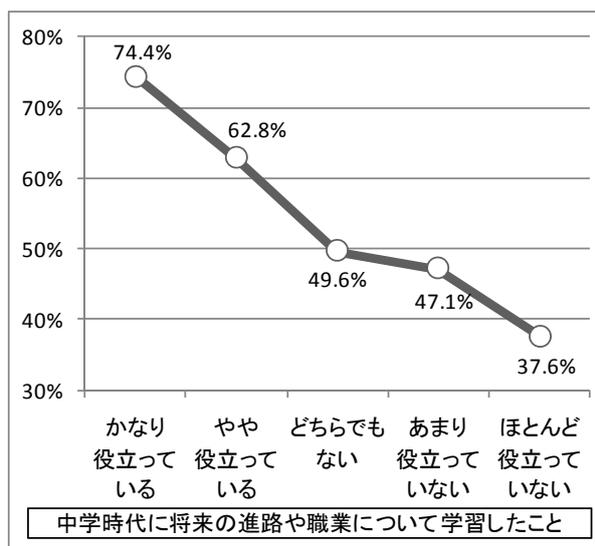
※「自尊心(自己評価)得点」は、心理学研究でよく使用されているRosenberg(1965)の自尊心尺度(山本・松井・山成, 1982)によって測定。項目は以下のとおり。「少なくとも人並みには、価値のある人間である」「色々な良い素質をもっている」「敗北者だと思ふことがよくある」「物事を人並みには、うまくやれる」「自分には、自慢できるところがあまりない」「自分に対して肯定的である」「だいたいにおいて、自分に満足している」「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」「自分は全くだめな人間だと思ふことがある」「何かにつけて自分は役に立たない人間だと思ふ」。これら10項目の意味内容から得点の方向を揃えて合計得点を求めたものを自尊心得点とした。【引用文献】山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68。

図表5-2には、現状に対する満足感が学校時代のキャリア教育の評価と具体的にどのように関連しているのかを検討するために、これまでの職業生活に対する満足感別にみた学校時代のキャリア教育の評価をグラフで示した。中学時代・高校時代に将来の進路や職業について学習したことのどちらの場合でも、「覚えている」「役立っている」という評価は、これまでの職業生活に対する満足感と直線的に関連していることが示される。

図表5-3は、図表5-2の縦軸と横軸を逆にしてグラフにしたものである。仮に、中学校時代、高校時代のキャリア教育がこれまでの職業生活に対する満足感に影響を与えているという因果関係があると考えることができるとすれば、このグラフから、学校時代のキャリア教育が役立っているほど、現在に至るまでの職業生活の満足感が高いということが言える。



図表5-2 これまでの職業生活に対する満足感別にみた学校時代のキャリア教育の評価



図表5-3 学校時代のキャリア教育の評価別にみたこれまでの職業生活に対する満足感
 (「満足している」+「おおむね満足している」の割合)

ただし、具体的にどのような授業や行事が記憶にあるのかという点では、図表5-4に示したとおり、これまでの職業生活全般に満足している者とそうでない者で大きな違いはみられなかった。強いて言えば、大学時代のキャリア教育で満足している者とそうでない者で違いが大きいと言えるが、顕著な結果ではなかった。これらの結果から、記憶に残る具体的な授業や行事があり、それゆえ学校時代のキャリア教育の評価が高く、その結果、これまでの職業生活が満足のものになっているというよりは、同じような授業や行事を記憶しているにも関わらず、個々人によって現在の満足感やキャリア教育全体に対する評価との関わりが異なるということが言える。

図表5-4 これまでの職業生活に対する職業満足感と
学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものとの関連

| これまでの職業生活に、どの程度、満足していますか | 満足して | 満足して |
|------------------------------|--------|--------|
| | いる | いない |
| | N=1859 | N=2050 |
| 大学 <u>自分の性格を理解するための検査</u> | 44.8% | 40.2% |
| <u>職場体験学習やインターンシップ</u> | 34.0% | 27.4% |
| <u>進路の目標や計画を考える授業</u> | 20.7% | 16.5% |
| <u>コミュニケーションやマナーを学ぶ授業</u> | 35.4% | 29.8% |
| <u>労働法(働くことに関する法律)に関する授業</u> | 23.6% | 19.3% |

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

なお、図表5-5に示したとおり、将来の目標の明確さと学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものとの関連は、比較的、広範にみられた。中学時代・高校時代・大学時代と一貫して、将来の目標が明確である者の方が学校時代に行った授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。

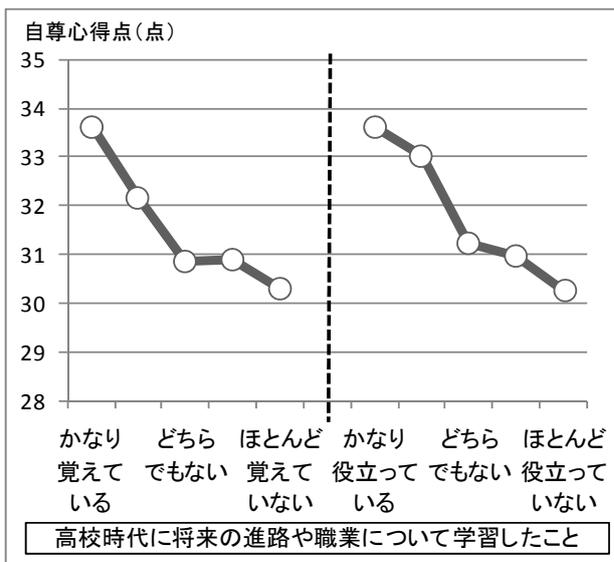
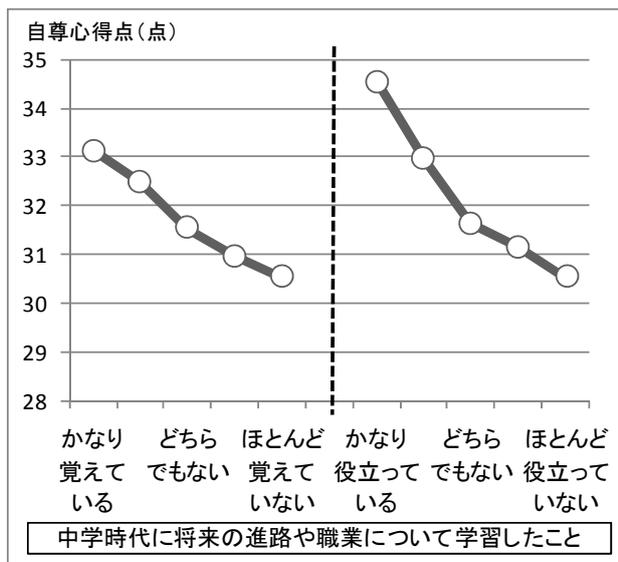
図表5-5 将来の目標の明確さと学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものとの関連

| 将来の目標や自分のやりたいことが、どの程度、明確ですか | 明確で | 明確で |
|------------------------------|--------|--------|
| | ある | ない |
| | N=2091 | N=1818 |
| 中学 <u>自分の性格を理解するための検査</u> | 23.3% | 19.8% |
| <u>ボランティアなどの体験活動</u> | 34.2% | 29.2% |
| <u>コミュニケーションやマナーを学ぶ授業</u> | 6.8% | 4.7% |
| 高校 <u>ボランティアなどの体験活動</u> | 22.1% | 18.0% |
| <u>進路に関する個別相談やカウンセリング</u> | 43.7% | 39.0% |
| <u>進路の目標や計画を考える授業</u> | 34.1% | 29.2% |
| 大学 <u>職業興味や職業適性などの検査</u> | 46.6% | 40.8% |
| <u>職業や仕事を調べる授業</u> | 23.8% | 18.7% |
| <u>職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業</u> | 20.5% | 15.9% |
| <u>職場体験学習やインターンシップ</u> | 34.0% | 26.6% |
| <u>ボランティアなどの体験活動</u> | 17.5% | 13.1% |
| <u>進路に関する個別相談やカウンセリング</u> | 32.6% | 25.1% |
| <u>進路の目標や計画を考える授業</u> | 20.1% | 16.6% |
| <u>就職活動の進め方や試験対策の授業</u> | 51.0% | 45.5% |
| <u>労働法(働くことに関する法律)に関する授業</u> | 24.9% | 17.2% |

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

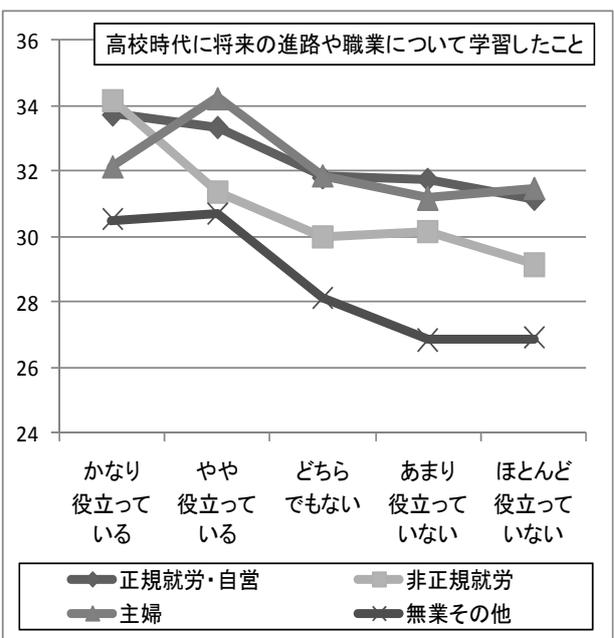
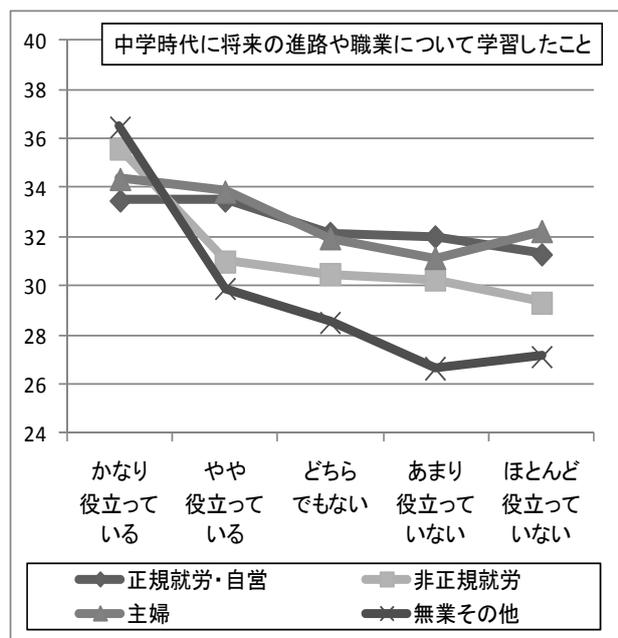
2. 自尊心と学校時代のキャリア教育の評価との関連

前節の図表5-1では、自尊心が学校時代のキャリア教育の評価と関連していた。図表5-6は、具体的に両者の関連をグラフに示したものである。学校時代のキャリア教育に対する評価と自尊心得点には直線的な関連がみられており、自尊心が高ければ高いほど、学校時代のキャリア教育に対する評価も高かった。

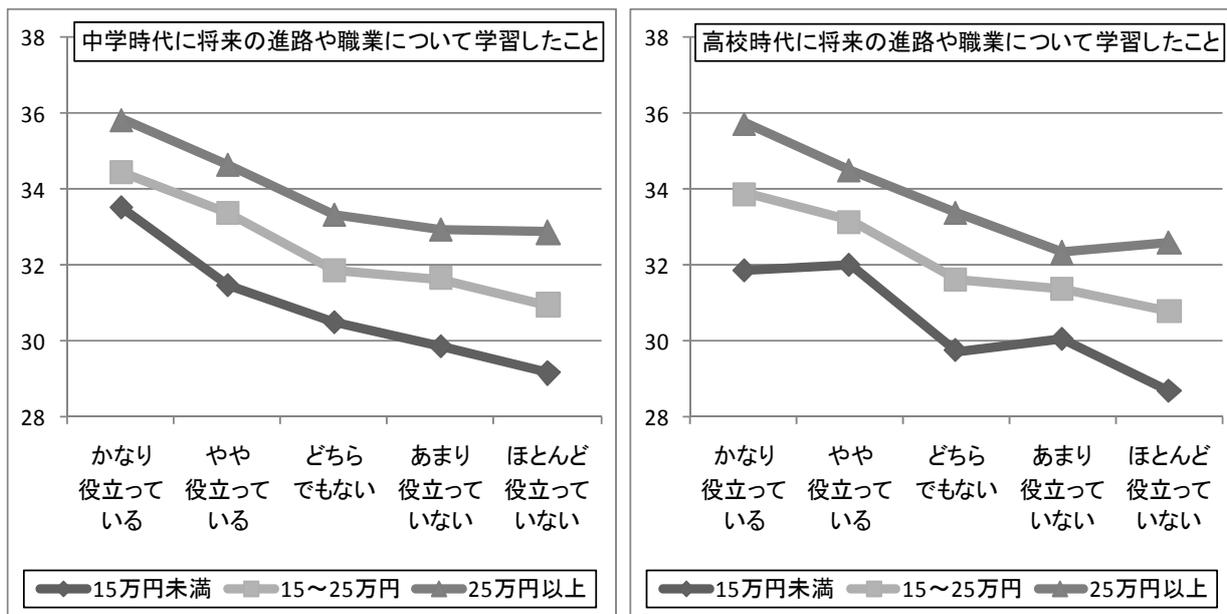


図表5-6 学校時代のキャリア教育の評価別の自尊心得点の平均値

ただし、図表5-7および図表5-8に示したとおり、非正規就労や無業その他の者、1ヶ月の収入が15万円未満の者は総じて自尊心が低いとは言え、これらの者であっても、学校のキャリア教育が役立っていると考えている場合には、それほど自尊心が低くないと解釈できる結果も得られた。これは、キャリア教育の効果が、たんに職業生活に影響を与えるのみならず、職業生活の状態に関わらず高い自尊心を保ち続けることに波及する可能性を示すと考えられる。



図表5-7 現在の身分・立場別および学校時代のキャリア教育に対する評価別に見た自尊心得点の平均値



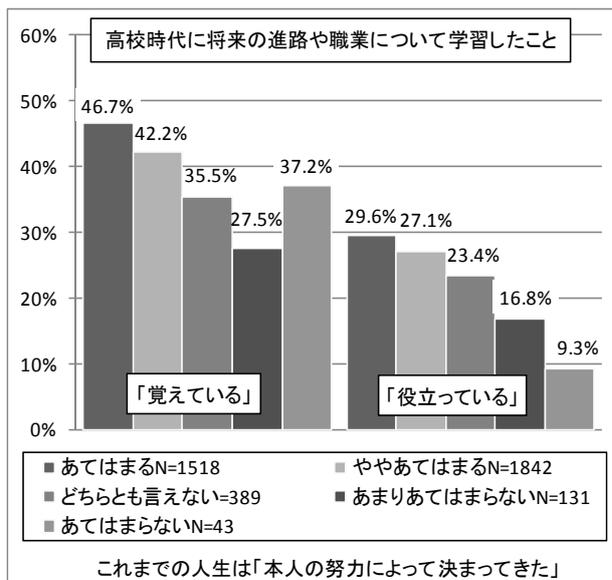
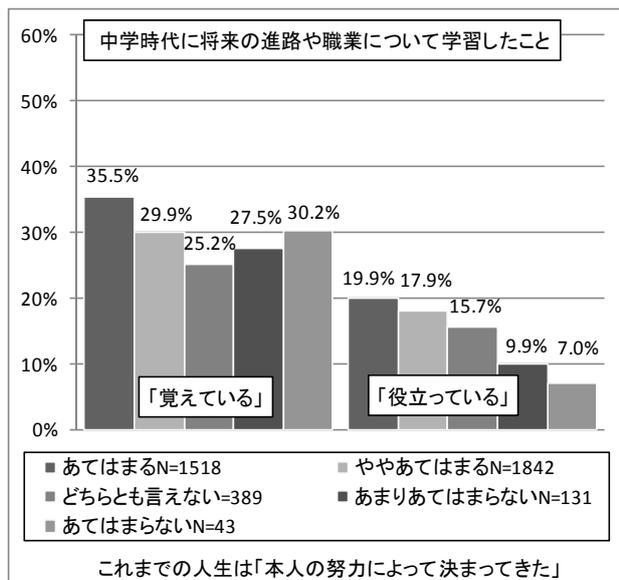
図表5-8 1ヶ月の平均収入別および学校時代のキャリア教育に対する評価別にみた自尊心得点の平均値

3. 人生に対する考え方と学校時代のキャリア教育の評価との関連

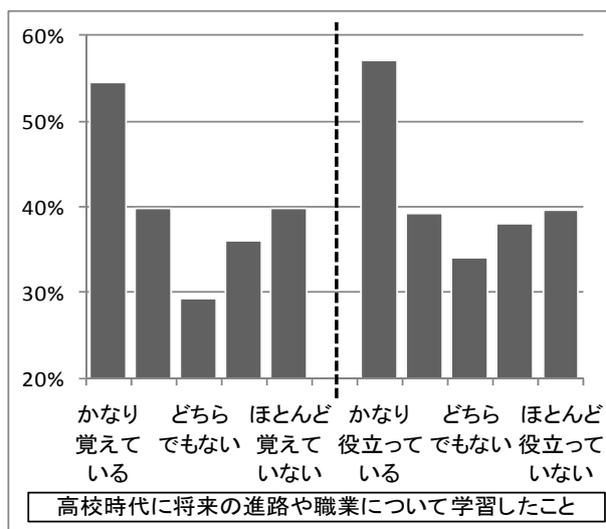
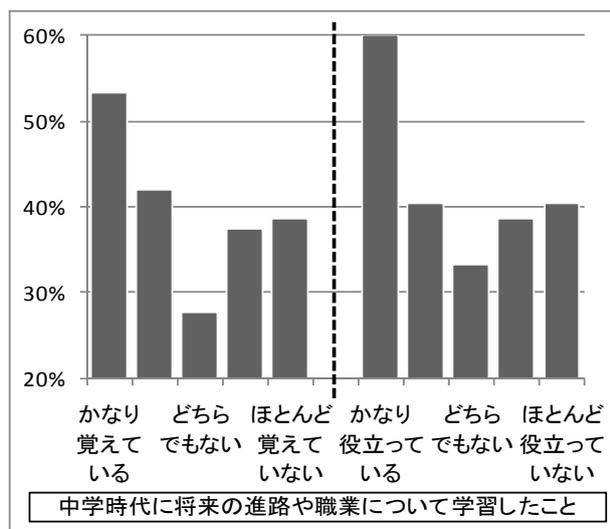
本調査では、これまでの人生がどのように決まってきたかについて、「本人の能力によって決まる」「本人の努力によって決まる」「周囲の環境によって決まる」「運によって決まる」の4つの側面からたずねた。これらは、より専門的には人生の原因帰属を簡単な質問項目によって測定したものであり、本人の自尊心や満足感などと関連するとされていることから、本研究に含めた。

その結果、先に図表5-1に示したとおり、おもに人生が「本人の努力によって決まる」と考えるか否かが、学校時代のキャリア教育に対する評価と密接に関連していた。具体的には、図表5-9に示したとおり、学校時代のキャリア教育が「役立っている」ほど、人生は本人の努力によって決まると考える割合が高かった。学校時代のキャリア教育を「覚えている」か否かについても同様であり、「覚えている」ほど本人の努力によって決まると考える割合が高かった。一方で、人生は本人の努力によって決まると考えていない者も学校時代のキャリア教育を覚えていると回答した割合が高く、U字形の関連がみられていた。

図表5-10は、図表5-9の縦軸と横軸を逆にして、仮に学校時代のキャリア教育に対する評価が「これまでの人生は努力によって決まる」という回答に影響を与えると考えられるとすれば、どのようなグラフの形状になるかをみたものである。図表5-10では、中学・高校時代のキャリア教育を「覚えている」「役立っている」のいずれのグラフについても肯定的に回答した者もそうでない者も「これまでの人生は努力によって決まる」と考えていた。このグラフでは、学校時代のキャリア教育に対する評価と「これまでの人生は努力によって決まってきた」に対する回答は、明白にU字型の関係となっているのが分かる。



図表5-9 「これまでの人生は努力によって決まってきた」に対する回答別の
 学校時代のキャリア教育に対する評価



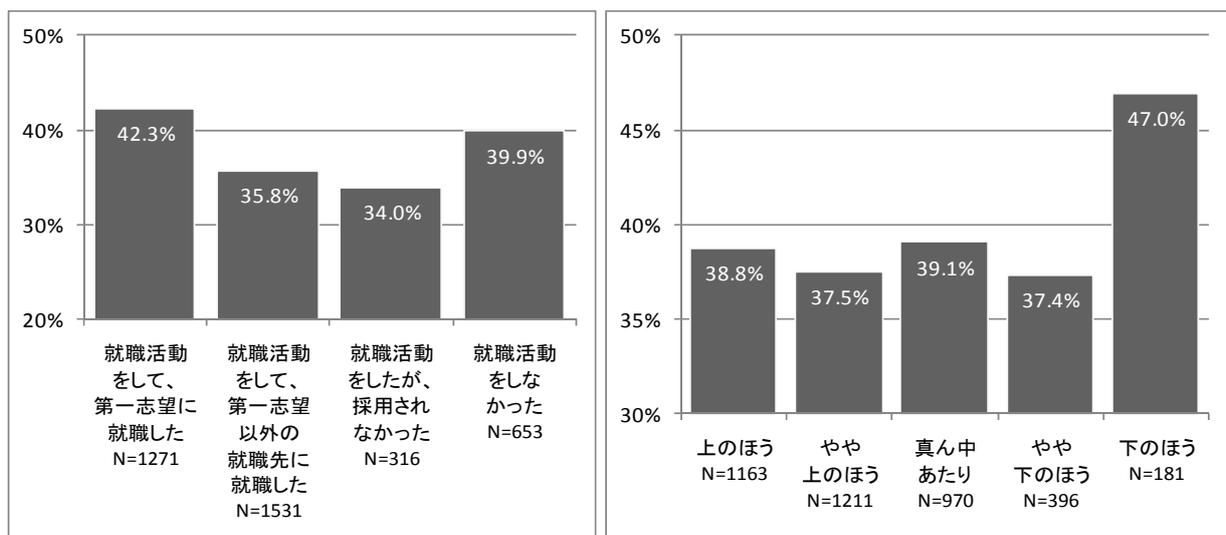
図表5-10 学校時代のキャリア教育に対する評価別にみた
 「これまでの人生は努力によって決まってきた」に「あてはまる」と回答した割合

「これまでの人生は努力によって決まってきた」という設問は、学校時代のキャリア教育と特に関連していたが、その関連のしかたは直線的ではなかった。そこで、以下に、その背景を検討することとした。

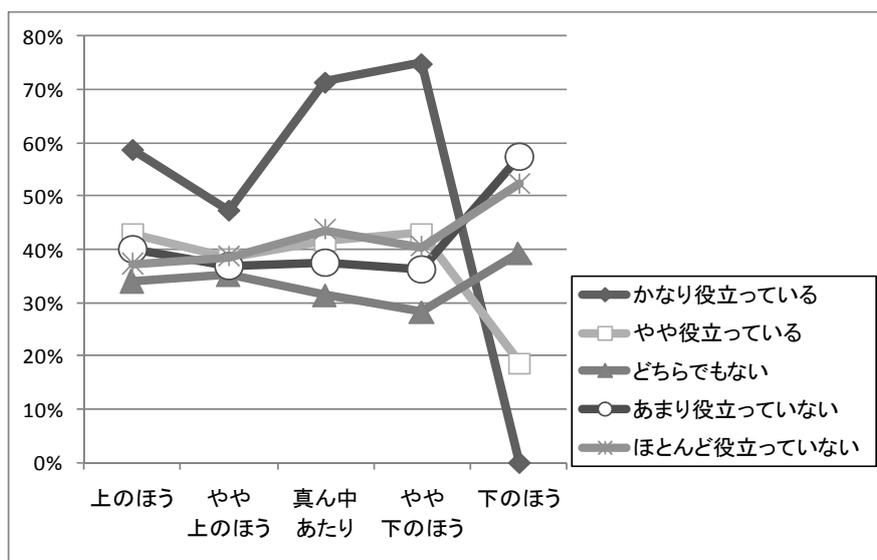
まず、「これまでの人生は努力によって決まってきた」と関連が深い要因を検討した。その結果、学校時代の就職活動と関連が深いことが示された。図表5-11左に示したとおり、「これまでの人生は努力によって決まってきた」という設問に対して「あてはまる」と回答した割合は「就職活動をして、第一志望に就職した」者が最も高く、以下「就職活動をして、

第一志望以外の就職先に就職した」「就職活動をしたが、採用されなかった」の順に続いていた。ただし、「就職活動をしなかった」者も「あてはまる」と回答する割合が高かった。同様の傾向は、中学校時代の学業成績との関連でもみられた。図表5-11右に示したとおり、中学校時代の学業成績が「下のほう」と回答した者が、「これまでの人生は努力によって決まってきた」という設問に対して「あてはまる」と回答した割合が最も高かった。

さらに、図表5-12に示したとおり、中学校時代の学業成績が「下のほう」と回答した者は、中学校時代のキャリア教育が役立たなかったと回答した者の方が、「これまでの人生は努力によって決まってきた」という設問に対して「あてはまる」と回答した割合が高かった。



図表5-11 学校卒業時の就職活動別(左)および中学校の学業成績別(右)にみた「これまでの人生は努力によって決まってきた」に「あてはまる」と回答した割合



図表5-12 中学校の学業成績別および中学校のキャリア教育の評価別にみた「これまでの人生は努力によって決まってきた」に「あてはまる」と回答した割合

これらの結果を重ね合わせて解釈すると、「これまでの人生は努力によって決まってきた」という設問に「あてはまる」と回答する背景には2つの場合があることが推測される。1つには、中学や高校時代のキャリア教育をよく覚えており、役立っているという感覚をもっている者、また学校卒業時に第一志望の就職先に就職できるなど上首尾な就職活動を行えた者。こうした回答者は、いわば自分の努力は正当に評価されてきたという思いを抱いていることが想定され、自分の人生がうまくいってきたからこそ「これまでの人生は努力によって決まってきた」と素朴に思えるグループであると言えよう。

しかし、もう1つ、中学・高校時代のキャリア教育を覚えてはいるが役立っているという感覚はもっていない者、中学時代の学業成績も下のほうであった者、就職活動をしなかった者は、むしろ、自分のこれまでの人生がそれほどうまくいってきたとは思えないからこそ、なおさら「これまでの人生は努力によって決まってきた」と考えるグループがあると言える。このグループでは、あるいは劣位の状態にある自身の現状を跳ね返すために努力を過剰に評価することも解釈できるが、より素朴に自分が努力不足だったからこうなったという意味で自分の人生は努力（の少なさ）によって決まってきたと考えているとも解釈できよう。

上記の解釈は、回帰分析の結果でも言えそうであったので、図表5-13にその結果を示した。表から、学校卒業時の就職活動の成否が人生は努力で決まるという思いに大きな影響を与えており、第一志望以外に就職した者、就職活動をしたが採用されなかった者は「人生

図表5-13 「これまでの人生は努力によって決まってきた」に「あてはまる」と回答するか否かに影響を与える要因(ロジスティック回帰分析)

| | B | Exp(B) | sig. |
|---------------------------------|-------|--------|------|
| 中学校時代の成績 | .058 | 1.060 | + |
| 学校卒業時の就職活動(vs.就職活動をして第一志望に就職した) | | | |
| 就職活動をして、第一志望以外に就職した | -.269 | .764 | ** |
| 就職活動をしたが、採用されなかった | -.278 | .757 | + |
| 就職活動をしなかった | .031 | 1.031 | |
| その他 | .216 | 1.241 | |
| 学校卒業直後の働き方(vs.正社員・正職員) | | | |
| 非正社員・非正職員・その他 | .163 | 1.178 | |
| 無業 | -.099 | .906 | |
| 正社員期間 | .092 | 1.096 | |
| 非正社員期間 | -.045 | .956 | |
| 1ヶ月の平均収入 | .044 | 1.045 | |
| 中学時代のキャリア教育を覚えている | .072 | 1.074 | + |
| 中学時代のキャリア教育は役立っている | -.117 | .889 | * |
| 高校時代のキャリア教育を覚えている | .034 | 1.035 | |
| 高校時代のキャリア教育は役立っている | .063 | 1.065 | |
| 性別 | .050 | 1.051 | |
| 年齢 | -.020 | .980 | |
| 学歴(vs.大卒) | | | |
| 大学中退 | -.089 | .914 | |
| 高卒 | -.207 | .813 | + |
| 高卒中退 | .628 | 1.873 | |

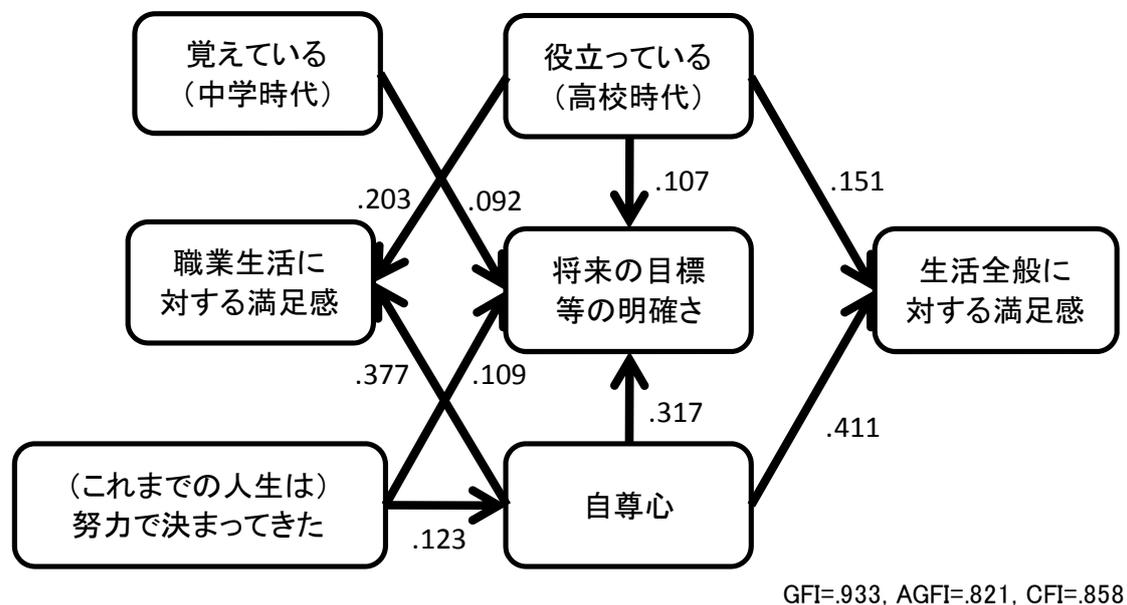
※「「これまでの人生は努力によって決まってきた」という設問に「あてはまる」と回答したか否かを被説明変数としたロジスティック回帰分析の結果。当該被説明変数に関連が深いと思われた要因を説明変数とした。有意水準は、+ p<.10 * p<.05 ** p<.01。

は努力によって決まってきた」とは思っていないことが分かる。また、中学時代のキャリア教育を「役立っている」と回答した者の方が「人生は努力によって決まってきた」とは思っていなかった。ここには図表5-11および図表5-12に示したような、中学時代のキャリア教育が人生は努力で決まるという思いに影響を与える複雑な様相がうかがえる。なお、その他にも中学時代の成績が良いほど人生は努力で決まると思い、または大卒に比べると高卒はそのようには思っていなかったことも示されていた。

4. 学校時代のキャリア教育と就労意識との関連(まとめ)

最後に本章のまとめとして、本章で検討した変数（現在の生活全般に対する満足感、これまでの職業生活に対する満足感、将来の目標・やりたいことの明確さ、自尊心、これまでの人生は本人の能力・本人の努力・周囲の環境・運によって決まってきた）間の関連をより明確な形でモデル化して示すこととした。

図表5-14に、現在の就労意識と学校時代のキャリア教育に対する評価の関連モデルを示した。現在の満足感や目標の明確さに、学校時代のキャリア教育や自尊心はどのような影響を与えているかという観点でモデルを設定し、共分散構造分析を用いて推計を行ったところ、図に示した関連モデルが最も適合性が高かった。



図表5-14 現在の就労意識と学校時代のキャリア教育に対する評価の関連モデル
(共分散構造分析による推計)

図表から、以下の4点を指摘できる。

- ①職業生活に対する満足感、将来の目標等の明確さ、生活全般に対する満足感には、高校時代のキャリア教育が「役立っている」という評価が全般的に影響を与えていた。

②本人の自尊心も、職業生活に対する満足感、将来の目標等の明確さ、生活全般に対する満足感に全般的な影響を与えていた。

③これまでの人生は自分の努力で決まってきたという感覚は、将来の目標の明確さや自尊心に影響を与えていた。

④中学時代のキャリア教育を「覚えている」か否かも将来の目標が明確さに影響を与えていた。

以上の結果から、学校時代のキャリア教育は、基本的に現在の満足感や将来の目標の明確さなどと広く関係していることが示された。特に、高校時代のキャリア教育が「役立っている」という感覚は強い影響を与えていた。さらに、上記の分析の過程で、現在の自尊心は、現在の満足感や将来の目標の明確さを下支えする重要な要因であることが示された。

従来、キャリア教育では、キャリアや就職に関わる事からのみを指導目標とすることが多かったが、本人の根本的な自尊心は若者の就労意識に全般的な影響を与えていることを重視すれば、こうした自尊心をいかなる形でキャリア教育に組み込んでいくのか（組み込まないのか）、また、労働行政の側からはどのような側面的なサポートが可能なのか等について、ある種の萌芽的な議論がなされて良いと思われる。

なお、本章の結果においても、総じて満足感が高く、自尊心も高く、就職活動で第一志望の就職先に就職するような回答者は、学校時代のキャリア教育は総じて評価が高いことが示された。一方で、中学時代の学業成績が悪く、相対的に就職活動の成否が上首尾なものではない回答者は、学校時代のキャリア教育は総じて評価が低いことが示された。同時に、こうした回答者は人生は努力で決まると考えている割合も、分析結果によっては高かった。

以上の結果から、本章においても、やはり学校時代の成績がよく、就職活動もうまく行い、学校卒業後のキャリアも良好な若者グループと、そうではない若者グループの2つの層があり、前者においては、現行のキャリア教育は総じて有効・有益であると評価されるが、後者にとっては十分に有効・有益なキャリア教育になりえていない現状が透かし見られる結果となった。ここからは、相対的に困難を抱えやすいヴァルネラブル（vulnerable 傷つきやすい）な若者に、何らかの形で自尊心をもたせることを主眼とする介入・取り組みを行うキャリア教育の必要性が示唆される。

上記図表5-14に示したとおり、自尊心は、現在の職業生活・生活全般に対する満足感および将来の目標等の明確さを下支えする。仮に、本人のキャリアが何らかの問題を抱えており、それゆえキャリア発達上の痛手を受けたとしても、それに耐えるのも、そこから立ち上がるのも、まずは基本的・根本的な自尊心が必要となろう。こうしたヴァルネラブルな若者に対する取り組みを、学校段階のキャリア教育においていかに行うのか（行わないのか）の検討はなされて良いと思われる。同時に、本来、学校で身につけておくべき基本的・根本的な自尊心を何らかの形で傷つけてしまった若者に対しては、単に就労支援のみを提供するのではなく、教育行政および労働行政が応分の責任を持って連携して事に当たることによっ

て、自尊心を高めるような介入を行うことが必要となる。

実際、本章図表 5-7 および図表 5-8 に示したとおり、現在の仕事上の立場が非正規や無業であっても、また、現在の収入が低かったとしても、学校時代のキャリア教育が役立っていると思える場合には自尊心は高まっていた。本章の結果から、こうした自尊心が満足感や目標の明確さにつながることは明白であり、政策的な介入の 1 つの目安として自尊心を念頭に置いておくことは、今後のより効果的な就労支援やキャリアガイダンスを考える上で不可欠であると言えよう。

【引用文献】

山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68。

第6章 学校時代のキャリア教育と学校生活・家庭生活との関連

1. 学校時代のキャリア教育の評価と学校生活との関連

本章では、学校時代のキャリア教育と学校生活および家庭生活との関連を検討する。

図表6-1に、中学時代の学校生活と中学校時代のキャリア教育に対する評価との関連、および高校時代の学校生活と高校時代のキャリア教育に対する評価との関連の2つの表を示した。表に示したとおり、総じて言えば、中学時代、高校時代のいずれの場合も、学校に適應的であり、学校生活をポジティブに送ったとする回答者の方が、学校時代のキャリア教育に対する評価も高かった。特に、「相談に乗ってくれる先生がいた」という項目は、中学・高校時代に共通して、キャリア教育を「覚えていますか」「役立っていますか」どちらの質問項目とも高い相関係数がみられた。親身になって相談に乗ってくれる教員がいたという記憶が、学校卒業後に振り返ったキャリア教育の評価とかなり密接に関連していると言える。一方で、「学校を休みがちであった」「いじめられたことがあった」などのネガティブな学校時代の記憶はキャリア教育に対する評価と統計的に有意な関連がみられないか、関連があったとしてもあまり相関係数が大きくなかった。これらの記憶は、キャリア教育の評価とは直接は関連しないと解釈しておくことができる。

図表6-1 中学時代の学校生活と中学校時代のキャリア教育に対する評価との関連(左)および高校時代の学校生活と高校時代のキャリア教育に対する評価との関連(右)

| 中学時代 | 将来の進路や職業について学習したこと 覚えていますか 役立っていますか | | 高校時代 | 将来の進路や職業について学習したこと 覚えていますか 役立っていますか | |
|--|--|-------------|--|--|-------------|
| 好きな先生がいた | .153 | .156 | 好きな先生がいた | .184 | .193 |
| 相談に乗ってくれる先生がいた | .188 | .233 | 相談に乗ってくれる先生がいた | .218 | .229 |
| 学校を休みがちだった | -.017 | -.034 | 学校を休みがちだった | -.102 | -.097 |
| 家で勉強をよくした | .162 | .136 | 家で勉強をよくした | .210 | .169 |
| 友人が多かった | .169 | .143 | 友人が多かった | .180 | .170 |
| いじめられたことがあった | .012 | -.016 | いじめられたことがあった | .003 | .005 |
| 部活動を一生懸命していた | .107 | .118 | 部活動を一生懸命していた | .161 | .157 |
| 学校は楽しかった | .129 | .147 | 学校は楽しかった | .188 | .193 |
| ※数値は順位相関係数。1%水準で有意な相関係数を網かけにした。各列で最も値の大きな相関係数を太字にした。 | | | ※数値は順位相関係数。1%水準で有意な相関係数を網かけにした。各列で最も値の大きな相関係数を太字にした。 | | |

図表6-2には、最後に通った学校の学校生活と中学・高校時代のキャリア教育に対する評価との関連を示した。最後に通った学校の学校生活なので、大卒者は大学が、高卒者は高校が該当する。大卒者にとっては大学での生活が、高卒者にとっては高校での生活どのようなものであった場合、中学・高校時代のキャリア教育を覚えている、役立っていると答えるのかを検討したものである。なお、大卒者・高卒者を分けて分析しても、全体的な傾向はほとんど変わらなかったため、図表6-2には、様々な最終学歴の回答者を1つにまとめた分

析結果を示した。表の結果から、最後に通った学校の学校生活についても、おおむね適応的な学校生活を送った回答者ほど、学校時代のキャリア教育に対する評価が高いことが示される。特に、大きな相関係数が観察されたのは、中学・高校に共通して「就職活動や就職試験・進学のための勉強を熱心に行った」という項目であり、この項目に肯定的に回答したもののほど中学・高校時代のキャリア教育を覚えている、または役立っていると回答していたことが示される。

図表6-2 最後に通った学校の学校生活と中学・高校時代のキャリア教育に対する評価との関連

| 最後に通った学校での生活 | 将来の進路や職業について学習したこと | | | |
|---------------------------|--------------------|-------------|-------------|-------------|
| | 【覚えていますか】 | | 【役立っていますか】 | |
| | 中学時代 | 高校時代 | 中学時代 | 高校時代 |
| 友人をたくさんつくった | .140 | .157 | .137 | .155 |
| アルバイトに打ち込んだ | .048 | .022 | .024 | .005 |
| 学業に熱心に取り組んだ | .168 | .229 | .140 | .198 |
| 部活・クラブ・サークル活動に熱中した | .100 | .129 | .108 | .113 |
| 就職活動や就職試験・進学のための勉強を熱心に行った | .209 | .280 | .224 | .280 |
| ボランティア活動に打ち込んだ | .188 | .172 | .206 | .202 |
| 自分ひとりの時間をたくさんもった | .016 | .011 | -.027 | -.038 |

※数値は順位相関係数。1%水準で有意な相関係数を網かけにした。各列で最も値の大きな相関係数を太字にした。

2. 中学時代の学業成績と学校時代のキャリア教育の評価との関連

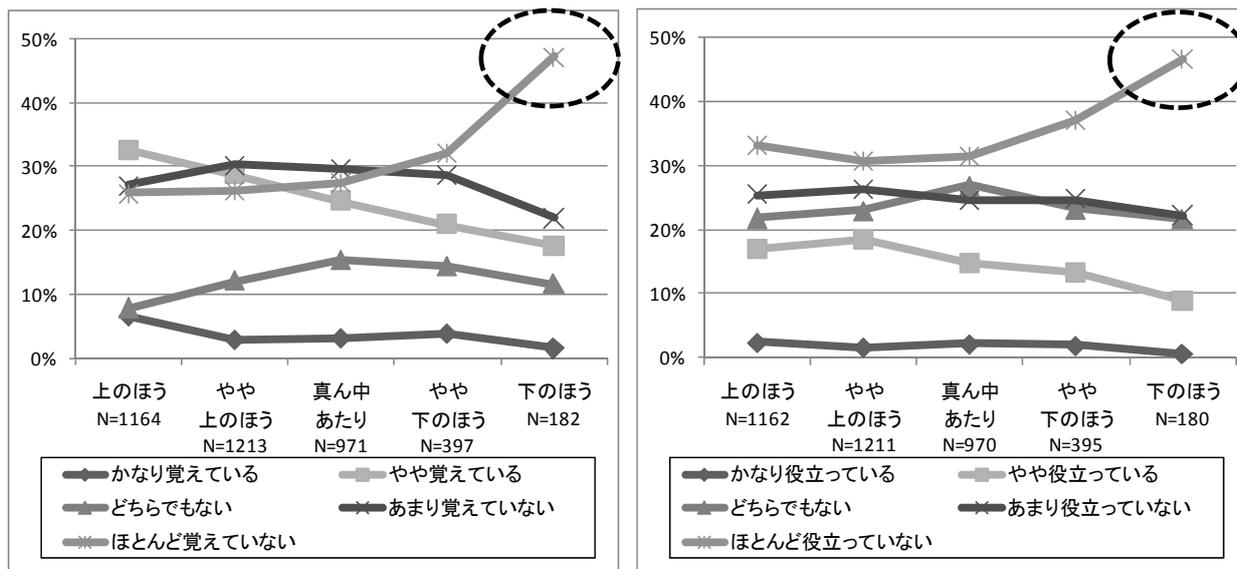
図表6-3には、中学校時代の学業成績と学校時代のキャリア教育の評価の関連を示した。表から、中学時代の学業成績は中学時代のキャリア教育の評価と結びついているが、高校時代のキャリア教育とは関連が薄いことが示される。

図表6-3 中学時代の学業成績と学校時代のキャリア教育の評価との関連

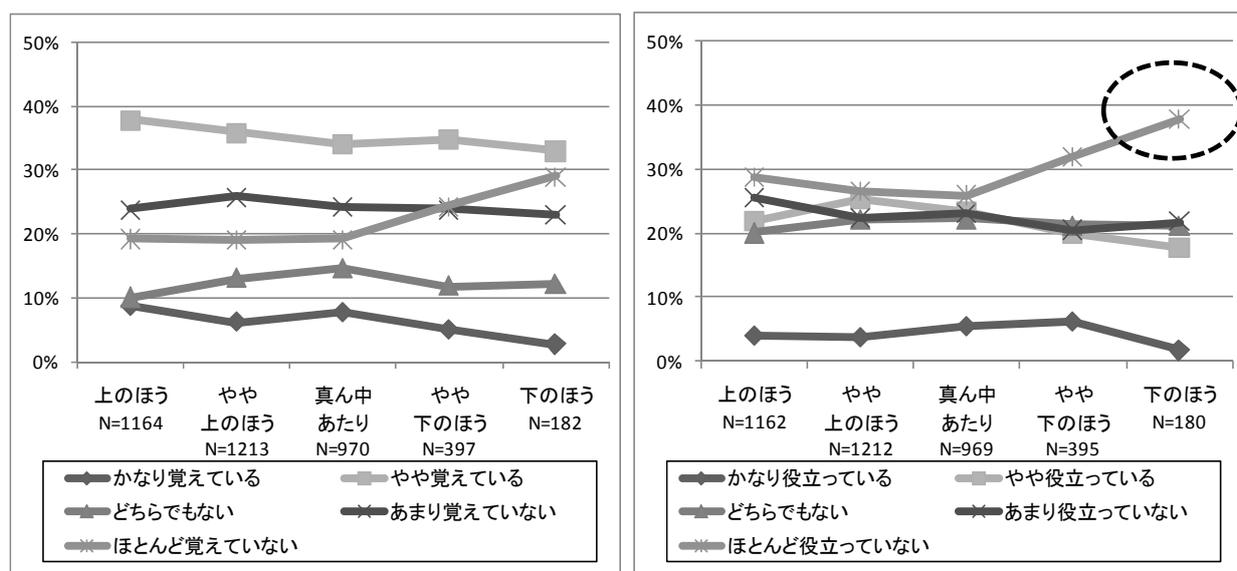
| 中学時代の成績 | 将来の進路や職業について学習したこと | | | |
|---------|--------------------|------------|-----------|------------|
| | 中学時代 | | 高校時代 | |
| | 覚えて いる | 役立つ ている | 覚えて いる | 役立つ ている |
| 中学時代の成績 | .100 | .053 | .036 | -.001 |

※数値は順位相関係数。1%水準で有意な相関係数を網かけにした。

図表6-4および図表6-5には、中学時代の学業成績別にみた中学時代・高校時代のキャリア教育の評価を示した。特に、学業成績が「下のほう」と回答した者で、中学時代のキャリア教育の評価が低いのが分かる。



図表6-4 中学時代の学業成績別にみた中学時代のキャリア教育の評価



図表6-5 中学時代の学業成績別にみた高校時代のキャリア教育の評価

図表6-6には、中学時代の学業成績別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。概して言えば、成績が「上のほう」の者は、中学時代、大学時代の授業や行事をよく記憶しており、成績が真ん中より「下のほう」の者は高校時代のことをよく記憶していた。

ここまでの結果をまとめると、中学時代の学業成績が高いほど中学時代のキャリア教育の評価が高いといった若干関連はみられるがそれほど密接なものではなかった。むしろ特徴的なのは、中学時代の学業成績について「下のほう」と回答した若者であり、特にキャリア教育に対する評価が低かった。また、キャリア教育に関する個別の授業や行事に関して言えば、中学時代の学業成績が「上のほう」「やや上のほう」の者にとっては、大学時代のキャリア教

育が、それ以外の者にとっては中学・高校時代のキャリア教育が特に記憶に残る傾向がある
 ということを指摘できる。

図表6-6 中学時代の学業成績別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

| | | 上のほう N=1166 | やや 上のほう N=1213 | 真ん中 あたり N=972 | やや 下のほう N=397 | 下のほう N=182 |
|-----------------------|-----------------------|----------------|----------------------|---------------------|---------------------|---------------|
| 中学 | 職業や仕事を調べる授業 | 34.9% | 32.2% | 27.6% | 26.2% | 28.6% |
| | ボランティアなどの体験活動 | 34.3% | 33.3% | 28.1% | 32.2% | 25.8% |
| | 進路に関する二者面談や三者面談 | 74.2% | 67.7% | 65.5% | 62.5% | 58.2% |
| 高校 | 職業興味や職業適性などの検査 | 28.2% | 33.9% | 36.4% | 38.0% | 37.9% |
| | 職業や仕事を調べる授業 | 16.6% | 21.6% | 25.7% | 25.4% | 25.8% |
| | 職業人や地域の人に仕事の話や話を聞く授業 | 12.1% | 15.1% | 17.5% | 17.6% | 15.9% |
| | 職場体験学習やインターンシップ | 6.7% | 11.0% | 15.9% | 15.4% | 18.7% |
| | 進路に関する二者面談や三者面談 | 81.6% | 82.4% | 80.5% | 74.8% | 68.7% |
| | 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 13.8% | 22.1% | 35.0% | 40.3% | 40.7% |
| | 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 10.5% | 13.9% | 22.8% | 23.2% | 24.7% |
| | コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 8.1% | 14.3% | 19.2% | 21.7% | 23.6% |
| | 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 5.3% | 7.1% | 10.4% | 8.3% | 12.1% |
| | 大学 | 職業興味や職業適性などの検査 | 44.4% | 47.1% | 42.8% | 39.8% |
| 自分の性格を理解するための検査 | | 45.6% | 46.2% | 38.1% | 36.3% | 30.2% |
| 職場体験学習やインターンシップ | | 34.0% | 33.0% | 27.3% | 25.2% | 22.0% |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | | 27.5% | 33.2% | 27.6% | 28.2% | 22.5% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | | 44.8% | 53.3% | 47.5% | 45.6% | 36.8% |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | | 47.9% | 53.8% | 47.3% | 42.1% | 37.9% |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | | 28.7% | 35.4% | 34.9% | 31.0% | 29.7% |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | | 21.1% | 24.2% | 20.3% | 20.2% | 13.2% |

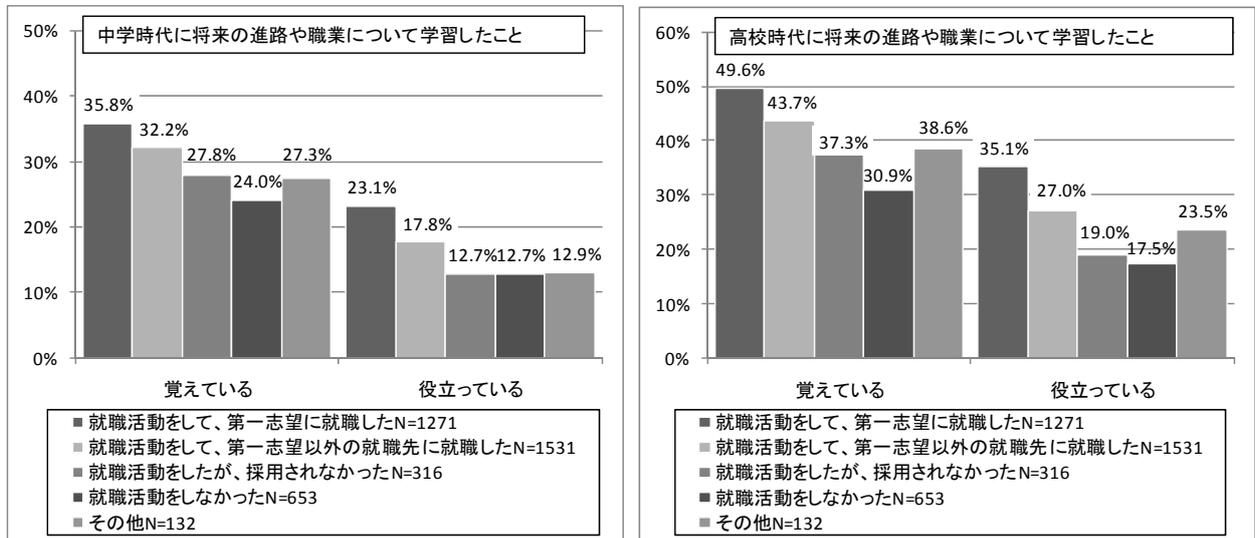
※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

3. 学校卒業時の就職活動と学校時代のキャリア教育の評価との関連

図表6-7は、学校卒業時の就職活動別に学校時代のキャリア教育の評価を図示したものである。「中学校時代に将来の進路や職業について学習したこと」を「覚えている」「役立っている」割合ともに「就職活動をして、第一志望に就職した」者が最も高く、以下「就職活動をして、第一志望以外の就職先に就職した」「その他」が続いていた。また、「中学校時代に将来の進路や職業について学習したこと」を「覚えている」「役立っている」割合も同様であり、いずれも「就職活動をして、第一志望に就職した」者が最も高く、以下「就職活動をして、第一志望以外の就職先に就職した」「その他」が続いていた。以上の結果から、学校時代のキャリア教育の評価は、就職活動を行ったか否か、また就職活動で希望どおりの就職先に就職できたか否かと関連していることがうかがえる。

ちなみに、本調査のこの項目における「その他」では自由記述を求めているが、その内容をみると、その多くが「内定をもらったが、辞退した」「第一志望に内定したが、就職しなかった」「就職活動をし、採用されたが入社しなかった」などのように、就職活動をして内定をもらったが就職しなかったというものであった。その理由は、結婚や学校中退、病気など様々であったが、いずれにしても「その他」は就職活動をして内定をもらった者に近い特徴をもつ若者であったと考えられる。なお、それ以外に「その他」には「知り合いを通じて就職」

「親せきに頼んだ」「アルバイト先に就職した」のように、知人や親・親戚、アルバイト先など、何らかの縁故による就職者も比較的多く含まれていた。



図表6-7 学校卒業時の就職活動別の学校時代のキャリア教育の評価

図表6-8は、学校卒業時の就職活動別に、学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。「就職活動をして、第一志望に就職した」者は、中学時代の「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」、高校時代の「履歴書の書き方や面接試験の練習」「就職活動の進め方や試験対策の授業」「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」が記憶にあると回答していた。一方、「就職活動をして、第一志望以外の就職先に就職した」者は、「進路に関する二者面談や三者面談」の記憶があるとの回答が多かった。「就職活動をしなかった」者、「その他」の回答者は中学時代の「職業興味や職業適性などの検査」「自分の性格を理解するための検査」など自己理解に関わる授業の記憶があるという回答が多かった。

図表6-8 学校卒業時の就職活動別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

| | 就職活動をして、第一志望に就職したN=1271 | 就職活動をして、第一志望以外の就職先に就職したN=1531 | 就職活動をしたが、採用されなかったN=316 | 就職活動をしなかったN=653 | その他N=132 |
|--------------------|-------------------------|-------------------------------|------------------------|-----------------|----------|
| 中学 | | | | | |
| 職業興味や職業適性などの検査 | 17.8% | 18.2% | 16.8% | 24.0% | 29.5% |
| 自分の性格を理解するための検査 | 20.5% | 20.2% | 20.9% | 26.3% | 28.8% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 11.9% | 9.0% | 13.0% | 13.3% | 16.7% |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 7.6% | 4.0% | 3.5% | 7.2% | 9.1% |
| 高校 | | | | | |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 80.6% | 82.6% | 80.4% | 73.5% | 84.1% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 30.4% | 21.4% | 25.0% | 25.4% | 28.8% |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 19.4% | 13.9% | 15.8% | 17.0% | 17.4% |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 17.2% | 12.4% | 15.8% | 15.9% | 12.1% |

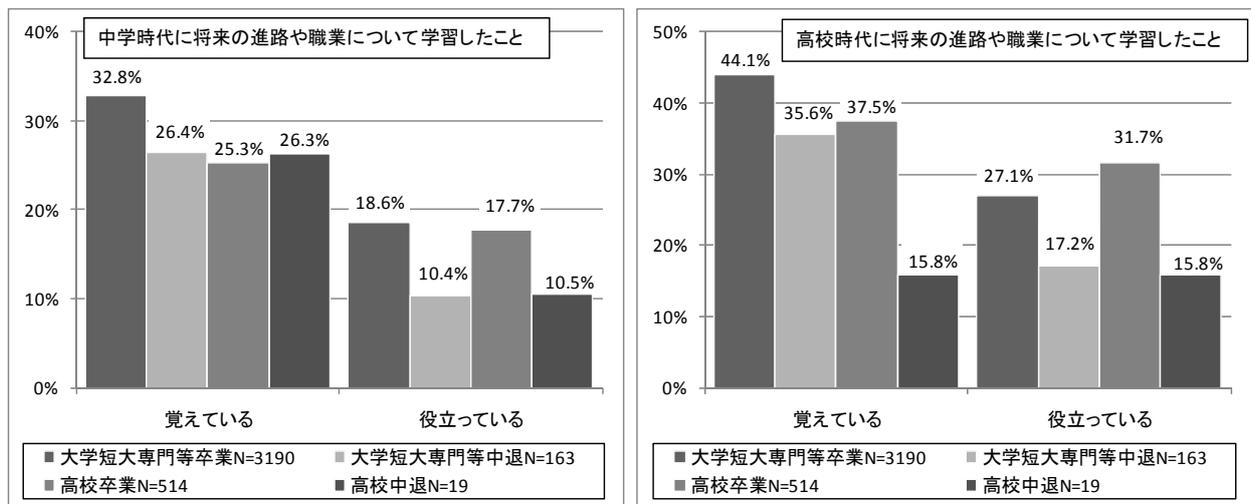
※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所を下線を付した。

概して言えば、就職活動をして自分の希望どおりに就職先が決まった者は、履歴書の書き方、就職活動の進め方、コミュニケーションやマナーなど、実際の就職活動に直接関連が深いような授業をよく記憶していたということができよう。一方で、就職活動をしなかった者では職業興味や性格など自己理解に関わる授業をよく記憶していたと言える。

4. 中退の有無と学校時代のキャリア教育の評価との関連

図表6-9では、学校の中退の有無とキャリア教育の評価との関連を検討した。図表6-9のうち、統計的に有意な差がみられた結果は以下のとおりである。①中学のキャリア教育を大学短大専門学校卒業者は覚えている割合が高く、高校卒業者は覚えている割合が低い。②高校のキャリア教育を大学短大専門学校卒業者は他に比べて覚えている割合が高い。③高校のキャリア教育を高卒者は役立っていると考えている割合が高く、大学短大専門学校中退者は役立っていると考えている割合が低い。

上記の結果を集約すれば、学校時代のキャリア教育を覚えているのは高卒よりは大卒以上、キャリア教育が役立ったと考えているのは学校中退者ではなく学校卒業者であると言える。



図表6-9 最後に通った学校の中退の有無別にみた学校時代のキャリア教育の評価

図表6-10では学校の中退の有無別に学校時代に行ったキャリア教育のうち記憶があるものを示した。大学短大専門学校卒業者は、大学等の授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。一方で、高校卒業者は高校の授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。ここで重要な結果は、高校中退者であり、中学時代の授業や行事が記憶に残っていると回答した割合が高かった。特に「就職活動の進め方や試験対策の授業」「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」「労働法（働くことに関する法律）に関する授業」など、就職や就労に直結する内容を記憶に残っているとしていた。高校中退者にとって、これらの事がらを学ぶ機会は中学しかなく、改めて、中学時代のキャリア教育の重要性を指摘できる。

図表6-10 最後に通った学校の中退の有無別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

| | 大学短大 専門等 卒業 N=3190 | 大学短大 等中退 N=163 | 高校卒業 N=514 | 高校中退 N=19 |
|-----------------------|-----------------------------|----------------------|---------------|--------------|
| 中学 | | | | |
| 職場体験学習やインターンシップ | 25.2% | 27.6% | 32.5% | 42.1% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 10.2% | 18.4% | 14.8% | 21.1% |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 4.0% | 4.3% | 6.8% | 21.1% |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 5.5% | 6.7% | 7.2% | 26.3% |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 3.2% | 4.3% | 3.9% | 31.6% |
| 高校 | | | | |
| 職業興味や職業適性などの検査 | 31.6% | 34.4% | 46.1% | 15.8% |
| 職業や仕事を調べる授業 | 19.7% | 25.8% | 33.3% | 21.1% |
| 職業人や地域の人に仕事の話聞く授業 | 14.1% | 12.9% | 21.8% | 5.3% |
| 職場体験学習やインターンシップ | 9.3% | 15.3% | 24.3% | 5.3% |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 81.6% | 76.7% | 74.9% | 31.6% |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 19.9% | 26.4% | 60.5% | 10.5% |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 12.5% | 15.3% | 42.2% | 0.0% |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 12.2% | 12.9% | 31.7% | 5.3% |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 6.3% | 11.0% | 14.8% | 15.8% |
| 大学 | | | | |
| 職業興味や職業適性などの検査 | 53.0% | 16.0% | | |
| 自分の性格を理解するための検査 | 51.0% | 16.6% | | |
| 職業や仕事を調べる授業 | 25.6% | 11.7% | | |
| 職業人や地域の人に仕事の話聞く授業 | 21.9% | 9.8% | | |
| 職場体験学習やインターンシップ | 36.3% | 17.2% | | |
| ボランティアなどの体験活動 | 18.4% | 9.2% | | |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | 21.3% | 4.9% | | |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | 34.9% | 11.0% | | |
| 進路の目標や計画を考える授業 | 22.3% | 6.1% | | |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 57.9% | 12.3% | | |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 58.5% | 16.6% | | |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 39.1% | 12.9% | | |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 25.5% | 9.2% | | |

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

5. 学校時代に学んだ知識が役立っている程度と学校時代のキャリア教育の評価との関連

学校時代のキャリア教育の評価と特に関連が深かったのは、学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っているか否かであった。図表6-11に示したとおり、比較的大きい値の相関係数がみられている。

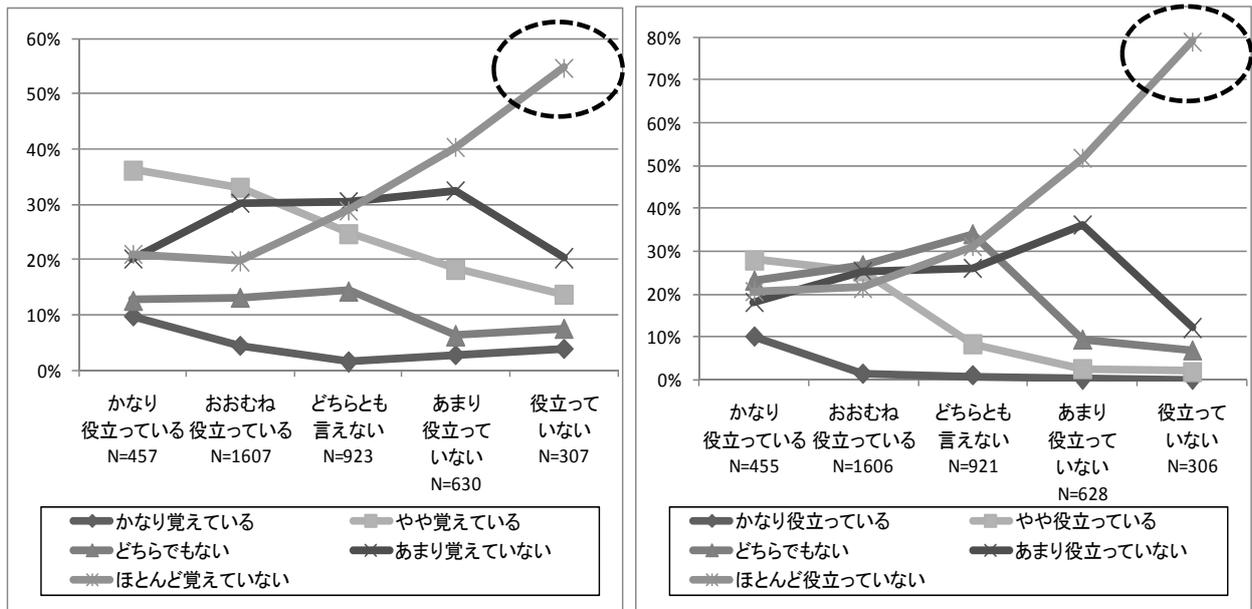
図表6-11 学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っているか否かと
学校時代のキャリア教育の評価との関連

| | 将来の進路や職業について学習したこと 【覚えていますか】 【役立っていますか】 | | | |
|---|--|------|------|------|
| | 中学時代 | 高校時代 | 中学時代 | 高校時代 |
| 学校時代(小学校～最後に通った学校までを通して)に学んだ知識は、今の仕事に役立っていますか | .246 | .397 | .308 | .446 |

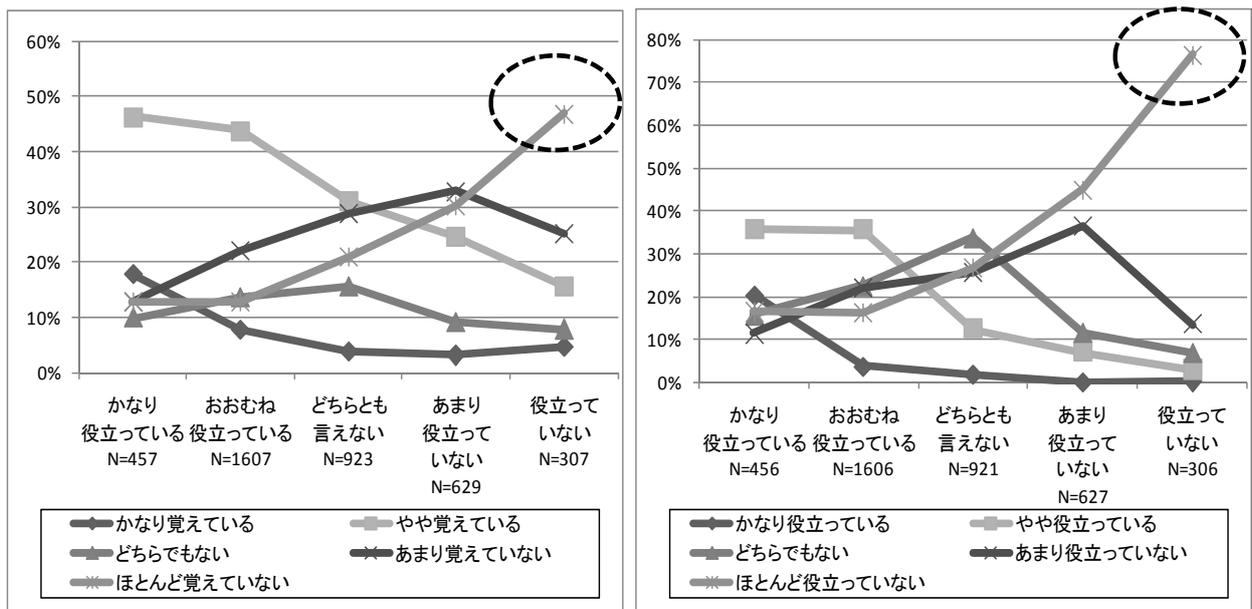
※数値は順位相関係数。全て1%水準で有意な相関係数。

図表6-12および図表6-13には、学校時代に学んだ知識が役立っている程度とキャリア教育に対する評価の関連をグラフに示した。全般的に学校時代に学んだ知識が役立って

いると考えている者ほど、学校時代のキャリア教育を覚えているまたは役立っていると回答する割合は高い。ただし、先に図表6-4および図表6-5に示した学業成績と学校時代のキャリア教育の評価との関連と傾向が似ており、むしろ、学校時代に学んだ知識が「役立っていない」と回答した者で、特に学校時代のキャリア教育に対する評価が厳しいことが分かる。



図表6-12 学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っているか否かと
中学時代のキャリア教育の評価との関連



図表6-13 学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っているか否かと
高校時代のキャリア教育の評価との関連

学校時代に学んだ知識と学校時代のキャリア教育の評価が、相互に密接に関連している様子は、中学時代から大学に至る個別の授業や行事の記憶の面でも明らかであった。図表6-14に示したとおり、学校時代に学んだ知識が今の仕事に「かなり役立っている」と回答した者が、学校時代のキャリア教育を高く評価していた。

ここまでの結果から、学校時代のキャリア教育が高く評価されるためには、そもそも学校時代に学んだ知識と現在の仕事の間には何らかの連なりが意識されている必要があることを指摘できるであろう。学校時代に勉強したことが学校卒業後の仕事を結びつくからこそ、キャリアに対する意識面での働きかけであるキャリア教育を有益なものとして考えることができる。学校時代に将来の職業に結びつく具体的な知識や技術を学んでおくことの必要性・重要性を示唆する結果としても解釈できる。

図表6-14 学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っているか否かと
学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

| | かなり役立っている N=457 | おおむね役立っている N=1608 | どちらとも言えない N=924 | あまり役立っていない N=631 | 役立っていない N=307 | |
|----|-----------------------|----------------------|--------------------|---------------------|------------------|-------|
| 中学 | 職業や仕事を調べる授業 | 38.9% | 32.6% | 29.7% | 26.9% | 23.8% |
| | 職業人や地域の人に仕事の話や話を聞く授業 | 38.7% | 32.2% | 30.0% | 30.9% | 22.8% |
| | ボランティアなどの体験活動 | 36.3% | 33.5% | 31.6% | 29.2% | 23.1% |
| | 進路の目標や計画を考える授業 | 26.0% | 18.9% | 18.8% | 16.0% | 14.3% |
| 高校 | 職業興味や職業適性などの検査 | 39.2% | 35.0% | 31.4% | 31.9% | 26.4% |
| | 職業人や地域の人に仕事の話や話を聞く授業 | 19.9% | 15.9% | 14.5% | 12.8% | 10.1% |
| | ボランティアなどの体験活動 | 26.3% | 20.7% | 18.4% | 18.1% | 18.2% |
| | 進路に関する二者面談や三者面談 | 84.2% | 81.7% | 78.8% | 79.6% | 72.6% |
| | 進路に関する個別相談やカウンセリング | 48.8% | 42.9% | 42.0% | 36.0% | 32.6% |
| | 進路の目標や計画を考える授業 | 40.0% | 35.1% | 28.6% | 27.9% | 20.2% |
| | コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 19.7% | 16.2% | 13.2% | 12.0% | 10.4% |
| 大学 | 職業興味や職業適性などの検査 | 45.7% | 47.5% | 40.8% | 43.6% | 31.6% |
| | 自分の性格を理解するための検査 | 47.5% | 45.8% | 39.1% | 39.6% | 30.3% |
| | 職業や仕事を調べる授業 | 24.1% | 23.5% | 20.0% | 20.0% | 14.0% |
| | 職業人や地域の人に仕事の話や話を聞く授業 | 25.8% | 19.2% | 16.3% | 16.3% | 12.4% |
| | 職場体験学習やインターンシップ | 43.1% | 34.0% | 26.4% | 24.7% | 17.9% |
| | ボランティアなどの体験活動 | 25.4% | 17.3% | 12.6% | 12.0% | 7.2% |
| | 進路に関する二者面談や三者面談 | 24.3% | 19.8% | 15.3% | 14.9% | 10.1% |
| | 進路に関する個別相談やカウンセリング | 35.7% | 31.7% | 26.7% | 26.3% | 18.9% |
| | 進路の目標や計画を考える授業 | 24.9% | 20.5% | 16.8% | 15.7% | 9.1% |
| | 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 48.4% | 52.7% | 46.5% | 44.7% | 31.3% |
| | 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 54.0% | 53.0% | 47.2% | 43.9% | 30.0% |
| | コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 42.0% | 36.0% | 31.0% | 26.1% | 18.2% |
| | 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 31.5% | 23.3% | 18.8% | 18.4% | 10.1% |

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所を下線を付した。

6. 家庭生活と学校時代のキャリア教育との関連

図表6-15には、家庭生活と学校時代のキャリア教育に対する評価との関連を示した。家庭生活は「高校生くらいまでの様子を振り返って、家庭生活や家族との関係はどうでしたか」という設問で表にある項目を提示し、「そう思う」から「そう思わない」までの5件法で

回答を求めた。

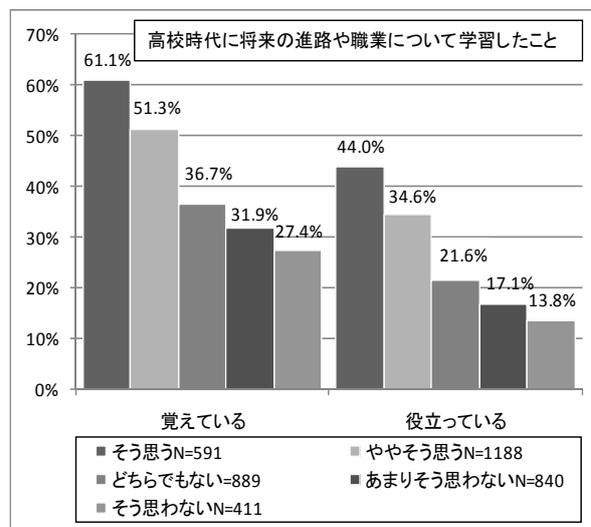
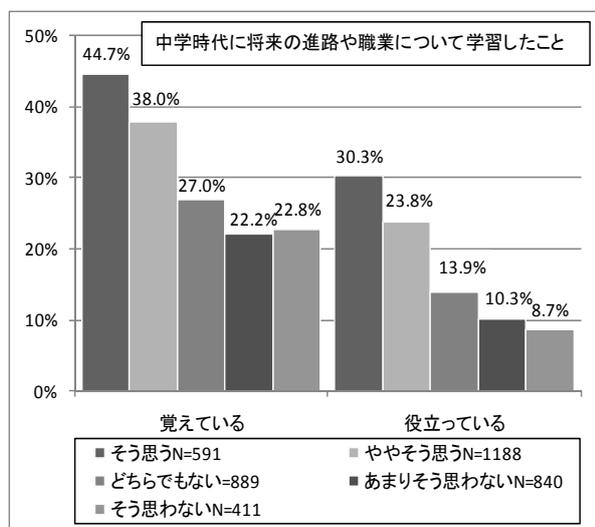
表中の相関係数はほぼ全て 1%水準で有意であり、家庭生活の良好さは学校時代のキャリア教育の評価の高さと関連していた。特に、「学校での出来事などを家族で話し合った」「将来について話し合った」など、家庭内でよく話し合ったか否かはキャリア教育の評価と関連していた。「父親は自分の気持ちをわかってくれた」「母親は自分の気持ちをわかってくれた」という設問も、特に「役立っている」という印象と関わっていた。家庭内で話し合った上で親が自分を理解してくれたか否かがキャリア教育の評価と関連していたと言える。

図表6-16は、特に相関係数の値が大きかった「将来について話し合った」に対する回答別に学校時代のキャリア教育の評価をみたものである。おおむね直線的に強く関連していることが示されている。

図表6-15 家庭生活と学校時代のキャリア教育に対する評価との関連

| | 中学時代 | | 高校時代 | |
|--------------------|-----------|------------|-----------|------------|
| | 覚えて いる | 役立っ ている | 覚えて いる | 役立っ ている |
| しつけが厳しい方だった | .092 | .086 | .120 | .113 |
| 帰宅の門限が厳しかった | .066 | .075 | .086 | .098 |
| 家の手伝いをさせられた | .087 | .087 | .123 | .110 |
| 学校での出来事などを家族で話し合った | .172 | .157 | .188 | .163 |
| 叱られることが多かった | .049 | .040 | .056 | .054 |
| 欲しいものは買ってもらえた | .048 | .073 | .023 | .043 |
| 親は学校の成績を重視していた | .078 | .064 | .059 | .048 |
| 父親は自分の気持ちをわかってくれた | .132 | .169 | .147 | .179 |
| 母親は自分の気持ちをわかってくれた | .118 | .156 | .139 | .169 |
| 父と母は仲が良かった | .068 | .084 | .084 | .092 |
| 家庭の雰囲気が明るかった | .105 | .121 | .127 | .127 |
| 将来について話し合った | .220 | .251 | .264 | .274 |

※スピアマンの順位相関係数。相関係数.043以上は1%水準で有意。 .15以上の相関係数に網かけを付した。



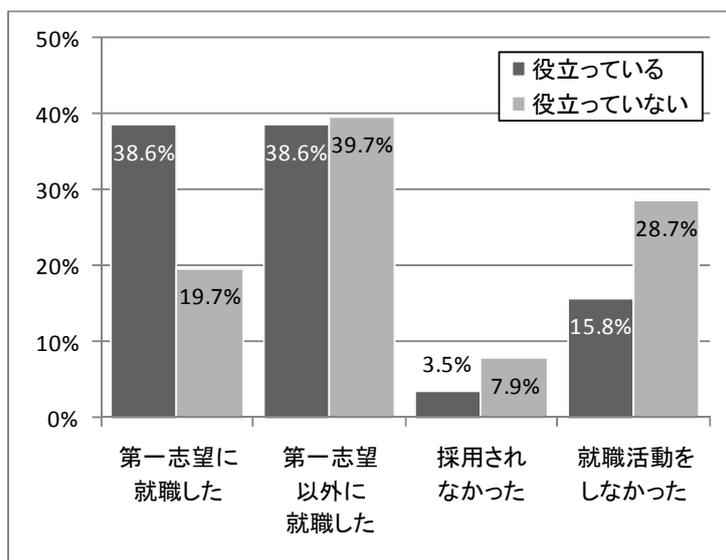
図表6-16 「将来について話し合った」に対する回答と学校時代のキャリア教育に対する評価

図表6-17から図表6-19では、家庭で将来について話し合わなかった若者であっても、仮に学校で適切なキャリア教育を受けて役立っていると感じられれば、その後の進路選択やキャリア形成に良い影響があるのではないかと考え、検討を行ったものである。具体的には、図表6-15で相関係数の値が最も大きかった「将来について話し合った」に対する回答が「そう思わない」であった回答者のみを分析対象とし、高校時代のキャリア教育が「役立っている」か否かで結果が異なるかを検討した。

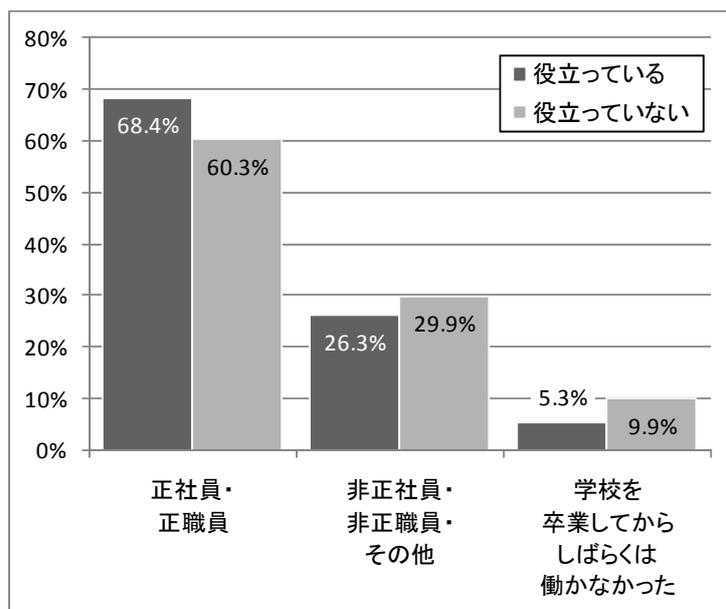
図表6-17では、学校卒業時の就職活動結果との関連をみた。グラフに示されたとおり、家庭で将来について話し合う機会に恵まれなかった若者であっても、高校時代のキャリア教育が役立っていると感じられている場合には「第一志望に就職した」割合が高く、「就職活動をしなかった」割合が低かった。

図表6-18では、学校卒業直後の働き方との関連をみた。同様に、高校時代のキャリア教育が役立っていると感じられている場合には、家庭で将来について話し合わなかった若者でも「正社員・正職員」として働き始めた割合が高く、「非正社員・非正職員・その他」の割合および「学校を卒業してからしばらくは働かなかった」割合は低かった。

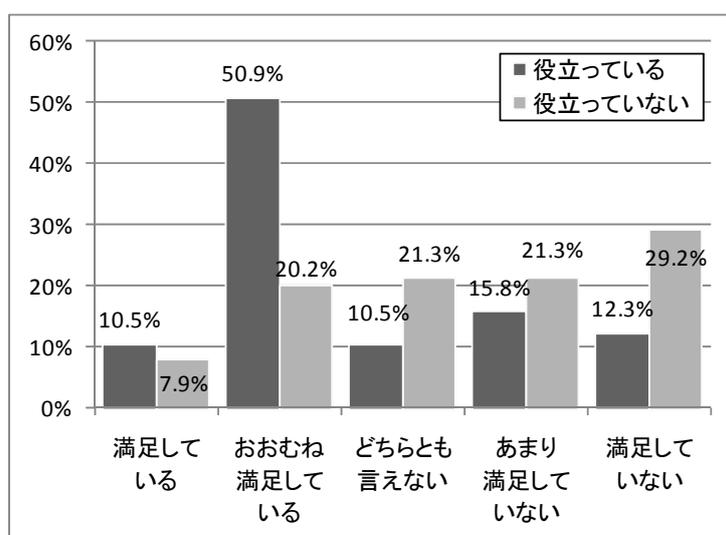
図表6-19では、これまでの職業生活に対する満足感との関連をみたが、高校時代のキャリア教育が役立っていると回答した者は「おおむね満足している」の回答が高いことが示されている。



図表6-17 家庭で将来について話し合わなかった若者における高校時代のキャリア教育の評価と学校卒業時の就職活動結果の関連



図表6-18 家庭で将来について話し合わなかった若者における
高校時代のキャリア教育の評価と学校卒業後の働き方との関連



図表6-19 家庭で将来について話し合わなかった若者における
高校時代のキャリア教育の評価とこれまでの職業生活に対する満足感

以上のように、総じて言えば、家庭教育は学校時代のキャリア教育の評価と密接な関連があり、家庭で将来によく話し合い、親に気持ちを分かってもらえたと感じることが、学校時代のキャリア教育の評価の高さに結びついているようであった。ただし、一方で、家庭でそうした話し合うような機会に恵まれなかった場合でも、学校時代のキャリア教育が有益なものであると感じられれば、その後のキャリア形成に良い影響を及ぼす可能性があることもうかがえた。

7. 本章のまとめと示唆

本章では、学校生活・家庭生活と学校時代のキャリア教育との関連を検討した。本章の結果、以下の諸点が示された。

第一に、総じて、学校に適応的であったほど、学校時代のキャリア教育に対する評価が高かった。特に、中学・高校時代においては「相談に乗ってくれる先生がいた」ということがキャリア教育の評価と強く関連していた。

第二に、一方で、学業成績とはそれほど強い関連はみられなかった。強いて言えば、中学時代の学業成績は下の方だったと回答した若者で、極端に学校時代のキャリア教育の評価が低いという結果が目立った。

第三に、就職活動がうまくいった若者、学校を中退しなかった若者、学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っていると感じる若者ほど、学校時代のキャリア教育の評価が高かった。特に、学校時代に学んだ知識とキャリア教育の評価の関連は比較的顕著であり、ここでも、学校時代の知識はほとんど仕事に役だっていないと回答した者で、極端に学校時代のキャリア教育の評価が低いという結果が目立った。

第四に、家庭生活が良好であった者ほど、学校時代のキャリア教育の評価が高かった。特に、「学校での出来事などを家族で話し合った」「将来について話し合った」など、家族で将来について話し合ったという若者で、特に学校時代のキャリア教育の評価が高かった。

これらの結果からは、以下の諸点が示唆される。

第一に、学校に適応的であることは、キャリア教育が効果的であるための必要条件になるということである。この点に関して、表面的には、労働行政に対する直接的な示唆はないように見える。しかし、必ずしも学校に適応的な生徒ばかりではないということを考えた場合、そうした生徒に対しては学校だけでは十分にキャリア教育の効果が及ばないという事態が生じることは十分に想定される。特に、高校中退者を中心に、学校を中退した若者の就労に向けた意識づけや就職のための具体的な支援は、大人になってからの職業紹介その他の形で、労働行政の側で行わざるを得なくなる。すなわち、学校に適応的でなく結果的にキャリア教育から学ぶことができなかつた生徒に対して、いずれキャリア教育的な介入支援を行わなければならないのは労働行政の側であるということになる。このように考えた場合、労働行政のキャリア教育との関わり方として、まずは学校段階におけるキャリア教育に対するいっそう緊密な連携を中心としつつ、学校のキャリア教育で十分に学べなかつた対象層に対して、その分を補填するようなキャリア形成支援を常に用意しておくということが示唆される。本章の結果は、いかなる対象層にいかなる支援を行うべきかを、労働行政に対して、間接的に示唆するものであったと解釈できよう。

第二に、良好な家庭生活がキャリア教育の基盤となっているという本研究の結果も、表面上、労働行政との接点がないように見える。しかし、ワーク・ライフ・バランスがなぜ必要なのかをキャリア教育の視点から捉えた場合、そのバランスを欠いてしまった場合には子ど

もに対するキャリア教育が十分に機能しなくなるからだということが言えるであろう。本章の結果を敷衍すれば、家庭で将来の進路について話し合い、将来に向けて問題意識をもつからこそ、子どもは、学校で教員が取り上げるキャリア教育の内容に関心をもち、そこから多くを吸収することであろう。一方で、学校のキャリア教育で学んだことや職場体験学習などをきっかけに、家庭で将来について話し合うということがあれば、キャリア教育の効果というのは、やはり増大するものであろう。そうした良好な家庭生活をできるだけ多くの人々に送り届けようというのは、労働行政においても常に大切にしている目標のはずであり、その目標の先に、子どもにとって効果的なキャリア教育があるということを、本章の結果は示唆するものであったと言える。

第7章 学校時代のキャリア教育の自由記述データによる分析

1. 本章の目的

高校時代のキャリア教育の経験を覚えている人の割合は、全体、性別、学歴別に見ても40%前後となっている。この結果は以下の2つの問題を示唆すると思われる。

第一に、職業に関する知識や考え方ではなく、職業生活という観点から見たときに、学校時代のキャリア教育の経験や記憶は他の何かに代替あるいは補完されている可能性があるということである。なぜならば、私たちは学校教育のみならず、様々な他者と出会う中で学習した事柄を現在の生活に意味づけていることも確かであり、職業生活を営んでいる現在の観点から過去を想起する場合、学校時代のキャリア教育ではなく具体的な他者との関係で学んだ事柄が想起されることも考えられるためである。そこで本章では、学校時代のキャリア教育を「キャリア教育」、それ以外の経験による学習を《キャリア教育》として区別し、いかなる経験が現在の職業生活に関係すると想起されるのかを分析する。したがって本章の第1の課題は、どのような経験が想起されるのかを理解するところにある。

第二に、M. Halbwachs (1925=1992, 1950=1989) が、私たちの記憶は現在の観点から再構成されたものであり、過去に経験した出来事を必ずしも想起するわけではないと指摘したように、学校時代の「キャリア教育」の効果や機能を測るとしても、それは回答者の現在の記憶に依存してしまうという問題にかかわる。ライフイベントの中で「最も大きな影響を与えた出来事」として回顧される内容には「職業」が上位にランクされることは知られているように(高橋・岸野, 2001)、「就職」という経験は私たちの人生にとって重要な出来事——転機である。だが、そのような重要な出来事であっても、P. Berger が「すでに起こった出来事を回想し、再解釈し、説明し直すたびに、過去は絶えず変化してゆく。(中略)われわれも自己の生活史を常に再解釈しつづけているのである」(Berger, 1963=1995: 85)と指摘するように、「キャリア教育」が想起されるのか否か、どのように意味づけられるのかは現在の回答者の状況に大きく依存すると考えられる。それゆえに本章の第2の課題は、「就職」という経験が人生の転機としてどのように捉えられているのか、および回答者の現在の状況によって過去の意味づけがどのように異なるのかという点の検討である。

上記の2点を検討するためには、回答者がキャリア教育や過去の経験をどのように捉え、意味づけているのかを理解する必要がある。そこで本章では、小学校や中学校、高校、大学等の学校時代において、現在の職業生活に関係があったと思うことの自由記述データを用いて分析を行う。とはいえ自由記述データの分析結果の最低限の客観性や厳密性を担保するために、樋口耕一氏によって開発されたフリーソフトウェアである「KH Coder」(<http://khc.sourceforge.net/>)を用いて、自由記述にどのような語句が頻出し、その語句が他のどのような語句と関連があるのかといった点に焦点を当てることにした。

2. 対象と課題の設定

本章では、本調査で設定した以下の自由記述を用いる。

- 25-1. 現在の職業生活に良い面、悪い面で関係があったと思うことを、小学生、中学生、高校生、大学生の頃に分けて、何でも自由にご回答下さい。学校の授業、家庭での出来事、友達と遊んだこと、アルバイト、ボランティアなど、何でも構いません。
- 25-2. 25-1. に挙げた出来事のうち、現在の自分の職業生活にもっとも関係のあるものに○を1つだけつけてください。
- 25-3. それが、現在の職業生活にどのように関係があると思うかを以下に自由に記入ください。

上記の意図は、①現在の観点から、学校時代の出来事を想起させ（25-1）、その内、②何が現在ともっとも関係が深いのか（25-2）、③その理由（25-3）を尋ねている点にある。

ここで本章の課題を再度整理する。

（課題1）各時代において現在の職業生活に関係のある事柄として何が想起され、その内容がどのように変容するのか[3,4節]

（課題2-1）現在の職業生活にもっとも関係がある時代はどの時代なのか[5,6節]

（課題2-2）回答者の現在の状況によって過去の意味付けはどのように異なるのか[7節]である。これらの検討を通して、回答者のキャリア教育の意味づけを理解し、「キャリア教育」に何が求められ、また何を必要としているのかという課題の一端を明らかにしたい。

3. 各時代の自由記述において頻出する語句

本節では、25-1.の設問に対する自由記述の回答から各時代における自由記述の全体的な傾向を把握していく。

(1)小学生の頃

小学生の頃の自由記述で頻出する語句（図表7-1）の内、上位4番目までが《キャリア教育》に該当する、「仲の良い友達が出来た」、「協調性が身についた」など【友達】、「勉強を頑張った」「遊んでばかりで勉強しなかった」など【勉強】、「学校での生活で集団におけるコミュニケーションの仕方を学んだ」など【学校】、具体的な授業科目とともに記述される【授業】である。そして5番目に「キャリア教育」に該当する「どんな仕事に就きたいかを調べたこと」など将来の【仕事】が挙げられている。ここから小学生の頃は、基礎的な人間関係を構築する力や将来の目標設定の涵養と関連しているということが理解できる。

図表7-1 現在の職業生活に関係のあったと思うことの自由記述で出現頻度の高かった語句
(小学生の頃)

| | | | | | | | |
|-----|-----|-----------|-----|--------|----|-----|----|
| 友達 | 424 | 社会 | 126 | クラス | 71 | 担任 | 57 |
| 勉強 | 300 | 興味 | 107 | 集団 | 70 | 手伝い | 56 |
| 学校 | 267 | 見学 | 106 | 遊び | 70 | ピアノ | 56 |
| 授業 | 261 | コミュニケーション | 99 | 野球 | 68 | 職場 | 54 |
| 仕事 | 245 | 小学校 | 86 | 基礎 | 68 | ゲーム | 52 |
| 友人 | 243 | 受験 | 85 | 学習 | 67 | 計算 | 52 |
| 先生 | 236 | 中学 | 83 | 地域 | 66 | 機会 | 51 |
| 自分 | 208 | 転校 | 78 | 家庭 | 65 | 家族 | 48 |
| 生活 | 171 | クラブ | 76 | 話 | 62 | 人間 | 47 |
| 関係 | 160 | 委員 | 76 | ボランティア | 61 | 行動 | 47 |
| 職業 | 152 | 両親 | 73 | 父親 | 61 | 運動 | 45 |
| 習い事 | 145 | サッカー | 72 | 経験 | 59 | | |
| 活動 | 144 | スポーツ | 72 | 体験 | 58 | | |

(2)中学生の頃

中学生の頃においても、学校生活における出来事が中心的であることは小学生の頃と同様である(図表7-2)。だが頻出する語句を見ていくと、1番目には部活動やボランティア活動の経験である【活動】、次いで、「協調性が身についた」「上下関係が出来た」といった人間関係を維持するためのルールの理解と関わる【部活】が登場するなど変化が見られる。さらに【勉強】については「受験勉強」などいわゆる学力に結びつく勉強に加えて、「部活動で上下関係の厳しさ、大切さなどを学んで勉強になった」などに見られる人間関係の在り方についての勉強といったように意味の膨らみが見られる。これらが《キャリア教育》に該当するのに対し、以下の2つは「キャリア教育」に該当する「自分のやりたい職業の仕事場へ行って、体験した」など【体験】、授業や職業体験など【学校】となっている。

ここから中学生の頃になると、部活動やボランティアなどに参加する機会が増加し、異なる年代の他者との人間関係を構築する術を体得したり、進路選択を迫られる中で進路や職業など自身の将来を見つめるようになってきた頃として位置づけられるといえる。

図表7-2 現在の職業生活に関係のあったと思うことの自由記述で出現頻度の高かった語句
(中学生の頃)

| | | | | | | | |
|----|-----|--------|-----|-----------|----|-----|----|
| 活動 | 624 | 仕事 | 207 | 先輩 | 87 | 教師 | 62 |
| 部活 | 570 | 職場 | 175 | 成績 | 87 | 話 | 60 |
| 勉強 | 540 | ボランティア | 147 | 進路 | 86 | 老人 | 59 |
| 体験 | 318 | 受験 | 146 | クラス | 84 | 委員 | 59 |
| 学校 | 303 | 生活 | 131 | 進学 | 82 | 行動 | 58 |
| 関係 | 302 | 上下 | 126 | 年間 | 69 | 後輩 | 54 |
| 授業 | 275 | 生徒 | 118 | 社会 | 66 | ホーム | 50 |
| 自分 | 267 | 中学 | 111 | コミュニケーション | 65 | 地域 | 46 |
| 先生 | 248 | 学習 | 108 | 経験 | 65 | 忍耐 | 43 |
| 高校 | 232 | 英語 | 94 | 練習 | 65 | 野球 | 42 |
| 職業 | 229 | クラブ | 91 | 努力 | 64 | 所属 | 40 |
| 友達 | 226 | 人間 | 90 | パソコン | 63 | | |
| 友人 | 215 | 興味 | 88 | テスト | 63 | | |

(3) 高校生の頃

高校生の頃になると頻出する語句に【アルバイト】が登場するようになり、《キャリア教育》の内容においても、それまでの学校生活中心の記述とは様相が異なってくる（図表7-3）。最も頻出する語句である【勉強】では受験勉強などに加え、「アルバイトが面白くなってしまった為、学生の本分の勉強をしなくなりました」などと学校生活とアルバイトを対比する記述も目立つようになった。それは2番目に頻出する【アルバイト】の自由記述において、接客やマナーの学習に関する記述のみならず、「アルバイトを始めて、リアルな社会勉強が出来た。反面、学校は面倒なだけだった」という記述があることから理解できる。一方で「大学受験」の経験など【大学】、部活やボランティア、生徒会などの【活動】なども語られている。その他、【授業】ではパソコンや英語、職業など具体的な科目名が挙げられており、これが「キャリア教育」に該当していると言える。

以上より高校時代は、さらに活動の幅が広がり、学校生活に関する【活動】と【アルバイト】など直接的に職業生活に関する活動とが両極に布置されるようになった時代であると理解できる。後で検討するが（4,5節）、「進学」か「就職」かという選択に応じて現在の職業生活に関係する事柄が変容することには留意する必要があると思われる。

図表7-3 現在の職業生活に関係のあったと思うことの自由記述で出現頻度の高かった語句
(高校生の頃)

| | | | | | | | |
|-------|-----|--------|-----|------|-----|-----------|----|
| 勉強 | 706 | 関係 | 228 | 興味 | 104 | 相談 | 68 |
| アルバイト | 705 | 進学 | 224 | 資格 | 102 | 進学校 | 66 |
| 大学 | 446 | 先生 | 213 | クラス | 99 | コミュニケーション | 60 |
| 活動 | 416 | 進路 | 191 | パソコン | 97 | 努力 | 58 |
| 学校 | 372 | 職業 | 169 | 理系 | 96 | クラブ | 55 |
| 部活 | 355 | 社会 | 151 | 人間 | 92 | 文化 | 55 |
| 授業 | 350 | お金 | 143 | 年間 | 87 | 上下 | 55 |
| 自分 | 343 | 生活 | 131 | 体験 | 85 | 話 | 55 |
| 友人 | 281 | 就職 | 130 | 成績 | 84 | 参加 | 54 |
| 受験 | 264 | ボランティア | 128 | 英語 | 82 | 目標 | 53 |
| 友達 | 242 | 接客 | 126 | 専門 | 79 | 数学 | 53 |
| 高校 | 237 | バイト | 118 | 生徒 | 70 | | |
| 仕事 | 234 | 経験 | 107 | 選択 | 69 | | |

(4) 大学生等の頃

大学生等の頃では高校生の頃と同様、学校生活とアルバイトなどの経験が上位に位置している（図表7-4）。具体的に頻出する語句の自由記述を見ていくと、上位3番目までは《キャリア教育》に該当する「アルバイトをすることで、働くことの楽しさ、厳しさを知った」「アルバイトで人間関係の難しさを改めて感じた」など【アルバイト】、人間関係や、ルール・マナーを学習したサークルや就職活動など【活動】、社会勉強や、資格の勉強、ゼミなどの【勉強】であり、4番目に「キャリア教育」に該当する壁にぶつかったりした就職活動の経験や就職ガイダンスの講座など【就職】などが挙げられている。ここで注目すべきは、これ

らが「アルバイトで社会勉強をし、自分が貢献できることを考えたこと」や自分に向いている職業、自分の強みなど自己理解（【自分】）へ統合されていることである。この点は、大部分の人が就職という選択をする中で、学校生活やアルバイトなどの様々な経験を自己理解へと動員させていく就職活動の経験とパラレルな関係にあるのではないかと推察できる。

以上、時代ごとの自由記述の傾向から理解できることは、時代を追うごとに活動や他者との関わりに多様性を帯びていくこと、高校生や大学生の頃では「就職」との関連が強くなること、「キャリア教育」についても一定の記述が見られるが、現在の職業生活に関係のある出来事の多くは《キャリア教育》の中から選択され、記述されていることである。

図表7-4 現在の職業生活に関係のあったと思うことの自由記述で出現頻度の高かった語句
(大学生等の頃)

| | | | | | | | |
|-------|------|--------|-----|-----------|-----|----|----|
| アルバイト | 1257 | 接客 | 211 | 友達 | 117 | 卒業 | 76 |
| 活動 | 488 | 社会 | 206 | 会社 | 111 | 試験 | 74 |
| 勉強 | 418 | 関係 | 205 | インターンシップ | 106 | 海外 | 73 |
| 就職 | 394 | 実習 | 182 | 興味 | 105 | 教育 | 73 |
| 自分 | 388 | バイト | 176 | コミュニケーション | 98 | 話 | 69 |
| 仕事 | 370 | 研究 | 167 | 企業 | 88 | 参加 | 69 |
| 大学 | 348 | ボランティア | 162 | 人間 | 87 | 部活 | 68 |
| 授業 | 340 | 資格 | 160 | 留学 | 82 | 年間 | 65 |
| 専門 | 293 | 知識 | 156 | ゼミ | 81 | 旅行 | 61 |
| 学校 | 266 | 生活 | 153 | 取得 | 79 | 分野 | 60 |
| 友人 | 247 | 職業 | 143 | 先生 | 78 | 仲間 | 54 |
| サークル | 239 | お金 | 131 | 体験 | 78 | | |
| 経験 | 221 | マナー | 120 | パソコン | 76 | | |

4. 頻出する語句の内容の時代的変容

前節では、25-1.の設問に対する自由記述データの全体的な傾向を把握したが、本節では(1)他者との関係を構築する上での第一歩目の対象となる【友達】【友人】、(2)「キャリア教育」とも関連する【授業】、(3)「キャリア教育」および様々な《キャリア教育》と関係する【自分】の3つの語句に注目して、他の語句との関連の時代的な変容を理解する。

(1)【友達】【友人】

【友達】【友人】は小学生の頃の自由記述で1位にランクした以外は順位を落としてはいるものの、常に頻出している語句である。図表7-5は、【友達】【友人】と関連のある語句の変遷を示したものだが、図表7-6の自由記述の例を見ると、【友達】【友人】は全体的に、「遊び仲間」、「コミュニケーション能力の向上に資する他者」として位置づけられていることが理解できる。また中学生の頃以降になると校区の広がりとともに新たに出会った他者との関係を構築することへの困難を覚え、そしてその克服の過程で、「コミュニケーション能力の向上に資する他者」として位置づけ直され、さらに高校生の頃や大学生の頃になると単に「遊び仲間」ではなく「相談相手」として位置づけられていることが理解できる。

図表7-5 【友達】【友人】と関連のある語句の変遷(相関係数 0.05 以上)

| 小学生の頃 (N=3932) | | 中学生の頃 (N=3932) | | 高生の頃 (N=3932) | | 大学生等の頃 (N=3932) | |
|-------------------|------------------|-------------------|-----------|------------------|-----------|--------------------|-----------|
| 友達 | 友人 | 友達 | 友人 | 友達 | 友人 | 友達 | 友人 |
| コミュニケーション .141** | 関係 .121** | コミュニケーション .087** | 関係 .094** | 話 .067** | 話 .105** | 旅行 .067** | 旅行 .077** |
| 遊び .135** | 学校 .056** | 話 .079** | 中学 .060** | コミュニケーション .061** | 関係 .103** | 先生 .055** | 海外 .076** |
| 習い事 .072** | コミュニケーション .051** | 体験 -.046** | | | 相談 .075** | | 自分 .056** |
| 関係 .062** | 転校 .044** | | | | | | |
| 人間 .055** | | | | | | | |
| 話 .050** | | | | | | | |

**、相関係数は 1% 水準で有意(両側)。

図表7-6 【友達】【友人】と関連のある語句を含む自由記述の例

【「友達」「友人」と関連のある語句の登場する自由記述の例】

小学生の頃(「友達」「友人」と「コミュニケーション」「遊び」)

毎日**友達と遊ぶ**事が今の**人間関係**、**コミュニケーション**能力があると思う。(男性、大卒、正社員)

友達と遊ぶことを通じて、人との**コミュニケーション**のとり方を学んだ気がする。(男性、大卒、非正社員)

学童に入り、**友達とたくさん遊ぶ**事によって、**コミュニケーションスキル**が上がった。(高卒、女性、専業主婦)

中学生の頃(「友達」「友人」と「コミュニケーション」「関係」)

校区が広がり、**友達**がたくさんできた。見知らぬ人がいたから**コミュニケーション**をとるのが、大変だった記憶がある。(男性、大卒、正社員)

バレーボール部に入り、色々な**友達**が出来た事により**コミュニケーション**の能力を学べたと思う。チームプレイだったので良い事ばかりじゃなかったけど、楽しかった。(女性、高卒、非正社員)

友人関係に悩んだ。周りとの接し方がよく分からなかった。(女性、大卒、正社員)

高校生の頃(「友達」「友人」と「コミュニケーション」「相談」)

新しい**友達**が出来て**コミュニケーション**がとれる様になった。(男性、高卒、自営業・自由業)

いつも**友達**がたくさんいて、人との**コミュニケーション**のとり方が良いと感じたこと。(女性、大卒、正社員)

就職してからも色々**相談**出来る**友達**が出来た。(男性、大卒、正社員)

高校で一生の**友達**ができた。**仕事**で辛い事や苦しいことがあったとき、親身になって**相談**ののってくれる。(女性、高卒、非正社員)

大学生等の頃(「友達」「友人」と「旅行」「先生」)

友達と**海外旅行**にたくさん行ったが、日本よりも良い面も悪い面もたくさんあっていつか、海外で働きたいと思った。(男性、大卒、正社員)

海外旅行で海外の人と**友達**になる。(女性、大卒、正社員)

今だに付き合いがある**先生**もいるし、よく**話し**を聞いてくれたり、お互い社会人としての話しもできるし、高校までの先生とは違い、友達ではないにしろ、**いい関係**をもって付き合える**先生**が多い。(男性、大卒、正社員)

担任の**先生**が親身になって悩みを聞いてくれたため、大人に対する見方が変わった。今も時々**相談**する。(女性、大卒、正社員)

(2)【授業】

【授業】はどの時代においても、常に上位に頻出しており、「キャリア教育」の現在の職業生活への関係を見ることが出来る語句である。図表7-7から関連のある語句の変遷を見ていくと、小学生の頃では【機会】【ボランティア】となっているが、中学生の頃以降になると【パソコン】など実践的な授業科目へと関連の強い語句が移行していることが理解できる。そのことは図表7-8の自由記述の例と重ねてみるとより明確に理解できる。小学生の頃や中学生の頃では、仕事や職業を知る・調べる【機会】を通して職業について意識した経験が挙げられ、高校生の頃以降になると、【パソコン】などスキルに関わる事柄を【授業】で経験したことが挙げられている。ここからは、成長段階とともに職業に対する知識や意識を学ぶ機会から、実践的なスキルの学習へと「キャリア教育」の内容が変容していく様が理解できる。

図表7-7 【授業】と関連のある語句の変遷(相関係数 0.05 以上)

| 小学生の頃 (N=3932) | 中学生の頃 (N=3932) | 高生の頃 (N=3932) | 大学生等の頃 (N=3932) |
|-------------------|---------------------|------------------------|-----------------------|
| 機会 .064** | 英語 .134** 興味 .052** | 学校 .146** 仕事 .054** | パソコン .143** 興味 .062** |
| ボランティア .050** | 学校 .118** 体験 .051** | パソコン .145** 進学校 .054** | マナー .130** 知識 .057** |
| | パソコン .104** | 選択 .125** 職業 .053** | 学校 .098** 大学 .055** |
| | 職業 .097** | 数学 .105** 部活 -.050** | 専門 .081** 話 .052** |
| | 仕事 .087** | 英語 .093** | 興味 .062** 先生 .050** |

** 相関係数は 1% 水準で有意(両側)。

図表7-8 【授業】と関連のある語句を含む自由記述の例

【「授業」と関連のある語句の登場する自由記述の例】

小学生の頃(「授業」と「ボランティア」「機会」)

学校の**授業**で、高齢者施設へと**ボランティア**に行ったこと。(男性、大卒、正社員)

3年生の時に、**授業**で近所の保育園で園児と遊ぶ時間があり、そこで保育の**仕事**の楽しさを知り、自ら**ボランティア**を希望し何度も遊びに行った。(女性、大卒、自営業・自由業)

勉強よりも、自然とふれ合う課外**授業**が多くあり、その場で、視野の広がる**機会**を得ることができた。(女性、大卒、正社員)

中学生の頃(「授業」と「職業」「体験」)

色々な**職業**を調べたり(就職するための手順なども)まとめた**授業**があり役に立った。(男性、大卒、正社員)

父親の**職業**について調べる**授業**があり、**職業**について初めて意識した。(女性、大卒、正社員)

学校の**授業**での**職場体験**により、職場の雰囲気を感じることが出来た。(男性、大卒、正社員)

体験授業でカメラマンの所にいった。(女性、高卒、正社員)

高校生の頃(「授業」と「学校」「パソコン」)

学校を休みがちになったため、もっと**授業**を受けていればより**英語**が読めて、仕様書読解が楽になったと思う。(男性、大卒、正社員)

学校の**授業**が選択できたこと(特に理科)。(女性、大卒、正社員)

パソコンの**授業**があり、**パソコン**の基礎的な事を学べた。(男性、高卒、非正社員)

パソコン操作の**授業**が充実しており、専門学校での学習の土台となった。(女性、大卒、正社員)

大学生等の頃(「授業」と「パソコン」「マナー」)

パソコンの基本的な使い方の**授業**(ITに関する基礎知識)。(男性、大卒、正社員)

授業以外に**パソコン**や簿記などの**資格**の**授業**を用意してくれていた。別に料金は掛かったがそれでも学校に通いながら**資格**が取れた。(女性、大卒、非正社員)

ビジネスマナーの**授業**があった為、それが役立っている。(男性、大卒、正社員)

パソコンの**授業**で秘書の**マナー**を学ぶのは、今の接客でプラスになっていると思う。(女性、大卒、非正社員)

(3)【自分】

【自分】もまた常に上位に頻出しているものの、それだけではどのような意味で用いられているのかは不明瞭な語句である。図表7-9に示すように関連のある語句をみてみよう。全体を通して見るならば、【自分】は常に【職業】や【仕事】と結び付けられて用いられていることが理解できるが、学歴別に見ると興味深いことに高卒者のみに最終学歴である高校生の頃に【バイト】【アルバイト】が登場する。さらに図表7-10の自由記述の例を見ると、【自分】と【職業】【仕事】が結び付けられているとはいっても、時代ごとにその意味内容の異同があることを理解できる。小学生・中学生の頃は、どちらかといえば「キャリア教育」との関連で【自分】がどんな【職業】に就きたいのかといった理想(「なりたいこと」)を明確化していったことが記述されている。だが、高校生・大学生の頃になると【アルバイト】や【就職活動】などを通して【自分】がどんな【職業】に向いているのか、といった現実(「できること」と直面していく様が見てとれる。もちろん高卒者と大卒者とでは高校時代の自由

図表7-9 【自分】と関連のある語句の変遷(相関係数 0.05 以上)

| 小学生の頃 (N=3932) | 中学生の頃 (N=3932) | 高生の頃 (N=3932) | 高生の頃 [高卒] (N=535) | 高生の頃 [大卒] (N=3375) | 大学生等の頃 (N=3932) |
|-------------------|-------------------|------------------|----------------------|-----------------------|--------------------|
| 職業 .079** | 職業 .092** | 大学 .104** | 高校 .190** | 大学 .109** | お金 .112** |
| 仕事 .066** | 進路 .069** | 仕事 .096** | 友人 .145** | 仕事 .092** | 興味 .086** |
| 父親 .051** | 高校 .066** | 進路 .077** | バイト .135** | 進路 .083** | 生活 .085** |
| | 興味 .058** | 高校 .072** | 仕事 .127** | 成績 .076** | 就職 .080** |
| | 先生 .057** | お金 .062** | アルバイト .122** | 学校 .058** | 仕事 .080** |
| | 経験 .056** | 先生 .054** | 話 .121** | お金 .055** | 仲間 .066** |
| | 仕事 .050** | 話 .054** | 勉強 .116** | 高校 .053** | 学校 .057** |
| | | 学校 .052** | お金 .116** | 友達 .052** | 友人 .056** |
| | | | | 就職 .051** | 留学 .056** |
| | | | | 先生 .050** | 勉強 .052** |

**、相関係数は 1% 水準で有意(両側)。

図表7-10 【自分】と関連のある語句を含む自由記述の例

【自由記述の例(小学生の頃:「自分」と「職業」「仕事」「父親)】

親(父)と顔を会わず事がほぼないくらい**仕事**をしていたので自分はこうはなりたくないと思った。(男性、大卒等、正社員)
 図書室に「〇〇(職業名)になりたい」というシリーズの本があり、授業で自分のなりたい**職業**についてまとめて提出した。とくに夢をもっていたときなので強くおぼえている。(女性、大卒等、非正社員)
 将来、どんな**仕事**につきたいか? どうしたらその**職業**につけるかを自分で調べる授業があった。(女性、高卒、正社員)
 父親が添乗員で世界の様々な国に行っていた。自分もいろんな国に行きたいと思っていた。(男性、大卒、正社員)
 父親が自分の仕事の話をよく私に聞かせていた。楽しそうに話すので、世間には楽しい**仕事**があるのだと思った。(女性、大卒、正社員)

【自由記述の例(中学生の頃:「自分」と「職業」「進路」「高校)】

学校の総合学習で、自分の興味のある**職業**について「人」をテーマに、インタビューや**職業**体験、レポート作成等行う。(男性、大卒等、正社員)
 職場体験によって、今まで**自分**が夢みた**職業**はあまりに現実離れしていると気づいた。(女性、大卒等、非正社員)
 学校で**職業**体験はしたが、その頃の**自分**は、将来に向けてとか考えが全くなかったので、あまり役に立ってないかも。(女性、高卒、専業主婦)
自分の進路・夢・将来のビジョンを書かせる時間を設けられたこと。(男性、大卒、正社員)
 職業体験などがなかったため、**進路**を決める際にも**自分の**幅をせばめてしまったかもしれない。(女性、大卒、非正社員)
高校の選択はよかったと思う。自分のなりたい**職業**の分野の学校に行けたと思う。(男性、大卒、進学準備)

【自由記述の例(高校生の頃:「自分」と「仕事」「アルバイト」「大学)】

高1で初めて、**アルバイト**を経験し、自分でかせいで、**アルバイト**代を頂いたことは、良い面に影響した。(男性、大卒等、無職)
アルバイト上で接客をしていたら、初めは自分には不向きだと思っていた接客という**仕事**が自分に向いていることに気付いた。(女性、高卒、自営・自由業)
 工場の**アルバイト**を短期でしたこと。自分には、この**仕事**は合わないと感じた。(女性、大卒等、正社員)
アルバイト禁止という学校だったので、**自分**で稼ぐという体験ができなかったため、高校を卒業し、すぐ**仕事**に就き、働いて給料を頂くという大変さが分からなかった。(女性、高卒、専業主婦)
アルバイトを通して、年齢差のある人とのコミュニケーション。(女性、大卒等、正社員)
大学受験に向け、**自分**なりの**勉強**のしかたを確立したこと。今の**仕事**のすすめ方を考える上でも参考になっている。(男性、大卒等、正社員)
 色々なことに**興味**があり、**自分**がやりたいことが決められなかったため四年制**大学**へ進学。(男性、大卒等、無職)
 将来の夢があり、その達成のための**大学**を選ぶ友達を見た。**自分**には夢ややりたいことがない焦り、将来を考えるようになった。(女性、大卒等、正社員)
 様々な**大学**の情報や**職業**について調べていくうちに少しではあるが、**職業**についてと**自分の**将来についてイメージする事ができた。(女性、大卒等、非正社員)
 担任との二者面談で相談した後も、結局**自分**が**大学**でどんな**勉強**がしたいのかはっきりと答えをみつけられなかった。(女性、大卒等、無職)

【自由記述の例(大学生等の頃:「自分」と「就職」「お金」「興味」「勉強)】

アルバイトや**インターンシップ**、**就職活動**を通じて**自分**が民間企業より公務員の方が適性があると実感できた。(男性、大卒等、正社員)
進路に悩みまくる**就職活動**もうまく行かず挫折しかけた。**自分**には何が向いているのかを模索しつづけた。(女性、大卒等、専業主婦)
就職説明会に行くことがあったが、その時初めて、**自分**で将来を決めなくてはいけないことに気付いた。今までは決められていて楽だったことを知った。(女性、大卒等、正社員)
アルバイトを通して、実際に**自分の**時間を**仕事**にあてて、その分給料をもらう喜びと**お金**の大切さを学びました。(男性、大卒、正社員)
自分で貯めた**お金**で、稼げる資格を取ろうと学校に通ったが、もともと好きなことではなく中退。**アルバイト**で再び**お金**を貯めて、心理関係とデザイン関係の資格を取った。(女性、大卒、専業主婦)
アルバイトで、料理が好きだったので**興味**があった飲食店の**仕事**をしたが、短時間で多くの**仕事**をこなすのは得意ではなく、**自分**には向いていないと感じた。(女性、大卒、正社員)
アルバイトで某コンビニエンスストアに数年間、務めました。その中で**マナー**、**コミュニケーション**、**段取り**、**経営**など**社会勉強**をしました。(男性、大卒等、非正社員)
自分の好きな**勉強**をすることができ、**勉強**していく中で、これからの人生に必要な経験もいくつかすることができた。(女性、大卒等、正社員)
 良い面は、学校の**先生**の進めで**ボランティア活動**をしたことがきっかけで教育者への道をめざす行動を起こすことができた。**自分**でやりたいと思ったことをつらめき通し、**勉強**は大変だったが資格取得をすることができた。(女性、大卒等、専業主婦)

記述に差異はみられる点には留意が必要だが、「就職」を現実的に考えるとき、「キャリア教育」を通して明確化した理想と、【アルバイト】などの《キャリア教育》を通して直面した現実とが交錯する過程で「自分とは何か」が明確化されていくと言えるのではないだろうか。

以上より、成長するごとに現在の職業生活に関係のある「キャリア教育」の内容も機会からスキルへと変容し、《キャリア教育》との関連も色濃くなることが理解できた。次節では、《キャリア教育》を支える【アルバイト】と【活動】に焦点を当てることにする。

5. 【アルバイト】【活動】が意味する《キャリア教育》

本節では【アルバイト】【活動】と他の語句の関連から《キャリア教育》の特徴を抽出する。

(1)【アルバイト】と他の語句との関連

【アルバイト】は高校生の頃以降になると上位に頻出するようになる語句である。図表7-1 1から【アルバイト】と関連の強い語句は、【接客】、【お金】、【経験】であり、また高校生の頃では【社会】とともに用いられていることが理解できる。この点を図表7-1 2の自由記述の例から確認すると、【アルバイト】で【接客業】に携わった【経験】、【お金】を稼ぐことの【経験】を通して【社会】のルールやマナーを勉強したという記述が目立つ。それまでの学校内での活動とは異なる【アルバイト】という経験は、「労働」とはいかなることかを認識する契機であり、職業生活に結びつく社会的なルールの教育的効果を有している。

では、【アルバイト】の経験は現在の職業生活にどのように関係しているのだろうか。その点を現在にどのような関係があるか(25-3.)の自由記述から確認しよう。図表7-1 3は25-1.の自由記述で【アルバイト】を挙げた人の25-3.の自由記述を、25-2.で選択した最も関係のある時代別に例示したものである。その記述を見ると、高校生の頃をもっとも関係があると答えた人も大学生の頃をもっとも関係があると答えた人の多くは、【アルバイト】の経験と現在の職種や職業上の特徴との関連を見だし、それが現在の職業生活に生かされていると【アルバイト】の経験を解釈していることが理解できる。このような意味で、【アルバイト】という経験は《キャリア教育》の一翼を担っている。

図表7-11 【アルバイト】とその他の語句の関連(相関係数 0.10 以上)

| 全体 (3932) | 高校生の頃 | | | | 大学生等の頃 | |
|--------------|-------------|-----------|--------------|-----------|--------------|------------|
| | 高卒 (535) | | 大卒 (3375) | | 大卒 (3375) | |
| 接客 .289** | 社会 .165** | 接客 .285** | 社会 .159** | お金 .311** | 社会 .157** | 接客 .270** |
| お金 .273** | 仕事 .116** | 経験 .223** | お金 .132** | 接客 .282** | 仕事 .120** | お金 .189** |
| 経験 .179** | | 年間 .165** | 自分 .122** | 経験 .172** | | 経験 .175** |
| | | | | | | 専門 -.108** |

** 相関係数は 1% 水準で有意(両側)。

図表7-12 【アルバイト】と関連のある語句を含む自由記述の例

【自由記述の例(「アルバイト」と「接客」「お金」「経験」「社会」「仕事」)】

アルバイトを通じて、**社会勉強**をし、**仕事**の重要さを学んだ。(高校生の頃、男性、大学等、正社員)

3年間アルバイトをしていた為、**社会**のルールや上司に対する言葉使いや**お金**を稼ぐ事がどれだけ大変かわかった。(高校生の頃、男性、高卒、正社員)

初めてアルバイトをして働く**経験**ができたこと。なんとなく働くということがどう言うことかがわかった。(高校生の頃、男性、大学等卒、非正社員)

初めてアルバイトをした。レジやウェイトレスなどの**接客業**を経験。社会の基本的なマナーを学べた。(高校生の頃、女性、大学等卒、非正社員)

一人暮らしをし**アルバイト**や家事など全てを自分でこなすことで**金銭**感覚や対人関係を勉強できた。(大学生等の頃、男性、大学等卒、正社員)

アルバイトをたくさんしたので、世の中には色々な人がいて、その人たちとうまく**仕事**をやっていくのも**仕事**のうちだと人間関係について学んだ。(大学生等の頃、女性、大学等卒、非正社員)

図表7-13 【アルバイト】の経験と現在の職業生活との関係

【自由記述の例(「現在の職業生活」にどのように関係があるか: 高校生の頃がもっとも関係があるを選択した人の【アルバイト】を含む自由記述)】

仕事(アルバイト)を15才から始め、他の人よりも早くから社会人の自覚を持った。その事により、大学等卒後の就職で同期の人と比べ、良い成績をおさめた。(男性、大学等卒、正社員)

様々なアルバイトをする事で対人関係についての勉強する事ができた。今の仕事では、毎日見知らぬ人達と電話で話しています。(男性、大学等卒、正社員)

調理士として働いており、料理を作る楽しさを知った。(男性、高卒、正社員)

多少の理不尽を感じても、お客様第1の行動がとれるようになったのは、この時のアルバイトが生きていると思う。(女性、大学等卒、正社員)

接客の仕事なので、大きい声を出したり、笑顔で接客することは当たり前なので、高校のころからアルバイトでやっていたので、苦にならずできる。(女性、大学等卒、非正社員)

【自由記述の例(「現在の職業生活」にどのように関係があるか: 大学生の頃がもっとも関係があるを選択した人の【アルバイト】を含む自由記述)】

会社においても、対人能力が高い人が、仕事が良くてできることから、アルバイトでレベルアップすれば、社会に出て役立つと感じているから。(男性、大学等卒、正社員)

アルバイトで実際に、正社員と共に働いたことで、仕事に対する自信や責任感、仕事のやり方・進め方を経験したことが、今の仕事の行動指針になっている。(男性、大学等卒、正社員)

以前働いていた職場は、そこでアルバイトをしていて、ここでずっと働きたいと思い改めて正社員面接をさせてもらい、採用してもらったので、とても関係が深かったと思う。実際、ジャンルにとらわれることなく、アルバイトを経験することが出来、またこの職場と出会ったことは、自由のきく大学生活でしかできなかったことだと思う。(女性、大学等卒、専業主婦)

とにかく食べものに興味が有り、バイト先ではとにかく食べ物の話、それをしていても否定されないバイトメンバーとの会話で、より自分の調理をしたい! 何かメニューを作りたいと思う夢が強くなり、初めて就いた仕事も飲食系の仕事につけた。(女性、大学等卒、非正社員)

(2)【活動】と他の語句との関連

【活動】はそれ自体では不明瞭であるが、常に上位に頻出する語句である。図表7-14から【活動】と他の語句との関連を確認し、【活動】の意味内容を理解しよう。小学生の頃の【活動】はクラブ活動やボランティア活動であるが、中学生の頃になると部活動や生徒会活動が登場する。【上下】は、部活動などを通して先輩-後輩の関係を学んだということの意味する。そのことは図表7-15の自由記述の例からも理解できる。さらに注目すべきは「最終学歴」においてのみ【活動】が就職活動と結びつくことである。ここでは就職活動に関する「キャリア教育」だけではなく、就職活動それ自体を通して、礼儀作法を学んだことが挙げられており、この意味で就職活動もまた《キャリア教育》の効果を果たしていることが興味深い。

図表7-14 【活動】とその他の語句との関連(相関係数 0.10 以上)

| 小学生の頃 (N=3932) | 中学生の頃 (N=3932) | 高校生の頃 (N=3932) | 高校生の頃 [高卒] (N=535) | 高校生の頃 [大卒] (N=3375) | 大学生等の頃 (N=3932) |
|-------------------|-------------------|-------------------|-----------------------|------------------------|--------------------|
| クラブ .403** | 部活 .495** | 部活 .515** | 部活 .447** | 部活 .523** | 就職 .472** |
| ボランティア .331** | クラブ .255** | クラブ .241** | 就職 .302** | クラブ .252** | サークル .361** |
| | 上下 .150** | 上下 .128** | 生徒 .219** | 上下 .133** | 部活 .244** |
| | ボランティア .123** | ボランティア .128** | ボランティア .165** | ボランティア .124** | ボランティア .130** |
| | 生徒 .112** | | | | |

** 相関係数は 1% 水準で有意(両側)。

図表7-15 【活動】と関連のある語句を含む自由記述の例

【自由記述の例(「活動」「部活」「クラブ」「サークル」「ボランティア)】

スポーツクラブで集団活動¹⁾を学ぶ。(小学生の頃、男性、大学等卒、正社員)

クラブ活動²⁾に入り、先輩や後輩という関係ができた。(小学生の頃、女性、高卒、非正社員)

老人ホームでの、ボランティア活動³⁾(清掃業務)を通じて勤勉に働くことでの職場への貢献を知ることができた点が良い面だと思います。(小学生の頃、男性、大学等卒、正社員)

ボランティア活動⁴⁾を通じて、社会の役に立つことを行う、ということを知り初めて意識した。(小学生の頃、女性、大学等卒、正社員)

部活動⁵⁾で先輩や後輩との人間関係を学びました。(中学生の頃、男性、高卒、正社員)

部活動⁶⁾にうちこむことに努力と、負けない気持ちを培う事ができた。さらに高みにのぼるために努力を重ねた。(中学生の頃、女性、大学等卒、非正社員)

先生からボランティア活動⁷⁾を勧められ、参加した事で社会奉仕が気持ち良い事に思えた。(中学生の頃、男性、大学等卒、正社員)

ボランティア活動⁸⁾で老人ホームを訪問し、そこで知りあった方(老人)と、文通するようになった。私と手紙をやりとりする事によるこびを感じてもらっていたようで、私自身もうれしかった。人と接する仕事を“いいなあ”と感じました。(中学生の頃、女性、大学等卒、非正社員)

部活動⁹⁾をすることで協調性が身に付いた。(高校生の頃、男性、大学等卒、正社員)

部活動¹⁰⁾による精神力、忍耐力、体力の強化 体の健康維持。(高校生の頃、女性、大学等卒、非正社員)

部活¹¹⁾でのボランティア活動¹²⁾が私自身の価値観や考え方を大きく変えた。(高校生の頃、女性、大学等卒、非正社員)

サークル活動¹³⁾を通して、社会の見方や考え方を多角的に学んだ。(大学生等の頃、男性、大学等卒、自営業・自由業)

世界観が広がったサークル活動¹⁴⁾:全国規模のサークルに入っていて、いろんな価値観や情報・仲間を得た。(大学生等の頃、女性、大学等卒、非正社員)

ボランティア活動¹⁵⁾を通して人の役に立つ職につきたいと感じていた。(大学生等の頃、男性、大学等卒、その他)

ボランティアサークル¹⁶⁾での活動。障害児教育に関するものだったので、今の仕事で、子供に関するイベントや教育活動に役に立っている。(大学生等の頃、女性、大学等卒、正社員)

【自由記述の例(「活動」と「就職)】

良い面で、就職活動¹⁾の時に、礼儀作法の大切さを学んだ。(高校生の頃、男性、高卒、非正社員)

就職活動²⁾を通じて、事前準備の大切さを知った(面接の練習や、模試など)。(高校生の頃、男性、高卒、正社員)

部活動³⁾に打ち込んだため、就職⁴⁾後も、我慢することや、継続することの大切さを学び、力になった。(高校生の頃、女性、大学等卒、非正社員)

就職活動⁵⁾を初めてした時に面接の仕方、人との接し方、礼儀などを学びました。(高校生の頃、女性、高卒、非正社員)

就職活動⁶⁾ガイダンスなど積極的に大学が開催してもらうことにより、業界のことも学ぶことができた。(大学生等の頃、男性、大学等卒、正社員)

インターンで今の会社で体験、職種の楽しさを知り就職活動⁷⁾でその会社を受ける。(大学生等の頃、男性、大学等卒、正社員)

就職活動⁸⁾の進め方や、社会人としてのマナー・言葉づかいについての授業。(大学生等の頃、女性、大学等卒、非正社員)

就職活動⁹⁾を通じ学生と社会人との違いを感じとる事ができました。(大学生等の頃、大学等卒、専業主婦)

ここで【アルバイト】と同様に、【活動】の経験が現在の職業生活にどのように関係があるのかについて確認しよう。図表7-16は25-1.の自由記述で【活動】を挙げた人の25-3.の自由記述を、25-2.で選択した最も関係のある時代別に例示したものである。その記述を見ると、【部活】を通して培った社会性やコミュニケーション能力、協調性、忍耐、【ゼミ】を通して得られたプレゼンテーション能力など多様であるが、いずれも他者との関係性を構築していく術を学んだことが現在に生かされていると記述されていることが理解できる。

ところで【活動】と【アルバイト】の間に関連は見られないことから、この2つの語句はいずれも主体的な行動であるという点では共通するものの異なる意味内容を示しており、【活動】は、人間生活を営む上での基礎的なルールの学習と関連し、職業生活に結びつく社会的なルールの教育的効果を有している【アルバイト】とは異なる意味で《キャリア教育》の効果を果たしている。ここから、《キャリア教育》とは私たちが主体的に行動する中で、基礎的なルール(【活動】)や社会的なルール(【アルバイト】)を学習する経験を意味すると言うことができるだろう。

ここまでの検討から示唆されることは、「最終学歴」における《キャリア教育》が現在の職業生活にもっとも関係しているのではないかという点である。節を改めその点を検討する。

図表7-16 【活動】の経験と現在の職業生活との関係

| |
|---|
| <p>【自由記述の例(「現在の職業生活」にどのように関係があるか: 高校生の頃がもっとも関係があるを選択した人の【活動】を含む自由記述)</p> <p>部活動を通じて身に付けた社会性、コミュニケーション能力や集団における協調性が現在の基礎となっており仕事が円滑に進む要因の1つであると考えている。(男性、大学等卒、正社員)</p> <p>3年間継続した事による忍耐力と、上下関係による、あいさつや言葉づかいなどの人間関係のとり方。(男性、大学等卒、非正社員)</p> <p>仕事をする上で、いつも自分の思い通りになることばかりではなく、上司から厳しい言葉を言われることもあるが、高校時代、辛い部活動を辞めずに続けることができたことで自分の中に自信が持てている。(男性、高卒、正社員)</p> <p>現在の職業には人前で食べ物を作る難しさ、人間関係の難しさ、仕事へのやりがい、その他、事務作業も含め中学、高校で学んだ簿記や経理の経験、人間関係の経験を生かし役に立っていると思います。(男性、高卒、非正社員)</p> <p>この時期にPCを学んでいなかったら、今の自分はこんなにくわしくなかったと思う。今の社会でPCは必要不可欠なので、面白さに気付いて良かったと思う。(女性、大学等卒、正社員)</p> <p>目標をたてて、まわりと達成していくために話し合い、協力して、はげますことをしたので、仕事でもあたりまえに同僚と協力することができ、事がうまくいくと思う。(女性、大学等卒、非正社員)</p> <p>高校時代に学んだ面接の仕方や、礼儀などが、今の会社のマニュアルに大変影響しています。目上の方への接し方や、自分の行動の責任感を重く感じています。(女性、高卒、非正社員)</p> |
| <p>【自由記述の例(「現在の職業生活」にどのように関係があるか: 大学生等の頃がもっとも関係があるを選択した人の【活動】を含む自由記述)</p> <p>ゼミの教授の話によって金融機関への就職を希望し、現在の職業となっているため。(男性、大学等卒、正社員)</p> <p>これまでの学生生活の中では、勉強や友人とのコミュニケーションが、現在行っている営業活動をしていく上で、とても重要な経験となって活きていると感じます。学生時代に築き上げた感性においても同じ事が言えます。(男性、大学等卒、正社員)</p> <p>インターシップがあったのはとてもよかったです。それが、今になって役に立っていると感じる。(男性、大学等卒、非正社員)</p> <p>上下関係を学んだことで、社会人になって人との付き合い方が分かった。(男性、大学等卒、無職)</p> <p>教師という職業に就いている現在、やはり大学時代の教育実習が一番今までの思い出に残っています。仕事が忙しい時や辞めたくなった時も、その頃の写真やもらった色紙などを見たりすると、がんばれる。(女性、大学等卒、非正社員)</p> <p>やはり、辛い事でも仲間や先生を信じて乗り越えてきました。その中で、どんな仕事に対しても、継続して一生懸命頑張ろうという事を学び、いい先生に出会えたから、私も先生になって、夢や希望、一生懸命やる事の素晴らしさを伝えたいと思いました。出会いって、やっぱり大切です。(女性、大学等卒、専業主婦)</p> <p>いろいろな人と話すときに、自分の経験が話のネタになったりする。学生時代の部活動等でたくさん運動してきたことでじょうぶな体が得られ、かぜで仕事をやすまなくてすむ。(女性、大学等卒、正社員)</p> <p>ゼミ活動で学んだこと。民間企業へプレゼンテーションを行い、企業の色・方向性など特色を知った。自分の考えを相手に伝えることの難しさを知り、努力した。その時身につけたコミュニケーション・プレゼン能力は役立っていると思う。(女性、大学等卒、正社員)</p> |

6. 転機としての最終学歴

《キャリア教育》とは、私たちが主体的に行動する中で、基礎的なルールや社会的なルールを学習する経験として指摘した。さらに、「最終学歴」における《キャリア教育》が現在の職業生活に関連があるのではないかとということが示唆された。本節では、この点について検討する。図表7-17は、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」(25-2.)の結果を学歴別に示したものである。図表から理解できるように、学歴を問わず、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」は「最終学歴」へと結びつく傾向が見られる。

前節までにみてきたように、【アルバイト】は高校生の頃において登場するようになり、【就職】は「最終学歴」において【活動】と結びつく語句である。「最終学歴」が現在の職業生活にもっとも関係がある時代として選択される理由を探るには、大卒者の場合を考えてみる事が補助線となる。仮に労働の意味やそれに伴うルールを学習する【アルバイト】のみが重要であれば、大卒者であっても「高校生の頃」をもっとも関係のある時代として選択すると考えられる。だが、実際は【アルバイト】と【就職】(活動)の2つが重なる「大学生の頃」をもっとも関係のある時代として選択している。すなわち、高卒者よりもより多くの選択肢を有している大卒者が、現在の職業生活からみてもっとも関係のある時代として「最終学歴」を挙げる背景には、【アルバイト】のみならず、実際に職業や何が自分にできるのかを考える【就職】(活動)の経験とが重要な位置を占めていると推察できる。換言すれば、「最終学歴」が選択されることは、それが単に現在からもっとも近い過去としての学校時代であるため

はなく、その時代の自身の選択に結びついた【アルバイト】や【就職】（活動）が重要な意味を有しているということが関係していると言える。

以上より、現在の職業生活は、「最終学歴」時点における「就職」の経験に大きな影響を受けていると考えられる。20歳代の若者が「これまでの人生でともっとも影響を受けた出来事」としてあげた出来事の経験年齢は15歳と18歳という進路選択とも重なる時期に頻出することが報告されている（角田，2004）。であるならば、「就職」および「職業生活」という観点からみた場合、「最終学歴」は「就職」という人生の選択が迫られる時期——転機として考えられる。だが、図表7-17からも理解できるように、学歴を問わず約70%前後の人が「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」を挙げているが、残りの30%はそれとは異なる時代を挙げている。その背景を理解するためには、回答者が現在の職業生活の観点から過去を想起するという本調査の構造を考える必要があるだろう。それゆえに、回答者が置かれている「現在」との関連で、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」の選択の異同を検討することが重要となる。さらに、その検討を通して、回答者がキャリア教育や過去の経験をどのように捉え、意味づけているのかを理解することが可能となるだろう。

図表7-17 学歴と現在の職業生活にもっとも関係のある時代のクロス表

| | 現在の職業生活にもっとも関係のある時代 | | | | | | | | | |
|-----|---------------------|------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|------|--------|
| | 小学生の頃 | | 中学生の頃 | | 高校生の頃 | | 大学生等の頃 | | 合計 | |
| 大学等 | 220 | 7.5% | 192 | 6.5% | 535 | 18.2% | 1997 | 67.8% | 2944 | 100.0% |
| 高校 | 42 | 9.8% | 75 | 17.5% | 311 | 72.7% | - | - | 428 | 100.0% |
| 合計 | 262 | 7.8% | 267 | 7.9% | 846 | 25.1% | 1997 | 59.2% | 3372 | 100.0% |

※ カイ二乗値は1%水準で有意

7. 現在の状況による過去の意味づけの異同

【アルバイト】や【就職】（活動）を経験した「最終学歴」が「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として想起される傾向にあることと、それらの経験が当の時代において重要であると認識していたか否かは別の問題である。大部分が「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」を挙げる一方で、それとは異なる時代を挙げる人が学歴を問わず一定数存在することはその証左となるだろう。そこで本節では「現在にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」以外を選択する人の特性および過去の意味づけの検討を通して、逆説的に学校時代のキャリア教育の課題を浮かび上がらせてみたい。このような一見すると少数派として一括りにされてしまう層に着目し、その「質」的な分析を行うところに、自由記述データによる分析の旨みがあるように思われる。

(1)現在の身分

「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」の選択は一様ではない。この選択の異同が

何に依っているのかは端的に回答者の置かれた「現在」との関連で理解できるのではないだろうか。なぜならば、①学校時代のキャリア教育の経験は、「現在」の観点からの想起という形式をとっているため、②学歴による検討を通して回答者の過去の生活史の中で、いつの時代が重要とされるのかという構造を理解することはできても、回答者の「現在」は問えないためである。そこで本節では、回答者の「現在」の状況を示す「現在の身分」に着目して、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」を選択したか否かと「現在の身分」との関係から、「最終学歴」以外を選択する人の特性について考察する。

図表7-18は、「現在の身分」から「正社員」（正社員・正職員など）、「非正社員」（契約社員・嘱託、派遣社員、パートまたはアルバイト）、「専業主婦」（専業主婦（主夫）、または結婚の準備）、「無職（求職中）」（無職で仕事を探している）、「無職（何もしていない）」（無職で何もしていない）を抽出したものであり、この分布をみると、大半が「正社員」となっている。そして、「最終学歴を選んだか否か」の結果を見ると、「正社員」から順に「非正社員」、「無職（求職中）」、「専業主婦」、「無職（何もしていない）」の順に最終学歴を選択する傾向は弱まっていくことが理解でき、かつこの傾向は1%水準で有意な関連がみられる。

この結果で注目すべきことは、「正社員」のみならず、「非正社員」や「無職」であっても求職中の者は比較的「最終学歴」を選択する傾向にあるのに対して、「専業主婦」や「無職（何もしていない）」者は、「最終学歴」を選択する傾向が低くなることである。「現在の身分」は確かに「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」の選択を規定する一要因となっている。だが、その分水嶺は「正社員」か否かではなく、「無職」でも求職中の者は「最終学歴」を選択する傾向が見られることから理解できるように「労働市場の中に身を置いているか否か、意欲があるか否か」（＝「労働市場との断絶」）に引かれるところが重要である。

以上より、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」以外を選択する人は、「正社員」か否かという職業生活上の可視的な現在の状況ではなく、「労働市場との断絶」があるかないかという社会的・心理的な現在の状況に依存しているという特性を帯びていることが示唆される。では、その人たちは、キャリア教育や過去の経験をどのように意味づけているのだろうか。

図表7-18 現在の身分と最終学歴を現在の職業生活にもっとも関係のある時代に選んだかのクロス表

| | | 現在の身分 | | | | | | | | | | | |
|---------------------|------|-------|--------|------|--------|-------------|--------|------|--------|-----------------|--------|------|--------|
| | | 正社員 | | 非正社員 | | 無職 (求職中) | | 専業主婦 | | 無職 (何もしていない) | | 合計 | |
| 現在の職業生活にもっとも関係のある時代 | 最終学歴 | 1440 | 71.3% | 472 | 66.2% | 68 | 65.4% | 205 | 59.8% | 14 | 51.9% | 2199 | 68.6% |
| | それ以外 | 579 | 28.7% | 241 | 33.8% | 36 | 34.6% | 138 | 40.2% | 13 | 48.1% | 1007 | 31.4% |
| | 合計 | 2019 | 100.0% | 713 | 100.0% | 104 | 100.0% | 343 | 100.0% | 27 | 100.0% | 3206 | 100.0% |

※残差の分析の結果、5%水準で有意に値が大きい個所を太字、小さい個所に下線を付した。

※ カイ二乗値は1%水準で有意。

(2)最終学歴以外を選択した人の理由

P. Berger は「われわれは、ある社会的世界から別の社会的世界へと移動するにつれて、われわれの世界観を変えてゆく（それゆえ、われわれが自己の生活史に対して行った解釈・再解釈も再び変わってゆく）」（Berger 1963=1995：95）と指摘した。このように「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」を選択した人は、学校生活から職業生活へと移動する中で、「最終学歴」時点における【アルバイト】や【就職】（活動）の経験を有意義なものとして解釈していると言える。ところが、「最終学歴」以外を選択した人にとっては、現在置かれている状況から、それとは異なる解釈をしている。つまり、「就職」という経験とその結果によって、過去の経験の捉え方は変わってくると考えられる。そこで、「最終学歴」以外を選択した人が、どのような経験を現在の職業生活に関係のあるものとして記述しているのかという点から過去の意味づけの差異を確認し、そこから「キャリア教育」の課題を見出してみたい。

図表7-19は、最終学歴以外を現在の職業生活にもっとも関係のある時代として選択した人の自由記述の例を「現在の身分」ごとに提示したものである。以下、この図表を参照しながら、それぞれの特徴を検討する。

「正社員」および「非正社員」の大部分は、「最終学歴」以外の過去のある時点を「現在の職業生活と関係のある時代」として選択する場合、過去を立脚すべき転回点として捉えていることが理解できる。具体的には、「夢・目標」が定まった時点、「進路選択・職業選択」を決定づけた時点、現在の職業生活に関連づけられる「コミュニケーション能力」が涵養された時点といったような語りであり、過去を肯定的に捉えていることが特徴である。

「専業主婦」もまた、多くは「正社員」「非正社員」と同様の語り方であるが、特徴として興味深いのは、主婦業の特性でもある母親としての役割と関連して、幼少期の自身の経験を挙げる者が28%いることである。この場合、過去は準拠すべき時点として選択されており、肯定的に解釈されている。

一方で「無職」は過去を現在の状況を生み出した帰責の対象であり否定的に捉えている点に特徴が見られる。具体的にみると、「無職（求職中）」では28%、「無職（何もしていない）」ではその傾向がより顕著になり62%が、「怪我や病気といった過去の経験が現在の障害になっている」といったトラウマ的な語り方や「やりたいことが見つからなかった」といった語り方をしている。このような過去の捉え方をする人の割合の差異が「求職中」と「何もしていない」との間で、「最終学歴」を選択するか否かという異同とつながっていると考えられる。

ここから見出されることは、①「正社員」「非正社員」「専業主婦」は現在を梃子にして過去の準拠点を模索していく中で、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」を選択することもあれば、それ以外を選択することもある一方で、②「無職」（特に「無職」の内、「何もしていない者」）は過去を否定的に捉え現在の問題を過去に帰責し、過去が現在を規定しているという解釈をするため、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」と

図表7-19 最終学歴以外を現在の職業生活に関連のある頃と答えた人の自由記述の例

【最終学歴以外を現在の職業生活に関連のある頃と答えた人の自由記述：正社員】

科学そのものへの興味の火種となり、嫌われがち、理系科目を学ぶことが楽しかった。それは、現在も続いている。(男性、大学等卒、小学生の頃)

小学生①で出会ったお姉さんは学校の先生を目指していたが保育士のアルバイトもしていた。私が児童館の先生か保育士かでまよっていた時にアドバイスをくれ自然と保育士の道へ行くことになった。私が高校3年の時お姉ちゃんも小学校の先生をあきらめ保育士になり、より保育士へのあこがれも。(女性、大学等卒、小学生の頃)

今この場でやってもよいことか悪いことなのか判断できない(しない)人が多く、それを注意する人もいない。小さい時に注意しないと、大人になってから言っても意味がない。(理解できていない。)(女性、高卒、小学生の頃)

教育産業に携わっている為、かつて自分が勉強した体験・内容をそのまま子供に伝える事ができている。(男性、大学等卒、中学生の頃)

ゼロの状態から仲間と協力して1つのモノを形づくっていく工程が、サッカー部創設の頃と似ている。(男性、高卒、中学生の頃)

教師という職業の専門性とやりがいを感じ取った。(男性、大学等卒、高校生の頃)

物事の見方を一側面だけではなく多角的に見られるようになり、継続力を培ったと思う。(女性、大学等卒、中学生の頃)

今現在、営業をふまえた事をしていて、色々な人との関わりがあるので、人とのコミュニケーションの取り方や、相手を思いやる事などが関係してきてると思います。(女性、高卒、中学生の頃)

中学まで大人しく、勉強もできなかったのですが、高校は遠へ行って誰も知らない環境にした。そこで積極的な行動(学級委員になった)を取って、自分が変わった。どこかで勇気を持って、自分を変えなくては！！(男性、大学等卒、高校生の頃)

行く気はなかったが商業高校に行くことになり、簿記やパソコンを勉強し、事務の仕事っていいかもと思うようになった。実際、今事務の仕事をしているが、当時やった事が役に立っている。(女性、大学等卒、高校生の頃)

実際に見学したことで、大学受験に対して決心が固まり、集中的に勉強に打ちこむことができ、大学に合格できた。職種上、学校を卒業することが国家試験の受験資格であるため、学校へ入学することが将来の一步を作ったと考える。(女性、大学等卒、高校生の頃)

【最終学歴以外を現在の職業生活に関連のある頃と答えた人の自由記述：非正社員】

小学校の頃から抱いていた夢をどうしてもあきらめきれずにいて、一度は小学校の現場で働きたいと思っていた結果、今現在、教師とは違うが小学校という現場で働くことができているから。(男性、大学等卒、小学生の頃)

基本は小学校の頃に見た甲子園がきっかけでスポーツが好きになった。そして、スポーツにかかわる仕事がしたいと思い、教師になり顧問として全国に行きたいと思ったきっかけ。(男性、大学等卒、小学生の頃)

パートの仕事では、特にない。主婦業では自分がしつけされた事を参考に子育てしているから、かなり関係あると思う。(女性、高卒、小学生の頃)

部署内に、年上の上司や、年のはなれた(年上の)部下がいて、とても人間関係の構築に悩んだ。タテとヨコの人間づきあいの仕方の違い、というものの経験が役立っている。(男性、大学等卒、中学生の頃)

パレ一部に入室しとても上下関係がきびしく、敬語やあいさつなど今につながる事を学べました。社会に出て敬語とあいさつに最低限のマナーなので今になって思えば、役に立っているなと思います。(女性、高卒、中学生の頃)

くじけそうになっても、なぜ看ご師になったのかという原点を再確認することで、また頑張れるから。(女性、大学等卒、高校生の頃)

今になって、そういえば高校で教えてもらったマナーだなと思うことがある(男性、大学等卒、高校生の頃)

【最終学歴以外を現在の職業生活に関連のある頃と答えた人の自由記述：専業主婦】

今は専業主婦として家のことを主にやっているので、昔母親に教えてもらった家事が役立っている。(女性、大学等卒、小学生の頃)

子育て中の主婦として、今まで経験したことはすべて役に立っていると思う。特に、兄弟の面倒を見ていたことは役に立っている。しかし、学校生活という点に限定すると、具体的にはうかばない。(女性、大学等卒、小学生の頃)

子育てをする中で子供がどのように接すると喜ぶか、などわかっていて育てやすい。(女性、高卒、中学生の頃)

現在は主婦なので何も仕事はしてないけれど、子供2人を育てるのに、昔、保母さんになりたかったので少し関係があると思った。(女性、高卒、中学生の頃)

学生時代の体験や生活において学んだマナーや日常の常識、人との関係を築いていく上で重要なことなどが、現在子育てや主婦としての生活において役立っていると思う。(女性、大学等卒、高校生の頃)

大学に入って卒業するまでに結婚、出産を経験し、就職や進学することもなく、そのまま専業主婦になったので、大学に入ったことが大きな別れ道になったと思う。(女性、大学等卒、高校生の頃)

【最終学歴以外を現在の職業生活に関連のある頃と答えた人の自由記述：無職(求職中)】

もっと若い頃に自分の適性に気付いていれば大きく変わったと思う。(男性、大学等卒、小学生の頃)

自分が後々の進路を選ぶ、大きな基礎になったと思う。もし小学校の頃、授業がしぼりのあるものであったり、そもそも軽視されてカットされていたら、絶対に今の自分の価値感は無かったと思うので。(女性、大学等卒、小学生の頃)

子どもの頃に受けた心の傷は、余程のことがない限り克服することができません。特に対人関係は、ダメージが大きく、社会人になっても、世間から距離を取りたいと思ってしまうことが多いです。(女性、大学等卒、小学生の頃)

ものづくりの楽しさが分かるようになった(男性、高卒、中学生の頃)

部活で椎間板ヘルニアになり、現在も長時間立っているのが大変。よって働ける(就ける)職業の幅がかなり狭まった。(男性、大学等卒、高校生の頃)

【最終学歴以外を現在の職業生活に関連のある頃と答えた人の自由記述：無職(何もしていない)】

やりたいことが見つからなかった。(男性、高卒、小学生の頃)

最早、永久に真っ当なホワイトカラーとして働いて行ける能力が自分にはなく、病んだ体で他人に迷惑をかけ続け、いずれ下らない死に方をすることをよく理解出来た。中学時代に負った傷が、永遠に心をむしばみ続け、それを治す術はない。少なくとも、2度と普通の人、同年代の人間のような職に就き、働くことはないだろう。(男性、大学等卒、中学生の頃)

自らの精神状態を管理できなかった自分の責任ではあるけれど、不登校になったことでほぼ決定していた大学の希望学部・学科への内部推薦が取り消されて、同時にずっと追いかけていた将来の夢がつぶれてしまったので未来を考えるのが嫌になった。(男性、大学等卒、高校生の頃)

して「最終学歴」以外を選択する傾向が高くなるのではないかということである。だが、重要なことは、「無職」だから過去を否定的に捉えているというような解釈をすることではなく——そのような状況に置かれた「個人」の問題と捉えるのではなく、同じようなライフコースを辿ってきたはずなのに過去をそのように解釈せざるを得ないその背景——現在の「社会」が抱える問題との関連で、「個人」の問題を考えることであるように思われる。なぜならば、「現在」が変われば「過去」の解釈もまた異なるものになり得るからである。

以上、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」以外を選択した、言わば少数層の特性やその背景を「質」的に検討することで見出された「キャリア教育」の課題を提示する。第1に、誰もがスムーズに職業生活に移行することを前提とせず、そこから漏れた人たちの問題を、「社会」との関連で捉え過度に「個人」の問題として帰責しないことが挙げられる。それに関連して、第2に、職業体験や職業に関する知識、職業生活において必要とされるスキル、働くことはどういうことかといった点の教授と同時に、学生のような《キャリア教育》の経験を有意味に紡ぎあげていくような支援、換言すれば、固着した過去を解きほぐし、再構成して自己理解を促していく支援が課題として挙げられる。そのためには学校時代のみならず、継続的な支援が求められていると言えるのではないだろうか。

8. まとめ

本章は、自由記述データを用いて、「現在の職業生活に関係する出来事」および「もっとも関係する時代」、それらを想起する「現在の状況による過去の意味づけの異同」を検討してきた。これらの分析は自由記述というデータの特性上、限定的なものかもしれない。だが、計量的な分析では扱うことが難しい回答者の主観的な意味世界の分析を通して幾つかの知見と課題が得られた。最後に、本章の検討から得られた知見と課題を提示しよう。

まず本章の検討から得られた知見についてである。第一に自由記述の内容の時代的変遷の分析を通して、職業生活に関係する各時代における基本的な事柄を見出したことである。具体的には①関与する他者（【友達】【先輩】など）や活動（【クラブ】【部活】【アルバイト】【サークル】など）の幅の広がり、②同一の語句の意味内容の変遷——【友達】【友人】は遊び仲間から相談相手へ、【授業】から理解できる「キャリア教育」は職業について体験・理解する機会から職業上有益なスキルの獲得へ、職業意識（【自分】）は理想（なりたいこと）から現実（できること）へ——を理解した。

第二に、職業生活を営む現在から学校時代の経験を想起した際に、授業としての「キャリア教育」も一定の記述があるものの、人間生活を営む上での基礎的なルールの学習である【活動】と職業生活に結びつく社会的なルールの教育的効果を有している【アルバイト】といった《キャリア教育》がより「現在の職業生活に関係した出来事」として結びつく傾向にあることを明示した点である。ここから学校時代のキャリア教育を「キャリア教育」と《キャリア教育》との双方から分析する視点の有効性が見出されたと思われる。

第3に、「現在の職業にもっとも関係した時代」について①学歴を問わずに約70%の人が《キャリア教育》(【アルバイト】【就職])と「キャリア教育」(【就職])を経験した「最終学歴」を選択する一方で、②「現在の身分」によっては、「最終学歴」を選択する割合が低下するという事実から、「就職」という経験は、その結果によっては過去の意味づけを変容させる人生の転機となっているという記憶の現在性・社会性(cf: M. Halbwachs)との関連を明らかにした点である。補足するならば、①の点からは、「最終学歴」時点におけるキャリア教育の重要性が理解できる。また②の点からは、「正社員」「非正社員」「無職(求職中)」と「専業主婦」「無職(何もしていない)」との間に存在する「労働市場との断絶」という分水嶺による差異が、「専業主婦」を除けば、前者と比較したときに後者は過去を否定的に捉え、現在の問題の原因を過去のある時代の出来事に帰責し、「最終学歴」以外の時代を選択する傾向が高まることから理解できた。だが、いずれの点も新卒一括採用という日本型雇用システムによる人生選択の機会の希少性という問題を浮き彫りにしているように思われる。

次に上述した知見から導かれる「キャリア教育」の課題についてである。第一は、「キャリア教育」が「社会」の変化に対応していかなければならないという点である。本章で分析した自由記述の内容は、回答者が経験してきた様々な過去の出来事の中から選択的に構造化された自己物語(浅野, 2001)として理解できるが、その内容は、今日の就職活動において頻繁に語られる内容——「アルバイト」「サークル」「ボランティア」「ゼミ」などと類似していることは明らかである。であるならば、「求められる人材像」の変化とともに就職活動において説得的に受容される語りの内容が変容していくのに対応して、「キャリア教育」は《キャリア教育》の経験の中から有意味な事柄を引き出していく役割が求められるだろう。そのためには今日流通している「就職」や「職業」という文脈における説得的な語りの形式および内容の歴史的特殊性の把握が重要となると思われる。

この点と関連して第二に、「キャリア教育」と《キャリア教育》とをどのように結び付けていくのかという点である。本章で検討したように学校時代のキャリア教育は授業としての「キャリア教育」のみで成り立つわけではなく、学生の自主的な行動による《キャリア教育》からも成り立っていた。この事実を認識するならば、「キャリア教育」は学生が、①《キャリア教育》を経験する基盤としての役割、②《キャリア教育》の経験の解釈に対する支援を果たしていくことが重要となるだろう。なぜならば、特に「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」以外を選択した人たちは、「キャリア教育」と《キャリア教育》とを巧みに接合させ、過去を再解釈するのではなく、過去を否定的に捉え、現在の問題を過去に帰責させていたためである。それゆえに、「キャリア教育」を通して彼/彼女らが肯定的に解釈していない《キャリア教育》や認識していない《キャリア教育》を有意味に紡ぎあげていくような支援を行っていくことが「キャリア教育」の課題であると思われる。

第3に学校教育における「キャリア教育」の効果を測定することの困難という問題がある。なぜならば、「キャリア教育」が有益であったかどうかや過去の経験をどのように意味づける

か、あるいは想起するか否かは、想起する回答者の現在の状況に大きく依存してしまうため、「キャリア教育」の効果は、常に不安定かつ不確定な状態に置かれている。さらに回答者の現在の状況は、社会の経済状態とそれに伴う雇用の問題と大きく関連する以上、「個人」的な問題ではなく、「社会」的な問題と通底している。したがって、「個人」の問題としてだけでなく、「社会」の問題とも関連させて「キャリア教育」の在り方を模索していくこと、ならびに「キャリア教育」の困難を学校教育の問題だけではなく「社会」の問題として捉え、その困難と向き合っていくことが肝要となるだろう。

【引用文献】

浅野智彦, 2001, 『自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ』勁草書房.

Berger, P. L., 1963, *Invitation to Sociology: A Humanistic Perspective*, Doubleday Anchor Books.

(=1995, 水野節夫・村山研一訳『社会学への招待』, 新思索社.)

Halbwachs, M., 1925, *Les Cadres Sociaux de Mémoire*, Paris : P. U. F. (=1992, Coser, L, A, tr., *On Collective Memory*, Chicago : University of Chicago Press.)

————, 1950, *La Mémoire collective*, Paris : P. U. F. (=1989, 小関藤一郎訳, 『集合的記憶』, 行路社.)

高橋正樹・岸野洋久, 2001, 「思い出と持続の置き換わり——ライフイベント分析からの試み」『理論と方法』16(1) : 47-60.

角田隆一, 2004, 「現代若者にとって『最も影響を受けた出来事』とはどのようなものか」、『都市的ライフスタイルの浸透と青年文化の変容に関する社会学的分析』 : 257-273.

第8章 労働行政におけるキャリア教育の推進に向けて

本章では、本報告書の各章の分析結果から、今後のキャリア教育推進に向けて注目される事項を要約し、労働行政におけるキャリア教育推進施策等について若干の示唆を行う。

1. キャリア教育の推進に向けて注目される事項

本調査研究の目的は、若者の職業生活の視点から学校段階のキャリア教育にアプローチし、学校段階のキャリア教育と学校卒業後の就労行動、職業生活との関係について分析することにより、学校卒業後のキャリア形成に効果的なキャリア教育推進の検討を行うことにあった。

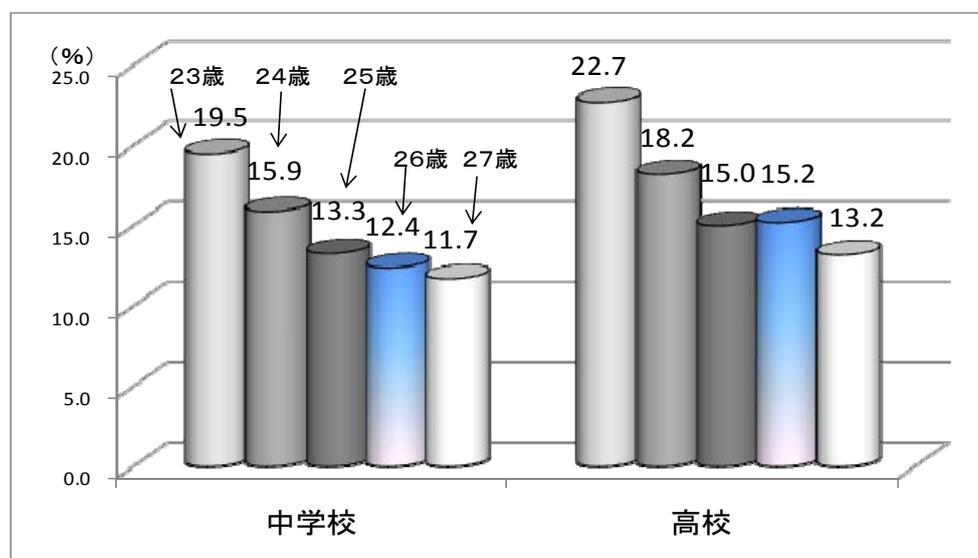
第2～7章の分析により様々な知見が得られたが、学校段階のキャリア教育推進に向けて特に次の事項に注目したい。

(1) キャリア教育の記憶と評価

学校時代におけるキャリア教育についての記憶は、中学校での学習を覚えている（「かなり覚えている」+「やや覚えている」の合計。以下同じ。）者が31.5%、高校での学習を覚えている者が42.8%、キャリア教育が現在の職業生活に役立っていることについての評価は、中学校での学習が「役立っている（「かなり役立っている」+「やや役立っている」の合計。以下同じ。）とした者が18.1%、高校での学習は同27.3%であった。

調査対象者は中学校を卒業してから8～12年、高校を卒業してから5～9年経ているが、年齢別にみると中学、高校のキャリア教育ともに、年齢が若いほど覚えているとする割合が有意に高かった。この背景には、キャリア教育を受けてからの年数経過の違いがあることと

図表8-1 年齢別にみた「キャリア教育を覚えている-役立っている」者の割合



(注) 第2章の図表2-5より作成。

ともに、本調査対象者がキャリア教育の発展期に中学・高校時代を過ごした者であることから、年齢が若い者ほど学校でのキャリア教育が発展していったことの影響があると考えられる。

注目したいのは、「覚えている」とする割合と「役立っている」とする割合の差が、年齢が高くなるほど小さくなる傾向があることである（図表8-1）。

「覚えている」と「役立っている」という評価の関係については、キャリア教育が「役立っている」と評価した者の方が評価しない者に比べて、中学、高校のキャリア教育の各内容を記憶している割合が高かった。特に高校のキャリア教育についての両者間の記憶の差は、ほとんどの内容に関してキャリア教育が「役立っている」と評価した者の方が評価しない者に比べて、統計的に有意な水準で高かった（第2章 図表2-19）。

このように、記憶していなければ役立っているとの評価はなされにくいのであり、また記憶している割合とキャリア教育を評価する割合の差が年齢とともに小さくなる事実を勘案するならば、まずは、キャリア教育の内容が職業生活を送るようになってからも記憶に留まるようなものであるか否かが、キャリア教育の有効性の1つの指標となり得るのではないかと考えられる。

そこで、キャリア教育の各内容の記憶うち、「覚えている」との記憶、「役立っている」との評価に影響しているものをみると、キャリア教育について「覚えている」ことに影響を及ぼす内容は、中学、高校共通して「職業興味や職業適性などの検査」（自己理解）、「職業や仕事を調べる授業」、「職業人や地域の人に話を聞く授業」（仕事理解）、「進路の目標や計画を考える授業」（意思決定）の記憶であった。さらに高校では「ボランティアなどの体験活動」（啓発的経験）、「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」の記憶が加わった。

図表8-2 キャリア教育の記憶、評価に影響を及ぼすキャリア教育内容

| 覚えていることに対して影響のある キャリア教育記憶の内容 | | 役立っているとの評価に影響のある キャリア教育記憶の内容 | |
|---------------------------------|--------------------|---------------------------------|----------------------|
| 中学 | 高校 | 中学 | 高校 |
| 職業興味や職業適性などの検査 | | | |
| 職業や仕事を調べる授業 | | | |
| 職業人や地域の人に話を聞く授業 | | | |
| | ボランティアなどの 体験活動 | | |
| | | 進路に関する個別相談やカウンセリング | |
| 進路の目標や計画を考える授業 | | | |
| | | | 就職活動の進め方や 試験対策の授業 |
| | コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | | |

（注）第2章の図表2-21から、1%水準で有意なものを記載した。

これらのうち、中学では「職業人や地域の人に話を聞く授業」（仕事理解）の記憶が、高校では「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」の記憶の影響が一番大きかった。また、キャリア教育が「役立っている」という評価に影響するのは、中学、高校共通して「進路に関する個別相談やカウンセリング」、「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」、高校での「就職活動の進め方や試験対策の授業」の記憶であった。「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」の記憶は、中学、高校のキャリア教育を「役立っている」と評価することに最も大きな影響を与えていた（第2章 図表2-21、図表8-2）。

キャリア・コンサルティング技法等に関する研究会（2001）で示されたキャリア形成の流れの6段階（自己理解、仕事理解、啓発的経験、キャリア選択に係る意思決定、方策の実行、新たな仕事への適応）のうち、キャリア教育を「覚えている」ことに影響を及ぼす内容として、自己理解、仕事理解、啓発的経験、意思決定に関連する内容が見出され、キャリア教育を受ける者の記憶の面からも、具体的な就職活動（方策の実行）前の自己理解、仕事理解、啓発的経験、意思決定に係る各学習の重要性が確認できる。それとともに、長く記憶に留まり後に役立ったとされるように、これらの内容をいかに実施するかが課題となる。

また後に「役立っている」と評価されることに及ぼす影響が大きい内容は、「進路に関する個別相談やカウンセリング」、「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」、「就職活動の進め方や試験対策の授業」のように進路選択の意思決定やそれを実行するためのノウハウ等に直接関係するキャリア教育の記憶であった。進路選択、就職活動に関する相談指導について、記憶に残るよう具体的にきめ細かく実施することの必要性を改めて示す結果となった。また、キーコンピテンシーとして指摘されることの多いコミュニケーション能力や社会人としてのマナーの重要性が、キャリア教育を受ける者からも指摘されたと言える。

さらに、最終学歴に近い学校種に通っているときに将来の進路や職業について最も学習したとする傾向が強かったことも注目される（第2章 図表2-20）。これは、高卒者では大学・短大・高等専門学校卒業者に比べて、中学の「職業興味や職業適性などの検査」、「職場体験学習やインターンシップ」、高校の「職業興味や職業適性などの検査」、「職業や仕事を調べる授業」、「職業人や地域の人に仕事の話聞く授業」、「労働法（働くことに関する法律）に関する授業」を覚えている者の割合が有意に高く（第3章 図表3-2）、高校中退者では中学の「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」、「労働法（働くことに関する法律）に関する授業」を覚えている者の割合が高卒以上の者に比べて有意に高い（第6章 図表6-10）という、学歴別にみた各学校段階のキャリア教育内容の記憶の面からも裏付けることができる。もちろん、キャリア教育は「小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」（中央教育審議会答申（1999））が、最終学歴直近の学校段階におけるキャリア教育は、総仕上げとしての意義が大きい。キャリア教育を受ける最後のチャンスとなる学校段階で最も学習しているからこそ、各内容が記憶に残りやすいのであり、その重要性を再認識する必要があると言えよう。

(2)現在の職業生活とキャリア教育

(労働市場における困難経験とキャリア教育に関する認識)

本調査結果からは、現在の職業生活と学校段階のキャリア教育の記憶及び役立っているとの評価の間には、学校卒業時における就職活動に成功し、「直線的」なキャリアを歩んだ者ほど、キャリア教育の記憶があり、役立っているとの評価が高いという興味深い結果が得られた。

具体的には、就職活動をした者の方が、就職活動をしなかった者より中学、高校のキャリア教育を「覚えている」、「役立っている」と回答し、就職活動をした者の中では第一希望に就職した者で、中学、高校のキャリア教育を「覚えている」、「役立っている」と回答する割合が一番高かった(第6章 図表6-7)。また、労働市場への参入時の就業状況及び参入後のキャリアの状況別にキャリア教育の記憶と評価をみると、学校卒業直後の就業形態が正社員・正職員の者は非正社員・非正規職員に比べて、転職経験のない者は転職経験のない者に比べて、中学、高校のキャリア教育を「覚えている」、「役立っている」と回答した割合が高かった(第3章 図表3-3、図表3-11)。さらに非正社員期間が短い者ほど、中学、高校のキャリア教育を「覚えている」、「役立っている」と回答し(第3章 図表3-7)、現在の収入が高い者ほど、中学、高校のキャリア教育を「覚えている」、「役立っている」と回答する傾向があった(第4章 図表4-5、図表4-6)。

これらをもって、キャリア教育をキャリア形成に活かせていない者が、労働市場で困難な体験をしていると結論づけるのは早計に過ぎよう。有業者のうち前職あり(転職経験者)の者の占める割合は、2007年の就業構造基本統計調査によれば、48.2%(5年前に比べ0.5%ポイント上昇)を占め、長いキャリアの中で、多くの者が離転職を経験している現況にある。このような状況において、就職活動をしなくても学校卒業後希望のところに就職できなかった、あるいは転職を経験したという、キャリア形成上の困難さを経験した者において、キャリア教育を記憶している割合が低く、評価も高くないことは、むしろキャリア教育の反省材料として捉える必要があるのではなかろうか。

一方で、学校卒業直後に無業または非正規就労であった者、転職経験がある者、非正規就労の経験がある者であってキャリア教育が「かなり役立っている」と評価した者においては、現在の収入が1ヶ月15万円以上である割合が、「やや役立っている」以下の評価をした者に比べて相当程度高かった(第4章 図表4-20~22)。このように、「直線的」なキャリアを歩まなかったもののキャリア教育を「かなり役立っている」と高く評価する者では、一定の収入を得られていることから、キャリア教育は、労働市場において困難を経験した者に対しても確かな影響を与えていると考えられる。

1999年の中央教育審議会の答申においてキャリア教育が「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」と明記された後、2008年の中央教育審議会の答申において

は、「将来子どもたちが直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応」するために「キャリア教育を充実する必要がある」とされた。下村（2009）が指摘するように「何か決まり切った一本道をいかに選ぶかではなく、より根本的に、自分が進む道をいかに切り開くかが重要」なのであり、キャリア教育の目的は、環境変化の中でキャリアを形成していく力を身につけることにあると言える。キャリア教育とは、労働市場において遭遇する様々な困難局面においても、キャリアを形成していくための基礎となる力を育み培う教育であり、労働市場において困難を経験した者においても、キャリア教育の内容が記憶されており、後に役立ったと評価されることが期待されるものである。

（就労意識や学校時代の生活とキャリア教育に関する認識）

職業生活や人生に対する考え方等の視点からキャリア教育に関する認識をみると、中学、高校のキャリア教育を「覚えている」程度が高い者ほど、また中学、高校のキャリア教育が「役立っている」と評価する程度が高い者ほど、現在、過去の職業生活への満足感が高く、将来の目標が明確であるとともに、自尊心が高かった。「（これまでの人生は）努力によって決まってきた」とする考えについても、中学、高校のキャリア教育を覚えている程度が高い者ほど、また高校のキャリア教育が役立っていると評価する程度が高い者ほど、賛同していた（第5章 図表5-1）。

現在の就労意識とキャリア教育に関する評価の関連モデルをみると、高校のキャリア教育が「役立っている」との評価が職業生活に対する満足感、生活全般に対する満足感、将来の目標等の明確さに正の影響を与えており、中学のキャリア教育を「覚えている」ことが将来の目標等の明確さに正の影響を与えていた（第5章 図表5-14）。職業生活や生活全般、将来の目標設定に対するキャリア教育の正の影響の構図が明らかになった。

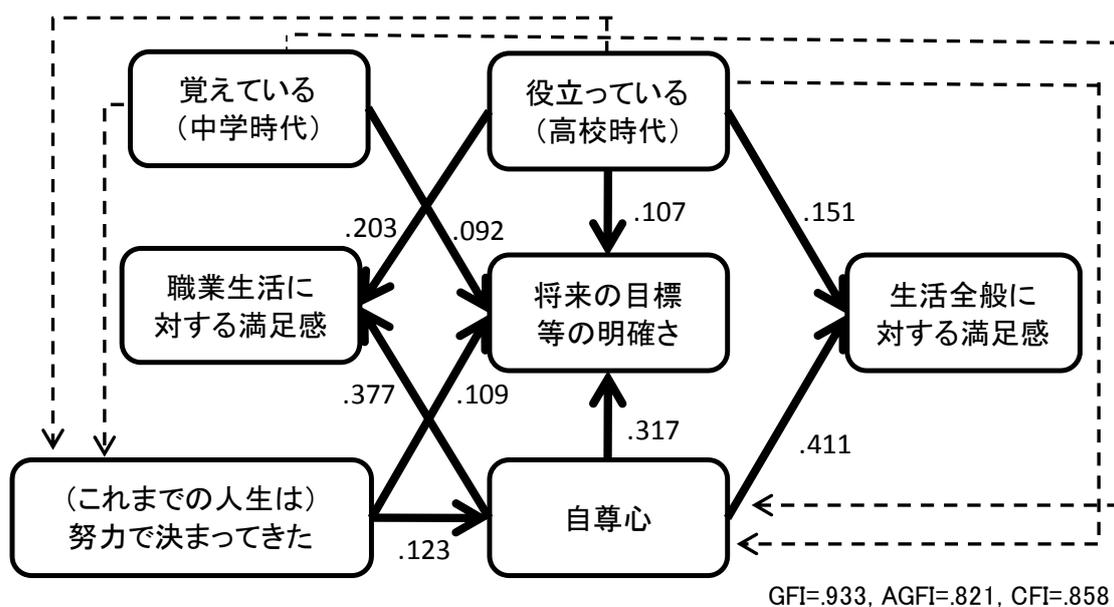
一方、第6章でみたように、学校時代の学校生活とキャリア教育に関する認識の関係については、総じて、キャリア教育が役に立っていると肯定的に評価する者の方が、学校に適応的であり、学校生活をポジティブに送ったと回答していた（第6章 図表6-1）。また、中学時代の成績が「下のほう」の者では、特にキャリア教育に対する評価が低くなった（第6章 図表6-5）。さらに、キャリア教育に対する評価が低い者ほど、学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っていると評価する者の割合が低かった（第6章 図表6-11）。このように、学校生活に適応し積極的に学校生活を送ることができなかつた者、成績が下位であった者からは、学校時代のキャリア教育について良い評価が得られない傾向があり、キャリア教育に対する評価が低い者ほど学校時代に学んだ知識が仕事に役立っていると考えられていないことは重く受け止める必要がある。

しかしながらこれらの結果は、逆にキャリア教育による新たな体験や刺激が、学校生活を積極的に送る方向に機能した場合、学校生活や職業生活に好影響をもたらす可能性を示していると考えられることもできる。

加えて、先の関連モデル図で注目されるのは、職業生活に対する満足感、生活全般に対する満足感、将来の目標等の明確さに与える自尊心の正の影響の大きさと、自尊心が「(これまでの人生は) 努力できまってきた」という考え方に正の影響を受けていることである。

自尊心と中学、高校のキャリア教育の記憶及び中学、高校のキャリア教育が役立っているとの評価の間、「(これまでの人生は) 努力によって決まってきた」という考え方と中学、高校のキャリア教育の記憶、高校のキャリア教育が役立っているとの評価との間には、各々1%の水準で有意な相関が見出されている(第5章 図表5-1)。全体としては自尊心が低い非正規就労者においても、キャリア教育が「かなり役立っている」との認識を持っている者では、自尊心は高いとの結果も見出された(第5章 図表5-7)。これらのことは、先のモデル図が図表8-3のように発展することにより、キャリア教育が自尊心や人生に対する考え方に影響を与える可能性を示唆していると考えられる。

図表8-3 キャリア教育の記憶、評価と現在の就労意識等への評価の関連モデルの発展



(注) 第5章の図表5-14に加筆。

キャリア教育がこのような機能すれば、自尊心を高める効果をもたらし、職業生活及び生活全体に対する満足感、将来に対する明確な目標の設定に二重の好影響を及ぼすものとなる。

キャリア教育が、職業の実態や職業生活への理解、進路選択の決定を促すことに留まらず、教科の勉強や学校生活を積極的に送ることへ影響を与え、努力することを促すとともに自尊心を高めるような内容となることの重要性を指摘しておきたい。

例えば下村(2009)は、「アメリカの職場体験学習では、いかに学校の勉強が大切にされているかを教えることも、大きな目的のひとつ」と指摘し、キャリア教育から教科の勉強への循環の視点を示している。キャリア教育により将来のキャリアを考え、それが今なすべき

ことを考え、積極的な学校生活を送ることにつながるという、好循環が形成されることが期待される。

また矢野（2009）は、大学工学部出身者を対象とした教育効果の分析から、「学び習慣は、大学教育に熱心に取り組むことによって培われている」こと、「卒業時の知識能力は、直接的に所得の上昇に結びついていない」こと（むしろ小さいながらマイナスの効果）を指摘し、学校時代に学びの習慣を身につけ、卒業後もそれを継続することによる職業生活での知識の獲得により所得が上昇することから、「学習は、継続し、維持することによって、力を発揮する。」と職業生活へと続いていく「学び習慣」の重要性を指摘した。キャリア教育は、この「学び習慣」を教科とは違う側面から刺激することができるのではないかと考えられる。

キャリア教育はすべての学生・生徒に必要なことは言うまでもないが、キャリア教育を最も必要としているのは、実は学校生活への適応が困難であったり、成績がふるわなかったりして、将来の見通しが持てないでいる若者たちである。しかしながらキャリア教育に対する認識は、学校生活の送り方や教科の成績等と独立してある訳ではないという現実が本調査から明確になった。当然、キャリア教育の基礎としての教科学習、学校生活の充実の重要性が指摘される場所であるが、一方キャリア教育には、すべての学生・生徒に、教科の勉強とは違う側面から学びへの刺激を与えることができる可能性を内在している。

その可能性を現実のものとする方策の一つとして、教育振興基本計画（2008）等において提示されている、学校外の多様な資源との連携による教育支援を一層有効に機能させることがあると考えられる。第7章の自由記述の分析からは、学校内外の経験の広がりの中で職業生活と結びつく社会的なルールやキャリア形成意識等を体得していることが示されたが、キャリア教育は、学生・生徒のキャリアに関連するこのような自主的な行動の基盤となる。併せてキャリア教育においては、学生・生徒のキャリアに関連する自主的な行動や体験の中からキャリア形成の力を引き出し、統合し、高めるとともに、キャリアに関連する自主的な行動が少ない者に対しては、体験を補填する役割も担う必要がある。このようなキャリア教育を推進するに当たっては、教育行政と労働行政等の関係行政が緊密に連携する中で、学校内の資源だけでなく学校外の資源も有効に活用して、多角的な視点から実施することが効果的と考えられる。これにより、キャリア教育から教科や学校生活の適応への好循環が促進されることも期待したい。

2. 労働行政の担うキャリア教育推進施策への示唆

(1)労働行政におけるキャリア教育推進の意義

労働行政においてキャリア教育を推進する意義について、キャリア・コンサルティング研究会（2010）は、「川上対策としての失業、フリーター・ニート状態の発生・長期化の未然防止」を指摘する。矢野（2009）の言うように、「キャリア教育の関心は、変化する産業社会における就業可能性にある」ことから、将来の労働市場における失業等の長期化を未然に防止

するため、労働行政がその得意とする分野からキャリア教育に貢献することは重要であり、必然のことであると言える。

このため労働行政においては、従来から公共職業安定所と学校との連携により職業指導を推進してきたが、「キャリア教育に資し得る資源」としてのキャリア・コンサルティング機能についても、キャリア・コンサルタント5万人計画の達成やキャリア・コンサルティング技能検定制度の導入等により、量と質の量側面から整いつつある。

キャリア・コンサルティング研究会（2009）は、「教育機関は、・・・（中略）・・・本人の適性や生活環境等について最も把握し得る立場で、本人のやる気・意欲を喚起し、能力や適性に気づかせるようなキャリア教育プログラムを提供することが望まれる。その際には、労働市場、企業の視点も導入した上で、プログラムを実施し、その効果について評価することが重要である。」とキャリア教育プログラムにおける労働の観点の重要性を指摘した。労働市場や企業の視点に関する専門性を有するのは労働関係機関（者）であり、教育機関と労働関係機関（者）との適切な役割分担と連携により、前節で指摘した、学校生活・教科－キャリア教育との好循環がもたらされ得ると考えられる。

本調査結果に基づき、教育機関と労働関係機関（者）の役割分担と連携に関する具体的な内容としては、次項のようなものが考えられる。

(2)労働行政の特徴を生かしたキャリア教育の推進

(自己理解促進について－職業適性検査等の活用)

本調査研究結果によれば、職業に関する自己理解を促進するための職業興味や職業適性などの検査の経験は、中学、高校ともにキャリア教育全体を覚えていることに対して大きな影響をもたらしていた。また、高校時代のキャリア教育が役立っていると回答した者においては、キャリア教育が役立っていないと回答した者に比べて、職業に関する自己理解を促進するための職業興味や職業適性などの検査の経験を覚えている割合が有意に高かった。教科のテストとも知能検査とも違う、これら職業適性検査等の体験は、中・高生にとって新鮮な体験であったことが推測される。

この新鮮な体験をキャリア形成の意欲喚起へとつなげていくことが重要である。

労働行政においては、厚生労働省編一般職業適性検査、職業レディネス・テストを学校に提供しているところであるが、これらの職業適性検査等をキャリア形成に対する意欲の喚起と促進につなげるためには、教育行政との連携を一層密にし、キャリア教育に活用できる検査等情報を提供するとともに、必要に応じ、学校の教員等が検査の意味を理解し、結果を正しく解釈して学生・生徒にフィードバックすることができるような支援を行うことにより、学校における検査実施前、後の学習の充実に貢献することが必要である。

職業適性検査等や職業ガイダンスツールを研究開発している(独)労働政策研究・研修機構としても、学校での活用も意識した研究を行い、成果や情報を提供することにより、キャリ

ア教育の推進に一層貢献する必要がある。

(仕事調べによる仕事理解について—地域の实情に即した職業情報の収集と提供)

本調査研究結果によれば、職業や仕事を調べる授業についても、中学、高校ともにキャリア教育全体を覚えていることに対して大きな影響をもたらしていた。さらに高校時代のキャリア教育が役立っていると回答した者においては、キャリア教育が役立っていないと回答した者に比べて、職業や仕事を調べる授業を覚えている割合が有意に高かったところである。

職業や仕事の情報については、まずは各職業に関する標準的な内容が提供される必要があるが、これに加えて、居住する地域にある職業や労働市場情報が提供されることにより、学生・生徒が、職業を現実のものとしてより身近にとらえることができるようになり、生きた知識として記憶に留まるようになると考えられる。

地域の職業、労働市場に関する情報に最も詳しいのは、地域の労働行政機関である。このため、公共職業安定所等の労働行政機関においては、地域の労働事情や職業情報を学生・生徒にわかりやすく加工・編集して提供することが肝要である。これら情報の提供は、労働行政において実施されている高校生に対する職業ガイダンスをはじめとして、労働行政機関と学校の教員等との様々な連携機会を通じて積極的に行うことが望まれる。

(職業の世界に接することによる仕事理解と啓発的体験について—学校生活の充実へと循環するような職業人の講話や職場体験等)

本調査研究結果から、職業人や地域の人のお話を聞く授業については、中学、高校のキャリア教育を覚えていることに対する影響が大きく、また役立っていると認識にも大きな影響を及ぼしていることが分かった。現在、労働行政においては、企業で働く者などを講師として中学、高校等に派遣することにより、職業や産業の実態、働くことの意義、職業生活等に関する理解と生徒自ら考えることを促進するためのキャリア探索プログラム、高校生を対象としたジュニア・インターンシップが行われている(第1章 図表1-3)。職業人の講話や職場体験等は、学生・生徒が職業の世界に直に接することができる数少ない機会である。特に中・高卒者にとって中学・高校時代のキャリア教育が重要であることは、本調査結果から明らかになったところであり、中高生を対象とした職業人の職業講話や職場体験は、地域労働情勢に関する専門機関であり、企業との接触機会が豊富な労働行政の一層の貢献が望まれるキャリア教育分野である。

その際、矢野(2009)の言う「学習の継続」や、亀山(2009)の指摘する「職業キャリアにとどまらない、生活全般にかかるライフ・キャリアを視野に入れた包括的能力育成」の観点が加わることが望まれる。職業人の職業講話や職場体験は、学校からの連続過程の中でどのように職業キャリアと人生キャリアを築いていくのかを事実として伝えることができる。この事実が、キャリア教育から学校生活や教科の勉強へ、さらにキャリア形成へという好循

環を促すと考えられる。このような循環が生まれるよう、労働行政においては、学びの連続としての職業及び人生キャリアの形成が銘記されるよう効果的なプログラムを工夫し、実施後のフォローアップを行う等、積極的な取り組みが期待される。

(意思決定支援について—キャリア・コンサルティングの充実等)

教育機関領域におけるキャリア・コンサルティングについては、キャリア・コンサルティング研究会報告(2010)において、「多くのキャリア・コンサルタントにとって、中学校、高等学校のキャリア教育は、量的にも質的にもいわばフロンティア、これからの本格的活動が期待される領域と言えるものである。」との指摘がなされたところである。

本調査研究結果をみると、「進路に関する個別相談やカウンセリング」の記憶は、中学、高校のキャリア教育が役立っているとの評価に影響を及ぼしていた。1対1できめ細かな支援を行うことのできる個別相談やカウンセリングの重要性が本調査結果からも再確認されたとと言える。また様々なキャリア教育のメニューの中で、特にキャリア・コンサルティングは、キャリア形成に大きな影響を及ぼすことが本調査結果から明らかになった自尊心を高めるよう、学生・生徒を直接支援することができると考えられる。

このように個別相談やカウンセリングの影響力と重要性は大きいですが、1対1で行うが故に、相談やカウンセリングを担う人材の力量が非常に重要である。キャリア・コンサルティング能力については、技能検定制度がそれを担保するものとなるが、さらに教育機関領域における実践力を鍛えることができるよう、キャリア・コンサルタント個人及び関係団体の研さんを支援することが望まれる。

さらに労働行政においては本年度、蓄積されてきたキャリア・コンサルティングの専門性を活かして高校教員、キャリア・コンサルタント、その他学校内外でキャリア教育に関わる人材を対象として、キャリア・コンサルティングの理念・手法を活用し、学校現場におけるキャリア形成支援を担う人材を育成するキャリア教育専門人材養成事業(第1章 図表1-3)が開始される。本調査結果から、キャリア教育において様々な局面に遭遇する中でキャリアを形成していく力を培うものであるという視点の重要性を強調してきたところであり、当該事業が学校に適応が困難であったり、成績がふるわない者を含め、すべての学生・生徒に対して、職業や人生に対する取り組み姿勢や学校の教科学習に対する好影響を与え、努力を促すとともに自尊心を高めることができるようなキャリア教育の企画・運用ができる人材の育成につながることを期待される。

(方策の実行支援について—具体的な就職活動ノウハウの提供)

就職活動を具体的に進める方策の実行に関する内容は、キャリア教育の最終段階となる。キャリア教育内容の記憶を学校段階別にみると、大学等での「履歴書の書き方や面接試験の練習」、「就職活動の進め方や試験対策の授業」は、半数近い者が記憶していた。また、「就職

活動の進め方や試験対策の授業」は、高校のキャリア教育が「役立っている」という評価に対して影響を及ぼす内容であった。

このように、就職活動に直結するキャリア教育の内容が記憶に残り役立つとの評価に影響を及ぼすことから、企業との接点が多い労働行政機関における就職活動支援に係るノウハウを積極的に学校に提供していくことは、キャリア教育の効果を高めるためにも必要であると言える。

短大、大学においては、設置基準が改正されたことにより、2011年から「大学（短期大学）内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整える」こととなった。労働行政においては、高校生に対する就職ガイダンスとして、就職活動の進め方等の説明がなされているところであるが、大学等におけるキャリア教育の推進に資するために、就職活動の進め方や履歴書作成といった分野において、公共職業安定所における職業相談等で培われたノウハウを整理し大学等へ提供していくことも検討されてよいと考えられる。

以上、キャリア形成の段階別に、本調査研究で得られた知見をもとに、労働行政の特徴を生かしたキャリア教育推進や貢献の在り方について検討した。

併せて、学校時代のキャリア教育から十分学べなかった者については、労働行政におけるキャリア形成支援が非常に重要な意味を持つことを本報告で重ねて指摘したことを付記しておきたい。学校時代のキャリア教育から十分学べなかった者に対する支援として、キャリア・コンサルティングや職業理解、自己理解等に関するガイダンスやセミナー、ジョブカードを活用した職業能力開発などのきめ細かなキャリア形成支援メニューが労働行政において常に用意され、充実されていくことが必要である。

小、中、高校の学習指導要領及び大学、短大設置基準の改正により、各学校段階でキャリア教育が本格的に推進される時代を迎えた。キャリア教育本格化時代においてキャリア教育を効果的に推進するためには、職業生活に対する影響や効果の検証という長期的な視点が求められる。本調査研究はそれに応えるために、職業生活とキャリア教育の関係にアプローチした初期的な研究であり、本研究で得られた知見は、学校から職業への円滑な移行を支援するために、労働行政をはじめキャリア教育関係行政共通の検討材料として提供したい。

キャリア教育が職業生活に及ぼす長期的な効果をより深く検討するためには、実際に行われているキャリア教育の内容に関する詳細な分析や調査対象者の年齢の拡大、学校卒業後のフォローアップ等課題は多い。今後とも、労働の視点からキャリア教育をとらえた調査研究を深め、キャリア形成支援の充実・発展に貢献していきたいと考えている。

【引用文献】

- 亀山俊朗 2009 キャリア教育からシティズンシップ教育へ？ 日本労働研究雑誌 No.583
（独）労働政策研究・研修機構 92-104
- キャリア・コンサルティング技法等に関する研究会 2001 キャリア・コンサルティング 技法等に関する調査研究報告書
- キャリア・コンサルティング研究会 2009 「キャリア・コンサルティング」研究会報告書
中央職業能力開発協会
- キャリア・コンサルティング研究会 2010 「キャリア・コンサルティング」研究会報告書
中央職業能力開発協会
- 下村英雄 2009 キャリア教育の心理学 東海教育研究所
- 矢野眞和 2009 教育と労働と社会 日本労働研究雑誌 No.588 （独）労働政策研究・研修
機構 5-15

補章1 学校時代のキャリア教育と地方の教育・労働指標との関連

1. 本章の問題意識

本章では、学校時代のキャリア教育と地方の教育・労働指標との関連を検討する。まず、学校時代のキャリア教育と地方の教育・労働指標との関連を検討する意義を述べる。

第1章で述べたとおり、従来から継続的に議論されてきたキャリア教育論の論点の1つとして、キャリア教育の効果測定の問題がある。そして、この問題については、たんにキャリア教育的な取り組みの前後でどのような意識変化があったかといった短期的なアウトカムの評価に止まらず、より長期的なアウトカムの評価に対する関心が高まっている。具体的には、キャリア教育的な取り組みによって、児童・生徒・学生の意識だけではなく、そこからさらに地域の教育や労働、経済に影響を与えることができるということが主張されるようになり、そのため、キャリア教育の効果を長期的な視点から考えてみようとする研究動向がみられるようになっている。

しかし、実際には、こうした問題関心はこれまでに十分な実証的に検討がなされている訳ではない。キャリア教育が最終的には一国の、または地域の教育・労働・経済に影響を与えるということは言えるとしても、その間には幾重にも媒介変数が介在しており、単純に教育・労働・経済の指標とキャリア教育との関連を実証的に検証することが難しいと考えられがちであることが、キャリア教育の長期的な効果の実証研究が進まない大きな理由の1つとなっている。

そこで、本章では、将来的にキャリア教育の長期的な効果を検討するための手がかりを得る目的から、ともかくも、本研究で得られた学校段階のキャリア教育に対する評価を各都道府県別の様々な指標と関連づけて分析し、学校時代のキャリア教育の長期的な効果に関する研究の端緒としての分析を行うこととした。

上記の問題意識に基づく分析のため、本章において学校時代のキャリア教育との関連性について検討した分析結果は、いずれも誤差が大きく、不正確な面が多く、問題を含んだ分析結果であることにあらかじめ留意していただきたい。にもかかわらず、補章としてここに分析結果を示したのは、不正確な分析結果でありながら、キャリア教育と地域の教育・労働・経済の大まかな関連性や結びつきが垣間見られたからである。

最終的に、本章で分析を行った結果、キャリア教育が地域の教育・労働・経済の各指標に影響を与えるというよりは、むしろ逆であり、地域の教育・労働・経済のあり方がキャリア教育の導入や定着に一定の方向性をもった形で影響を与えていることが示された。その意味では、期待されたようには、キャリア教育の長期的な効果測定に資する結果とはならなかった。しかし、地域のマクロな各種指標とキャリア教育との間には、何らかの関係があるということは、これまでにない数少ない知見であると思われる。

上述の点に留意して、以下に、具体的に分析結果を示していくこととする。

2. 学校時代のキャリア教育の評価の都道府県別の集計結果と社会生活統計指標

まず、都道府県ごとに、学校時代のキャリア教育を「覚えている」割合、「役立った」割合を求めた。図表補1-1はその結果である。概して言えば、「覚えている」「役立った」×中学・高校の4つの指標は相互に関連しており、1つの指標の値が全国平均と比較して高ければ、残りの3つの指標の値も高いという傾向はみられる。しかし、それ以外の傾向を読みとるのは難しかった。

図表補1-1 学校時代のキャリア教育の評価の都道府県別の集計結果

| | 覚えてい | | 役立って | | | 覚えてい | | 役立って | | | 覚えてい | | 役立って | |
|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|
| | ますか | いますか | ますか | いますか | | ますか | いますか | ますか | いますか | | ますか | いますか | ますか | いますか |
| | 中学 | 高校 | 中学 | 高校 | | 中学 | 高校 | 中学 | 高校 | | 中学 | 高校 | 中学 | 高校 |
| 北海道 | -0.20 | -0.05 | -0.09 | -0.06 | 石川県 | -0.15 | .04 | -0.03 | .01 | 岡山県 | -0.45 | -0.29 | -0.38 | -0.33 |
| 青森県 | -0.28 | -0.18 | -0.16 | -0.30 | 福井県 | .06 | -0.14 | -0.24 | -0.27 | 広島県 | -0.13 | -0.06 | -0.12 | -0.05 |
| 岩手県 | -0.03 | -0.14 | .13 | .15 | 山梨県 | .08 | -0.09 | .10 | .07 | 山口県 | -0.10 | .01 | .04 | .14 |
| 宮城県 | .01 | -0.06 | -0.14 | -0.05 | 長野県 | .35 | -0.02 | .12 | .05 | 徳島県 | -0.20 | -0.09 | -0.10 | -0.08 |
| 秋田県 | -0.06 | .16 | -0.11 | .07 | 岐阜県 | -0.04 | -0.07 | .07 | .02 | 香川県 | -0.13 | .14 | .04 | -0.01 |
| 山形県 | .36 | .06 | .14 | -0.08 | 静岡県 | .13 | .17 | -0.11 | -0.08 | 愛媛県 | .11 | .08 | .07 | .03 |
| 福島県 | .26 | .07 | .23 | .20 | 愛知県 | .10 | .01 | -0.03 | .00 | 高知県 | -0.31 | -0.41 | -0.10 | -0.15 |
| 茨城県 | .22 | .20 | .12 | .03 | 三重県 | .04 | .05 | .14 | .16 | 福岡県 | -0.04 | .02 | -0.04 | .01 |
| 栃木県 | -0.30 | -0.33 | -0.26 | -0.29 | 滋賀県 | .16 | .21 | .30 | .33 | 佐賀県 | -0.16 | -0.15 | -0.26 | -0.27 |
| 群馬県 | .26 | .12 | .08 | .05 | 京都府 | -0.05 | -0.05 | -0.06 | -0.04 | 長崎県 | .02 | .10 | .19 | .25 |
| 埼玉県 | -0.07 | -0.11 | -0.10 | -0.13 | 大阪府 | -0.10 | .03 | -0.13 | -0.01 | 熊本県 | .24 | .08 | .05 | .01 |
| 千葉県 | -0.05 | -0.17 | -0.13 | -0.17 | 兵庫県 | -0.04 | -0.02 | .02 | .07 | 大分県 | -0.11 | -0.03 | -0.01 | -0.04 |
| 東京都 | .15 | .11 | .12 | .07 | 奈良県 | -0.23 | .15 | -0.04 | .07 | 宮崎県 | .15 | .45 | .20 | .45 |
| 神奈川県 | -0.02 | -0.03 | -0.03 | -0.06 | 和歌山県 | .18 | -0.11 | .21 | .12 | 鹿児島県 | -0.04 | -0.09 | .00 | -0.07 |
| 新潟県 | -0.08 | -0.21 | -0.12 | -0.23 | 鳥取県 | .14 | .09 | -0.05 | -0.13 | 沖縄県 | -0.05 | .05 | .06 | .18 |
| 富山県 | .20 | .33 | .11 | .27 | 島根県 | .19 | .16 | .28 | .09 | 全国平均 | 2.52 | 2.86 | 2.31 | 2.55 |

※全国平均と比較して値がプラスの箇所を網かけにした。

各都道府県の集計結果からは、大まかな傾向を読み取ることが難しかったので、各都道府県の様々な統計指標との関連を検討することによって、キャリア教育の評価に対する地方差・地域差にアプローチすることとした。

まず、総務省統計局から公開されている「社会生活統計指標：都道府県の指標」から、キャリア教育と直接的・間接的に関連がみられる可能性のある97指標を取り出し、本調査の都道府県事の集計結果との関連を検討した。図表補1-2は、検討を行った97指標である。

これら97指標の指標に関して、調査回答者が中高生だった10年前のデータと最新のデータの2つのデータとの関連を検討した。最新のデータは指標によって異なるが、おおむね2007～2008年近辺のデータであり、指標によっては2005～2006年のものも含まれていた。10年前のデータとの相関関係を相互に比較することで、調査回答者が中高生だった10年前のキャリア教育と相関の高い10年前の指標はキャリア教育が生徒の印象に残るための先行条件もしくは随伴する条件と考えることができる。一方で、調査回答者が中高生だった10年前のキャリア教育と最新データの相関関係は、キャリア教育が生徒達に影響を与えた後の各都道府県の指標であり、理屈の上では、キャリア教育が各都道府県の地域の社会経済的な指標に与えた影響として解釈することができる。当然ながら、こうした相関関係・因果関係

には媒介変数、第3の変数が介在しており、単純な解釈を許さない。データの制約や分析上の問題点は幾重にも指摘できることは承知した上で、まずは素朴にどのような指標と相関関係がみられるのか、相関関係がみられたとしてその背景には何があるのかを考察する手がかりとしたいと考える。

図表補1-2 本章で検討した97指標(総務省「社会生活統計指標」より)

| |
|--|
| ・教育(27) |
| 生徒1人当たり公立中学校費、生徒1人当たり公立高等学校費、幼稚園数、保育所数、小学校数、中学校数、高等学校数、公立高等学校割合、女子教員割合、中学校生徒数、高等学校生徒数、公立高等学校生徒比率、短期大学数、大学数、専修学校数、各種学校数、専修学校生徒数、各種学校生徒数、中学校長期欠席生徒比率、不登校による中学校長期欠席生徒、中学校卒業者の進学率、高等学校卒業者の進学率、出身高校所在地県の大学への入学者割合、最終学歴小学中学卒の割合、高卒中卒割合、短大高専卒割合、大卒院卒割合 |
| ・労働(25) |
| 労働力人口比率(男性)、労働力人口比率(女性)、第1次産業就業者比率、第2次産業就業者比率、第3次産業就業者比率、完全失業率、完全失業率(男性)、完全失業率(女性)、有効求人倍率、就職率、県外就職者比率、充足率、パートタイム就職率、高卒者に占める就職者の割合、高卒者に占める県外就職者の割合、高等学校新規卒業者の就職率、高等学校新規卒業者の求人倍率、大学卒業者に占める就職者の割合、大学新規卒業者の無業者率、公共職業能力開発施設数、きまって支給する現金給与月額[男]、きまって支給する現金給与月額[女]、高等学校新規卒業業者初任給[男]、高等学校新規卒業業者初任給[女]、大学新規卒業業者初任給[男] |
| ・経済(24) |
| 1人当たり県民所得、第2次産業事業所数構成比、第3次産業事業所数構成比、従業者1~4人の事業所割合、従業者5~9人の事業所割合、従業者10~29人の事業所割合、従業者100人以上の事業所割合、就業者1人当たり農業産出額、製造品出荷額等(従業員1人当たり)、製造品出荷額等(1事業所当たり)、商業年間商品販売額(従業員1人当たり)、商業年間商品販売額(事業所当たり)、郵便貯金残高、国内銀行預金残高、消費者物価地域差指数(東京=100)、財政力指数、小売店数(飲食店を除く)、織物・衣服・身の回り品小売店数、飲食料品小売店数、飲食店数、大型小売店数、コンビニエンスストア数、給油所数、理容・美容所数 |
| ・人口(11) |
| 15歳未満人口割合、生産年齢人口割合、老年人口割合、人口増加率、自然増加率、合計特殊出生率、社会増加率、転入率、転出率、流入人口比率、流出人口比率 |
| ・その他(10) |
| ボランティア活動の年間行動者率、スポーツの年間行動者率、旅行・行楽の年間行動者率、海外旅行の年間行動者率、公民館数、図書館数、博物館数、青少年教育施設数、勤労青少年・婦人福祉施設数、老人ホーム数 |

3. 学校時代のキャリア教育の評価と都道府県別の社会生活統計指標との関連

(1) 中学時代のキャリア教育を「覚えている」割合と関連の深い社会生活統計指標

これら97指標と、中学時代のキャリア教育を「覚えている」割合との順位相関係数を求めた。その結果、図表補1-3に示した結果となった。これらの表のうち、絶対値が約.30以上の相関係数が5%水準で統計的に有意な相関係数であり、参考までに絶対値が.20台の相関係数も表に示した。したがって、以下では統計的に有意な相関係数に絞って解釈を行う。表から以下の諸点を指摘できる。

第一に、「覚えている」か否かと関連が深い指標として、10年前データの「有効求人倍率」「労働力人口比率(男性・女性)」「完全失業率」、最新データの「完全失業率(全体・男性・女性)」などの労働関係の指標があがった。概して有効求人倍率が高いほど、労働力人口の比率が高いほど、完全失業率が低い都道府県ほど、中学時代のキャリア教育を覚えていると回答することが示された。

第二に、10年前データの「15歳未満人口割合」「合計特殊出生率」などの人口に関わる指標とも関連がみられた。子どもが多い都道府県、または子どもが多く生まれている都道府県ほど、中学時代のキャリア教育を覚えていると回答していた。

第三に、10年前データの「専門学校生徒数」「大学数」、最新データの「大学数」など教育関連の指標と負の関連がみられた。解釈は難しいが、専門学校の生徒数が少ない、大学の数が少ないなど、高校卒業後の進学先が少ないほど、学校卒業後に就職するという選択肢が身近に感じられる可能性があり、それゆえ中学時代のキャリア教育を覚えているという回答につながった可能性がある。

図表補1-3 中学時代のキャリア教育を「覚えている」という評価と関連が深い社会生活統計指標

| 10年前データ | 最新データ |
|-------------------------|-------------------------|
| 覚えている | 覚えている |
| 有効求人倍率 .39 | ボランティア活動の年間行動者率 .37 |
| 15歳未満人口割合 .35 | 合計特殊出生率 .29 |
| 合計特殊出生率 .34 | 労働力人口比率女性 .28 |
| 労働力人口比率女性 .31 | 労働力人口比率男性 .28 |
| 労働力人口比率男性 .30 | 第2次産業就業者比率 .25 |
| 第2次産業就業者比率 .28 | 高等学校新規卒業者の就職率 .22 |
| ボランティア活動の年間行動者率 .26 | コンビニエンスストア数 .20 |
| コンビニエンスストア数 .26 | 第2次産業事業所数構成比 .20 |
| 製造品出荷額等(1事業所当たり) .20 | 中学校長期欠席生徒比率 -.21 |
| 充足率 -.20 | 第3次産業事業所数構成比 -.22 |
| 第3次産業事業所数構成比 -.22 | 短期大学数 -.23 |
| 中学校長期欠席生徒比率 -.24 | 出身高校所在地県の大学への入学者割合 -.23 |
| 出身高校所在地県の大学への入学者割合 -.25 | 専修学校生徒数 -.25 |
| 専修学校数 -.27 | 女子教員割合 -.26 |
| 短期大学数 -.28 | 大学数 -.31 |
| 不登校による中学校長期欠席生徒 -.32 | 完全失業率男性 -.33 |
| 専修学校生徒数 -.34 | 完全失業率女性 -.36 |
| パートタイム就職率 -.36 | 完全失業率 -.37 |
| 完全失業率 -.39 | 第3次産業就業者比率 -.41 |
| 完全失業率男性 -.40 | |
| 完全失業率女性 -.40 | |
| 第3次産業就業者比率 -.41 | |
| 大学数 -.42 | |

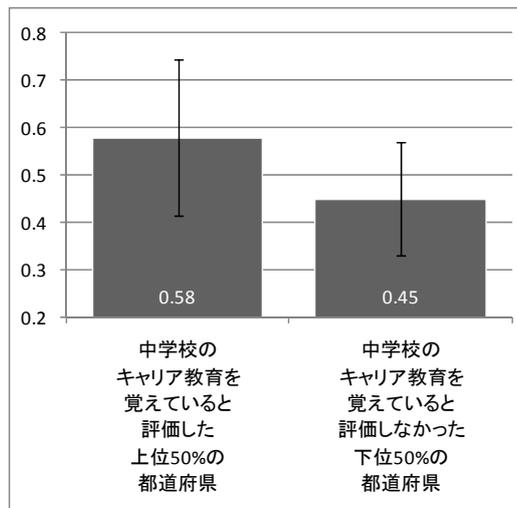
※.30以上の相関係数(5%水準以下で有意)に網かけを付した。

第四に、経済関連の指標では、10年前データおよび最新データの「第3次産業就業者比率」と負の相関がみられた。第3次産業に就労している人が少ないほど、中学時代のキャリア教育を覚えていると回答していた。いくつかの解釈が考えられるが、第3次産業に就労している人の割合が低い都道府県の方が職場体験などの実施が容易である可能性があること、第3次産業に従事する割合が低い都道府県では若者のアルバイト経験なども少なく、それだけ中学時代の職場体験を鮮明に記憶されやすいことなどが考えられる。10年前データの「パートタイム就職率」の指標にも負の相関がみられているが、同様の傾向を示すものと解釈される。

なお、最新データの「ボランティア活動の年間行動者率」とも統計的に有意な相関係数がみられた。これは、職場体験活動を中心にキャリア教育には全国のNPOやボランティア団

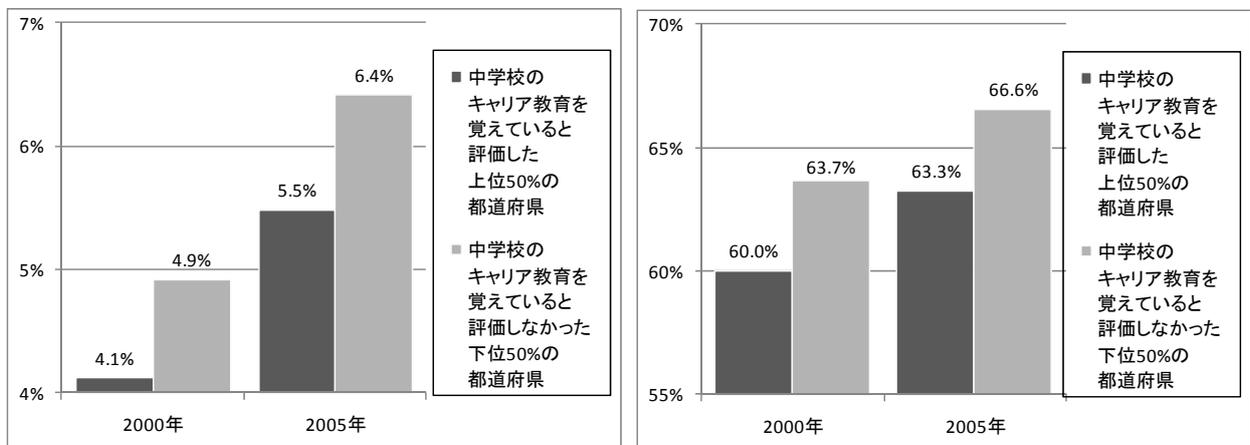
体が関わっていることが多いことも関連していると思われる。

図表補 1-4 および図表補 1-5 には、図表補 1-3 で高い相関係数が観察された「有効求人倍率」「完全失業率」「第 3 次産業就業者比率」と中学時代のキャリア教育を「覚えている」という評価との関連をグラフにして示したものである。図表補 1-4 では、中学のキャリア教育を覚えていると評価した上位 50%の都道府県では、2000 年当時の求人倍率が 0.58 倍であったのに対して、覚えていると評価しなかった下位 50%の都道府県では求人倍率が 0.45 倍だったことが示されている。



図表補 1-4 有効求人倍率と中学時代のキャリア教育を「覚えている」という評価との関連

同様に、図表補 1-5 でも、総じて、中学校のキャリア教育を覚えていると評価した上位 50%の都道府県では完全失業率が低かった。また、第 3 次産業就業者比率についても、覚えていると評価した都道府県の方が値が小さかった。



図表補 1-5 完全失業率(左)および第 3 次産業就業者比率(右)と中学時代のキャリア教育を「覚えている」という評価との関連

なお、国立教育政策研究所生徒指導研究センターが公表している「平成 17 年度公立中学校における都道府県・政令指定都市別職場体験実施率」との相関係数を求めたところ、図表補 1-6 のとおりであった。この実施率は各都道府県の教育委員会から提出された数値をもとに集計されたものであり、平成 17 年（2005 年）当時の職場体験実施率のかなり正確な値となる。図表補 1-6 で高い相関係数がみられた指標は、図表補 1-3 に挙げた指標とほぼ重複しており、各都道府県の職場体験実施率がそのまま今回の調査回答者の「覚えている」という印象にも結びついていることが分かる。①完全失業率が低い都道府県ほど、②子どもが多く産まれていて子どもの割合が高い都道府県ほど、③第 3 次産業の事業者数・就業者が少ない都道府県ほど（第 2 次産業の事業者数・就業者が多いほど）、ボランティア活動の盛んな都道府県ほど、中学校における職場体験の実施率が高いということが確認される。

図表補 1-6 都道府県別公立中学校職場体験実施率(国立教育政策研究所, 2005)と

関連が深い社会生活統計指標

| | 相 関 係 数 |
|--------------------|------------------|
| 15歳未満人口割合 | .44 |
| 第2次産業就業者比率 | .43 |
| 第2次産業事業所数構成比 | .42 |
| 合計特殊出生率 | .38 |
| 労働力人口比率女性 | .37 |
| ボランティア活動の年間行動者率 | .32 |
| 労働力人口比率男性 | .29 |
| 人口増加率 | .26 |
| 中学校生徒数(教員1人当たり) | .24 |
| 自然増加率 | .23 |
| 公立高等学校割合 | .22 |
| 有効求人倍率 | .22 |
| 生徒1人当たり公立高等学校費 | -.21 |
| 転出率 | -.21 |
| 大型小売店数 | -.21 |
| 給油所数 | -.22 |
| 中学校数 | -.22 |
| 消費者物価地域差指数(東京=100) | -.27 |
| 大学新規卒業者の無業者率 | -.27 |
| 第3次産業就業者比率 | -.31 |
| 完全失業率女性 | -.36 |
| 生徒1人当たり公立中学校費 | -.36 |
| 完全失業率 | -.37 |
| 完全失業率男性 | -.37 |
| 第3次産業事業所数構成比 | -.44 |

※.30以上の相関係数(5%水準以下で有意)に網かけを付した。

(2) 中学時代のキャリア教育は「役立っている」割合と関連の深い社会生活統計指標

中学時代のキャリア教育は「役立っている」と評価する割合と社会生活統計指標との順位相関係数を求めた。その結果、図表補 1-7 に示した結果となった。表から以下の諸点を指摘できる。

第一に、前項の「覚えている」で関連のあった指標と同様の解釈が可能な指標がいくつか見られた。まず、10年前データの「合計特殊出生率」「専修学校生徒数」は前項でも関連が深い指標であった。子どもが多く産まれている都道府県では中学時代のキャリア教育が役立っていると感じられる割合が高く、一方で、専修学校の生徒数が多くそれだけ専修学校が生徒にとって身近な都道府県ではキャリア教育が役立っていると感じられる割合が低かった。

図表補1-7 中学時代のキャリア教育は「役立っている」という評価と関連が深い社会生活統計指標

| 10年前データ | 最新データ |
|---------------------|---------------------|
| 役立っている | 役立っている |
| 合計特殊出生率 | 公立高等学校生徒比率 |
| .34 | .31 |
| 公立高等学校生徒比率 | 合計特殊出生率 |
| .32 | .28 |
| 生徒1人当たり公立中学校費 | ボランティア活動の年間行動者率 |
| .26 | .25 |
| 大学新規卒業者の無業者率 | 従業者1~4人の事業所割合 |
| .25 | .25 |
| 15歳未満人口割合 | 就職率 |
| .24 | .21 |
| 最終学歴小学中学卒の割合 | 老年人口割合 |
| .24 | .20 |
| ボランティア活動の年間行動者率 | 中学校長期欠席生徒比率 |
| .24 | -.21 |
| 中学校数 | 従業者5~9人の事業所割合 |
| .22 | -.21 |
| 従業者1~4人の事業所割合 | 第3次産業就業者比率 |
| .21 | -.25 |
| 就職率 | 生産年齢人口割合 |
| .21 | -.25 |
| 大学新規卒業者初任給[男] | 従業者10~29人の事業所割合 |
| -.21 | -.31 |
| 大学卒業者に占める就職者の割合 | 商業年間商品販売額(事業所当たり) |
| -.21 | -.31 |
| 不登校による中学校長期欠席生徒 | 出身高校所在地県の大学への入学者割合 |
| -.22 | -.32 |
| 大学数 | 商業年間商品販売額(従業員1人当たり) |
| -.23 | -.33 |
| 完全失業率女性 | |
| -.24 | |
| 従業者10~29人の事業所割合 | |
| -.25 | |
| 第3次産業就業者比率 | |
| -.25 | |
| 中学校生徒数 | |
| -.25 | |
| 専修学校数 | |
| -.27 | |
| 中学校長期欠席生徒比率 | |
| -.28 | |
| 出身高校所在地県の大学への入学者割合 | |
| -.35 | |
| 商業年間商品販売額(事業所当たり) | |
| -.36 | |
| 商業年間商品販売額(従業員1人当たり) | |
| -.36 | |
| 専修学校生徒数 | |
| -.41 | |

※.30以上の相関係数(5%水準以下で有意)に網かけを付した。

第二に、「出身高校所在地の大学への入学者割合」「商業年間商品販売額」が多い都道府県ほど、中学校のキャリア教育を役立っていると回答する割合は低かった。これも前項の「覚えている」で関連のあった指標と同様の解釈が可能であり、地元で大学進学者が容易である場合は中学校のキャリア教育が役立っていると評価されにくいことが分かる。また、商品販売額はおそらくは第3次産業が盛んであるほど中学校のキャリア教育を「覚えている」という前項の結果と同様に様々な解釈が可能である。商業が盛んな地域では、商業で職場体験等を行う機会が多いが、普段から商業で働く人々を目にしやすい地域では、そうした職場体験が役立っているとは評価されなかった可能性がある。また、実際に高校生・大学生になってアルバイト等で就労経験をする機会も商業が盛んな地域では多いことが予想される。その場合も中学校の職場体験が役立ったとは評価されにくい素地となっていると考えられる。

第三に、いくつか解釈の不明な指標も関連がみられた。例えば、10年前データおよび最新

データともに「公立高等学校生徒比率」が高い都道府県ほど、中学時代のキャリア教育は役立っていると評価されていなかった。また、最新データでは「従業者10～29人の事業所割合」が多い都道府県ほど、中学時代のキャリア教育は役立っていると評価されていなかった。概して、公立学校の方がキャリア教育が盛んであるとは言えるとしても、それ以上の考察は困難である。また、従業員数についても、職場体験先の確保の問題と関連が推測されるが、このデータだけでは解釈が難しい結果であった。

(3) 高校時代のキャリア教育の評価と関連の深い社会生活統計指標

図表補1-8および図表補1-9に、高校時代のキャリア教育の評価と関連の深い社会生活統計指標を示した。

高校時代のキャリア教育の評価と関連の深い社会生活統計指標は、中学時代の指標と比べて数がかかなり少ないのが特徴となっている。特に、最新データとの関連については5%水準で統計的に有意な相関係数はみられず、この結果だけから言えば、高校生のキャリア教育に対する評価は、本章で取り上げたような社会生活統計指標とは関係がないという解釈になる。

図表補1-8 高校時代のキャリア教育を「覚えている」という評価と関連が深い社会生活統計指標

| 10年前データ | | 最新データ | |
|-----------------|------|-----------------|------|
| 覚えていますか | | 覚えていますか | |
| 大学新規卒業者の無業者率 | .24 | ボランティア活動の年間行動者率 | .21 |
| パートタイム就職率 | -.21 | 中学校長期欠席生徒比率 | -.20 |
| 中学校長期欠席生徒比率 | -.22 | 生徒1人当たり公立中学校費 | -.21 |
| 不登校による中学校長期欠席生徒 | -.32 | 不登校による中学校長期欠席生徒 | -.26 |
| | | 専修学校生徒数 | -.27 |

※.30以上の相関係数(5%水準以下で有意)に網かけを付した。

図表補1-9 高校時代のキャリア教育を「役立っている」という評価と関連が深い社会生活統計指標

| 10年前データ | | 最新データ | |
|---------------------|------|---------------------|------|
| 役立っていますか | | 役立っていますか | |
| 大学新規卒業者の無業者率 | .37 | 公立高等学校生徒比率 | .29 |
| 公立高等学校生徒比率 | .31 | 従業者10～29人の事業所割合 | -.23 |
| 生徒1人当たり公立中学校費 | .28 | 商業年間商品販売額(事業所当たり) | -.23 |
| 中学校長期欠席生徒比率 | -.28 | 商業年間商品販売額(従業員1人当たり) | -.26 |
| 商業年間商品販売額(事業所当たり) | -.31 | | |
| 商業年間商品販売額(従業員1人当たり) | -.32 | | |

※.30以上の相関係数(5%水準以下で有意)に網かけを付した。

ただし、10年前データでは若干の関連がみられていた。第一に、「不登校による中学校長期欠席生徒」「中学校長期欠席生徒比率」が少ないほど、高校時代のキャリア教育は覚えているという結果が示された。この結果の解釈は容易ではない。しかし、第6章では、学校生活に適應しているほど学校時代のキャリア教育に対する評価が良いという結果が示されていた。ここでの不登校や長期欠席の生徒が少ない都道府県ほどキャリア教育に対する評価が高いという傾向も同種の解釈が可能ではないかと思われる。

第二に、「大学新規卒業者の無業者率」が高い都道府県ほど、高校時代のキャリア教育は「役立っている」という評価がなされた。大卒新規卒業者が無業で卒業するという事態は、就職の厳しさを物語るものであり、それゆえ高校時代のキャリア教育で学んだことが有益であると感じられたという解釈ができる。

第三に、前項の中学校のキャリア教育の評価でもみられたが、「商業年間商品販売額」は高校時代のキャリア教育とも関連していた。商品販売額が高い都道府県ほど高校時代のキャリア教育が「役立っている」と評価されにくいことが示された。前項で示したとおり、商業が身近な地域特性が、キャリア教育が有益であるという捉え方と相反するものである可能性が示される。

以上のような若干の関連は観察されながらも、総じて言えば、高校のキャリア教育は、都道府県の社会生活統計指標と明確に解釈が可能なはっきりとした関連を示さないのが特徴であった。

これは、先に図表補 1－5 で示した統計と同じく、国立教育政策研究所生徒指導研究センターが公表している平成 17 年（2005 年）当時の公立高校のインターンシップ実施率である「平成 17 年度公立高校における都道府県・政令指定都市別インターンシップ実施率」でも同様である（図表補 1－10 参照）。高校のインターンシップの実施率は、各都道府県の教育・労働・経済その他の指標とはあまり関連しないというのが、ここでの暫定的な結論の 1 つとなるであろう。

図表補 1－10 都道府県別公立高等学校インターンシップ実施率(国立教育政策研究所, 2005)と
関連が深い社会生活統計指標

| | 相 関 係 数 |
|--------------------------------|------------------|
| 公共職業能力開発施設数 | .33 |
| 高等学校生徒数 | -.30 |
| 財政力指数 | -.30 |
| きまって支給する現金給与月額[男] | -.32 |
| きまって支給する現金給与月額[女] | -.32 |
| 従業者100人以上の事業所割合 | -.34 |
| 社会増加率 | -.34 |
| 流入人口比率 | -.35 |
| ※.30以上の相関係数(5%水準以下で有意)のみ表に示した。 | |

高校のキャリア教育の取り組みをインターンシップに代表させず、他の様々な取り組みもあわせて考えても結果は変わらず、地域の社会生活統計指標とはほとんど関連がみられなかった。図表補 1－11 は、今回の調査で「あなたは、高校時代に、何か進路・進学や仕事や職業に関連するような特別な授業を受けた経験がありますか。」とたずねた設問に対する回答と、本章で取り上げている社会生活統計指標との関連をみたものである。5%水準で統計的に有意な相関係数は 2 つであり、1 つは、図表補 1－7 および図表補 1－8 でも観察された「大

学新規卒業者の無業者率」であった。大学の新規卒業者の無業者率が高い都道府県ほど、高校のキャリア教育で何らかの特別な取り組みをしていたと解釈できる。ただし、もう1つの「国内銀行預金残高」については解釈が難しい。預金残高が多い言わば裕福な都道府県ほど高校のキャリア教育で何らかの特別な取り組みをしていなかったと解釈できる結果であるが、その背景を推測することは、本研究のデータだけでは困難である。

図表補1-11 高校時代に何らかの特別な授業を受けた記憶の有無と
関連が深い社会生活統計指標

| | 相 関 係 数 |
|--------------|------------------|
| 大学新規卒業者の無業者率 | .36 |
| 国内銀行預金残高 | -.33 |

※.30以上の相関係数(5%水準以下で有意)のみ表に示した。

4. 学校時代のキャリア教育の評価と都道府県別の社会生活統計指標の変化との関連

前項までの分析をさらに発展させて、10年前データと最新データとの単純な差分をとり、その差分と学校時代のキャリア教育の評価との相関係数を求めた。この分析によって、2000年代の社会生活統計指標の変化と学校時代のキャリア教育の評価との関連を検討することができる。

図表補1-12に、中学時代のキャリア教育の評価と関連が深い社会生活統計指標(10年前→最近の変化)を示した。中学時代のキャリア教育を「覚えている」という評価と関連が深いのは「パートタイム就職率」「中学校卒業者の進学率」「第3次産業就業者比率」であり、これらの指標は2000年代に増加している都道府県ほど、中学校のキャリア教育を覚えているという評価がなされていた。一方、「従業者5~9人の事業所割合」が減少した都道府県ほど、中学校のキャリア教育を覚えているという結果となった。

中学校のキャリア教育が役立っているという評価と関連があった指標は、「従業者1~4人の事業所割合」「大学新規卒業者の無業者率」「従業者10~29人の事業所割合」であり、1~4人の事業所割合が増加し、10~29人の事業所割合が減少した都道府県ほど、また、新規大卒者が無業で卒業する割合が減少した都道府県ほど、中学校のキャリア教育が役立っていると感じられていた。

図表補1-12 中学時代のキャリア教育の評価と関連が深い社会生活統計指標

(10年前→最近の変化)

| 覚えている | | 役立っている | |
|----------------------|------|------------------------|------|
| パートタイム就職率 | .37 | 従業者1~4人の事業所割合 | .30 |
| 中学校卒業者の進学率 | .33 | 専修学校生徒数 | .29 |
| 第3次産業就業者比率 | .30 | 高等学校数(15~17歳人口10万人当たり) | .27 |
| ボランティア活動の年間行動者率 | .28 | 生産年齢人口割合 | .25 |
| 従業者1~4人の事業所割合 | .27 | 小学校数(6~11歳人口10万人当たり) | .24 |
| 小学校数(6~11歳人口10万人当たり) | .25 | 中学校卒業者の進学率 | .23 |
| 生産年齢人口割合 | .23 | 専修学校数 | .21 |
| 不登校による中学校長期欠席生徒 | .22 | 15歳未満人口割合 | -.21 |
| 高等学校卒業者の進学率 | .22 | 社会増加率 | -.21 |
| 公立高等学校割合 | .21 | 生徒1人当たり公立中学校費 | -.22 |
| スポーツの年間行動者率 | .21 | 人口増加率 | -.26 |
| 老人ホーム数 | .20 | 大学新規卒業者の無業者率 | -.36 |
| 青少年教育施設数(人口100万人当たり) | -.21 | 従業者10~29人の事業所割合 | -.41 |
| 老年人口割合 | -.21 | | |
| コンビニエンスストア数 | -.22 | | |
| 人口増加率 | -.23 | | |
| 従業者10~29人の事業所割合 | -.23 | | |
| 第2次産業就業者比率 | -.24 | | |
| 製造品出荷額等(従業員1人当たり) | -.28 | | |
| 従業者5~9人の事業所割合 | -.30 | | |

※.30以上の相関係数(5%水準以下で有意)に網かけを付した。

図表補1-13には、高校時代のキャリア教育の評価と関連が深い社会生活統計指標(10年前→最近の変化)を示した。中学時代の指標との関連と比べると、統計的に有意な相関係数の数は少なくなり、「大学卒業者に占める就職者の割合」が2000年代に増加した都道府県ほど高校時代のキャリア教育を覚えているという回答が多く、「大学新規卒業者の無業者率」が減少した都道府県ほど高校時代のキャリア教育が役立っているという回答が多かった。

図表補1-13 高校時代のキャリア教育の評価と関連が深い社会生活統計指標

(10年前→最近の変化)

| 覚えている | | 役立っている | |
|--------------------|------|------------------------|------|
| 大学卒業者に占める就職者の割合 | .36 | 大学卒業者に占める就職者の割合 | .29 |
| 中学校卒業者の進学率 | .28 | 高卒者に占める就職者の割合 | .27 |
| ボランティア活動の年間行動者率 | .21 | 中学校生徒数(教員1人当たり) | .23 |
| コンビニエンスストア数 | -.24 | 大学新規卒業初任給[男] | .23 |
| 大学新規卒業者の無業者率 | -.26 | 高等学校数(15~17歳人口10万人当たり) | .22 |
| 消費者物価地域差指数(東京=100) | -.27 | 給油所数 | .22 |
| | | コンビニエンスストア数 | -.21 |
| | | 高等学校卒業者の進学率 | -.22 |
| | | 充足率 | -.23 |
| | | 生徒1人当たり公立中学校費 | -.26 |
| | | 従業者10~29人の事業所割合 | -.29 |
| | | 大学新規卒業者の無業者率 | -.43 |

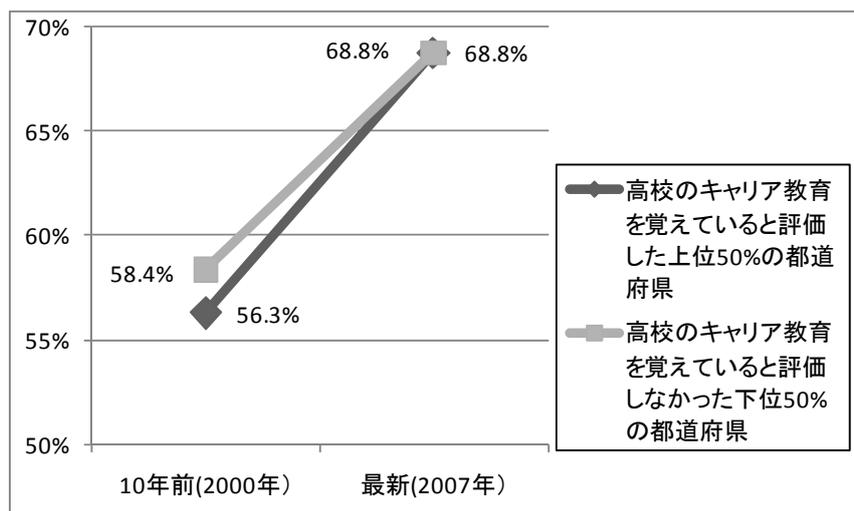
※.30以上の相関係数(5%水準以下で有意)に網かけを付した。

ただし、以上のような傾向がみられながらも、図表補1-12および図表補1-13ともに解釈は容易ではない。特に、従業者の少ないいわゆる零細企業の割合の増減がなぜキャリ

ア教育の印象・評価と関連するのは今回のデータだけでは明らかにならない。また、図表補1-12の「パートタイム就職率」や「第3次産業就業者比率」の増加との相関係数が上位に上がってきた点について前節までの結果と統合的な解釈を行うのは難しい。

結局、社会生活統計指標の変化との関連である程度明確な結果と言えるのは、図表補1-13の「大学卒業者に占める就職者の割合」と「大学新規卒業者の無業者率」であることから、図表補1-14および図表補1-15には、具体的な変化と関連の様相をグラフにして示した。

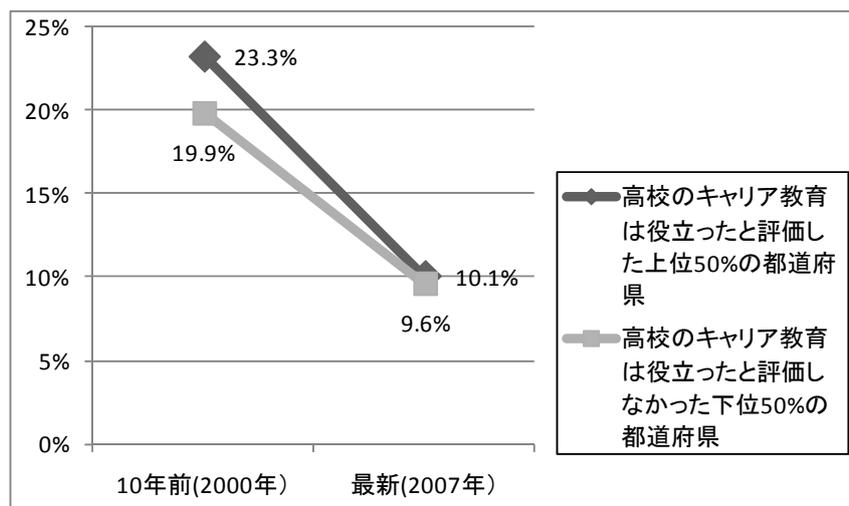
まず、図表補1-14について、仮に中学校のキャリア教育をよく覚えていたために「大学卒業者に占める就職者の割合」が高まったと解釈することが可能であるとすれば、確かに、役立ったと回答した上位50%の都道府県では2000年時点では就職者の割合が56.3%だったのが2007年には68.8%となっており、高校のキャリア教育の結果、就職者の割合は増加したように見えるグラフを作成することができる。



図表補1-14 大学卒業者に占める就職者の割合と
高校時代のキャリア教育を「覚えている」という評価との関連

次に、図表補1-15についても、仮に高校時代のキャリア教育が役立ったために「大学新規卒業者の無業者率」が減少したと解釈することが可能であるとすれば、確かに「役立った」と評価した上位50%の都道府県では10年前と比べて最新データでは無業者率の減少の程度が大きいことが示されている。

ただし、やはり、図表補1-14および図表補1-15は、たんに高校のキャリア教育が記憶に残り、役立つものだったために就職者の割合が増え、無業者の割合が減ったと解釈するには無理がある。関連する様々な要因が相互に影響を及ぼしあって、結果的に就職者が増え、無業者が減ったということは言えるものと思われるが、キャリア教育だけの効果であるとはとても言えない。



図表補1-15 大学新規卒業者の無業者率の変化と
 中学時代のキャリア教育が「役立った」という評価との関連

しかしながら、まったく無関係であるとすることも適切ではないと思われる。就職者が増え、無業者が減ったという指標の変化の背景に、おそらく高校のキャリア教育を行うにあたって良い影響を与える環境の変化があり、かつ両者の変化は同じ性質の社会経済的な環境変化の一環として、これらの指標に現れている可能性が考えられる。すなわち、図表補1-14および図表補1-15に因果関係を読み取ることは問題があるものの、やはり、2つのグラフの背後には高校のキャリア教育に伴って変化する一連の社会経済的な変化があったのであり、その意味では、高校のキャリア教育がうまくいく時には、めぐりめぐって大学生の就職者の割合が増え、無業者の割合が減るといった可能性があるということ期待できると言えるであろう。

5. 学校時代のキャリア教育の評価に影響を与える要因および示唆(まとめ)

図表補1-16は、最後にまとめの分析として、学校時代のキャリア教育の評価に影響を与える要因を重回帰分析によって検討したものである。表からは、様々な指標間の相関関係を調整した場合には、学校側の要因がキャリア教育には大きな影響を与えていることがうかがえる。

なお、有効求人倍率、大学卒業者に占める就職者の割合、大学新規卒業者の無業者率、第2次産業就業者比率など、学校時代のキャリア教育の評価に影響を与える労働関係の指標と関連が強くなっており、引き続き、より詳細な分析が求められる。特に、地域の労働市場の状況や就業者比率など地域の特性によって若年就労者のキャリア教育に対する評価が異なっていることがうかがえる結果となっており、地域に密着したよりきめの細かいキャリア教育に対する側面的な支援が求められる。地域の労働市場情報などを豊富にもっており、地域の社会経済状況にも詳しいハローワーク等の地域の職業安定機関の役割の一端をこうした点に

求めることができるであろう。

図表補1-16 学校時代のキャリア教育の評価に影響を与える要因

| 中学時代のキャリア教育「覚えている」 | β | sig. |
|--------------------|---------|------|
| 有効求人倍率 | .590 | .000 |
| 大学卒業者に占める就職者の割合 | -.447 | .001 |
| 専修学校数 | -.260 | .035 |
| 不登校による中学校長期欠席生徒 | -.329 | .005 |
| 高等学校数 | -.291 | .026 |

| 高校時代のキャリア教育「覚えている」 | β | sig. |
|--------------------|---------|------|
| 不登校による中学校長期欠席生徒 | -.566 | .000 |
| 中学校数 | -.372 | .008 |
| 大学卒業者に占める就職者の割合 | -.406 | .004 |
| 高等学校卒業生の進学率 | .312 | .049 |

| 中学時代のキャリア教育「役立っている」 | β | sig. |
|---------------------|---------|------|
| 中学校長期欠席生徒比率 | -.356 | .007 |
| 専修学校数 | -.362 | .007 |
| 大学卒業者に占める就職者の割合 | -.348 | .010 |
| 各種学校数 | .267 | .041 |

| 高校時代のキャリア教育「役立っている」 | β | sig. |
|---------------------|---------|------|
| 大学新規卒業生の無業者率 | .599 | .001 |
| 第2次産業就業者比率 | .380 | .029 |

さらに、解釈の仕方によっては、本章の結果は、各都道府県の完全失業率を減少させ、有効求人倍率を増やすことで、中学校の職場体験学習を中心としたキャリア教育を活性化させることができるという示唆を引き出すことができる。これも様々な要因が絡み合っただけの結果になっていることは承知した上で、何らかの形で地域の労働市場を安定させることによって、キャリア教育の推進を側面から支援することが可能となる場合があることを暫定的な知見の1つとして述べておきたい。少なくとも地域の労働市場の状況とキャリア教育には循環的な因果関係が存在している可能性は、本章の結果から十分にうかがえるものと思われる。

補章2 これからのキャリア教育と労働行政

1. 本研究の意義 —キャリア教育の中長期的な効果測定—

キャリア教育という名称を用いた取り組みが導入されてからの日はまだ浅いが、進路指導・職業指導の取り組みは歴史が長い。日本の学校教育におけるキャリア教育は、進路指導の改善という流れの中で登場したものであり、本格的な導入は文部科学省の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」が出された2004年以降である。

学校から職業生活への円滑な移行を促進するより有効な支援プログラムを開発・提供するためには、キャリア教育の普及・推進に加えて、その評価や効果を検証することが求められている。当初は取り組みの実施自体を指標としたいわゆるアウトプット評価が中心であったが、近年では感想やアンケートから生徒たちの変化を読みとったり、研究者が加わって自己効力感や不決断傾向、進路成熟度などの心理学的指標を用いた効果測定を行ったりといったように、アウトカム評価も実施されるようになってきている。しかしながら、キャリア教育の本格的な導入後の歴史が短いこともあって、多くの研究は短期的な効果を測定したものである。短期的な効果が得られたとしても、それがどの程度持続し、児童・生徒の職業選択やその後の職業生活に影響をもたらすのかは明かではない。また、きめ細かく年間に数回の測定を行っても、指標として用いた尺度の平均得点は上昇と下降をくり返し、短期的な効果をとらえにくい場合さえある（たとえば、川崎, 2010）。

キャリア教育は発達段階に応じて系統的・継続的に取り組むものとされているが、学校から職業生活への円滑な移行の支援ということを考えれば、中長期的あるいは累積的な効果を測定することが必要である。しばしば、若年者の就業問題として指摘されるフリーターや無業者、早期離職は、いずれも初期キャリアの問題であり、ここにキャリア教育がどのような影響を及ぼしているのかを検討するが必要であろう。しかし、その必要性は指摘されてきたものの、実際に中長期的な効果の検証はいまだ行われていないのが現状である。

本研究は、25歳前後（23～27歳）という初期キャリアにある者を対象とし、キャリア教育のさまざまな取り組みを回想してもらい、「覚えているか」「役に立ったか」という指標を用いてキャリア教育の中長期的な効果の検証を試みたものである。全国規模のデータを用いてキャリア教育の中長期的な効果を検討したはじめての研究といってもよいものであり、この点において大きな意義を持つといえるであろう。

2. これからのキャリア教育 —勤労観・職業観と基礎的・汎用的能力—

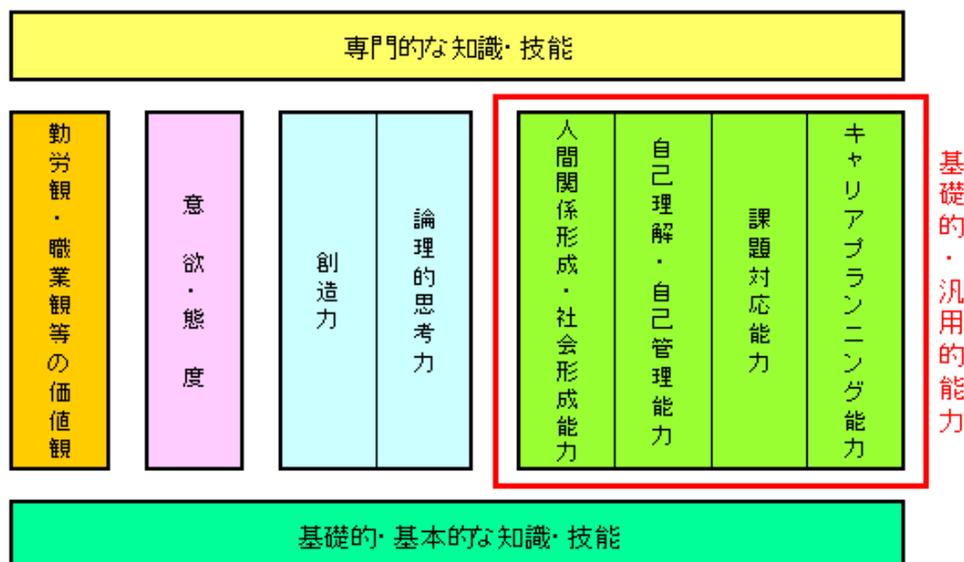
ところで、学校教育におけるキャリア教育は、現在、少し方向を転じようとしている。教育行政において、はじめてキャリア教育が定義されたのは、中央教育審議会（1999）のいわゆる接続答申であった。そこでは「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育て

る教育」と定義されていたが、文部科学省（2004）において「キャリア概念に基づいて、児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と定義され直した際に、「端的に言えば、児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」という一文が加えられたこともあり、これがひとり歩きした感が否めない。このわかりやすい定義はキャリア教育の普及に貢献したともいえるが、「キャリア教育＝勤労観、職業観を育てる教育」という部分のみが強調されて、今日に至っているように思われる。この定義とともに学校現場に比較的浸透したのが「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」として提示された、いわゆる「4領域8能力」（人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力）である。

2010年10月現在、文部科学大臣の諮問を受けて、中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会が「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方」を審議中であるが、2009年7月に出された審議経過報告では、キャリア教育が「社会的・職業的自立に向け、必要な知識、技能、態度をはぐくむ教育」（中央教育審議会, 2009）と定義され、また2010年5月に出された第二次審議経過報告では「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」（中央教育審議会, 2010）と定義されている。そして、「4領域8能力」にかわる概念として、「基礎的・汎用的能力」（人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力）が新たに示された（図表補2-1）。この新たな動きは、勤労観・職業観を育成するだけでは、社会的・職業的自立を果たせるとは限らないことから、基礎的・汎用的能力を身につける必要性を強調したものととらえることができる。

これまでのキャリア教育は、キャリアを「意識」ととらえ、気づきをうながし、意欲・態度に働きかけて勤労観・職業観を育成し、キャリア発達を支援する働きかけであったといえよう。これに対して、新たに示された方向性は、キャリアを「能力」ととらえ、スキルを身につけ、知識・技能に働きかけて基礎的・汎用的能力を育成し、社会的・職業的自立を支援する働きかけである（図表補2-2）。しかし、ここで重要なことは、勤労観・職業観をはぐくむこれまでのキャリア教育が否定されたわけではないということである。これだけでは不十分なことから、社会的・職業的自立を支援するために、勤労観・職業観に加えて基礎的・汎用的能力を育成し、キャリア発達をうながすというより包括的な働きかけがこれからのキャリア教育であるととらえることができる。つまり、これまでのキャリア教育が「勤労観・職業観をはぐくむ教育」であったとするならば、これからのキャリア教育は「勤労観・職業観に加えて、基礎的・汎用的能力をはぐくむ教育」であるといえよう。

もうひとつ、ここで注目すべき点は、新たな方向性として示された基礎的・汎用的能力は、厚生労働省が提示していた「就職基礎能力」（コミュニケーション能力、職業人意識、基礎学力、資格取得、ビジネスマナー）とも重なるところがあり、労働行政が担うキャリア教育の方向性とも一致していた点である。



※中央教育審議会(2010)より作成

図表補2-1 「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」の構成

図表補2-2 これまでのキャリア教育とこれからのキャリア教育

| | 文科省(2004, 2006) | 中教審(2009, 2010) |
|-----------|-----------------|-----------------|
| はぐくむもの | 勤労観・職業観 | 基礎的・汎用的能力 |
| キャリアのとらえ方 | 「意識」としてのキャリア | 「能力」としてのキャリア |
| 働きかける対象 | 意欲・態度 | 知識・技能 |
| 目的 | キャリア発達支援 | 社会的・職業的自立 |
| | これまでのキャリア教育 | |
| | これからのキャリア教育 | |

※川崎(2010)を加筆修正

3. 効果をもたらす取り組みとは

さて、本研究の結果で注目されるのは、将来の進路や職業について学習したことの記憶が学校時代のキャリア教育の評価に与える影響についてである。

中学時代の取り組みを影響力の大きさの順にみると、「職業人や地域の人に仕事の話を書く授業」「進路の目標や計画を考える授業」「職業興味や職業適性などの検査」「職業や仕事を調べる授業」といった事項が「覚えている」という評価に影響を与えており、高校時代の取り組みでは、「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」「進路の目標や計画を考える授業」「職業興味や職業適性などの検査」「職業や仕事を調べる授業」「職業人や地域の人に仕事の話を書く授業」「ボランティアなどの体験活動」といった事項が「覚えている」という評価に

影響を与えていた。

また、「役に立っている」という評価に対しては、中学時代の取り組みでは「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」「進路に関する個別相談やカウンセリング」「職業人や地域の人に仕事の話聞く授業」、高校時代の取り組みでも「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」「就職活動の進め方や試験対策の授業」「進路に関する個別相談やカウンセリング」が影響を与えていた。第2章の図表2-21に基づき、これらの結果を改めて整理したものが図表補2-3である。

図表補2-3 キャリア教育の記憶、評価に影響を及ぼす取組内容

| | 覚えていることに対する影響 | | 役に立っているという評価に対する影響 | | 6領域からみた取組 | キャリアの とらえ方 |
|-----------------------|---------------|----|--------------------|----|-----------|---------------|
| | 中学 | 高校 | 中学 | 高校 | | |
| 職業興味や職業適性などの検査 | ○ | ○ | | | 自己理解 | 意識 |
| 自分の性格を理解するための検査 | | | | | | |
| 職業や仕事を調べる授業 | ○ | ○ | | | 仕事理解 | |
| 職業人や地域の人に仕事の話聞く授業 | ◎ | ○ | ○ | | 仕事理解 | |
| 職場体験学習やインターンシップ | | | | | | |
| ボランティアなどの体験活動 | | ○ | | | 啓発的経験 | |
| 進路に関する二者面談や三者面談 | | | | | | |
| 進路に関する個別相談やカウンセリング | | | ○ | ○ | 意思決定 | |
| 進路の目標や計画を考える授業 | ○ | ○ | | | 意思決定 | |
| 履歴書の書き方や面接試験の練習 | | | | | | 能力 |
| 就職活動の進め方や試験対策の授業 | | | | ○ | | |
| コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | | ◎ | ◎ | ◎ | | |
| 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | | | | | | |

図表の「○」は「覚えていること」「役に立っていることに」に対する影響がみられた取り組みであり、「◎」は最も影響力が大きかった取り組みを示している。「6領域からみた取組」には、進路指導の6領域に基づいた「キャリア形成の6ステップ」を示したが、前述のように、「自己理解」「仕事理解」「啓発的経験」「意思決定」の影響が確認されている。これらの取り組みはキャリアのどのような側面に働きかけようとしているのか、それを「キャリアのとらえ方」として、「意識」としてのキャリアと「能力」としてのキャリアに区分して図表補2-3の最後に示した。

ここから確かなことが読み取れるわけではないが、「役に立っている」という評価に対する影響は「能力」としてのキャリアへの働きかけの方が大きいように思われる(第2章、図表2-21)。しかし、重要なことは、「意識」としてのキャリアへの働きかけと「能力」としてのキャリアへの働きかけの双方が「覚えていること」「役に立っていること」という評価に対して影響を及ぼしていることである。累積的効果ともいえるであろう。そして、今回の分析では明らかにされていないが、「意識」としてのキャリアへの働きかけがあつてこそ、「能力」としてのキャリアへの働きかけが効果と持つとも考えられる。つまり、たとえば中学時

代から「職業人や地域の人に仕事の話聞く授業」や「進路の目標や計画を考える授業」、「職業興味や職業適性などの検査」といった「意識」としてのキャリアへの働きかけがなされ、高校時代にもこれらが反復されてはじめて、高等学校における「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」や「就職活動の進め方や試験策の授業」が効果を発揮するのではなかろうか。「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」については、中学時代の「役になっている」という評価にも影響を与えていることから、それぞれの学校段階で「能力」としてのキャリアへの働きかけも重視する必要があるが、社会的・職業的自立により近い段階での取り組みの効果は、それまでの取り組みの累積的效果の上に成り立つと考えられる。このような中学時代と高校時代との関係は、大学時代を加えても同様である。

したがって、それぞれの発達段階や学校段階に応じて、キャリア教育の取り組みを積み重ね、「意識」としてのキャリアを育みながら、これを前提として、「能力」としてのキャリアへの働きかけを継続していくことが重要である。このことは、前節で述べたこれからのキャリア教育の方向性とも合致するものである。なお、本調査で尋ねた「能力」としてのキャリアへの働きかけは、実践的な就職活動支援が中心となっているが、今後はこれに限らず、「能力」を意識した働きかけが求められると考えられる。

4. 労働行政が担うキャリア教育

第8章で述べられているように、労働行政におけるキャリア教育は、学校から職業への移行に関わるフリーター、無業者、早期離職といった若年者問題の「川上対策」と位置づけることができる。学校や職場という所属を離れてはじめて労働行政の対象となるのではなく、学校から職業への移行をスムーズにするために、学校教育場面においても労働行政の取り組みがより一層求められる時代を迎えているともいえよう。しかし、キャリア教育が発達段階・学校段階に応じて計画的・継続的に行うものと位置づけられ、長期間にわたる累積的效果の上に社会的・職業的自立が成り立つとすれば、「川上」は小学校時代にまでさかのぼるし、さらにその「水源」は、就学前の幼稚園・保育所や家庭を中心とした教育の取り組みに求められるかもしれない。そうだとすれば「川上」をどこまでもさかのぼるのではなく、中等教育・高等教育にある程度限定して、労働行政の特性を生かした取り組みを推進していくことが必要であろう。

労働行政においては古くから、アセスメントツールや職業情報の開発、相談技法の研究など学校教育場面で活用できるガイダンスツールや技法の提供を行ってきた。第7章で述べられているように、アセスメントツールを活用した自己理解の促進、職業情報の収集や提供を生かした仕事調べ等による仕事理解の促進、労働行政が介在して地域の資源を活用する仕事調べや職業人の講話・職場体験活動などが「川上対策」として有効であり、また社会的・職業的自立が近づいた段階における総仕上げの支援としては、相談技法やキャリア・コンサルティングの提供による意思決定支援や具体的な就職活動のノウハウ提供による方策の実行支

援が有効である。本調査の結果、ある程度までこれらの取り組みの初期キャリアへの有効性が示されたこともあり、より積極的なキャリア教育の推進が期待される場所である。

いわゆる「出口指導」にあたる総仕上げの取り組みとして、高等学校における「就職活動の進め方や試験対策の授業」や大学における「履歴書の書き方や面接試験の練習」「就職活動の進め方や試験対策の授業」が必要であり、また、「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」といった実践的な就職支援が大切であることが本調査の結果としても示されている。しかしながら、くり返しになるが、総仕上げとしての実践的な就職支援だけを提供しても、それまでの取り組みが何もなされていなければ、社会的・職業的自立を果たすことは困難であると考えられる。コミュニケーション能力や履歴書・エントリーシートの書き方は、自分らしさを発揮するためのコンピテンシーやスキルである。これらを身につけて他者に伝えたりアピールしたりするには、まず自分らしさを磨いておくことが必要である。自分らしさを磨くためには、これまでの「意識」としてのキャリアに働きかけるだけでなく、これからは「能力」としてのキャリアに意識的に働きかけるキャリア教育の推進が強く求められる。このような過程においても労働行政が開発してきたツールの一層の活用が期待されるが、労働行政が果たすべき役割は、キャリア教育を通して高められる「意識」と「能力」を社会的・職業的自立にうまくつなげていくところにあると考えられる。キャリアは個人の生き方と関わる広範な概念であり、キャリア教育は生き方教育ともいえるものである。しかし、この点が強調されすぎると、キャリア教育が職業離れを起こすことになりかねない。学ぶこと・働くこと・生きることを結びつけていくことが重要であり、生き方の視点から働くことをとらえることが大切である。キャリア教育が職業離れを起こすことがないよう、社会的・職業的自立へ向けての支援を充実させていくことが労働行政に求められているのではなかろうか。

【引用文献】

- 中央教育審議会 1999 初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）
- 中央教育審議会 2009 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（審議経過報告）
- 中央教育審議会 2010 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（第二次審議経過報告）
- 川崎友嗣 2010 キャリア教育の効果と意義に関する研究－意岐部中学校区における効果測定－ 『革新的学習と教育システム開発の国際共同研究－人間活動理論の創成－』（関西大学人間活動理論研究センター）,pp.171-190.
- 文部科学省 2004 キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書
- 文部科学省 2006 小学校・中学校・高等学校 キャリア教育実真の手引き－児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために－

資 料

「学校時代のキャリア教育と若者の職業生活」

調査票および単純集計結果

1. あなたの性別をお答えください。

| | |
|------|------|
| ア 男性 | イ 女性 |
|------|------|

2. 現在、お住まいの都道府県名をお答えください。

| | |
|--|---------|
| | 都・道・府・県 |
|--|---------|

3. 中学・高校時代に住んでいた都道府県名をお答えください。

複数ある場合は、いちばん長い期間住んでいた都道府県をお答えください。

| | |
|--|---------|
| | 都・道・府・県 |
|--|---------|

4. あなたの年齢をお答えください。

| | |
|--|---|
| | 歳 |
|--|---|

5. あなたの中学校時代はどうでしたか。**【それぞれについて○は1つ】**

| | そう思う | やや そう思う | どちらとも 言えない | あまり 思わない | そう 思わない |
|------------------|------|------------|---------------|-------------|------------|
| ア 好きな先生がいた | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| イ 相談に乗ってくれる先生がいた | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ウ 学校を休みがちだった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| エ 家で勉強をよくした | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| オ 友人が多かった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| カ いじめられたことがあった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| キ 部活動を一生懸命していた | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ク 学校は楽しかった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

6. あなたの中学校時代の成績は、どのくらいでしたか。**【○は1つ】**

| | | |
|----------|----------|----------|
| ア 上のほう | イ やや上のほう | ウ 真ん中あたり |
| エ やや下のほう | オ 下のほう | |

7-1. あなたが最後に通った学校について最も近いものを以下から選び、あてはまるもの1つに○をつけてください。**【○は1つ】**

| | | |
|----------|---------|-----------|
| ア 大学・大学院 | イ 短大・高専 | ウ 専門・各種学校 |
| エ 高校 | オ 中学 | カ その他 () |

7-2. あなたは上で回答した学校を卒業しましたか、中退しましたか。あてはまるもの1つに○をつけてください。【○は1つ】

| | | | |
|--------|--------|-------|-----------|
| ア 卒業した | イ 中退した | ウ 在学中 | エ その他 () |
|--------|--------|-------|-----------|

8. あなたの高校時代はどうでしたか。【それぞれについて○は1つ】

| | そう思う | やや そう思う | どちらとも 言えない | あまりそう 思わない | そう 思わない |
|------------------|------|------------|---------------|---------------|------------|
| ア 好きな先生がいた | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| イ 相談に乗ってくれる先生がいた | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ウ 学校を休みがちだった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| エ 家で勉強をよくした | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| オ 友人が多かった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| カ いじめられたことがあった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| キ 部活動を一生懸命していた | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ク 学校は楽しかった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

9. あなたが最後に通った学校(例:大卒の方は大学、短大・専門学校卒の方は短大・専門学校、高卒の方は高卒など)での生活はどのようなものでしたか。【それぞれについて○は1つ】

| | そう思う | やや そう思う | どちらとも 言えない | あまりそう 思わない | そう 思わない |
|----------------------------|------|------------|---------------|---------------|------------|
| ア 友人をたくさんつくった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| イ アルバイトに打ち込んだ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ウ 学業に熱心に取り組んだ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| エ 部活・クラブ・サークル活動に熱中した | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| オ 就職活動や就職試験・進学ための勉強を熱心に行った | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| カ ボランティア活動に打ち込んだ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| キ 自分ひとりの時間をたくさんもった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

10. 学校時代(小学校～最後に通った学校までを通して)に学んだ知識は、今の仕事に役立っていますか。【○は1つ】

| | | |
|--------------|--------------|-------------|
| ア かなり役立っている | イ おおむね役立っている | ウ どちらとも言えない |
| エ あまり役立っていない | オ 役立っていない | |

11. あなたは、学校を卒業(中退)する際、どのように就職活動(教員試験・公務員試験の受験などを含む)を行い、就職しましたか。【○は1つ】

- ア 就職活動をして、第一志望に就職した
- イ 就職活動をして、第一志望以外の就職先に就職した
- ウ 就職活動をしたが、採用されなかった
- エ 就職活動をしなかった
- オ その他 ()

12. あなたは、学校を卒業(中退)した直後、どのように働きましたか。【○は1つ】

- ア 正社員・正職員
- イ 非正社員・非正職員・その他
(パート・アルバイト、派遣社員、契約社員、「フリーター」などを含む)
- ウ 学校を卒業してからしばらくは働かなかった

13. あなたは、学校を卒業(中退)してから、以下の働き方をどのくらいしてきましたか。

- ア 正社員・正職員の期間 ⇒ ()年 ()ヶ月ぐらい
- イ 非正社員・非正職員・その他の期間 ⇒ ()年 ()ヶ月ぐらい

14. あなたは、学校を卒業(中退)してから、今までに転職の経験がありますか。ある場合には、その回数もお答えください。【○は1つ】

- ア 転職の経験がある ⇒ _____回
- イ 転職の経験はない

15. あなたの現在の立場・身分はどのようなものですか。次の項目のうち、あてはまるものを1つお選びください。【○は1つ】

- ア 正社員・正職員など
- イ 自営業・自由業
- ウ 契約社員・嘱託
- エ 派遣社員
- オ パートまたはアルバイト
- カ 家族従業員
- キ 専業主婦(主夫)、または結婚の準備
- ク 大学院や専門学校などの教育機関に在学中
- ケ 無職で進学や留学などの準備
- コ 無職で仕事を探している
- サ 無職で何もしていない
- シ その他 (具体的に:)

15で「ア 正社員・正職員・公務員」～「カ 家族従業員」と回答した方は、以下にお答えください。

16. あなたの1週間の平均労働時間(残業なども含む)をお答えください。

時間ぐらい

★全員の方へ

17. あなたの1ヶ月の平均収入はどれくらいですか。【○は1つ】

| | | |
|-------------|-------------|-------------|
| ア 収入なし | イ 5万円未満 | ウ 5～10万円未満 |
| エ 10～15万円未満 | オ 15～20万円未満 | カ 20～25万円未満 |
| キ 25～30万円未満 | ク 30～35万円未満 | ケ 35～40万円未満 |
| コ 40万円以上 | サ 決まっていない | |

18. あなたの現在の勤務先全体の従業員数について、あてはまるもの1つに○をつけてください。【○は1つ】

| | | | |
|------------|------------|------------|------------|
| ア 29人以下 | イ 30～49人 | ウ 50～99人 | エ 100～299人 |
| オ 300～499人 | カ 500～999人 | キ 1,000人以上 | ク わからない |

19. あなたの現在の勤務先の業種について、あてはまるもの1つに○をつけてください。【○は1つ】

| | |
|-----------------------|---------------------|
| ア 農業、林業 | イ 漁業 |
| ウ 鉱業、採石業、砂利採取業 | エ 建設業 |
| オ 製造業 | カ 電気・ガス・熱供給・水道業 |
| キ 情報通信業 | ク 運輸業、郵便業 |
| ケ 卸売業、小売業 | コ 金融業、保険業 |
| サ 不動産業、物品賃貸業 | シ 学術研究、専門・技術サービス業 |
| ス 宿泊業、飲食サービス業 | セ 生活関連サービス業、娯楽業 |
| ソ 教育、学習支援業 | タ 医療、福祉 |
| チ 複合サービス業(郵便局、協同組合など) | ツ サービス業(他に分類されないもの) |
| テ 公務(他に分類されるものを除く) | ト その他() |
| ナ わからない | |

20. あなたの仕事は次のどれにあたりますか。あてはまるもの1つに○をつけてください。【○は1つ】

| |
|--|
| ア 専門的・技術的職業(教師・看護師・エンジニア・デザイナーなど) |
| イ 管理的職業(会社や役所での課長・部長以上など) |
| ウ 事務的職業(会社や役所での一般事務・経理、内勤の営業など) |
| エ 販売の職業(小売店やコンビニなどでの販売や外勤のセールス、不動産売買など) |
| オ サービスの職業(接客、飲食物調理、理容師・美容師、パチンコ店店員など) |
| カ 保安の職業(自衛官・警察官・消防員や警備など) |
| キ 農林漁業の職業 |
| ク 運輸・通信の職業(鉄道運転、自動車運転、郵便の集配・配達など) |
| ケ 生産工程・建設・軽作業などの仕事(工場のオペレーターや組立工、電気工事、軽作業など) |
| コ 上記以外 |

21. 中学時代・高校時代に、将来の進路や職業について学習したことを、どのくらい覚えていますか。
 以下にあてはまるもの1つに○をつけてください。【それぞれについて○は1つ】

【中学時代に将来の進路や職業について学習したこと】

- ア かなり覚えている イ やや覚えている ウ どちらでもない
 エ あまり覚えていない オ ほとんど覚えていない

【高校時代に将来の進路や職業について学習したこと】

- ア かなり覚えている イ やや覚えている ウ どちらでもない
 エ あまり覚えていない オ ほとんど覚えていない

22. 中学時代・高校時代に、将来の進路や職業について学習したことは、どのくらい現在の職業生活に役立っていますか。以下にあてはまるもの1つに○をつけてください。【それぞれについて○は1つ】

【中学時代に将来の進路や職業について学習したこと】

- ア かなり役立っている イ やや役立っている ウ どちらでもない
 エ あまり役立っていない オ ほとんど役立っていない

【高校時代に将来の進路や職業について学習したこと】

- ア かなり役立っている イ やや役立っている ウ どちらでもない
 エ あまり役立っていない オ ほとんど役立っていない

23. あなたが学校に通っている間に、将来の進路や職業について最も学習したと思うのは、いつ頃ですか。
 以下にあてはまるもの1つに○をつけてください。【○は1つ】

- ア 小学校時代 イ 中学校時代 ウ 高校時代 エ 大学、短大・高専、専門・各種学校時代

24. あなたは、学校に通っている間に以下に挙げるような授業や行事が記憶にありますか。記憶があるものについて○をつけてください。

| | 中学 | 高校 | 大学・短大・高専、 専門学校等 |
|-------------------------|----|----|--------------------|
| ア 職業興味や職業適性などの検査 | | | |
| イ 自分の性格を理解するための検査 | | | |
| ウ 職業や仕事を調べる授業 | | | |
| エ 職業人や地域の人に仕事の話聞く授業 | | | |
| オ 職場体験学習やインターンシップ | | | |
| カ ボランティアなどの体験活動 | | | |
| キ 進路に関する二者面談や三者面談 | | | |
| ク 進路に関する個別相談やカウンセリング | | | |
| ケ 進路の目標や計画を考える授業 | | | |
| コ 履歴書の書き方や面接試験の練習 | | | |
| サ 就職活動の進め方や試験対策の授業 | | | |
| シ コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | | | |
| ス 労働法（働くことに関する法律）に関する授業 | | | |

25-1. 現在の職業生活に良い面、悪い面で関係があったと思うことを、小学生、中学生、高校生、大学生の頃に分けて、何でも自由にご回答下さい。学校の授業、家庭での出来事、友達と遊んだこと、アルバイト、ボランティアなど、何でも構いません。

25-2. 25-1に挙げた出来事のうち、現在の自分の職業生活にもっとも関係のあるものに○を1つだけつけてください。

| | 25-1 ※小学、中学、高校、大学・短大・高専・専門学校等、 各項目とも必ず具体的に記入をお願いします。 | 25-2 ○をつける |
|--------------------------|--|---------------|
| 小学生の頃 | ① | |
| | ② | |
| 中学生の頃 | ① | |
| | ② | |
| 高校生の頃 | ① | |
| | ② | |
| 大学・短大・ 高専・専門 学校生の頃 | ① | |
| | ② | |

25-3. それが、現在の職業生活にどのように関係があると思うかを以下に自由にご記入下さい。

※具体的に記入をお願いします。

26-1. あなたは、中学時代に、職場体験の経験がありますか。あてはまる数字に○をつけてください。

1 ある 2 ない → 問27-1へ

以下の設問には、26-1で、職場体験の経験が「ある」と回答した方がお答えください。

26-2. あなたが経験した職場体験について、いつ、どのくらいの期間、どこで、どんな内容の仕事をしたか、下記にお答えください。

| | | | |
|---------|------------|----------|----------|
| ア 何年生の頃 | 1. 1年生の頃 | 2. 2年生の頃 | 3. 3年生の頃 |
| イ 期間 | 1. 3日以下 | 2. 4～7日 | 3. 8～14日 |
| | 4. 15日～1ヵ月 | 5. 2ヵ月以上 | |
| ウ どこで | | | |
| エ どんな内容 | | | |

26-3. あなたは職場体験の経験で、どのようなことを学んだと思いますか。それぞれについてあてはまる数字に○をつけてください。**【それぞれについて○は1つ】**

| | そう思う | やや思う | どちらとも言えない | あまり思わない | そう思わない |
|---------------------|------|------|-----------|---------|--------|
| ア 就きたい仕事について知識を得た | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| イ 仕事の厳しさを知った | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ウ その仕事に向いていることがわかった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| エ 視野が広がった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| オ 働く意味を感じた | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| カ 忍耐力がついた | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| キ 社会的マナーを学んだ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

★全員の方へ

27-1 あなたは、高校時代に、何か進路・進学や仕事や職業に関連するような特別な授業を受けた経験がありますか。あてはまる数字に○をつけてください。

| | | |
|------|------|----------|
| 1 ある | 2 ない | → 問28-1へ |
|------|------|----------|

以下の設問には、27-1で、特別な授業を受けた経験が「ある」と回答した方がお答えください。

27-2 「1. ある」と回答した方にお聞きます。いつ、どのくらいの期間で、どこで、どんな仕事を体験しましたか。最もあてはまる数字に○をつけてください。

| | | | |
|----------------|---------------|--------------|--------------|
| ア 何年生の頃 | 1. 1年生の頃 | 2. 2年生の頃 | 3. 3年生の頃 |
| イ どこで | | | |
| ウ どんな内容 | | | |
| エ どのくらい役立ちましたか | 1. かなり役立った | 2. やや役立った | 3. どちらとも言えない |
| | 4. あまり役立たなかった | 5. 全く役立たなかった | |
| オ その理由は何か | | | |

★全員の方へ

28-1. あなたは、中学時代および高校時代のいずれかで、進路相談・進学相談やキャリアカウンセリングなどの「個別相談」(二者面談、三者面談を除く)を受けた経験がありますか。あてはまる数字に○をつけてください。

| | |
|------|-------------|
| 1 ある | 2 ない → 問29へ |
|------|-------------|

以下の設問には、28-1で、「個別相談」を受けた経験が「ある」と回答した方がお答えください。

28-2. あなたが経験した「個別相談」についてお聞きします。具体的に下記に書いてください。複数ある場合は、いちばん記憶に残っているものを書いてください。

| | | | |
|----------------------|---------------|--------------|--------------|
| ア 何年生の頃 | 1. 中学1年生の頃 | 2. 中学2年生の頃 | 3. 中学3年生の頃 |
| | 4. 高校1年生の頃 | 5. 高校2年生の頃 | 6. 高校3年生の頃 |
| イ 誰に相談 しましたか | | | |
| ウ どんな内容の 相談をしましたか | | | |
| エ どのくらい 役立ちましたか | 1. かなり役立った | 2. やや役立った | 3. どちらとも言えない |
| | 4. あまり役立たなかった | 5. 全く役立たなかった | |
| オ その理由は 何ですか | | | |

★全員の方へ

29. あなたは、現在の生活全般に、どの程度、満足していますか。【○は1つ】

| | | |
|--------------|--------------|-------------|
| ア 満足している | イ おおむね満足している | ウ どちらとも言えない |
| エ あまり満足していない | オ 満足していない | |

30. あなたは、これまでの職業生活に、どの程度、満足していますか。【○は1つ】

| | | |
|--------------|--------------|-------------|
| ア 満足している | イ おおむね満足している | ウ どちらとも言えない |
| エ あまり満足していない | オ 満足していない | |

31. あなたは、将来の目標や自分のやりたいことが、どの程度、明確ですか。【○は1つ】

| | | |
|------------|-----------|-------------|
| ア 明確である | イ やや明確である | ウ どちらとも言えない |
| エ あまり明確でない | オ 明確でない | |

32. 書き出しに続く空欄に、あなたの感じた通り、考えた通りを自由に書いて、文章を完成させてください。

(1)～(4)まで必ず記入して下さい。

(1) 今の私にとって大切なことは、

| |
|--|
| |
|--|

※次ページにつづく

(2) これまでの職業生活で後悔することは、

| |
|--|
| |
|--|

(3) これまでの職業生活で最も良かったと思うことは、

| |
|--|
| |
|--|

(4) 今後、やってみたいと思うことは、

| |
|--|
| |
|--|

33. 次の文章について、あなた自身にどの程度あてはまるかをお答えください。**【それぞれについて○は1つ】**

| | あてはまる | ややあてはまる | どちらとも言えない | あまりあてはまらない | あてはまらない |
|-------------------------|-------|---------|-----------|------------|---------|
| ア 少なくとも人並みには、価値のある人間である | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| イ 色々な良い素質をもっている | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ウ 敗北者だと思ふことがよくある | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| エ 物事を人並みには、うまくやれる | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| オ 自分には、自慢できるところがあまりない | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| カ 自分に対して肯定的である | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| キ だいたいにおいて、自分に満足している | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ク もっと自分自身を尊敬できるようになりたい | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ケ 自分は全くだめな人間だと思ふことがある | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| コ 何かにつけて自分は役に立たない人間だと思ふ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

34. これまでの人生はどのようにして決まってきたと思いますか。それぞれについて、あてはまるもの1つに○をつけてください。**【それぞれについて○は1つ】**

| | あてはまる | ややあてはまる | どちらとも言えない | あまりあてはまらない | あてはまらない |
|----------------|-------|---------|-----------|------------|---------|
| ア 本人の能力によって決まる | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| イ 本人の努力によって決まる | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ウ 周囲の環境によって決まる | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| エ 運によって決まる | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

35. 身近に、職業生活や職場の問題についての専門のカウンセラー(キャリア・コンサルタント)がいるとしたら、どんなことを相談してみたいですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。【○はいくつでも】

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1. 将来全般について | 2. 自分の職業の向き不向きについて |
| 3. 自分の労働条件について | 4. 自分の仕事の内容について |
| 5. 自分の職業能力をアップさせる方法について | 6. 職場の同僚との人間関係について |
| 7. 職場の上司との人間関係について | 8. 職場の部下との人間関係について |
| 9. 職場外の人との人間関係について | 10. 自分の両親について |
| 11. 身近な法律的な問題について | 12. 身近な健康問題について |
| 13. いわゆる悩みやグチなどについて | 14. 誰にも話せない深刻な悩みについて |

36. 現在、あなたと同居されているご家族はいらっしゃいますか。【○はいくつでも】

- | | | |
|---|------------|----------|
| 1 本人のみ | 2 配偶者(夫、妻) | 3 親(父、母) |
| 4 子ども(人) | 5 兄弟姉妹 | 6 祖父、祖母 |
| 7 その他() | | |

37. 高校生くらいまでの様子を振り返って、家庭生活や家族との関係はどうでしたか。

【それぞれについて○は1つ】

| | そう思う | ややそう思う | どちらとも言えない | あまり思わない | そう思わない |
|----------------------|------|--------|-----------|---------|--------|
| ア しつけが厳しい方だった | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| イ 帰宅の門限が厳しかった | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ウ 家の手伝いをさせられた | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| エ 学校での出来事などを家族で話し合った | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| オ 叱られることが多かった | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| カ 欲しいものは買ってもらった | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| キ 親は学校の成績を重視していた | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ク 父親は自分の気持ちをわかってくれた | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ケ 母親は自分の気持ちをわかってくれた | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| コ 父と母は仲が良かった | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| サ 家庭の雰囲気が明るかった | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| シ 将来について話し合った | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

以上でアンケートは終了です。ご協力ありがとうございました。

**今一度ご記入漏れがないかご確認のうえ、
2月28日(日)までにポストにご投函下さい。**

単純集計結果

1. あなたの性別をお答えください。

| 選択肢 | 度数 | % |
|------|-------|--------|
| 1 男性 | 1,932 | 49.1% |
| 2 女性 | 2,000 | 50.9% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

2. 現在、お住まいの都道府県名をお答えください。(地域)

| 選択肢 | 度数 | % |
|----------|-------|--------|
| 1 北海道 | 132 | 3.4% |
| 2 東北 | 247 | 6.3% |
| 3 関東 | 1,433 | 36.4% |
| 4 甲信越 | 124 | 3.2% |
| 5 北陸 | 99 | 2.5% |
| 6 東海 | 469 | 11.9% |
| 7 近畿 | 644 | 16.4% |
| 8 中国 | 274 | 7.0% |
| 9 四国 | 130 | 3.3% |
| 10 九州・沖縄 | 379 | 9.6% |
| 11 無効回答 | 1 | 0.0% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

3. 中学・高校時代に住んでいた都道府県名をお答えください。

複数ある場合は、いちばん長い期間住んでいた都道府県をお答えください。(地域)

| 選択肢 | 度数 | % |
|----------|-------|--------|
| 1 北海道 | 155 | 3.9% |
| 2 東北 | 331 | 8.4% |
| 3 関東 | 1,081 | 27.5% |
| 4 甲信越 | 175 | 4.5% |
| 5 北陸 | 105 | 2.7% |
| 6 東海 | 460 | 11.7% |
| 7 近畿 | 688 | 17.5% |
| 8 中国 | 294 | 7.5% |
| 9 四国 | 151 | 3.8% |
| 10 九州・沖縄 | 481 | 12.2% |
| 11 無効回答 | 11 | 0.3% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

4. あなたの年齢をお答えください。

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------|-------|--------|
| 1 23歳 | 343 | 8.7% |
| 2 24歳 | 533 | 13.6% |
| 3 25歳 | 744 | 18.9% |
| 4 26歳 | 1,034 | 26.3% |
| 5 27歳 | 1,264 | 32.1% |
| 6 無効回答 | 14 | 0.4% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

5. あなたの中学校時代はどうでしたか。【それぞれについて○は1つ】

上段：度数

下段：%

| | そう思う | ややそう 思う | どちらと も言え ない | あまり そう思 わない | そう思 わない | 無効回 答 |
|------------------|----------------|----------------|-------------------|-------------------|----------------|------------|
| 1 好きな先生がいた | 950 24.2% | 1,342 34.1% | 613 15.6% | 660 16.8% | 366 9.3% | 1 0.0% |
| 2 相談に乗ってくれる先生がいた | 569 14.5% | 1,027 26.1% | 941 23.9% | 843 21.4% | 549 14.0% | 3 0.1% |
| 3 学校を休みがちだった | 132 3.4% | 188 4.8% | 201 5.1% | 493 12.5% | 2,914 74.1% | 4 0.1% |
| 4 家で勉強をよくした | 453 11.5% | 949 24.1% | 803 20.4% | 1,116 28.4% | 598 15.2% | 13 0.3% |
| 5 友人が多かった | 486 12.4% | 1,297 33.0% | 1,193 30.3% | 743 18.9% | 207 5.3% | 6 0.2% |
| 6 いじめられたことがあった | 406 10.3% | 604 15.4% | 488 12.4% | 778 19.8% | 1,653 42.0% | 3 0.1% |
| 7 部活動を一生懸命していた | 1,227 31.2% | 946 24.1% | 486 12.4% | 611 15.5% | 657 16.7% | 5 0.1% |
| 8 学校は楽しかった | 963 24.5% | 1,466 37.2% | 815 20.7% | 445 11.3% | 239 6.1% | 4 0.1% |

6. あなたの中学校時代の成績は、どのくらいでしたか。【○は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|----------|-------|--------|
| 1 上のほう | 1,166 | 29.7% |
| 2 やや上のほう | 1,213 | 30.8% |
| 3 真ん中あたり | 972 | 24.7% |
| 4 やや下のほう | 397 | 10.1% |
| 5 下のほう | 182 | 4.6% |
| 6 無効回答 | 2 | 0.1% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

7-1. あなたが最後に通った学校について最も近いものを以下から選び、あてはまるもの1つに○をつけてください。【○は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|-----------|-------|--------|
| 1 大学・大学院 | 2,462 | 62.6% |
| 2 短大・高専 | 322 | 8.2% |
| 3 専門・各種学校 | 592 | 15.1% |
| 4 高校 | 538 | 13.7% |
| 5 中学 | 3 | 0.1% |
| 6 その他 | 14 | 0.4% |
| 7 無効回答 | 1 | 0.0% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

7-2. あなたは上で回答した学校を卒業しましたか、中退しましたか。あてはまるもの1つに○をつけてください。【○は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------|-------|--------|
| 1 卒業した | 3,734 | 95.0% |
| 2 中退した | 184 | 4.7% |
| 3 在学中 | 7 | 0.2% |
| 4 その他 | 6 | 0.2% |
| 無効回答 | 1 | 0.0% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

8. あなたの高校時代はどうでしたか。【それぞれについて○は1つ】

上段：度数

下段：%

| | そう思う | ややそう思う | どちらとも言えない | あまりそう思わない | そう思わない | 無効回答 |
|------------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-----------|
| 1 好きな先生がいた | 998 25.4% | 1,190 30.3% | 684 17.4% | 621 15.8% | 436 11.1% | 3 0.1% |
| 2 相談に乗ってくれる先生がいた | 658 16.7% | 1,074 27.3% | 875 22.3% | 778 19.8% | 542 13.8% | 5 0.1% |
| 3 学校を休みがちだった | 162 4.1% | 281 7.1% | 290 7.4% | 507 12.9% | 2,687 68.3% | 5 0.1% |
| 4 家で勉強をよくした | 504 12.8% | 902 22.9% | 748 19.0% | 1,057 26.9% | 716 18.2% | 5 0.1% |
| 5 友人が多かった | 594 15.1% | 1,196 30.4% | 1,151 29.3% | 769 19.6% | 215 5.5% | 7 0.2% |
| 6 いじめられたことがあった | 84 2.1% | 191 4.9% | 280 7.1% | 593 15.1% | 2,775 70.6% | 9 0.2% |
| 7 部活動を一生懸命していた | 929 23.6% | 585 14.9% | 389 9.9% | 526 13.4% | 1,494 38.0% | 9 0.2% |
| 8 学校は楽しかった | 1,211 30.8% | 1,323 33.6% | 722 18.4% | 419 10.7% | 250 6.4% | 7 0.2% |

9. あなたが最後に通った学校(例：大卒の方は大学、短大・専門学校卒の方は短大・専門学校、高卒の方は高卒など)での生活はどのようなものでしたか。【それぞれについて○は1つ】

上段：度数

下段：%

| | そう思う | ややそう思う | どちらとも言えない | あまりそう思わない | そう思わない | 無効回答 |
|----------------------------|----------------|--------------|--------------|----------------|----------------|------------|
| 1 友人をたくさんつくった | 356 9.1% | 771 19.6% | 849 21.6% | 1,150 29.2% | 801 20.4% | 5 0.1% |
| 2 アルバイトに打ち込んだ | 701 17.8% | 513 13.0% | 508 12.9% | 1,117 28.4% | 1,088 27.7% | 5 0.1% |
| 3 学業に熱心に取り組んだ | 463 11.8% | 968 24.6% | 890 22.6% | 998 25.4% | 607 15.4% | 6 0.2% |
| 4 部活・クラブ・サークル活動に熱中した | 1,684 42.8% | 609 15.5% | 434 11.0% | 525 13.4% | 675 17.2% | 5 0.1% |
| 5 就職活動や就職試験・進学ための勉強を熱心に行った | 788 20.0% | 959 24.4% | 824 21.0% | 851 21.6% | 499 12.7% | 11 0.3% |
| 6 ボランティア活動に打ち込んだ | 2,483 63.1% | 727 18.5% | 352 9.0% | 247 6.3% | 110 2.8% | 13 0.3% |
| 7 自分ひとりの時間をたくさんもった | 342 8.7% | 742 18.9% | 944 24.0% | 1,129 28.7% | 768 19.5% | 7 0.2% |

10. 学校時代(小学校～最後に通った学校までを通して)に学んだ知識は、今の仕事に役立っていますか。【○は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------------|-------|--------|
| 1 かなり役立っている | 457 | 11.6% |
| 2 おおむね役立っている | 1,608 | 40.9% |
| 3 どちらとも言えない | 924 | 23.5% |
| 4 あまり役立っていない | 631 | 16.0% |
| 5 役立っていない | 307 | 7.8% |
| 6 無効回答 | 5 | 0.1% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

11. あなたは、学校を卒業(中退)する際、どのように就職活動(教員試験・公務員試験の受験などを含む)を行い、就職しましたか。【○は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|---------------------------|-------|--------|
| 1 就職活動をして、第一志望に就職した | 1,277 | 32.5% |
| 2 就職活動をして、第一志望以外の就職先に就職した | 1,536 | 39.1% |
| 3 就職活動をしたが、採用されなかった | 316 | 8.0% |
| 4 就職活動をしなかった | 656 | 16.7% |
| 5 その他 | 132 | 3.4% |
| 6 無効回答 | 15 | 0.4% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

12. あなたは、学校を卒業(中退)した直後、どのように働きましたか。【〇は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|-------------------------|-------|--------|
| 1 正社員・正職員 | 2,747 | 69.9% |
| 2 非正社員・非正職員・その他 | 954 | 24.3% |
| 3 学校を卒業してからはしばらくは働かなかった | 216 | 5.5% |
| 4 無効回答 | 15 | 0.4% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

13. あなたは、学校を卒業(中退)してから、以下の働き方をどのくらいしてきましたか。

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------------------|-------|--------|
| 1 正社員・正職員の期間 | 2,385 | 60.7% |
| 2 非正社員・非正職員・その他の期間 | 816 | 20.8% |
| 3 無回答 | 731 | 18.6% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

13-1. 正社員・正職員の期間

| 選択肢 | 度数 | % |
|-----------|-------|--------|
| 1 1年未満 | 1,322 | 33.6% |
| 2 1年～2年未満 | 529 | 13.5% |
| 3 2年～3年未満 | 573 | 14.6% |
| 4 3年～4年未満 | 560 | 14.2% |
| 5 4年～5年未満 | 459 | 11.7% |
| 6 5年以上 | 380 | 9.6% |
| 7 無効回答 | 3 | 0.1% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

13-2. 非正社員・非正職員・その他の期間

| 選択肢 | 度数 | % |
|-----------|-------|--------|
| 1 1年未満 | 2,769 | 70.4% |
| 2 1年～2年未満 | 300 | 7.6% |
| 3 2年～3年未満 | 286 | 7.3% |
| 4 3年～4年未満 | 213 | 5.4% |
| 5 4年～5年未満 | 135 | 3.4% |
| 6 5年以上 | 228 | 5.8% |
| 7 無効回答 | 1 | 0.0% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

14. あなたは、学校を卒業(中退)してから、今までに転職の経験がありますか。ある場合には、その回数もお答えください。【〇は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|------------|-------|--------|
| 1 転職の経験がある | 1,597 | 40.6% |
| 2 転職の経験はない | 2,320 | 59.0% |
| 3 無効回答 | 15 | 0.4% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

14-1. 転職経験回数

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------|-------|--------|
| 1 1回 | 813 | 51.1% |
| 2 2回 | 375 | 23.6% |
| 3 3回 | 216 | 13.6% |
| 4 4回以上 | 184 | 11.6% |
| 5 無効回答 | 3 | 0.2% |
| 合計 | 1,591 | 100.0% |

15. あなたの現在の立場・身分はどのようなものですか。
次の項目のうち、あてはまるものを1つお選びください。【〇は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|-----------------------|-------|--------|
| 1 正社員・正職員など | 2,296 | 58.4% |
| 2 自営業・自由業 | 92 | 2.3% |
| 3 契約社員・嘱託 | 222 | 5.6% |
| 4 派遣社員 | 135 | 3.4% |
| 5 パートまたはアルバイト | 470 | 12.0% |
| 6 家族従業員 | 25 | 0.6% |
| 7 専業主婦(主夫)、または結婚の準備 | 430 | 10.9% |
| 8 大学院や専門学校などの教育機関に在学中 | 7 | 0.2% |
| 9 無職で進学や留学などの準備 | 15 | 0.4% |
| 10 無職で仕事を探している | 134 | 3.4% |
| 11 無職で何もしていない | 38 | 1.0% |
| 12 その他 | 49 | 1.2% |
| 13 無効回答 | 19 | 0.5% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

15で「ア 正社員・正職員・公務員」～「カ 家族従業員」と回答した方は、以下にお答えください。

16. あなたの1週間の平均労働時間(残業なども含む)をお答えください。

| 選択肢 | 度数 | % |
|-------------|-------|--------|
| 1 10時間未満 | 428 | 13.1% |
| 2 10～20時間未満 | 232 | 7.1% |
| 3 20～30時間未満 | 126 | 3.9% |
| 4 30～40時間未満 | 262 | 8.0% |
| 5 40～50時間未満 | 1,250 | 38.4% |
| 6 50～60時間未満 | 540 | 16.6% |
| 7 60時間以上 | 329 | 10.1% |
| 8 無効回答 | 91 | 2.8% |
| 合計 | 3,258 | 100.0% |

17. あなたの1ヶ月の平均収入はどれくらいですか。【〇は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|-------------|-------|--------|
| 1 収入なし | 487 | 12.4% |
| 2 5万円未満 | 147 | 3.7% |
| 3 5～10万円未満 | 228 | 5.8% |
| 4 10～15万円未満 | 493 | 12.5% |
| 5 15～20万円未満 | 1,043 | 26.5% |
| 6 20～25万円未満 | 939 | 23.9% |
| 7 25～30万円未満 | 309 | 7.9% |
| 8 30～35万円未満 | 105 | 2.7% |
| 9 35～40万円未満 | 33 | 0.8% |
| 10 40万円以上 | 46 | 1.2% |
| 11 決まっていない | 54 | 1.4% |
| 12 無効回答 | 48 | 1.2% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

18. あなたの現在の勤務先全体の従業員数について、あてはまるもの1つに〇をつけてください。【〇は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|------------|-------|--------|
| 1 29人以下 | 770 | 19.6% |
| 2 30～49人 | 216 | 5.5% |
| 3 50～99人 | 319 | 8.1% |
| 4 100～299人 | 438 | 11.1% |
| 5 300～499人 | 202 | 5.1% |
| 6 500～999人 | 226 | 5.7% |
| 7 1,000人以上 | 934 | 23.8% |
| 8 わからない | 438 | 11.1% |
| 9 無効回答 | 389 | 9.9% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

19. あなたの現在の勤務先の業種について、あてはまるもの1つに○をつけてください。【○は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|------------------------|-------|--------|
| 1 農業、林業 | 18 | 0.5% |
| 2 漁業 | 2 | 0.1% |
| 3 鉱業、採石業、砂利採取業 | 3 | 0.1% |
| 4 建設業 | 116 | 3.0% |
| 5 製造業 | 603 | 15.3% |
| 6 電気・ガス・熱供給・水道業 | 39 | 1.0% |
| 7 情報通信業 | 240 | 6.1% |
| 8 運輸業、郵便業 | 99 | 2.5% |
| 9 卸売業、小売業 | 320 | 8.1% |
| 10 金融業、保険業 | 206 | 5.2% |
| 11 不動産業、物品賃貸業 | 61 | 1.6% |
| 12 学術研究、専門・技術サービス業 | 102 | 2.6% |
| 13 宿泊業、飲食サービス業 | 114 | 2.9% |
| 14 生活関連サービス業、娯楽業 | 55 | 1.4% |
| 15 教育、学習支援業 | 215 | 5.5% |
| 16 医療、福祉 | 306 | 7.8% |
| 17 複合サービス業(郵便局、協同組合など) | 28 | 0.7% |
| 18 サービス業(他に分類されないもの) | 402 | 10.2% |
| 19 公務(他に分類されるものを除く) | 180 | 4.6% |
| 20 その他 | 300 | 7.6% |
| 21 わからない | 153 | 3.9% |
| 22 無効回答 | 370 | 9.4% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

20. あなたの仕事は次のどれにあたりますか。あてはまるもの1つに○をつけてください。【○は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------------------|-------|--------|
| 1 専門的・技術的職業 | 1,055 | 26.8% |
| 2 管理的職業 | 21 | 0.5% |
| 3 事務的職業 | 1,106 | 28.1% |
| 4 販売の職業 | 361 | 9.2% |
| 5 サービスの職業 | 327 | 8.3% |
| 6 保安の職業 | 26 | 0.7% |
| 7 農林漁業の職業 | 17 | 0.4% |
| 8 運輸・通信の職業 | 37 | 0.9% |
| 9 生産工程・建設・軽作業などの仕事 | 166 | 4.2% |
| 10 上記以外 | 453 | 11.5% |
| 11 無効回答 | 363 | 9.2% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

21. 中学時代・高校時代に、将来の進路や職業について学習したことを、どのくらい覚えていますか。以下にあてはまるもの1つに○をつけてください。【それぞれについて○は1つ】

【中学時代に将来の進路や職業について学習したこと】

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------------|-------|--------|
| 1 かなり覚えている | 159 | 4.0% |
| 2 やや覚えている | 1,081 | 27.5% |
| 3 どちらでもない | 464 | 11.8% |
| 4 あまり覚えていない | 1,123 | 28.6% |
| 5 ほとんど覚えていない | 1,102 | 28.0% |
| 6 無効回答 | 3 | 0.1% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

【高校時代に将来の進路や職業について学習したこと】

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------------|-------|--------|
| 1 かなり覚えている | 277 | 7.0% |
| 2 やや覚えている | 1,406 | 35.8% |
| 3 どちらでもない | 487 | 12.4% |
| 4 あまり覚えていない | 964 | 24.5% |
| 5 ほとんど覚えていない | 794 | 20.2% |
| 6 無効回答 | 4 | 0.1% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

22. 中学時代・高校時代に、将来の進路や職業について学習したことは、どのくらい現在の職業生活に役立っていますか。以下にあてはまるもの1つに○をつけてください。【それぞれについて○は1つ】

【中学時代に将来の進路や職業について学習したこと】

| 選択肢 | 度数 | % |
|---------------|-------|--------|
| 1 かなり役立っている | 78 | 2.0% |
| 2 やや役立っている | 633 | 16.1% |
| 3 どちらでもない | 927 | 23.6% |
| 4 あまり役立っていない | 988 | 25.1% |
| 5 ほとんど役立っていない | 1,294 | 32.9% |
| 6 無効回答 | 12 | 0.3% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

【高校時代に将来の進路や職業について学習したこと】

| 選択肢 | 度数 | % |
|---------------|-------|--------|
| 1 かなり役立っている | 170 | 4.3% |
| 2 やや役立っている | 899 | 22.9% |
| 3 どちらでもない | 840 | 21.4% |
| 4 あまり役立っていない | 911 | 23.2% |
| 5 ほとんど役立っていない | 1,100 | 28.0% |
| 6 無効回答 | 12 | 0.3% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

23. あなたが学校に通っている間に、将来の進路や職業について最も学習したと思うのは、いつ頃ですか。以下にあてはまるもの1つに○をつけてください。【○は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|----------------------|-------|--------|
| 1 小学校時代 | 74 | 1.9% |
| 2 中学校時代 | 354 | 9.0% |
| 3 高校時代 | 911 | 23.2% |
| 4 大学・短大・高専・専門・各種学校時代 | 2,543 | 64.7% |
| 5 無効回答 | 50 | 1.3% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

24. あなたは、学校に通っている間に以下に挙げるような授業や行事が記憶にありますか。記憶があるものについて○をつけてください。

| 選択肢 | 中学 | | 高校 | | 大学・短大・高専・専門学校等 | |
|--------------------------|-------|-------|-------|-------|----------------|-------|
| | 度数 | % | 度数 | % | 度数 | % |
| 1 職業興味や職業適性などの検査 | 759 | 19.3% | 1,315 | 33.4% | 1,726 | 43.9% |
| 2 自分の性格を理解するための検査 | 853 | 21.7% | 1,285 | 32.7% | 1,662 | 42.3% |
| 3 職業や仕事を調べる授業 | 1,221 | 31.1% | 854 | 21.7% | 846 | 21.5% |
| 4 職業人や地域の人に仕事の話聞く授業 | 1,237 | 31.5% | 593 | 15.1% | 722 | 18.4% |
| 5 職場体験学習やインターンシップ | 1,033 | 26.3% | 461 | 11.7% | 1,201 | 30.5% |
| 6 ボランティアなどの体験活動 | 1,252 | 31.8% | 794 | 20.2% | 609 | 15.5% |
| 7 進路に関する二者面談や三者面談 | 2,679 | 68.1% | 3,155 | 80.2% | 697 | 17.7% |
| 8 進路に関する個別相談やカウンセリング | 875 | 22.3% | 1,631 | 41.5% | 1,146 | 29.1% |
| 9 進路の目標や計画を考える授業 | 744 | 18.9% | 1,251 | 31.8% | 728 | 18.5% |
| 10 履歴書の書き方や面接試験の練習 | 442 | 11.2% | 1,003 | 25.5% | 1,880 | 47.8% |
| 11 就職活動の進め方や試験対策の授業 | 177 | 4.5% | 650 | 16.5% | 1,907 | 48.5% |
| 12 コミュニケーションやマナーを学ぶ授業 | 229 | 5.8% | 583 | 14.8% | 1,280 | 32.6% |
| 13 労働法(働くことに関する法律)に関する授業 | 140 | 3.6% | 304 | 7.7% | 841 | 21.4% |

25-2. 25-1に挙げた出来事のうち、現在の自分の職業生活にもっとも関係のあるものに○を1つだけつけてください。

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------------------|-------|--------|
| 1 小学生の頃 | 262 | 6.6% |
| 2 中学生の頃 | 268 | 6.9% |
| 3 高校生の頃 | 849 | 21.6% |
| 4 大学・短大・高専・専門学校生の頃 | 2,013 | 51.2% |
| 5 無効回答 | 540 | 13.7% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

26-1. あなたは、中学時代に、職場体験の経験がありますか。あてはまる数字に○をつけてください。

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------|-------|--------|
| 1 ある | 1,231 | 31.3% |
| 2 ない | 2,686 | 68.3% |
| 3 無効回答 | 15 | 0.4% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

26-1で、職場体験の経験が「ある」と回答した方がお答えください。

26-2. あなたが経験した職場体験について、いつ、どのくらいの期間、どこで、どんな内容の仕事をしたか、下記にお答えください。

ア 何年生の頃

| 選択肢 | 度数 | % |
|---------|-------|--------|
| 1 1年生の頃 | 124 | 1.0% |
| 2 2年生の頃 | 788 | 65.2% |
| 3 3年生の頃 | 269 | 22.3% |
| 4 無効回答 | 27 | 2.2% |
| 合計 | 1,208 | 100.0% |

26-1で、職場体験の経験が「ある」と回答した方がお答えください。

イ 期間

| 選択肢 | 度数 | % |
|-----------|-------|--------|
| 1 3日以下 | 994 | 81.7% |
| 2 4～7日 | 186 | 15.3% |
| 3 8～14日 | 21 | 1.7% |
| 4 15日～1ヵ月 | 7 | 0.6% |
| 5 2ヵ月以上 | 8 | 0.7% |
| 合計 | 1,216 | 100.0% |

26-1で、職場体験の経験が「ある」と回答した方がお答えください。

26-3. あなたは職場体験の経験で、どのようなことを学んだと思いますか。それぞれについてあてはまる数字に○をつけてください。【それぞれについて○は1つ】

上段:度数

下段:%

| | そう思う | ややそう 思う | どちらと も言え ない | あまり そう思 わない | そう思 わない | 無効回 答 |
|---------------------|--------------|--------------|-------------------|-------------------|--------------|-----------|
| 1 就きたい仕事について知識を得た | 386 31.1% | 358 28.9% | 244 19.7% | 193 15.6% | 59 4.8% | 0 0.0% |
| 2 仕事の厳しさを知った | 181 14.6% | 303 24.5% | 227 18.3% | 386 31.2% | 142 11.5% | 0 0.0% |
| 3 その仕事に向いていることがわかった | 380 30.7% | 339 27.4% | 366 29.5% | 123 9.9% | 30 2.4% | 1 0.1% |
| 4 視野が広がった | 162 13.1% | 181 14.6% | 284 22.9% | 471 38.0% | 142 11.5% | 0 0.0% |
| 5 働く意味を感じた | 155 12.5% | 237 19.1% | 317 25.6% | 396 31.9% | 134 10.8% | 1 0.1% |
| 6 忍耐力が身についた | 257 20.8% | 336 27.1% | 377 30.5% | 215 17.4% | 53 4.3% | 0 0.0% |
| 7 社会的マナーを学んだ | 151 12.2% | 173 14.0% | 324 26.1% | 478 38.5% | 114 9.2% | 0 0.0% |

27-1 あなたは、高校時代に、何か進路・進学や仕事や職業に関連するような特別な授業を受けた経験がありますか。あてはまる数字に○をつけてください。

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------|-------|--------|
| 1 ある | 853 | 21.7% |
| 2 ない | 3,071 | 78.1% |
| 3 無効回答 | 8 | 0.2% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

27-1 で特別な授業を受けた経験が「ある」と回答した方がお答えください。
 27-2 「1. ある」と回答した方にお聞きします。いつ、どのくらいの期間で、どこで、どんな仕事を
 経験しましたか。最もあてはまる数字に○をつけてください。

ア 何年生の頃

| 選択肢 | 度数 | % |
|---------|-----|--------|
| 1 1年生の頃 | 111 | 13.1% |
| 2 2年生の頃 | 314 | 37.1% |
| 3 3年生の頃 | 359 | 42.4% |
| 4 無効回答 | 62 | 7.3% |
| 合計 | 846 | 100.0% |

27-1 で特別な授業を受けた経験が「ある」と回答した方がお答えください。

エ どのくらい役立ちましたか

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------------|-----|--------|
| 1 かなり役立った | 135 | 15.9% |
| 2 やや役立った | 376 | 44.3% |
| 3 どちらとも言えない | 161 | 19.0% |
| 4 あまり役立たなかった | 112 | 13.2% |
| 5 全く役立たなかった | 62 | 7.3% |
| 6 無効回答 | 2 | 0.2% |
| 合計 | 848 | 100.0% |

28-1. あなたは、中学時代および高校時代のいずれかで、進路相談・進学相談や
 キャリアカウンセリングなどの「個別相談」(二者面談、三者面談を除く)を受けた経験がありますか。
 あてはまる数字に○をつけてください。

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------|-------|--------|
| 1 ある | 1,829 | 46.5% |
| 2 ない | 2,090 | 53.2% |
| 3 無効回答 | 13 | 0.3% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

28-1 で、「個別相談」を受けた経験が「ある」と回答した方がお答えください。

28-2. あなたが経験した「個別相談」についてお聞きします。具体的に下記に書いてください。
 複数ある場合は、いちばん記憶に残っているものを書いてください。

ア 何年生の頃

| 選択肢 | 度数 | % |
|-----------|-------|--------|
| 1 中学1年生の頃 | 12 | 0.7% |
| 2 中学2年生の頃 | 33 | 1.8% |
| 3 中学3年生の頃 | 393 | 21.6% |
| 4 高校1年生の頃 | 40 | 2.2% |
| 5 高校2年生の頃 | 149 | 8.2% |
| 6 高校3年生の頃 | 876 | 48.1% |
| 7 無効回答 | 320 | 17.6% |
| 合計 | 1,823 | 100.0% |

28-1 で、「個別相談」を受けた経験が「ある」と回答した方がお答えください。

エ どのくらい役立ちましたか

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------------|-------|--------|
| 1 かなり役立った | 302 | 16.6% |
| 2 やや役立った | 760 | 41.8% |
| 3 どちらとも言えない | 390 | 21.4% |
| 4 あまり役立たなかった | 237 | 13.0% |
| 5 全く役立たなかった | 130 | 7.1% |
| 合計 | 1,819 | 100.0% |

29. あなたは、現在の生活全般に、どの程度、満足していますか。【○は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------------|-------|--------|
| 1 満足している | 402 | 10.2% |
| 2 おおむね満足している | 1,876 | 47.7% |
| 3 どちらとも言えない | 716 | 18.2% |
| 4 あまり満足していない | 601 | 15.3% |
| 5 満足していない | 332 | 8.4% |
| 6 無効回答 | 5 | 0.1% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

30. あなたは、これまでの職業生活に、どの程度、満足していますか。【○は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|--------------|-------|--------|
| 1 満足している | 341 | 8.7% |
| 2 おおむね満足している | 1,526 | 38.8% |
| 3 どちらとも言えない | 890 | 22.6% |
| 4 あまり満足していない | 700 | 17.8% |
| 5 満足していない | 466 | 11.9% |
| 6 無効回答 | 9 | 0.2% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

31. あなたは、将来の目標や自分のやりたいことが、どの程度、明確ですか。【○は1つ】

| 選択肢 | 度数 | % |
|-------------|-------|--------|
| 1 明確である | 606 | 15.4% |
| 2 やや明確である | 1,491 | 37.9% |
| 3 どちらとも言えない | 781 | 19.9% |
| 4 あまり明確でない | 691 | 17.6% |
| 5 明確でない | 354 | 9.0% |
| 6 無効回答 | 9 | 0.2% |
| 合計 | 3,932 | 100.0% |

33. 次の文章について、あなた自身にどの程度あてはまるかをお答えください。【それぞれについて○は1つ

上段:度数

下段:%

| | あてはまる | ややあてはまる | どちらとも言えない | あまりあてはまらない | あてはまらない | 無効回答 |
|--------------------------|--------------|----------------|----------------|----------------|----------------|------------|
| 1 少なくとも人並みには、価値のある人間である | 125 3.2% | 338 8.6% | 1,052 26.8% | 1,695 43.1% | 714 18.2% | 8 0.2% |
| 2 色々な良い素質をもっている | 142 3.6% | 490 12.5% | 1,275 32.4% | 1,528 38.9% | 485 12.3% | 12 0.3% |
| 3 敗北者だと思ふことがよくある | 597 15.2% | 1,105 28.1% | 989 25.2% | 879 22.4% | 351 8.9% | 11 0.3% |
| 4 物事を人並みには、うまくやれる | 101 2.6% | 436 11.1% | 895 22.8% | 1,878 47.8% | 609 15.5% | 13 0.3% |
| 5 自分には、自慢できるところがあまりない | 320 8.1% | 980 24.9% | 1,305 33.2% | 971 24.7% | 344 8.7% | 12 0.3% |
| 6 自分に対して肯定的である | 218 5.5% | 782 19.9% | 1,483 37.7% | 1,045 26.6% | 390 9.9% | 14 0.4% |
| 7 だいたいにおいて、自分に満足している | 343 8.7% | 989 25.2% | 1,135 28.9% | 1,139 29.0% | 316 8.0% | 10 0.3% |
| 8 もっと自分自身を尊敬できるようになりたい | 104 2.6% | 253 6.4% | 673 17.1% | 1,585 40.3% | 1,306 33.2% | 11 0.3% |
| 9 自分は全くだめな人間だと思ふことがある | 489 12.4% | 951 24.2% | 808 20.5% | 1,125 28.6% | 545 13.9% | 14 0.4% |
| 10 何かにつけて自分は役に立たない人間だと思ふ | 723 18.4% | 1,200 30.5% | 1,153 29.3% | 591 15.0% | 254 6.5% | 11 0.3% |

34. これまでの人生はどのようにして決まってきたと思いますか。それぞれについて、あてはまるもの1つに○をつけてください。【それぞれについて○は1つ】

上段:度数

下段:%

| | あてはまる | ややあてはまる | どちらとも言えない | あまりあてはまらない | あてはまらない | 無効回答 |
|----------------|-------------|-------------|--------------|----------------|----------------|-----------|
| 1 本人の能力によって決まる | 88 2.2% | 291 7.4% | 665 16.9% | 2,114 53.8% | 765 19.5% | 9 0.2% |
| 2 本人の努力によって決まる | 43 1.1% | 131 3.3% | 389 9.9% | 1,842 46.8% | 1,518 38.6% | 9 0.2% |
| 3 周囲の環境によって決まる | 29 0.7% | 146 3.7% | 536 13.6% | 2,038 51.8% | 1,174 29.9% | 9 0.2% |
| 4 運によって決まる | 136 3.5% | 376 9.6% | 916 23.3% | 1,785 45.4% | 710 18.1% | 9 0.2% |

35. 身近に、職業生活や職場の問題についての専門のカウンセラー(キャリア・コンサルタント)がいるとしたら、どんなことを相談してみたいですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

【○はいくつでも】

| 選択肢 | 度数 | % |
|------------------------|-------|-------|
| 1 将来全般について | 1,843 | 46.9% |
| 2 自分の職業の向き不向きについて | 1,536 | 39.1% |
| 3 自分の労働条件について | 1,147 | 29.2% |
| 4 自分の仕事の内容について | 711 | 18.1% |
| 5 自分の職業能力をアップさせる方法について | 1,802 | 45.8% |
| 6 職場の同僚との人間関係について | 448 | 11.4% |
| 7 職場の上司との人間関係について | 657 | 16.7% |
| 8 職場の部下との人間関係について | 217 | 5.5% |
| 9 職場外の人との人間関係について | 290 | 7.4% |
| 10 自分の両親について | 235 | 6.0% |
| 11 身近な法律的な問題について | 575 | 14.6% |
| 12 身近な健康問題について | 502 | 12.8% |
| 13 いわゆる悩みやグチなどについて | 757 | 19.3% |
| 14 誰にも話せない深刻な悩みについて | 330 | 8.4% |

36. 現在、あなたと同居されているご家族はいらっしゃいますか。【○はいくつでも】

| 選択肢 | 度数 | % |
|------------|-------|-------|
| 1 本人のみ | 1,119 | 28.5% |
| 2 配偶者(夫、妻) | 1,103 | 28.1% |
| 3 親(父、母) | 1,648 | 41.9% |
| 4 子ども | 620 | 15.8% |
| 5 兄弟姉妹 | 968 | 24.6% |
| 6 祖父、祖母 | 368 | 9.4% |
| 7 その他 | 143 | 3.6% |

37. 高校生くらいまでの様子を振り返って、家庭生活や家族との関係はどうでしたか。

【それぞれについて○は1つ】

上段:度数

下段:%

| | そう思う | やや思う | どちらとも も言え ない | あまりそ う思わ ない | そう思 わない | 無効回 答 |
|----------------------|----------------|----------------|--------------------|-------------------|--------------|------------|
| 1 しつけが厳しい方だった | 600 15.3% | 1,210 30.8% | 693 17.6% | 1,005 25.6% | 414 10.5% | 10 0.3% |
| 2 帰宅の門限が厳しかった | 547 13.9% | 864 22.0% | 574 14.6% | 1,033 26.3% | 905 23.0% | 9 0.2% |
| 3 家の手伝いをさせられた | 519 13.2% | 979 24.9% | 871 22.2% | 1,094 27.8% | 457 11.6% | 12 0.3% |
| 4 学校での出来事などを家族で話し合った | 576 14.6% | 1,189 30.2% | 819 20.8% | 909 23.1% | 427 10.9% | 12 0.3% |
| 5 叱られることが多かった | 443 11.3% | 939 23.9% | 930 23.7% | 1,120 28.5% | 491 12.5% | 9 0.2% |
| 6 欲しいものは買ってもらった | 238 6.1% | 922 23.4% | 1,020 25.9% | 1,159 29.5% | 583 14.8% | 10 0.3% |
| 7 親は学校の成績を重視していた | 444 11.3% | 906 23.0% | 869 22.1% | 1,057 26.9% | 643 16.4% | 13 0.3% |
| 8 父親は自分の気持ちをわかってくれた | 398 10.1% | 984 25.0% | 1,099 28.0% | 794 20.2% | 636 16.2% | 21 0.5% |
| 9 母親は自分の気持ちをわかってくれた | 651 16.6% | 1,481 37.7% | 1,013 25.8% | 491 12.5% | 281 7.1% | 15 0.4% |
| 10 父と母は仲が良かった | 1,009 25.7% | 1,117 28.4% | 814 20.7% | 455 11.6% | 510 13.0% | 27 0.7% |
| 11 家庭の雰囲気明るかった | 1,077 27.4% | 1,369 34.8% | 792 20.1% | 391 9.9% | 291 7.4% | 12 0.3% |
| 12 将来について話し合った | 591 15.0% | 1,188 30.2% | 889 22.6% | 841 21.4% | 413 10.5% | 10 0.3% |

労働政策研究報告書 No. 125

学校時代のキャリア教育と若者の職業生活

発行年月日 2010年 11月 19日

編集・発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構

〒177-8502 東京都練馬区上石神井4-8-23

(照会先) 研究調整部研究調整課 TEL:03-5991-5104

(販売) 研究調整部成果普及課 TEL:03-5903-6263

FAX:03-5903-6115

印刷・製本 有限会社 太平印刷

©2010 JILPT

* 労働政策研究報告書全文はホームページで提供しております。(URL:<http://www.jil.go.jp/>)